女子文壇

新年號





明治卅八年十二月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日）
明治四十四年十二月廿五日　印　刷　納　本（五日印刷納本）

第八年第一号

東京女子文壇社發兌

瓦斯でたく
二十世紀の
雜煮かな

新しき年と共に
燈火に臺所に瓦
斯をお使ひ遊せ



東京瓦斯株式會社

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尙梅毒消渴の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢〇
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

東京市本鄉區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所　中西葆光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

最も進歩せる子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦痛なく且つ局所の病に醫師の診察を受くる事の厭はしきより隱蔽放任して治療を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不妊娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡便に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺點なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進步は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて治療の目的を達するなり

獨乙の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は是等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は一度是非使用して病氣を根治し給ふべし

尚梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其の効最も大なり

定價
八球入金五十錢
十八球入金一圓〇〇
四十球入金二圓〇〇
特製百十球入金五圓〇
內地遞送無料

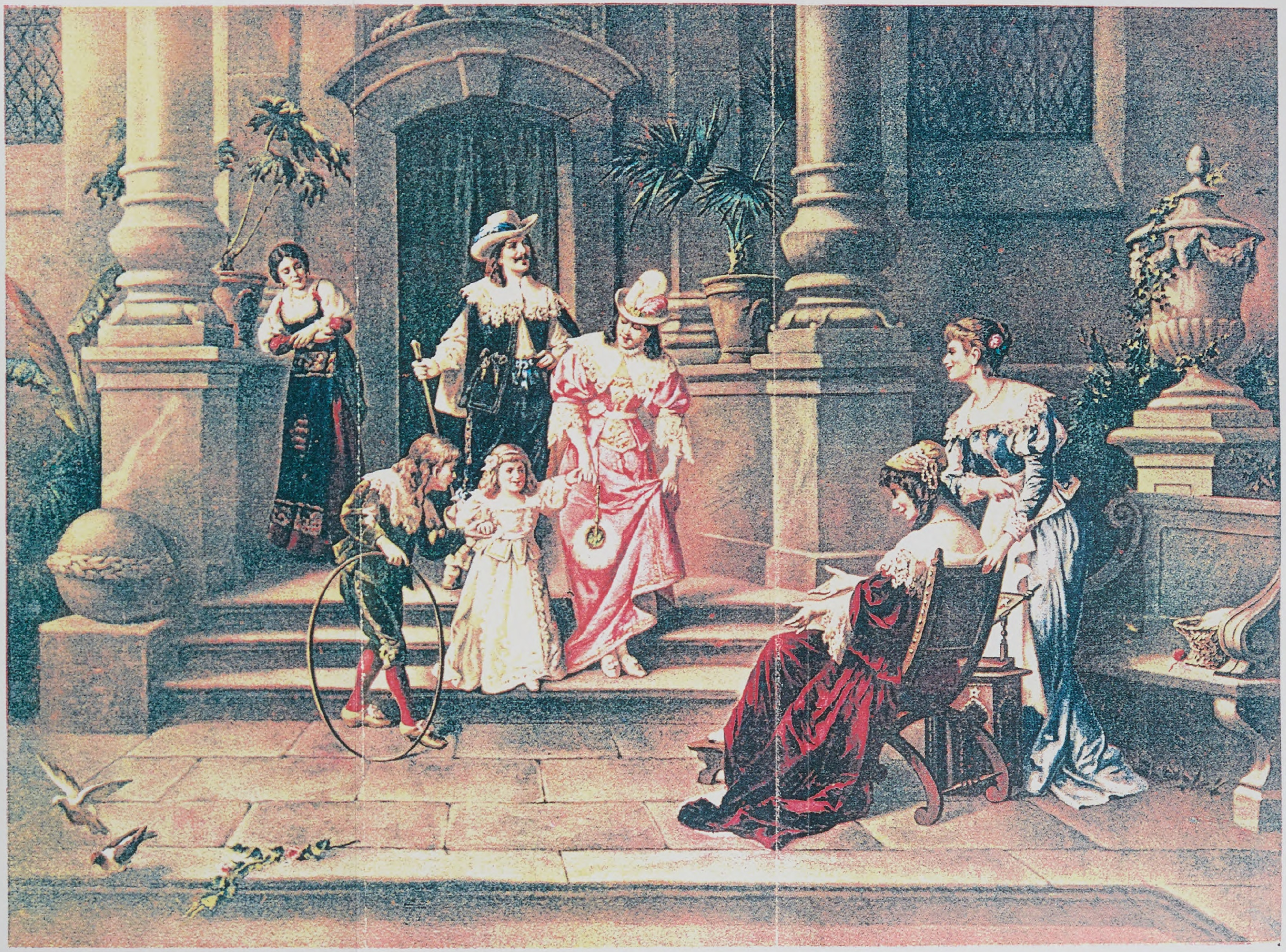
東京市本鄉區湯島天神町壹丁目五拾參番地
唯一丸發行所　中西篠光堂藥局
振替貯金東京口座千五百番（電話下谷五四七番）

◎全國到る所の有名なる藥店にて販賣す

女子文壇新年特別號（第八年第壹號）目次

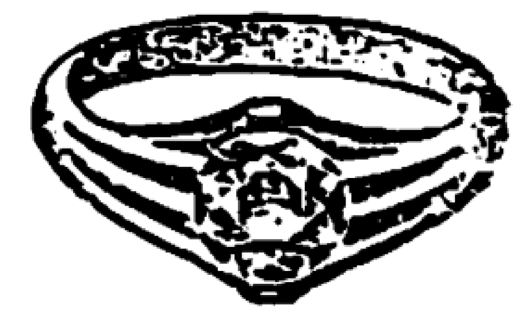

ヴワイオレット
ねり製 水製
壽美禮おしろい
西洋色白くなる
壽美禮ねらひ粉
壽美禮おしろいは即座の化粧に適し使用最も簡便にして濃くも淡くも自由にして殊に多量の花精を含み温雅なる芳香を放ち湯上り等に用て爽快を覚へ美は益々艶を發揮すべし
壽美禮煉白粉
壽美禮水白粉
壽美禮粉白粉
壽美禮打白粉
製造本鋪
東京東両國元町
壽美禮堂
電話浪花二七六五番

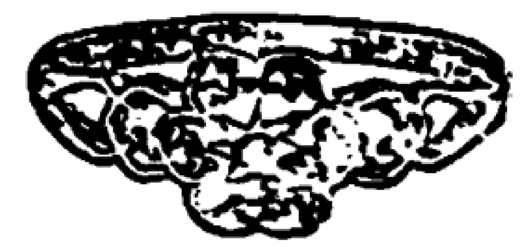
歡喜

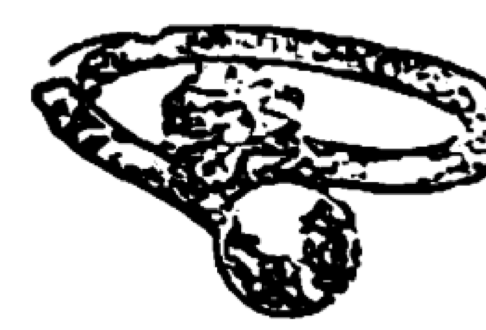


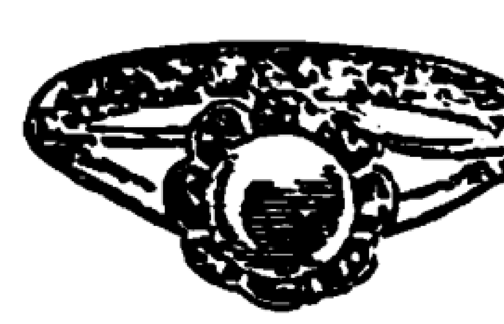
天賞堂製作品價格一斑

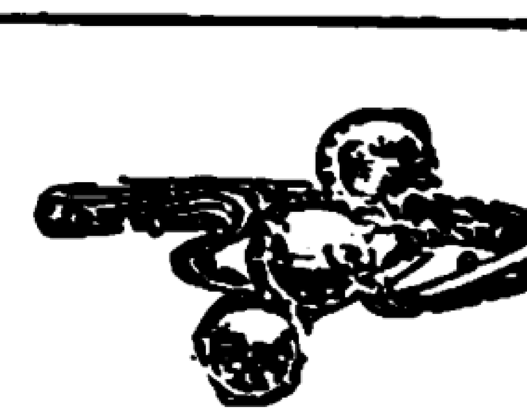

(1)
ダイヤモンド入
十八金製價五百圓


(2)
ダイヤモンド入
十八金製價三百卅圓


(3)
ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

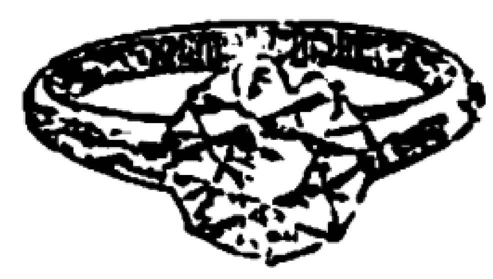

(4)
ダイヤモンド、眞珠入
價百七十五圓

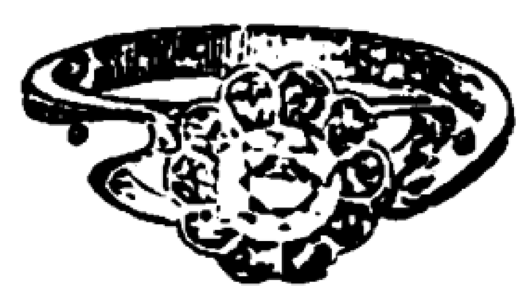

(5)
半肉眞珠入十八金製
價十五圓

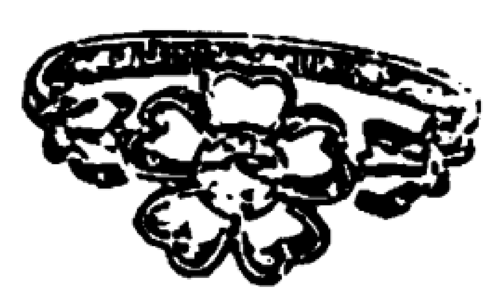

(6)
眞珠入十八金製
價十八圓

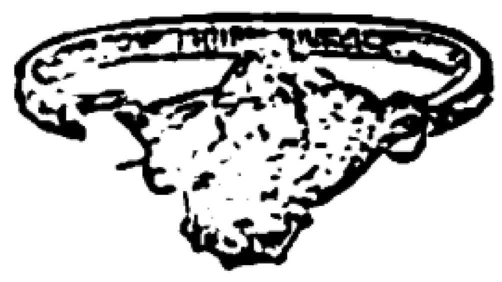

(7)
眞珠入十八金製
價十二圓

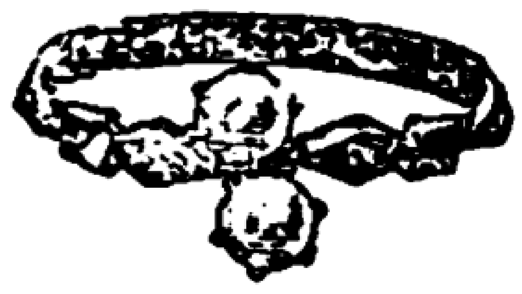

(8)
眞珠入十八金製
價二十圓

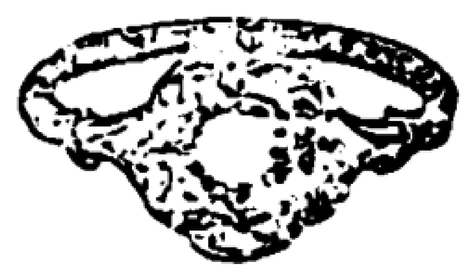

(9)
ダイヤモンド入
十八金製價九百圓

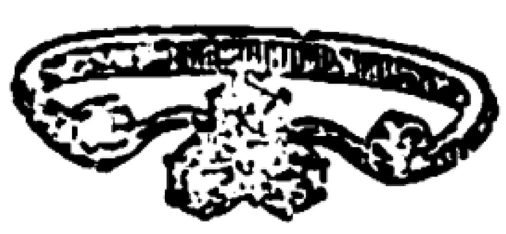

(10)
ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

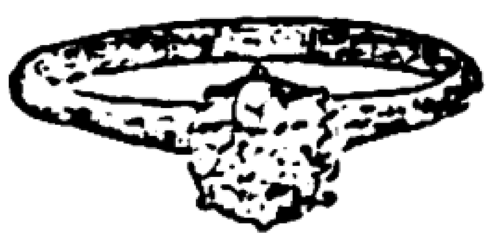

(11)
ダイヤモンド入
十八金製價三十圓


(12)
白サフヤ、ルビー入
十八金製價十圓

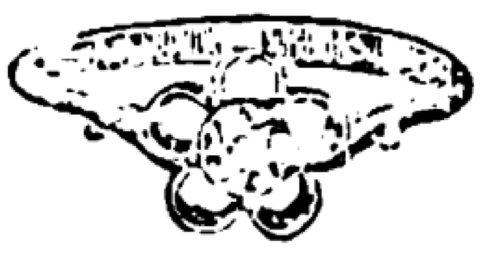

(13)
眞珠入十八金製
價十圓半

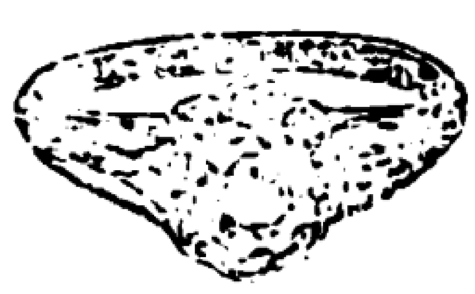

(14)
眞珠入十八金製
價十八圓

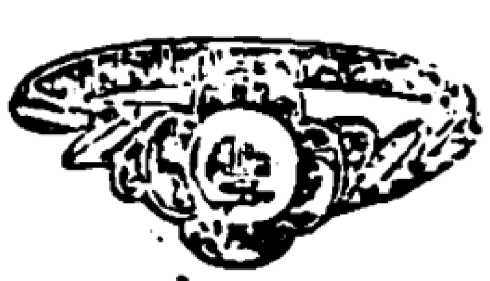

(15)
ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價廿八圓


(16)
色サフヤ入十八金製
價四十圓


(17)
眞珠入十八金製
價十五圓


(18)
ダイヤモンド入
十八金製價四十圓


(19)
ルビー入十八金製
價八圓五十錢


(20)
眞珠入十八金製
價三十圓


(21)
ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價百圓


(22)
ルビー入十八金製
價八十圓

本圖は本堂諸工場に於て製作せる多數の指環中特に寶石嵌入の一斑を揭け大小形狀に據り概價の標準を知るの一助となせるものなり此他美術彫刻指環印面付指環等を始め貴婦人用としては根掛、簪、櫛、笄、眼鏡、襟針、襟留、帶締、羽織鎖、時計鎖、同提物等に至る迄悉く現時流行の粹を拔き專ら品質の優秀さ價格の低廉さを主眼とし以て斯界先覺の實を擧げんを期す冀くは愛顧諸君多少を問はず高需の榮を給はらんことを

天賞堂本店

東京市京橋區尾張町二丁目

電話新橋特長三三三○長三三四●長三一五三

振替貯金口座番號東京五五

大阪支店●東京神田出張所●橫濱出張所



春　竹久夢二作

以下九種の書は[illegible]弘報館で販賣す

萬物製法秘術寶鑑

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目錄、輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●擣藥玉●齒磨●石鹼●洗粉●白粉●香水●紙を[illegible]のみ取粉●萬年草紙●メッキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●蟲取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●鑵詰●ラムネ●リモナーデ●ジンジャエール●蜜柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術**（器械不用）**早印刷法**等百餘種記載してあるが皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何故にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は此店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず縮でも文字でも大小の論なく速座に數百枚印刷するから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても慥に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目錄鬼火の妖術●口中より火焰を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●銀貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●籠に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上に木製船を自由に動かす術●黒いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黒水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステッキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法 附錄 **驚神的大魔術**、其他面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歳迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齢を當る法●顏を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生す法●書き損ひの字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●歌がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は廿三錢（郵券代用は廿五錢）

破天荒の快書 破格の大安賣 [illegible] 大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目錄天に文字を顯す術●白晝を闇黑にする術●夢に天國に遊ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●金錢自由吸集の妖術●羅拔の妖術●火渡の奇術●武道**隱身術**●人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歳の小兒を重くして上げられぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人を掌につけ押して居る椅子も取れぬ術●竹折術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揭げる術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如し、そして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出産死亡其他澤山。郵税共廿三錢

男女 無上の快樂

本書の内容は秘密に付掲載する事は出來ないから本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。（他人に見えぬやう密封にて送ります）定價郵税共二十四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない郵税共廿二錢

道具不要 輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くて美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

簡易 素人治療法

感冒●胃病●痔●痳病●子宮病●眼病●夜小便●男女陰部諸病●頭痛●凍腫●肺病●ニキビ●ワキガ●サメハダ●耳ダレ●齒痛等の療法●毛を生す法●白髮を黑くする法●其他萬病を高價な醫藥でなく手輕に治療し得る書は廿二錢郵券代用は廿四錢

振替貯金口座番號 東京壹六九〇八番

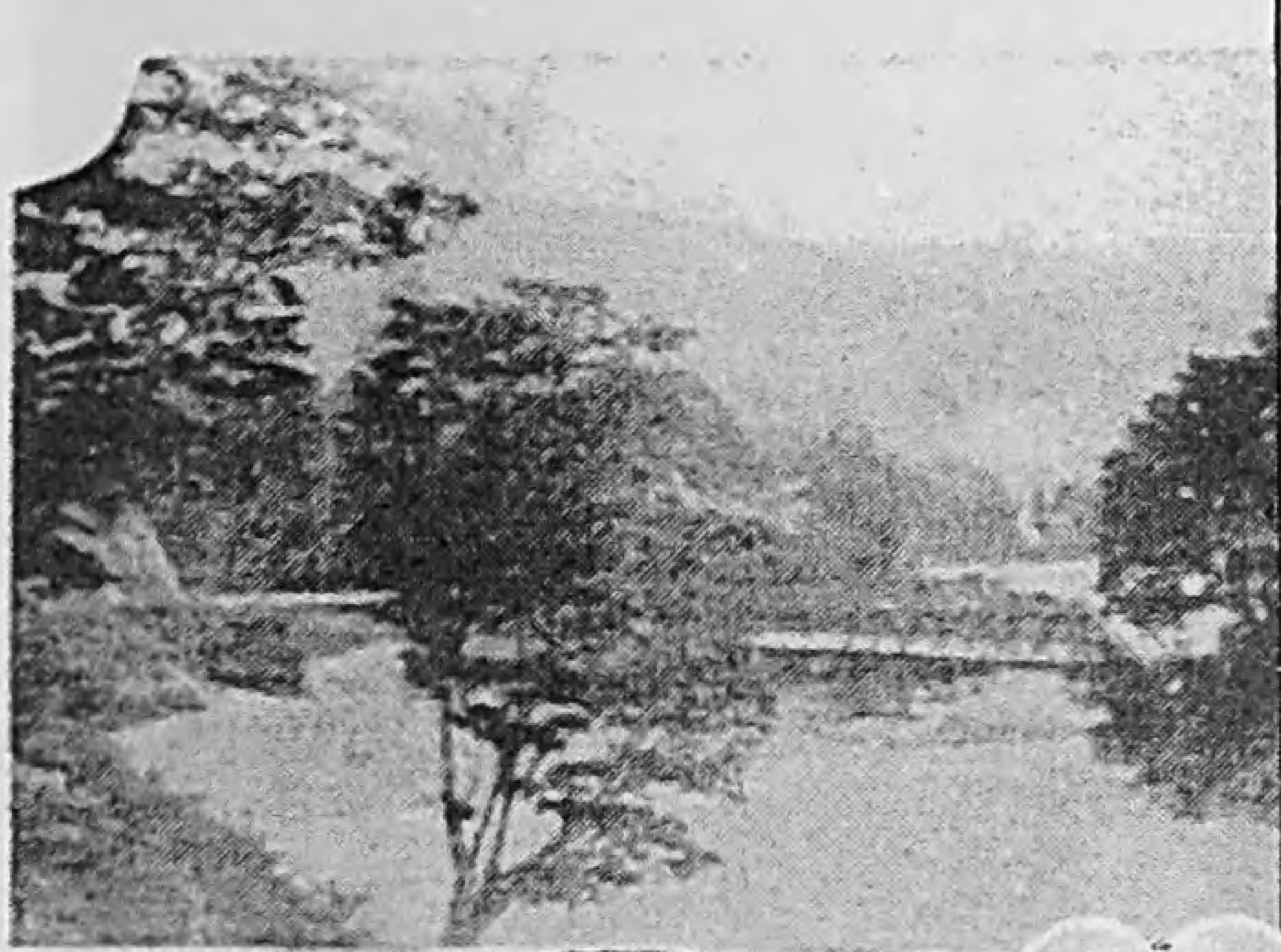
三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

◎割引上段下段ヨリドリ五冊一圓、十冊一圓七十錢、郵券代用一割增

竹田宮妃常宮昌子內親王殿下



慶雲





伯爵藤堂高紹氏夫人信子



溝口伯爵令嗣夫人すみ子



一月の御用命

○新柄ヲヴァーコートの御新調
○縞御召、好貴織の御選擇
○御題模樣小間物の御買上
○サーキュラーケープの御注文
○修整一時間寫眞の御撮影
○防寒ショール帽子の御用命

謹賀新年

東京日本橋
白木屋呉服店

地方御在住の御方様
本年より通信販賣課の業務益々擴張致し御便利相計り可申候得ば倍舊の御愛顧御注文の程奉願上候

萬春樂





釀造家岩崎重次郎氏夫人延枝子



二もとの梅に遅速を愛すかな　蕪村



炭鑛家安川敬一氏夫人幸子と愛兒

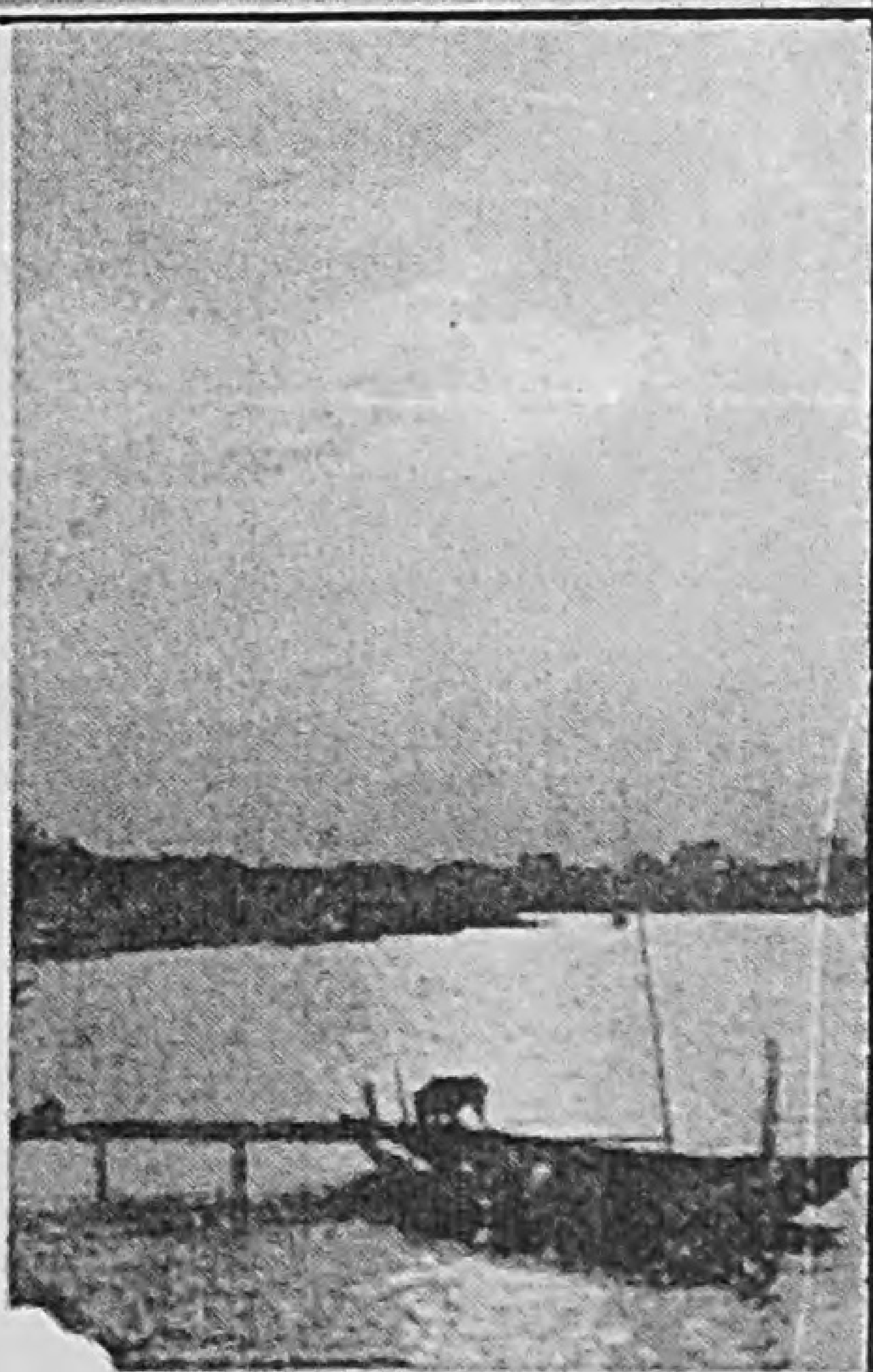


貴族院議員馬屋原二郎氏令嬢豊子（學習院出身）



執行海軍一等軍醫正令嬢英子（三輪田高女在學）





曙光

肺病新藥

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り各地の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥を服し東京市内有名大家著先生の診斷服藥し猶は横濱獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々喀血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致方無之只死を待の外なし然るに私は病中臥褥の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法開書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議に爽快を覺え尚續て服するに益々快方に赴き四週間餘りにて全く根治したり既に死期に臨みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざるものなし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て寧ろ之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を蒙り弘く世の肺患者に發賣する事となれり然る處本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に **米國紐育市タイヤーガ商會** 及び **印度パタビアヒイアエーテス社** 等へ續々輸出し專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に四千六百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に悩める人士なきにもあらじ天禀を完ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ

藥價……七日分貳圓●十四日分四圓●廿一日分五圓●卅五日分七圓五十錢●七十日分十四圓遞送料十錢●爲替局名は大森局宛取組の事

主治効能●肺結核肺炎●氣管支加答兒●肋膜●肺炎加答兒●たん咳等肺病一切より起る諸病を根治する偉功あり

用法及び詳細は本能書にあり但し本舗へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入申込を乞ふ

東京府下荏原郡入新井村字不入斗二百十四番地

調劑本舗 川名助次郎

(振替貯金口座東京一〇四番)(電話大森六九番)

東京神田區花房町二番地 山崎帝國堂
横濱吉田町二丁目都橋際 永井永進堂
東京神田區橋本町二丁目 昶井甚藏
北海道函館辨天町 國領平七

東京淺草並木 遠山藥店
東京銀座一丁目 佐々木玄兵衛
静岡市七間町 市川商店
埼玉縣熊ケ谷町 櫛田金造

肺治散特約店

東京銀座二丁目 岸田吟香
東京日本橋區本石町 守谷篤次郎
東京兩國米澤町角 吉田安五郎
大阪西横堀舟町橋西詰 賣藥御賣株式會社
馬關西南部町 賣藥會社

東京銀座三丁目 松澤八右衛門
東京日本橋區瀬戸物町 玉置金八
東京日本橋區上槇町 安川晃榮堂
相模横須賀汐入町 茶本商店

東京神田區鍛冶町 大木合名會社
東京日本橋區本町 大橋博愛堂
東京兩國米澤町 大木口哲本店
越後國長岡市 藤井卯吉

東京日本橋通 中田清兵衛
東京日本橋通 大野傳兵衛支店
大阪堺筋伏見町 谷同春堂
長野市大門町 小林傳兵衛

(全國到る處の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舗へ申越次第待約す)

◉興味と實益に富みたる日本一の理想的少女教育雜誌◉

大革新の新年號

少

第四巻 第壹號

（通巻第貳拾九號）

『少女』獨特の新年大繪附錄

◉新裝（石版極彩色刷 縱一尺三寸橫九寸）太田三郎先生筆

▲少女小説 海賊の寶（後篇第壹）……磯萍水

▲おとぎ噺 新しい心の袋……與謝野晶子

▲少女喜劇 嘘とまこと……海賀變哲

◉貴族の心と襤褸の着物……貴族院議員 秋元子爵

◉仕事場に行くに美服は要らぬ……女子高等師範學校長 中川謙次郎

少女訓話

◉萬一の時の心がけ……女子大學教授 松浦政泰

◉少女の自覺……少女世界記者 沼田笠峰

夢二畫集

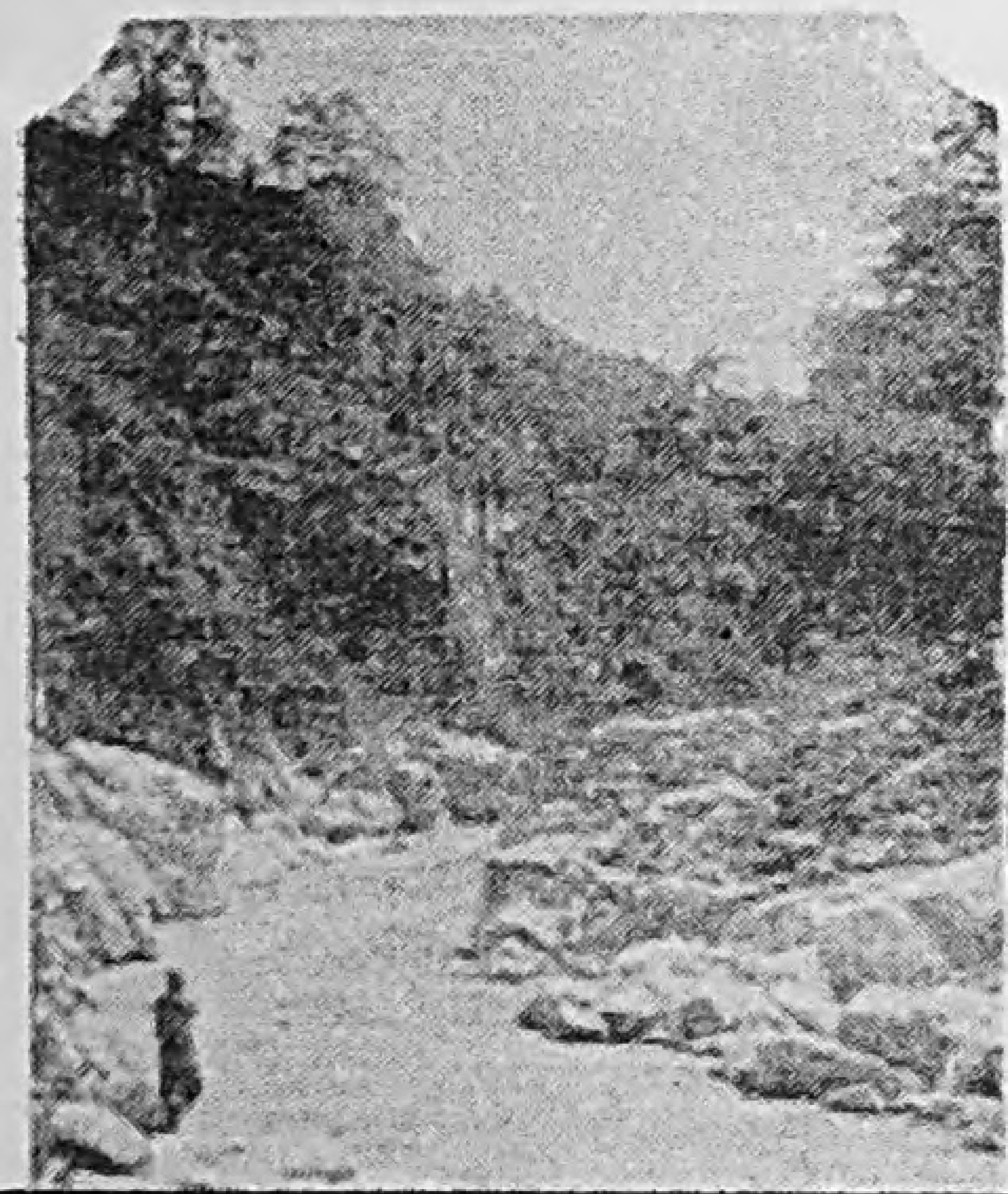


春鳥



和田維四郎氏令孃愛子（學習院在學）

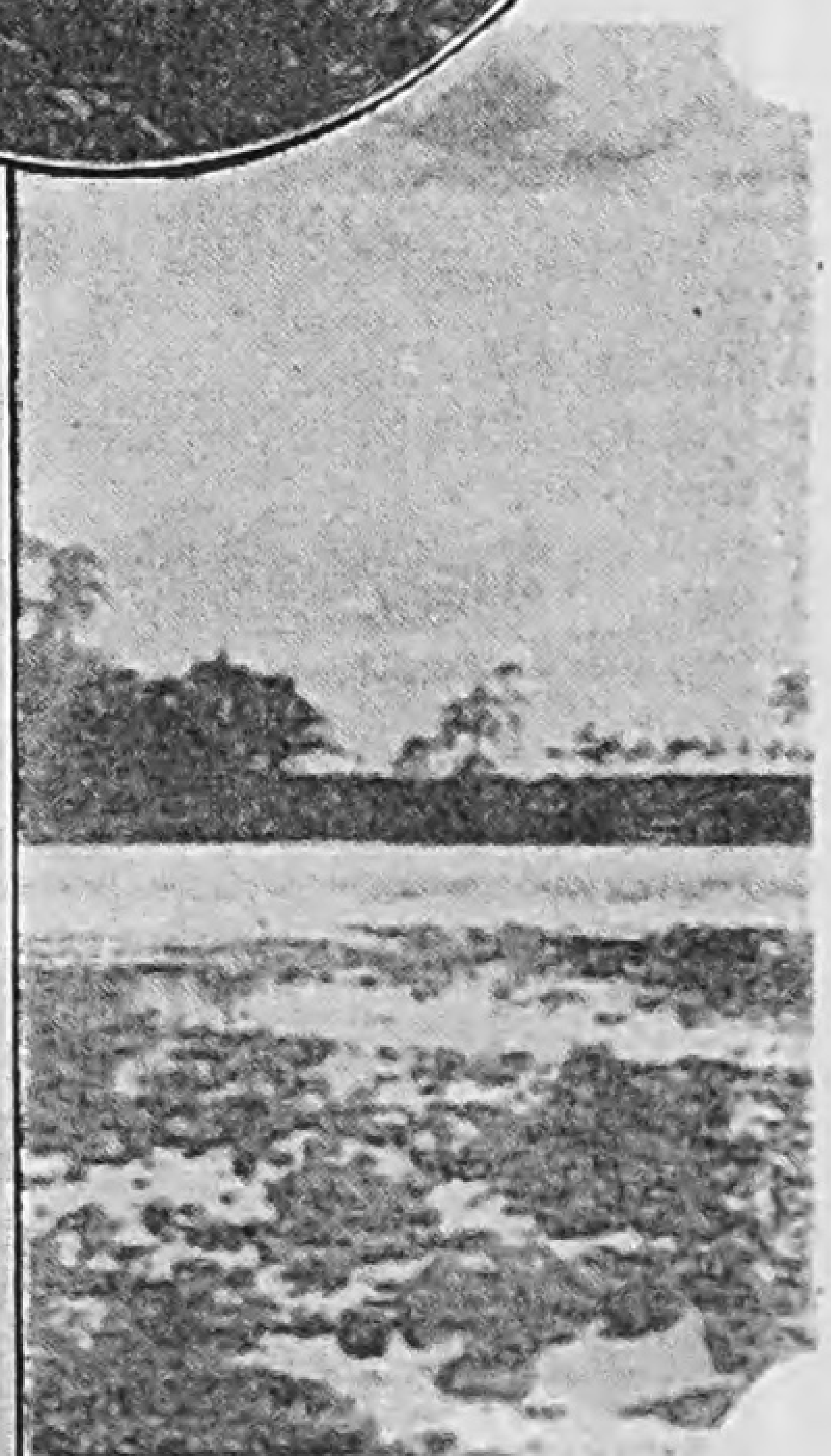
黒髪





毛利子爵令嬢多榮子





（孰れも學習院出身）

三岡大夫氏令嬢ゆき子

悪筆は御損です

文字の拙きほど恥かしきことはありますまい、ところが僅かなお稽古と僅かな費用で自分ながらも驚くほどお上手になれる方法があります、それは本會に葉書で御申込みになれば詳しき説明書の付いた見本を送ります。

◎女子部及男子部

書者

小野鷲堂先生
玉木愛石先生
稲川雲谿先生



東京本郷區大學正門前

帝國習字速成學會

電下三〇一一番
電下三二一〇番

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的知識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人の入會を待つ！

此際至急入會者に限り入會金を免除す

見よ!!! 舶來ラフ紙本印刷は講義錄唯一なり

和歌講義錄

十ヶ月卒業

科目

△短歌作法
△新派和歌講義
△新派和歌評釋
△歌話
△萬葉集評釋

△歌人評傳
△詩歌の流派
△詩の評釋
△新派和歌史
△新歌語と作例

▲添删實例
▲歌人經歷談
△講師は皆當代新派歌壇の名家！

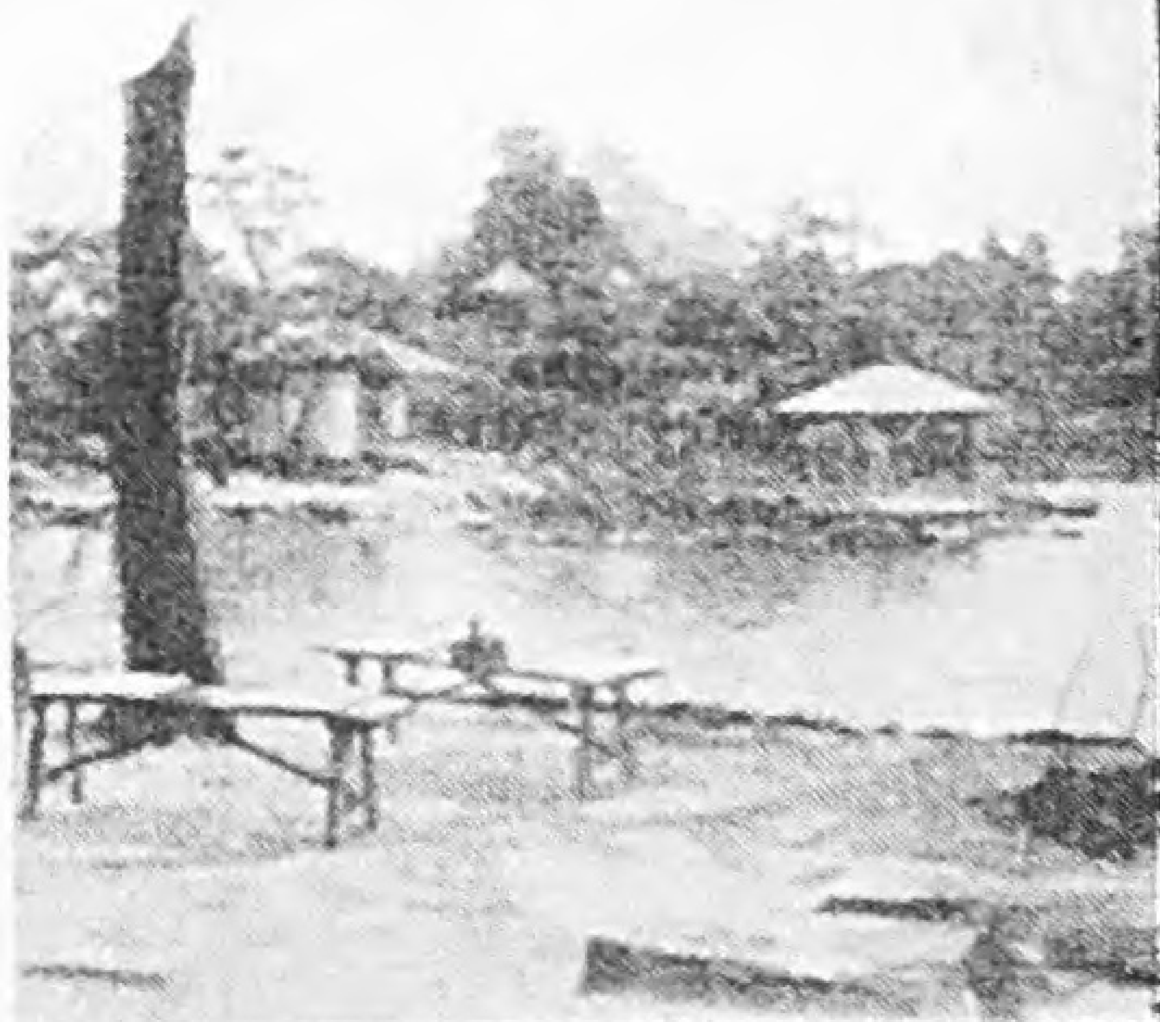
見本會則附き往復端書にて申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會
振替東京一九五五番

瑞氣



男爵福原俊丸氏夫人鶴子





子爵橋本長俊氏夫人鍾子



白雪



男爵山口豊男氏令妹花子（學習院卒業）





實業家淺野總一郎氏令孃はつ子（女學館在學）





喜谷
實母散
婦人産前産後
子宮病血の道の妙薬
東京市京橋區中橋大鋸町
本家 喜谷市郎右衛門

●やんやと御評判のある先生いらずのおけいこ本

成女學校學監嘉悦孝子女史述
惣菜料理のおけいこ
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

東京うへのしのぶ川主人述
豆腐のお料理
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

英國メェリー、エ、ウヰルソン女史 松波女史合述
洋食のおけいこ
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

近定主人 屋中定吉述
さつま芋お料理
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

專門大家七氏合述
裁縫のおけいこ
◎總がな付挿圖二百箇入美本　全一冊　價三十五錢　郵稅四錢

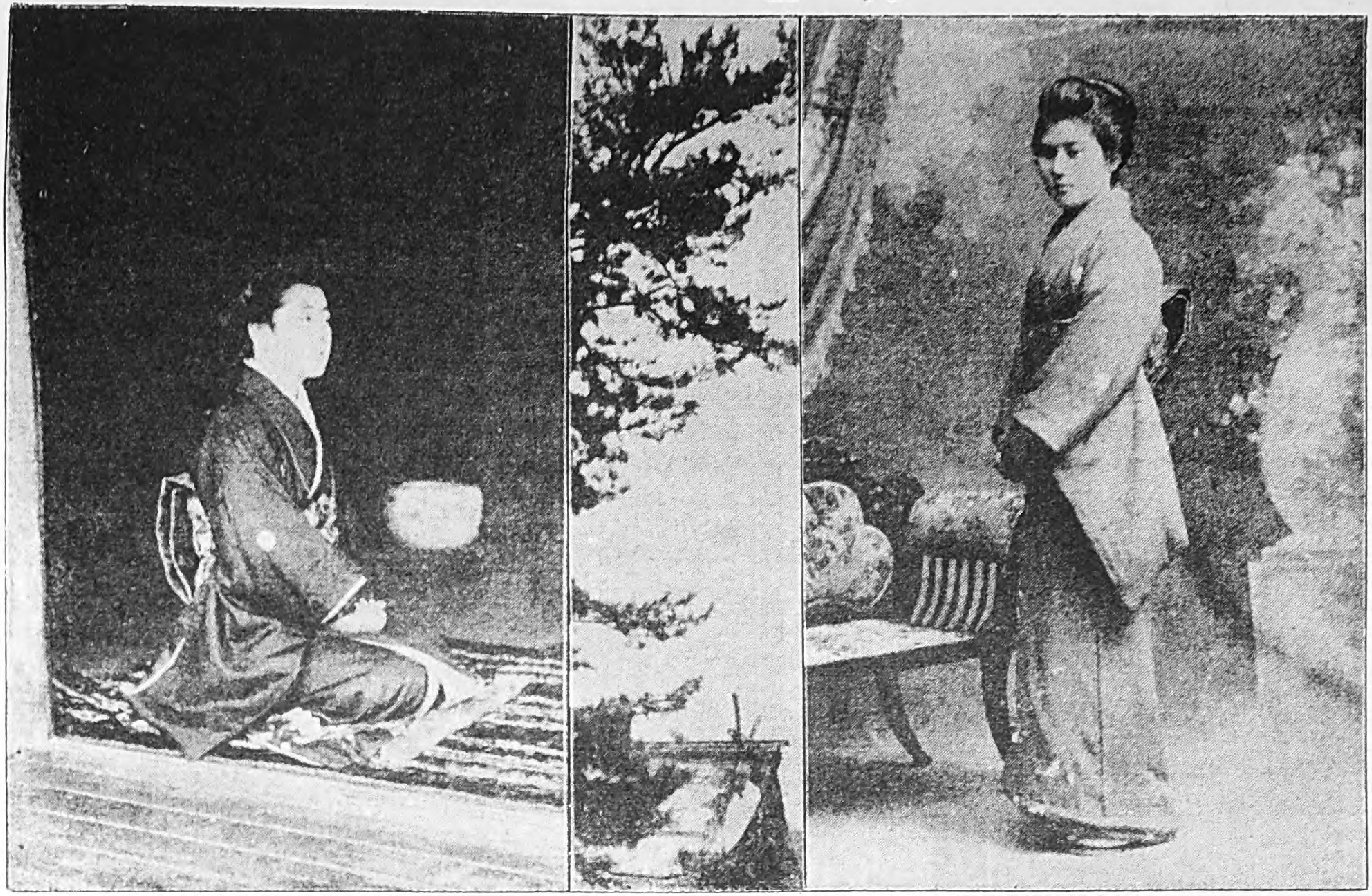
ねづみや主人野村福藏述
足袋裁ち縫ひのおけいこ
◎繪入總かなつき美本　全一冊價二十八錢郵稅四錢

井上秋江女史述
漬物のおけいこ
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

梅田竹次郎述
和洋菓子製造のおけいこ
◎繪入總がなつき美本全一冊　價二十八錢郵稅四錢

發兌元　東京市日本橋數寄屋町九番地　振替口座二三七一　電話本局五三二一番　六合館

文士の夫人



中村吉藏氏夫人幸子

文學士澤村胡夷氏夫人

浮世繪



紅葉狩



ねぎごと



帶



心中萬年草



丹波與作

と

婦人畫報

一月一日發行　一月卷一冊廿五錢　郵稅二錢五厘　三冊八十錢　六冊一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

畫報は優美高尚にして現代婦人界の活歷史讀物は穩健摯實にして家庭に缺く可からざる好侶伴

◎理想の家庭……横井、三輪田、江原、下田、添田、安井六氏
◎婦人の新覺悟……中島博士
◎娘の通學……吉田熊治
◎感心した婦人……高島平三郎
◎眞の儉約の仕方……嘉悅孝子
◎子供を喜ばせる方……岸邊福雄
◎禮を知らぬ客……棚橋絢子

◎育兒……加藤博士
◎看護の善惡……萩原竹子
◎家事十二ヶ月……秀子
◎諸國雜煮の色々……
◎笑ひ……三宅花圃
◎帶の結方と襟つき……
◎新案冬向寢冷不知……
◎正月と子供……倉橋惣三
◎東宮妃殿下御平常……
◎母親の顧問……黄雲女
◎松竹梅の歌……信綱
◎鼠の話……藤懸靜也

畫報

◎大附錄六名流婦人合作 は本誌五倍大にして跡見兩女史三輪田下田野口奥原六女史筆を上質和紙に印刷せし物家庭の珍寶たり
◎◎若春 滿谷畫伯筆 二倍三色版
◎三妃殿下御散步
◎◎北白川伏見宮姬宮殿下
◎二侯爵夫人の接對ぶり
◎◎三令孃の春裝
◎◎自働車と令孃
◎令孃の餅搗
◎◎雪と女學士
◎◎髮形のいろ〳〵
◎かるた合戰
◎追羽子
◎お正月の床かざり
◎馬上の令孃
◎◎西陣の織り方
◎◎孤兒院の正月
◎點茶書初
◎婦人の武術
◎若みづ……
◎梨本宮御邸御對面所
◎◎久邇宮御奥向
◎令孃の彈初め
◎十名家令孃其他
◎寫眞七十餘光彩燦爛

東京麴町區飯田町四ノ四　東京社　振替東京壹八壹八　（全國書店ニテ販賣ス）

暗香浮動



（右）鐵道院理事小林源藏氏令嬢
（中）後藤毛布會社長令嬢ふちえ子
（左）荒川西班牙公使令嬢きよ子

小集

前列向テ右ヨリ二人目小見山春子、左ヨリ幹事大山篤子、村井君子、立岡房江



岡山市女子文壇誌友會



下野金星會幹部紀念撮影

最も進歩したる生毛液

ピローゲン

薬學士藤本理先生新發明

▲ピローゲン發明の動機

毛髪脱落者の福音として、新に發明調劑せられたる生毛液ピローゲンは、薬學界の耆宿藤本理氏が、在來世に流布する生毛劑の不完全なるを慨せらるゝ餘り、多年の研鑽によりて些の毒劇藥を加ふる事なくして、全く生毛の實を擧げ得る一方劑を組織したるものなり。今同氏が確乎たる信念を以て、保證せられたる一文を左に掲ぐ

生毛劑ノ目的ハ普通毛ヲ生ズベキ身體ノ部分ニ何カノ原因ノ爲生毛セザル際ニ之ガ發生ノ機ヲ促ガスニアリ古來此目的ノ爲ニ種々ノ方劑考案セラレタレドモ遺憾ナガラ一モ信憑スベキモノ有ルナシ是ニ於テ余ハ現實生毛ニ効驗アリテ人身ニ害ナキ方劑ヲ獲ン事ヲ焦慮シ漸クニシテ自ラ完全無缺ト信ズルニ足ル所ノ一合劑ヲ造ルヲ得試ニ之ヲ拾數人ニ施スニ豫想ノ如ク早キハ一ケ月遲キモ一ケ月半ヲ出ズシテ全ク生毛ノ實ヲ徵シ得タリ本劑ハ生毛的成分ヲ有スル藥品ト養毛的効力アル藥品トヲ配シ且毒劇藥ヲ毫モ配合スル事ナケレバ皮膚ニ些少ノ損害ヲモ與フル無キハ余ノ確信シテ疑ハザル所ナリ

明治四十三年三月　薬學士　藤本理

以上は實に發明者が自家の名譽を賭して、使用者に誓ふ所、責任の所在を明晰にしたるを知る可きなり

▲ピローゲン効能

本劑は上記の如く、主として身體中毛を生ずべき部分に毛の無き者に塗抹して、直ちに効驗を顯はすは論を俟たず、譬へば鬚髯、腋毛、陰毛等の缺陷したる者、頭髪其他の生え際、薄き者を治し、鬼舐病及び惡疾より生ずる毛髪の禿脱、火傷、刀傷、發泡の痕等、苟しくも毛の生ずべき所あらば、必ず生毛せざる事なし。又本劑は薄き毛を濃密ならしめ、併せて毛髪の脱落を防ぐを以て、産後其他疾病等の爲め毛の脱ける部分に塗布して、現實に効果あり。

▲ピローゲンの使用法

ピローゲンの使用法は極めて簡易にして、先づ塗布すべき部分を石鹼にて能く洗滌し、然る後、筆にて丁寧に塗布する事、一日二回にて足るべし。萬一塗布後カユミ等を發する事あるも、何等の懸念あるなし、斯る反應を見るは、反つて薬劑の効驗顯著なるを證する事と知るべし。

定價

一壜金六拾錢
大壜金壹圓
特製金貳圓
内地小包料八錢
[illegible]三十錢

送金方法

代金は郵便振替貯金にて御送金被下らば郵便送料を要さずして確實に相届き可申候玉置口座番號は東京第四五一四番に有之候●又郵便爲替にても郵便切手代用にてもよろし但郵便切手代用は壹錢以上の切手にて壹割増に願上候

㊟注意　本劑は全國各地の信用ある藥店各小間物店にて取次販賣仕居り候御求の節は必ずピローゲンと御指名御購求被下度候成れば他の類藥を押賣する弊も尠からず候若し品切の節は直接本舗へ御注文被下らば壹圓以上は無料にて即刻郵送可仕候

ピローゲン發賣元　大日本東京市日本橋區横山町三丁目十五番地　諸賣藥卸問屋　玉置文治郎藥房

電話浪花長四〇一〇番、一五四二番　振替口座東京四五一四番

世には此如き安價の品有りや

本縮緬

景品に勅題模樣半えり進呈す

本品は品質の優良（綿絲一筋でもあれば金貳十圓進呈）と價格の低廉なる點に於て非常なる高評を博し數回賣り切れの盛況を呈し候ため今回更に製造工場を増設し同時に新年大賣出し開始候間紀念として例へ一品たり共御注文の御方には最上本縮緬半えり地一掛け宛進呈仕可候間何卒此好期を逸せず陸續御用命の程奉願上候

御袖地

- 男用　中巾別染友禪及び絞り染　割引　壹筋　金二圓卅五錢
- 女用　中巾別染友禪　減價　壹筋　金二圓八十錢

兵兒帶

- 白大巾　八尺五寸　同　壹筋　金三圓四十錢
- 同特製　一丈物　上　壹筋　金四圓五十錢

絞り兵兒帶

- 最新流行珍柄八尺五寸　同　壹筋　金三圓三十錢

婦人用頭巾

- 石持別染大々巾　上　壹枚　金二圓七十錢

羽織地

- 白並巾　三丈物　同　壹反　金九圓廿五錢
- 石持染　三つ紋付　三丈物　上　壹反　金十圓卅五錢

◎ハガキにて御年齢相添へ御注文あれば色及び柄等は充分流行物選定の上代金引換小包にて御送附可申上候　◎送料　内地　十二錢　海外　三十錢　代金引換各十錢増

◎萬一貴意に叶はざる時は返金交換に可應候

◎近頃類似の僞物販賣する者あり御求めの節は近江屋商店號に充分御注意被下度候

製造元　東京淺草區三間町四　縮緬製造卸商　㊞　近江屋商店　振替東京四四一三番　東京販賣部

發賣元　東京市京橋區大鋸町十一番地　振替口座東京一七二九番　女子文壇社代理部

急報

告白致します私は生來の赤毛でそれに生え際に禿があつて煩悶に煩悶を重ねた結果多年の實驗より發明した

專賣特許 毛生藥

で立派に毛生する事も出來漆の様な黑髮になつて再生の思ひをしました就ては此靈藥御望みの方は三錢郵券封入御申越あれば喜んで詳報もし叉五十二錢御送金になれば現品見本を差上ます使用法は至極簡單です

東京東兩國横網一丁目　西森五友



（あざのある人）（全治した人）

あざ ソバカス
●にきび●ほくろ●入墨●なまず●たむし

一日の藥用にて無害斑痕なく短時日に除去根治請合の家庭療法及全治の報告書郵券三錢送れ無代進呈す

●東京市大森區
大森　博濟藥院

官費にて陸海軍將校とならんと思ふ者は速に求め給へ

（最新刊）

陸海軍諸學校 入學案内

此際御注文者は特價郵税共廿五錢切手代用なれば廿八錢

本書には陸軍の各諸學校及海軍の各諸學校入學手續方法資格等を頗る平易に頗る明細に記載し併て一年志願兵心得をも記したる無二の良著なり

本書は始めて英語をひとりで學ぶ人の爲にと思つて著はしたる良書なり

忽ち四版

英語いろは

定價郵税共廿二錢　切手廿五錢

本書一冊を讀めばどんな女小供にても英語の書き方讀み方綴り方がわかる

發賣所　東京市神田區旭町廿四番地　三洋堂書店

俗謠改良の第一聲

我國の新春酒席の賑ひは本書にあり而も其調高尙優美

新都々逸

ポケット型天金付
定價金二十五錢
郵送料金二錢
切手代用一割增

粹な浮世を野暮らしく暮らす算盤胸算用。二一天作五厘無中。深いりせぬのが粹の粹。なぞと調子も水色に。理屈によう似た都々逸三昧。釋迦も浮かるゝ格子先。四角四面な謠ひもの。ペンとあはして碎いて世話の。三筋の絲に調子づき。都下流行の新都々逸謠曲入りを。筆先あやしく書き列ねたり。粹者求めよ是非ともにく

▲益
東京市神田區錦町二の三　益文堂書店
東京市神田區旭町二十四　三洋堂書店

急報

告白致します私は生來の赤毛でそれに生え際に禿があつて煩悶に煩悶を重ねた結果多年の實驗より發明した

專賣特許 毛生藥

で立派に毛生する事も出來漆の樣な黒髮になつて再生の思ひをしました就ては此靈藥御望みの方は三錢郵券封入御申越あれば喜んで詳報もし又五十二錢御送金になれば現品見本を差上ます使用法は至極簡單です

東京東兩國横網一丁目 西森五友



（あざのある人）（全治した人）

あざ ソバカス

●にきび●ほくろ●入墨●なまず●たむし

一日の藥用にて無害斑痕なく短時日に除去根治請合の家庭療法及全治の報告書郵券三錢送れ無代進呈す

●東京市大森區
大森 博濟藥院

官費にて陸海軍將校とならんと思ふ者は速に求め給へ

（最新刊）

陸海軍諸學校入學案内

此際御注文者は特價税共廿五錢切手代用なれば廿八錢

本書には陸軍の各諸學校及海軍の各諸學校入學手續方法資格等を頗る平易に頗る明細に記載し併て一年志願兵心得をも記したる無二の良著なり

本書は始めて英語をひとりで學ぶ人の爲にと思つて著はしたる良書なり

定價税共廿二錢 切手廿五錢

忽ち四版

英語いろは

本書一冊を讀めばどんな女小供にても英語の書き方讀み方綴り方がわかる

發賣所 東京市神田區旭町廿四番地 三洋堂書店

我國の新春酒席の賑ひは本書にあり而も其調高尚優美

俗謠 新都々逸

ポケット型天金付
定價金二十五錢
郵送料金二錢
切手代用一割増

俗謠改良の第一聲

粹な浮世を野暮らしく暮らす算盤胸算用。二一天作五厘無中。深いりせぬのが粹の粹。なぞと調子も水色に。理屈によう似た都々逸三昧。釋迦も浮かるゝ格子先。四角四面な謠ひもの。ペンとあはして碎いて世話の。三筋の絲に調子づき。都下流行の新都々逸謠ひ入りを。筆先あやしく書き列らねたり。粹者求めよ是非ともに

東京市神田區錦町二の三 益文堂書店
東京市神田區旭町二十四 三洋堂書店

るいれきの療法に就て

醫藥の進歩せる今日に於ても瘰癧の如きは尙未だ確固たる療法は發見せられません夫れ故花顏の子女も折角の美人も之れが爲めに玉疵の恨を遺したり有爲の靑年も之れが爲め意氣の銷沈を來たして千載不遇に終る者の多きは實に氣の毒千萬の次第であります

金線草丁幾

四百五十瓦入參圓 送費十五錢
貳百廿五瓦入壹圓半 送費十錢

本藥は上述の缺點を救はんが爲め多年の研究により發見せられたる理想的新藥にして如何なる難患にても本藥を服用せば切開其他外科的手術を要せずして全治し後日再發又は內臟を侵さるゝが如き憂なし、詳細說明書申越次第送呈す

發賣元 東京日本橋區本銀町四丁目 振替口座東京七六六七番 三田製藥所

るいれき最良藥

美髮の眞法

◎美髮の眞法を最もたやすく自修的に實行するには如何すべきか
◎拔け毛禿げを最も確實に防止し濃髮を再生せしむる確法如何
◎薄毛赤毛は如何にせば最も有効に之を濃化黑化せしめ得べきか
◎縮れ毛癖毛は如何せば最も安全に矯正し得て再發の憂無きを得るか

前記の諸問題を毛髮生理學の上より根本的に解決し治癒せば永久其の患に罹る事なき最も容易に安全に確實なる自修的療法を明快に講述せるものは

專門大醫口述の無價珍寶
●●●●●毛髮衛生說明書是なり
（一千部を限り）郵券貳錢送附次第先着順にて贈呈す

（轉居）名古屋市東區車道東町六十三 鬼頭杏西堂

東宮侍講本居豐穎先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題詠
國文學士小森松風先生編

好評

美文作法

▲全一冊大判二百卅頁 賣價貳拾錢郵稅四錢

美文の作り方を最も明瞭に解說し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者中村木公君編

好評

實地精査 女子遊學便覽

▲全一冊中判洋裝 賣價拾五錢郵稅四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

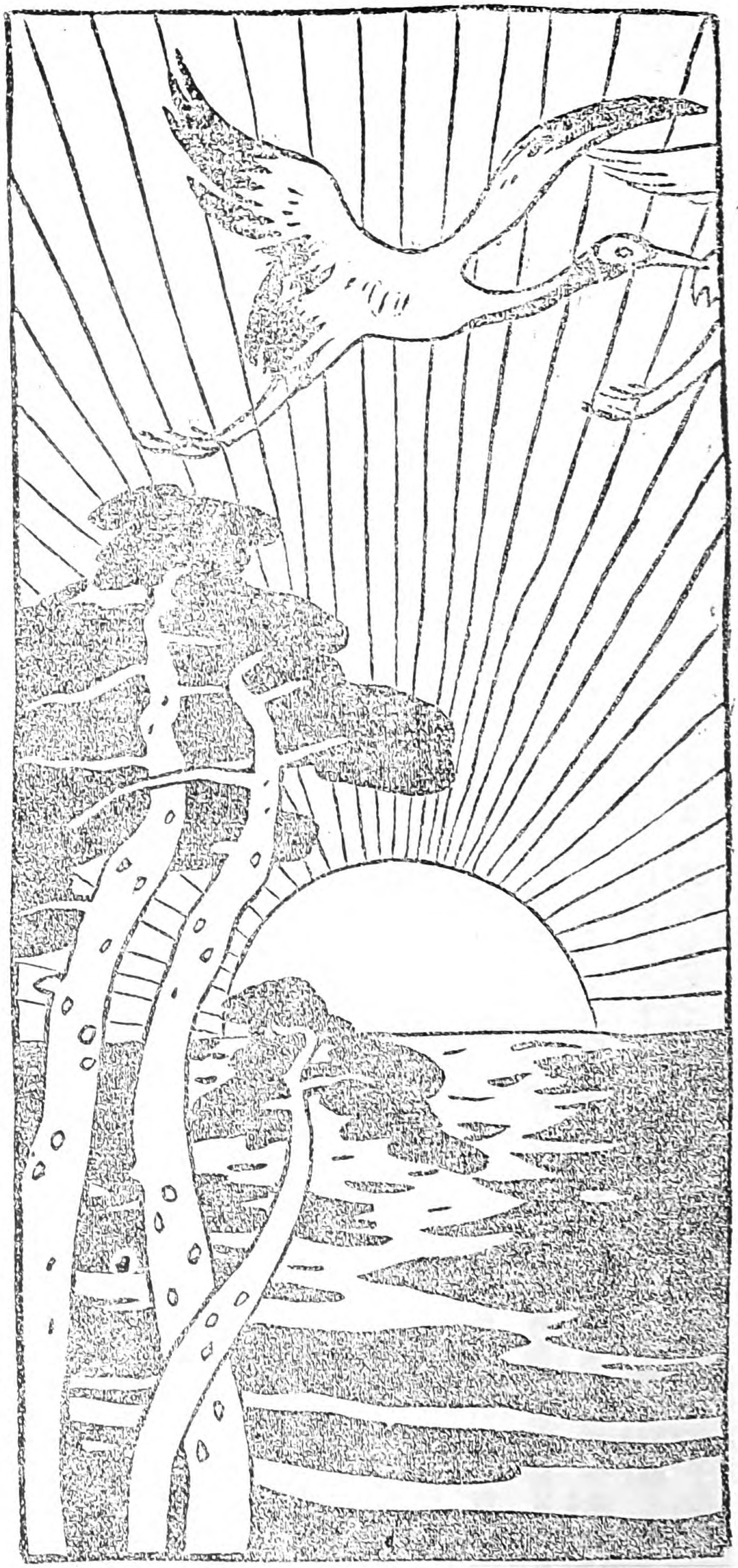
出版元 東京市京橋大鋸町 女子文壇社 （振替口座東京五七貳九番） 全國到處書店

恭賀新年

本年も不相變
御愛顧奉願上候

女子文壇社

社主　野口竹次郎
編輯局員
事務局員
外一同

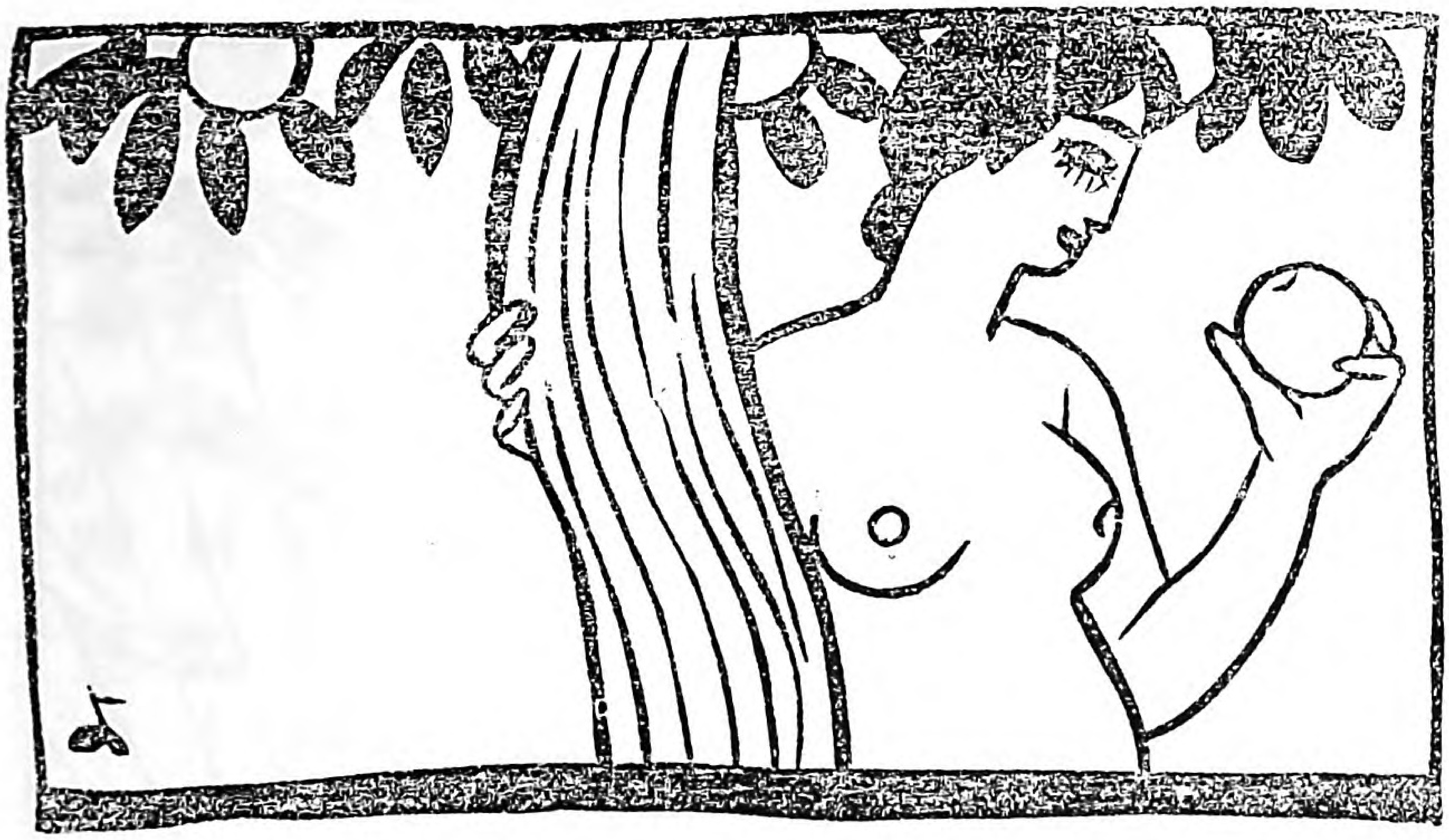


女子文壇

第八年第壹號・通卷壹百十冊

新年特別號

（明治四十五年一月一日發行）



我邦婦人の最大美點 ——（二）——

菊池幽芳

◎歐米婦人の恐るべき傾向

二十世紀において特筆すべき現象の一つは、婦人が社會的勢力の中心となつた一事でありませう。獨逸の如き軍人本位の國柄でも、その軍人を頤使して居るものは婦人で、また維也納などに行つて見ましても、軍人の職務は、たゞ婦人の歡心を買ふにあるかのやうに見えます。極端に云へば、歐羅巴の男といふものは、全く女の caprice を滿足させる爲に働いてるので、女は只遊んで、男を自由自在に頤使して居る專制君主の如き光景を呈して居ります。

女は最早子を産む事を欲せず、子を教育する事を欲せず、只一意此世の快樂を追はんとして居ます。家庭といふものを眞面目に考ふるものは次第に減つて來て、今は家庭を無意義のものとするものさへ生じて來ました。從つて結婚を大事とする觀念も薄らぎ、離婚を恥辱とせぬ恐るべき傾向さへ著しくなつてまゐりました。同時にまた父子の關係といふやうなものも、ます〳〵冷淡になり、歐洲の社會は今恐るべ

き危機に陷りつゝあるのであります。

そこでいろ〳〵の點から婦人問題の研究される間には、この傾向に反抗するものも少なくありませんで、現に英國などでは、有力な婦人間に、女は家庭に歸れといふ事を說いて居りますし、また今日の婦人跋扈の形勢を馴致した本尊の亞米利加ですら、その弊に堪へずして、昨今は家庭主義良妻主義が唱へらるゝといふ有樣です。併し滔々としてデカダンの潮流が漲つて居る今日、識者の叫びも容易に聞取られさうには思はれません。

そこでかういふ人々の間に、今日日本婦人を研究するものを生じて居るのみならず、一般に日本婦人に對する好奇心を持つやうになつて居るのも面白い現象で現に私なども二年あまりの佛國滯在中、屢々日本婦人に關する質問を受けました。自個中心主義——自我思想の甚だしい歐洲婦人の弊に困り拔いて居る歐洲人が思ひを沒我思想の代表ともいふべき日本婦人の上に致し始めたのは、殊に面白いコントラストであると思ひます。

◎日本を離れて日本を知る

私の知れる多くの佛國人は日本婦人のいろ〳〵の美點を認め、若しくは想像して、それを羨やんで居るといふ有樣で、一部の歐洲人の腦裏には、慥に日本婦人の型が描かれてあるのであります。實際の日本婦人は決して彼等が想像に描いて居るやうな、美しい性格ばかりは持つて居ませんが、併し私は外國に來たので、始めてよく日本婦人の長所を見る事が出來た事を告白いたします。無論短所も澤山あつて、歐洲婦人に比較して是非する事は容易ならぬ問題でありますが、日本婦人は慥かに世界に誇るべき二三の長所を持て居ります。それはどういふ點であるかは、以下の記事をお讀みになる中に自然お判りにならうと思ひます。

よく私共が彼地に居つて、不思議がらるゝ事は、日本人はなぜ妻を連れて外國を旅行せぬかといふ點ですこれは西洋人が十中の九迄、必ず妻を連れて旅行する

に引比べて、奇異の思ひをするのでは有ますが、その不思議がる奥に立入ると、日本人はよく妻を殘して置いて、安心して旅行が出來るものだといふ疑問になるのです。面と向つてから露骨の疑問は發しませんけれども、少し懇意の間柄になつて來ると、佛蘭西人などは一向遠慮をしませんから、露骨に問を發するやうになります。それは一年なり、二年なり、妻を本國に殘して置いて、どうして妻の貞操を保證する事が出來るといふのです。日本人として考へると、途方もない問でありますが、日本婦人を知らぬ西洋人としては無理も有ません。私共が假令二年が三年なりと留守にして居て、信用の出來ぬやうな妻は決してない。日本から單獨で歐洲に來て居る幾十百の妻帶者中一人でも、妻の貞操を疑ふやうなものはあるまいといふと、非常に驚きながら眞實にせぬものもあれば、それが日本の女の心理だと通をいふものなどもあつて、友達（佛人の）などは、さうはいふけれども內々心配になるだらうなどゝ、どうも眞實に信用するやうには見えぬのであります。

◎世界的尊敬に價する日本婦人の美點

併し佛蘭西の例をいふと、この數年來――日露戰爭以後は、日本の女といふものが大分雜誌や新聞などで紹介されると共に『お蝶さん』を始め、二ツ三ツ日本の女を主題とした芝居が仕組れ、それが皆日本の女の貞節を中心としたものであるので日人婦人と云へば、貞操の模範であるやうに考へる風が生じて來たのであります。ところが彼地の婦人は、どうであるかといふと、愛があつての貞操で、愛がなければ貞操もなく、姦通問題といふやうなものも、夫婦の間に愛がないといふ事が證明さるれば、それが多くの場合に辯解になる位ですから、一年も妻に空閨を守らして置けば最早妻の貞操を要求する權利がないとされる位です。從つて妻の貞操を保護するためには、非常の注意と少なからぬ苦心を要するので、殊に婦人に對する男子の訪

問客などゝいふものは、大抵機會があれば物にしようと狙つて居る狼なのですから、夫となるものゝ氣苦勞は到底日本人の想像し得るところでは有ません。殊に近代の婦人は、非常に奢侈と放恣の生活を取る事になつたゝめ、妻を持つといふ事はいよ〳〵容易ならぬ負擔であるので大いに活動をしようといふ政治家軍人などは無妻で通すといふ傾向が、近年ますます著しくなつて來て居ります。そしてかういふ人達は皆妾を持つので、それも殆んど公然で誰も怪しむものもなく社會の風紀といふものはいよ〳〵頽廢してまゐります、晩婚といふ事もまた是に伴つた現象で、婦人が家庭を無意義とする事、節操を無視する事、親子のある家庭を作らざらんとする事——子を產むを避る事は、延いて歐洲の社會を希臘羅馬の晩年の如き大墮落の有様に導びかんとしつゝあります。



併し外國人とても決して貞操を輕視しては居りません。巴里の一婦人雜誌が、理想の妻の資格を投票せしめた時に、やはり貞操といふものを妻の第一條件に置きました。また日本婦人の貞操を仕組んだ『お蝶さん』が、巴里の女を泣すところを見ると、外國の女とても

矢張り貞操を女の美德と考へて居るのです。而もそれを實行する事の出來ぬのは、彼等の神經が痲痺して了つたのと、一ッは日本のやうに貞操に關する傳統的の觀念がないからであります。私は外國へ來て、今迄は左ほど氣がつかずに居た日本婦人の貞節心に對して、非常なる敬意を表するの念を生ずると共に、あくまでもこの美德を日本婦人の長所として、保存したい希望に堪へぬのであります。

日本婦人が外國婦人の間に多くの崇拜者を有する事は、これまで日本婦人の知らぬところであらうと存じます。尤も彼等の多くは知らずに崇拜して居るのですから、日本婦人をよく知悉した上で、ほんとの崇拜者になるかどうかはまだ疑問ですが、私は巴里でも二三の崇拜者を知つて居ます。また巴里に居る日本婦人に接した佛蘭西人（男女とも）は、大抵皆心から日本婦人を懷かしんで居ます。巴里の有名な女優のスーザヌデプレーなども、小泉八雲の著書で、日本婦人を研究し、非常に懷かしがつて、私にその感想を語つた事があります。また巴里にマドモアゼルサランソンといふ立派な教育を受けた良家の令孃がありますが、この令孃などは、日本人とは何の關係もないのに、自ら日本婦人に私淑し、自分の何代前かの先祖は日本人の血を受けて居るに違ひないと固く信じ、自からは日本の文明に歸るのだと云つて、一生懸命日本の事を研究し、髮なども日本の島田のやうな髷を工夫して結び、その閑雅なる態度動作といひ、殆んど日本の令孃を見るやうで、佛蘭西人に屢々日本婦人と見誤まれる位です。それで私は外國人にそれほどまでに思ひこまれて居る日本婦人は、今後ますます自重して、デカダンの思想にかぶれず、特有の美點を發揮しなければなるまいと思ふのであります。

◎上下を通じて優良なる婦人

これはまた外國の醫者に聞た事でありますが、看護婦としては、日本の婦人が一番いゝといふのであります。日本看護婦の名といふものは、日露戰爭の時に大

いに發揮され、西洋人などもいろ／＼書いて居ります。從來西洋では、英吉利の看護婦が第一で、看護が行屆き、親切で、責任を盡すといふのでありますが、日本の醫者に聞いて見ましても、東京の醫科大學で養成した赤十字看護婦の如きは、世界第一の看護婦と稱して恥かしくないといふ事であります。

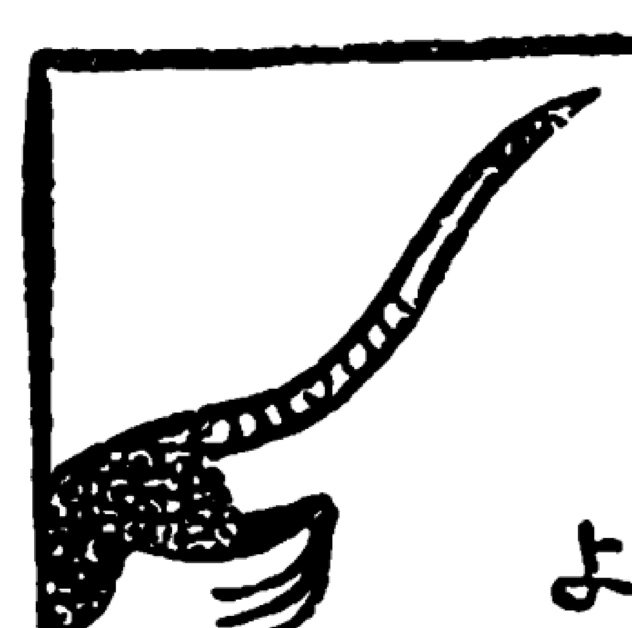
親切で優しいといふ點は、全く日本婦人の長所で、これは彼地に行つて居て、西洋の婦人と對照して見ると、最もよく分ります。神戸や横濱で下等な日本婦人を洋妾にして居るものさへ、彼地へ歸つて行くのは、皆惡い記憶は持つて行かずに、皆日本婦人の長所を賛へて居ます。實際また日本婦人を妻にした西洋人の家庭は、いづれも圓滿であるに引かへ、西洋婦人を妻にした日本人の家庭の多くは、圓滿ならざるを見ましても思ひ半ばに過る事と存じます。

猶終りに臨み、少し例に引くは如何とも思ひますが、これは新嘉坡で感じた事であります。御承知の通り、こゝには七八百の日本醜業婦が居りますが、新嘉坡政廰では内々日本醜業婦を歡迎して居るので、どういふ譯かといふと、日本の女は正直で客の物を盜まない、また客に物を強ひない、性質は溫順で且つ清潔を好む、伊太利、佛蘭西、露西亞、獨逸等から來る賣春婦は、客のものを盜み、客に惡じひし、不潔で且つ大あばづれである。日本の賣春婦は賣春婦中の優れたものであるといふのであります。いづれ賣春婦などをする女は、下等の女で、それから日本婦人の一般を押す事は誠に不遜ですが、而もこの下等の女も、かゝる美點を具へてるとして認識されて居るのであります。素より日本婦人の缺點といふものも多々ありまして、歐洲婦人に學ぶべきものは多いのでありますが、自から世界に傑出して居るかず／＼の長所ある事を忘れて、徒らに西洋婦人の短所を學ぶやうになりますと、やがては現在の歐洲が苦しんで居るやうな社會的大缺陷を生ずる日が來るであらうと危ぶまれますので、折角の河井君の御依頼により、滯歐中の所感を記して聊か婆心を加へた次第であります。



試に婦人の型を破れ

島邨抱月



婦人と文藝と云ふ問題の前には、先づ婦人と男子といふ問題が横はつて居る。一體男と女とは眞實の意味に於て如何云ふ社會的地位の異動があるか昔からしばしば繰り返されて居る所謂婦人問題とは、一方より云へば、結局女子の男子に對する地位如何といふ問題に異ならない。此點から云へば、歐洲などに婦人問題が起つて以來、すでに可なりの年月を經て行くに係はらず、今尚ほ此の問題を解決しようとしてゐる、言ひ換ゆれば、元來女子は一方男子があれ程、大膽に明白に社會的地位を占領して居るのに對して、果して如何なる程度までそれと對立し得るか、今日現在の婦人の狀態では未だ眞實の答は與へられない。何故なれば彼等は何百年來一種の型に入れて、育て上げられた、云はゞ人工的に誇張された婦人型といふものになつて作り上げられて居る。最も多少の例外はあるとしても大體に於て、其心理狀態から見ても、其生理狀態から見ても、女らしいと云ふ樣な一ッの觀念を、人爲的に誇張して、それにあてはめて幾百年來育て上げられて來た。從つて一寸見るとこれがやがて女子の天然自然の性質であつて、あんな風に弱い柔しい小さい細かいと云ふ樣な方面に進むのが造物者の主意であつたかの如く見える勿論其中には柔しいとか、細かいとか云ふ樣に、特性の天然の傾向があるには相違なかろうが。誇張とは其意味で、天然以外に大分極端に造り上げられて居る點

がある。此點より云へば、日本の婦人等は、世界に於て最もよい標本であつて、自然を通り過して大分向ふの方へ持つて行かれて居た。だから自然の女といふよりはむしろ人工の女といふ感が餘程多くあらはれて居る。若しこれを善良に解すれば日本の女は少なくとも舊來の社會が理想として居つた女子といふ觀念を一層多く具體せられたものである。即ち理想的女子であるけれども、それで裏から云へば、餘りに自然を誇張し過ぎた女子とも見られる、それに競ぶれば、大體に於て、西洋の女子は自然に近いけれども同じ西洋でも、國によつて色々相違もあり、かつ西洋の女だからと云つて、丸で男と違ひのないものと云ふことは決して出來ない。やはり女らしいと云ふ感はどこまでも失はれない。其歐洲の婦人ですらも實は疑問である。又餘程人工の跡

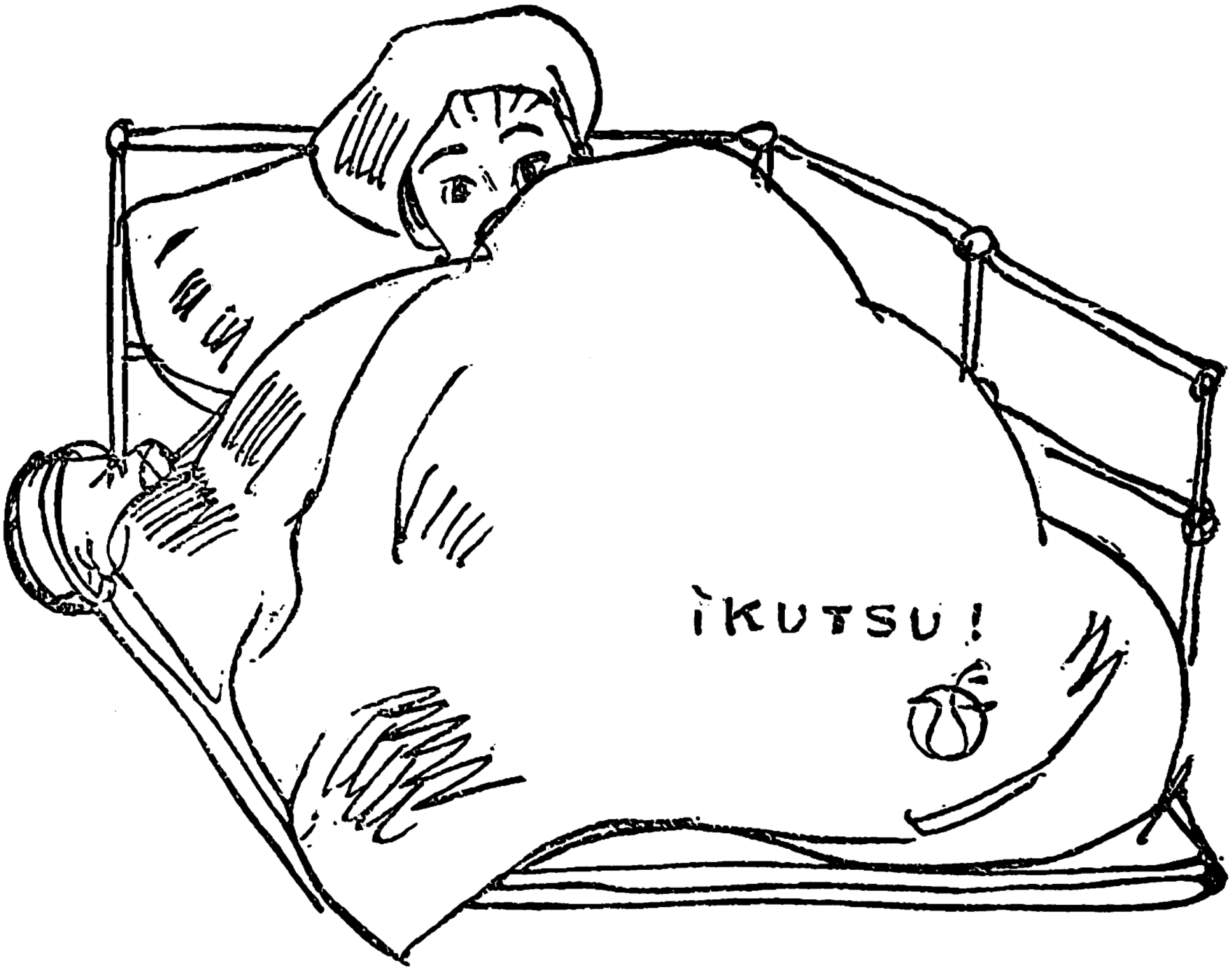


の殘つて居る婦人ではないか先づこの問題を解決しようとするのが、これ婦人解放論の主意であつて、つまり一度婦人をして、出來得るならば、全く無條件で、男子と同じ樣な生理的、心理的の敎育をして見、云ひ換ゆれば全然自由に、自然に、發展せしめて遺傳から來る婦人敎育の型をはなれしむるとすれば、其曉に於ける婦人の藝術は、かならずしも現時の狀態ではないかもしれぬ。然しそれは今兎角決せられぬ問題で是を決するには第一歩として眞の解放が必要である。それには各方面より婦人に色々の試みをさせてみるより外はない、文藝上から云へば、たとへば文藝といふものは、本來最も多く人間の感情的及び、感覺的生活に基礎を置いて居る。然るにこの感情及び感覺的生活といふ如きことは、比較的女子の方が最もたやすく實行し得る、それらから云へば、女子は生れながらにして、藝術的生活實行者である。事實に於ても、女の方が何となく、藝術的のことを多くやつて居るけれども、もし只一の問題といふことは、藝術的生活實行者が、かならずしも、藝術家ではない。自分の身に行つて居ることを、藝術として打出すには今一つ重大なる力がいる。それが、卽ち自覺若しくは內省の力である。極めて微妙なる作用であるが、無自覺に平氣で、やつて居る間は藝術的衝動はあらはれない。けれども何かの機會に、ちらりとでも、其自分を自覺し、若しくは內省して、はつと思つた其瞬間、そこに藝術的衝動と云ふ如き、一種の力が顯はれて來る。此の力の有無が、卽ち藝術家か、否か、の區別である。女子に最も多く、感情的感覺、云ひ換ゆれば最も藝術的な生活をもつて居る。然し多くは、それを無自覺に過ごしてしまう。

されば何うして自覺を與へるかと云ふに、兎に角この問題は、一度全く婦人といふものを從來の誇張したる型から救ひ出して、身一本の人間として育て上げなければ分らぬ。叉現在の婦人狀態をこの問題で解釋するには、餘りに多く婦人が人爲的に揑造せられたる婦人となつて居る。といふのが婦人解放論者の、元來の主意でなければならぬ。而してこの一般的な論法は、

又女子の文藝家としての地位といふのに、あてはまる。即ち今日迄の處ではかくの如く、人爲的に築き上げられたる婦人が作る文藝は、自からの結果としてやつぱり、婦人的になつて居る。概して細かい弱い柔しい樣なものが婦人の作るに適して居る樣になつて居る。近代の藝術が最も要求する處の、深酷とか强さとか云ふ如きものは、どうも婦人の手には不向の樣に一般に考へられて居る。けれどもこれは實は未知の問題で、從來缺けて居た處の智識の方面の自由な敎育を與へてみたら、内省の力が自づとあらはれて來はしないか。要するに精神の修養の深い人は、深い自覺を持ち得るわけである。かやうな方から云つても、婦人の自由敎育それから生ずる自覺、内省の力を、まづ婦人に與へる機會を作つた上でなければ、實際女子がどの位の程度までの文藝を作り得るかといふことは未知の問題である。

元日や
くらきより
人あらはるゝ
曉臺



自分の文學的生活

與謝野晶子

自分は斷えず忙しく暮して居る。月の初から終りまで毎日書き物に追はれて日を送つて居ると云ふ生活は肉體の勞働てそせざれ、其れ以上に忍び、其れ以上に力め、其れ以上に苦まねば成らぬ生活である。まだ娘で生家に居た頃に考へて居た文學者の生活程氣樂相で羨ましい物は無かつたが、其が我身の實生活と成つた今日は大分に趣が異ふ。生家の稼業に從事しながら筆を執つて居た頃は例へば鳥の歌ふ如き氣分で感情の湧く儘自然に歌ふ事が出來た。歌へば其れで滿足であつた。其れを衣食住の生活の資とする必要は少しも無かつた。今は然うで無い、筆を執ると云ふ事が自分の職業となり、之が直ちに自分と家族とを養ふ基礎である、感情の赴く儘に歌ふ事の樂みは以前も今も變りは無いが、其れのみでは孤獨の生活を送る資力にも足らない。況して一家を支へて行く事は望まれない。それでさまで自ら書くことを欲せず、格別書かねばならぬ必要を自分に感じて居ない種類の物にまで他から賴まれる儘に筆を着ける事となる。通俗な記述が却て自己の特長とする作物よりも衣食の資に換へ易い、意志の弱い文學者、前途の望の多い才人が中途で挫折して戯作者流

に墮落して仕舞ふのは大抵之が爲である。

☆

自分は時々之に就いて悲む。源氏、枕草紙の作者達は斯樣な苦しい生活を知らなかつた。平安朝の貴人才女の生活には藝術と戀愛とが融和せられて居た。其時代は夢の樣な時代、娑婆即ち寂光の淨土と樂むことの出來た時代であつた。固より裏面には政權の消長に由つて日常生活の榮枯浮沈は劇しかつたにせよ、其れが今日ほど肉滯して人の死命を制する事は無かつた。榮枯浮沈をさへ流轉無常の世相と涙を流して諦める事の出來る餘裕があつた。今日の樣に文學を直接衣食の資とせねば成らぬ時代に生れた文學者は、終に個性發揮の大事を放擲して心ならぬ循俗の記述にあたら精力と



宵闇の灯のつかぬ時

一生とを徒費せねば成らぬ結果に陷るかも知れぬ。純粹の文學と云ふものは此世紀の生存競爭と相容れずして亡ぶのであらうか。事毎に器械的に進化して行く世の中に愛情と神秘と夢とを母として生れた纎弱い詩歌は育たないのであらうか。

☆

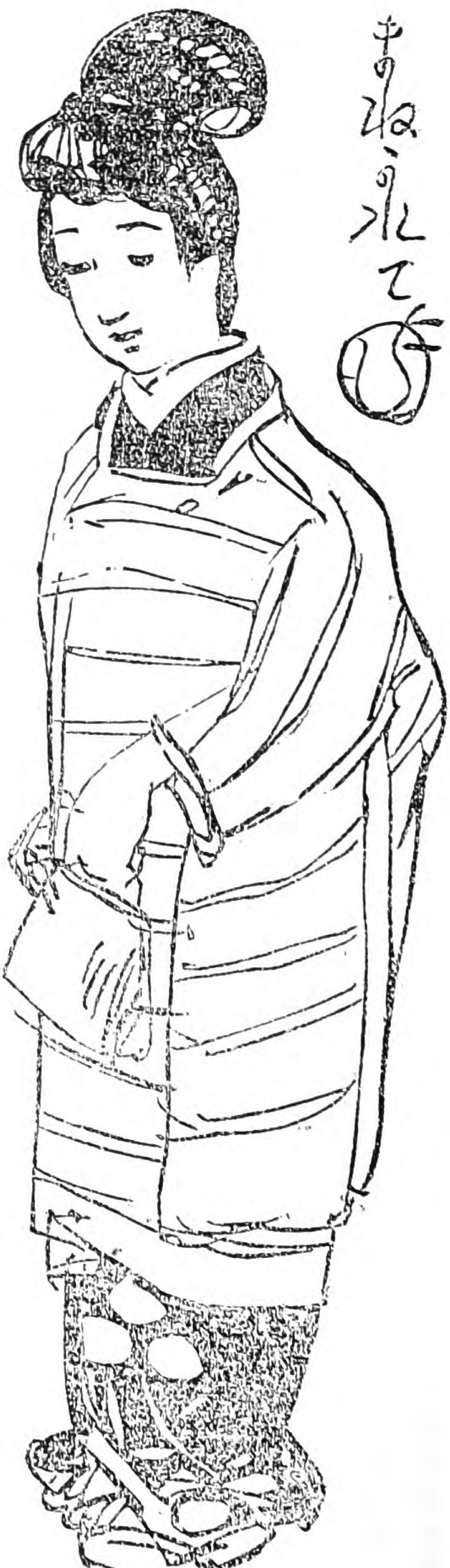
併し自分はまた思ひ返して「否」と叫ぶ。其樣な取越苦勞をするのは自分が現代の一女性であると云ふ自覺を忘れた刹那に射す舊思想の影である。現代に生きようとする勇者は現代に打勝たねば成らぬ。衆俗より逃れ走るな。ザラツストラの爲せし如く衆俗の間を行け。超人を學ぶ能はずとするも、せめては衆俗の間を潛行せよ。自分の意志は斯く命じる。そこで勇氣を回復した自分は飽くまでも有らゆる方面に自分の精力の許す限り筆を着けようと發憤する。昔のまゝの純粹の文學などと云ふものが今日に有り得よう筈がない。我我は今日の「我」から新しい樣式、新しい思想の文學を生むべきである。自己に適した勞働即ち文學上の製作を衣食の資に換へるのは現代に於て當然の事である其れを怪むのは文學は何時でも「櫻かざして今日も遊ぶ」空虛な前代の產物であると夢みて居るからである。

☆

或人は今日の如き時代にあつては二重三重の生活をせねばならぬと云ふ。其意は假面の生活をせよ、心ならぬ製作も衣食の爲には忍べと云ふのである。又其意は文學を最高の職能となし置き、衣食の資は泰西の二三流の藝術家が辯護士、醫師、銀行員、官吏などを本業とする如く他の職業より之を得よと云ふのである。都合の好い案である。自分は他人が之を爲すのに異議は毛頭ない。現に文學を志としながら新聞雜誌記者を本業として居る青年男女も少く無い。自分は其れを敬服すべき心掛だと思つて居る。併し自分の性情としては何うも假面を被りにくい。心ならぬ仕事をするのが厭である。自分は此兩三年この矛盾に人知れず惱ん

☆

而して自分の今の心持では斯う考へて心の上の平衡を兎に角保たせて居る。其れは二重三重の生活だと考へると慊らぬ所、安からぬ所がある自分は何事をするにも唯だ一重の平面な生活だと考へたい。一枚の平面の上に自分は幾様の變化ある生活をして居るのだと考へたい。其れで自動的に製作する場合は勿論のこと、他から需められて受身に成つて筆を執る時も自分の力量の許す限りを惜まずに出して、其れにも是にも相應の「我」と云ふ刻



印を押して置かうと思ふ。純粹の叙情詩、それは自分の瞳の様な位地を占めて居るものであるけれども、其れを主として世人の買ふ時代は遠い將來、自分の生きて居ない將來の事である。自分は手をも口をも足をも齊しく充實したる自分の表示だとして時の人の縱覗に任す。自分の一切の述作に自分を僞つた物は一つも無いことを期する。述作のみならず、良人と棲むのも子供を育てるのも、自分と關係を持つ一切の事は皆自分の平面生活の各範疇である。

☆

忙しいと云ふ事を苦にするのも實は勝手な贅澤を云ふのである。自分は年に一二度無い時間を差繰つて旅に行く。溫泉などの一日一夜は縛された繩を解かれた樣で心も身も伸び伸びする。併し二日三日となると田舍の生活の無爲なのに倦いて、しみじみと仕事のある都會が戀しく、安閑な日送の空虛な感じが悲しい程身を嚙むのを覺えて、張りつめた尖つた神經を持つて居る人々、殊に自分の樣な寂しがりの女は昨日も今日も同じ自然を眺めて暮す田舍には堪へ難く、矢張あとから、あとからと仕事に追はれて側目を振る遑も乏しい都會の生活が適して居る。苦しいのが却て樂しいのである。若し都會に居て仕事が無かつたら、其れは田舍に居るよりも幾倍か寂しい事であらう。然う思へば自分の忙しいのは幸福である。

☆

文學が既に現代の職業の一つである以上何人にも勸めて好いかと云ふに、自分は我兒にも之を勸めたくは無い。他の職業の大部分は他人の創案や慣例を襲ふて行けば普通の敎育がある限り何人にも何うにか經營されるものであるが、藝術は然うで無い。個性の最も生粹な發表を要求するのであるから、天分の乏しい生半可な藝術家の一生ほど慘めなものは無い。外面は兎も角、本人の内心の苦悶は一通で無からう。多少の天分を持つて居る者でも自發の泉には間歇がある。常に修養して補はねば成らぬ。衣食の計に追はれて居ては修養も容易でない。同輩との競爭の劇烈なのは何れの社會にも免れない事であるとして、其上に世評と云ふ怖しいものがある。意志が弱く乃至運の惡い者は世評に由つて永久に埋沒せられて仕舞ふ。自分は自ら進んで文學を熱愛する人で無い限り我兒と雖も勸め兼ねるのである。併し之を以て文學を青年に禁ずると云ふ樣な野蠻な敎育に賛成する自分では毛頭ない。學問や藝術とは空氣と共に幼年の時から一般の家庭で吸はせたいと考へて居る。

貴婦人論

一個人として世間に立てよ

文學博士　幸田露伴

◎貴婦人の重い地位

貴婦人と言へば地位あり、勢力あり、財產ある婦人を言ふのである、この地位あり、勢力あり、財產ある婦人は、世間から尊敬を受くべき地位に立つて居るから、其の一擧一動は自然一般婦人の思想を支配することになるから、貴婦人と言はれる人は其の行動を餘程注意して貰はねばならぬ。又斯う言ふ婦人は生活難から遠ざかつて居るから、家政の苦勞と言ふものがない家政の苦勞がない爲め間暇がある、この間暇を善用して世の爲め人の爲めになるべき事が充分出來る。又斯う言ふことをするのが貴婦人の務めである、尤も現代の貴婦人達も全く何事もしないのでない、愛國婦人會とか將校婦人會とか言ふ團體を作つて、公共事業に力を盡して居る。又鰥寡孤獨を憐む孤兒院や養育院等に盡力もして居る。これは誠に結構なことである、社會の上流に生活して生活難を感じない貴婦人達にとつては斯う言ふことに力を盡すのは當然のことで、さうなくてはならぬのである。婦人の本領は愛であるから、愛を基礎として慈善事業に從事するのは誠に其の當を

得たる仕事である。

◎團體的にも個人的にも

然し貴婦人の仕事としては斯う言ふ事のみを以て私は滿足しない、何故かと言ふに、愛國婦人會とか將校婦人會とか言ふ樣な團體的の力を以て一つの仕事をするのは、個人の力では出來ない大きい仕事が出來るから、この點は誠に結構なことである、又實際大きい仕事をするには、個人の力では到底出來るものでない、必ず團體的の力を以て之に當らねばならぬ。然れども利のあるところには又弊害もあるもので、團體的の力を以てする仕事には、成程大きい仕事が出來るには相違ないが、何分多くの人が寄り集まつてする仕事であるから個性を發揮することが出來ない、個人の特性を發揮すると言ふことが出來ない、のみならず責任の觀念が比較的薄いゆゑ、事柄に依つては充分目的を達することが出來ぬ。この點から言へば貴婦人は團體的に活動すると同時に、又個人的にも活動して貰はねばならぬ、個人的に世の爲め人の爲めに活動すれば、其所に個性を發揮せしむることが出來て、團體の力の及ばないところを補ふことが出來る。今一つ貴婦人に望むのは積極的の仕事をして貰ひたいことである。養育院や孤兒院等の事業に力を盡し、鰥寡孤獨を慰め勞ると言ふことは、貴婦人の仕事として適當な事で、誠に結構なことには相違ないが、然し孰れも消極的の仕事であるから、これのみを以て貴婦人の能事終れりとするは未だ以て貴婦人の責任を盡したりと言ふことは出來ない。苟も社會の上流に位せる貴婦人が、世の爲め人の爲に何事かしやうと言ふなら、消極的の事のみでなく、進んで積極的の事がして貰ひたい、貴婦人が生活難から遠ざかつて、家政に心を勞することがない爲め何事か世の爲め人の爲めに善事を爲さんとするなれば消極的の仕事だけでなく積極的の仕事がして貰ひたいのである。

◎自分の好なことに力を入れよ

個人的の仕事とは如何いふことかと言ふと、婦人會とか慈善會とか言ふ様に多くの人が集つて共同的に仕事をするのでなく、自分一人で為すべきことを為すのである。多くの人間を同時に助け様と思へば一人の力では出來ない仕事であるから、團體的の力に依らねばならぬが自分の力の及ぶ程度に於て自己の周圍の者を助けることは總て團體の力を待つに及ばぬ。一個人の力で充分目的を果すことが出來る。又團體的の仕事であると、自分の趣味に合はぬことや自分の本意でない事をせねばならぬことが起つて來るが、個人的の仕事には斯う言ふ弊がない。自分の趣味に適ふた事をするから熱心の度が團體事業の比でない、仕事の上に個性を發揮することが出來るゆゑ、其結果が頗る良好である。例を擧げて言へば、畵を好む者が畵家を奬勵し、文學を好む者が文學者に援助を與へ、音樂を好む者が音樂家に同情する様の類で、自己の趣味を基礎として、其趣味に適ふた事に從事するのであるから、樂しんで事に當ることが出來る。凡そ何事に依らず好んで為



ずは勉めて爲すに優るのである。故に國體的事業の場合に於けるが如く、勉めて爲すよりも、個人的事業として好んで爲すところに反つて大なる成功がある。勉めて爲す者には個性を發揮することが六箇敷いが、好んで爲す者には充分個性を發揮さすことが出來る。のみならず元々自分の好む道であるから、其仕事に從ふことが既に愉快である。世の爲め人の爲めと言ふよりも自分の爲めにすることになる。自分の爲めにすることが同時に又世の爲め人の爲めとなるのであるから、これ程都合のよいことはない。

◎貴婦人の美德

自分の趣味を基礎として世の爲め人の爲めにすることは自分の趣味を擴張すればよいので、強て世の爲め人の爲に犠牲的にするのでないから、實行の上に於て頗る容易である。然しこの趣味を基礎として個人的に善事を爲すのも、消極的の仕事でなく積極的の仕事をやつて貰ひたい。鰥寡孤獨を憐むと言ふのも誠に結構には相違ないが、國家の爲め社會の爲め何事か爲さんとする、學者、事業家、發明家等に援助を與へて、以て其の目的を達せしむと言ふ樣な積極的方面に活動してこそ、眞に世の爲め人の爲めになるのである。若し貴婦人にして斯う言ふ方面に活動する志があれば、爲すべき仕事は幾許もある、例之飛行機の發明者に援助を與へて成功せしむるもよし、大著述に從事せる者に同情して之を完成せしむるもよい、總て學問にしても發明にしても前人未發の理を發見しやうとするには總てのものを犠牲に供せねばならぬ。却々自己の生活などに顧慮して居ることは出來ない、斯る場合に社會の上流に在る貴婦人が援助を與へると言ふことになると、どれだけ奬勵になるか知れぬ。其の人の成功は國家社會の利益で、其人を成功せしめた貴婦人は間接に世の爲め人の爲めに盡したことになる、殊に人の美を爲さしめると言ふことは、婦人の尊敬すべき美德であるから、斯う言ふ方面に活動してこそ、貴婦人の貴婦人たる本分を盡すことが出來るのである。

◎また一つの仕事あり

貴婦人が、自分の地位、名誉、財産を善用して、世の為め人の為めに働いて居る人物に援助を與へることの貴婦人として最も適當な仕事であることは、今言ふた如くであるが、今一つ貴婦人の仕事として適當な仕事がある。それは外でもない物の蒐集である、蒐集すべき目的物は何でもよい、自分の趣味に適ふた物を集



めればよいのである。書物を好む者は書物を集めるがよし、繪畫を好む者は繪畫を集るがよい、人形が好きなら人形、盆栽が好きなら盆栽、各自其好むところの物を蒐集するのである。これは如何いふ利益があるかと言ふと、假令如何なる微細な物でも之を蒐集して其數が多くなれば人を益し世を益することになる、印紙の如き物でも之を蒐集すれば斯の道の研究材料になる位であるから陶器に趣味を持つ者は陶器を蒐集し、漆

器を好む者は漆器を蒐集すれば、斯道の奨勵ともなり又研究材料ともなり、斯の道の者にどれだけ利益を與へるか知れぬ。然し其の蒐集すべき目的物は範圍が廣くてはいかぬ。出來得る限りに於て範圍を狹くせねばならぬ。同じく陶器を蒐集するにしても、唯漠然と陶器を集めて居ては際限がない、又斯う言ふ際限もない蒐集は到底個人の力では目的を達することが出來ないそこで貴婦人が自分の趣味に適ふた物を蒐集する場合に極範圍を狹くせねばならぬ。例之陶器や漆器を蒐集する場合に於ても、漠然と陶器や漆器を蒐集せず、陶器なれば乾山の陶器、漆器なれば破笠の漆器と言ふ樣に其の範圍を限つて蒐集せねばならぬのである。斯うして範圍を限つて集めるのであると、之を完成するのも比較的容易であるし、又蒐集したる物も專門的研究の材料となつて、斯道の裨益となることが僅少でない。要するに貴婦人も更に個人的の活動をして貰ひたい。

上流婦人の今昔

内藤鳴雪

◎優つた點

貴婦人とは上流社會の婦人を指すのである。この上流社會の貴婦人は昔と今日と大分異つた點がある。昔の貴婦人よりも今の貴婦人の方に善い點もあるが、又惡い點もある。昔の貴婦人と言へば家の中に閉籠つて世間と沒交渉で居たのであるが、今の貴婦人は、却々家の中に引籠つて居ない。何々婦人會とか何々慈善會とかに關係して公共事業に盡力して居る。これはさもあるべき事で、貴婦人と言へば一國の婦人の模範たら代表たるべきものであるから、率先して國家事業や公共事業に力を盡すのは當然である。上の好むところは

下もこれを習ふのであるゆゑ、上流社會の貴婦人が斯う言ふことに奔走するのは誠に結構なことである。戰爭の樣な非常の場合は固より平時に於ても、貴婦人たる者は出來得る限り斯る國家事業、公共事業に盡力して貰ひたいものだ實際斯う言ふ方面に活動するのが貴婦人と言はるゝ者の本分であらう。この點から見ると今の貴婦人は確に昔の貴婦人よりは傑いと思ふ。次に今の貴婦人が昔の貴婦人よりも優れて居るのは、學問のあることである



昔の貴婦人は今の貴婦人から比較すると遙に學問が劣つて居る。昔の貴婦人は恐く無學であると言ふのではないが、昔の貴婦人の學問は文學の一局面に限られて居て、科學の知識と言ふものはカラ駄目であつたから一家を治めて行く上に種々不都合が生じたのである。嫁となつては舅姑との折合がつかず

母となつては子供の教育が出來ないと言ふ樣な不都合があつた。ところが今の貴婦人は昔と違ひ、完全なる教育が施されてあつて學問が充分であるから、一家を治めて行く上に不自由もなく、嫁となり母となつても各々推察が届いて衝突等も起らない筈である。これは今の貴婦人に學問のある御蔭で、この點は確に今の貴婦人は昔の貴婦人より優れて居ると言ふことが言へるのである。

◎劣つた點の一

以上は今の貴婦人が昔の貴婦人より優つて居る點であるが、今の貴婦人が昔の貴婦人に劣つて居る點を擧げると隨分ある。先づ第一に今の貴婦人の缺點は奢侈である。昔の貴婦人は階級に依り服裝が一定して居たから奢侈に流れる樣なことはなかつたが、今の貴婦人は別に一定の服裝と言ふものがないゆゑ、贅澤のありたけを盡して居る。それも身分相應の贅澤ならまだしも、身分も地位も考へずに無暗矢鱈に服裝に贅を盡したがる。幾許今は昔の樣に服裝に制限はないからと言つて、夫の地位や身分や收入の如何も考へずに、只モウ自分の虚榮心を滿足せしめんが爲めに有らん限りの贅澤を盡さんとするのが現代の貴婦人氣質とは情けない。如何に貴婦人だからとて、何もさう服裝に贅澤を盡す必要はない。貴婦人と言ふものは上流に在つて、世間の婦人の模範となるべきものであるから、婦德を涵養して其の身を愼み、上を敬ひ下を憐み、身を節して國の爲め人の爲めに力を盡してこそ貴婦人とも言はれ、人からも尊敬を受けるのである。それが今の貴婦人は如何であらう、多少公共事業に盡力する樣ではあるが、それよりも先づ自分の服裝を立派にし、持物に贅を盡すのを急務として居る。流行を追ふて贅澤をするのを貴婦人の本分と心得て居るのである。斯う言ふ樣な心掛けで、それで貴婦人で候などと大きな顏をして居ても、人は決して尊敬しない。なる程貴婦人は傑いと感心はしない。それでなくてさへ今の社會は奢侈に流れて、總てが贅澤になつて居るので、一方に生活

難の聲が高いにも係らず、一方では婦人が自己の身分も地位も考へずに猫も杓子も皆衣服持物に贅澤を盡さうと言ふ時節であるから、一般婦人の模範ともなるべき貴婦人は、此惡風を打破すべき責任のあるにも係らず、反つて率先して惡風の前驅となるに至つては沙汰の限りである。この點は今の貴婦人と昔の貴婦人と比較して餘程惡いと思ふ。

◎劣つた點の二

次に昔の貴婦人と今の貴婦人と比較して、今の貴婦人が昔の貴婦人に及ばないのは婦徳を重じないと言ふことである。昔の貴婦人は家の內にのみ閉籠つて、國家事業にも公共事業にも少しも力を盡さなかつた點は今の貴婦人に劣つて居るが、婦徳を重じた點に於ては今の貴婦人よりは優れて居る。今の貴婦人は何々慈善會とか何々音樂會とか言ふ會合に常に外出する。斯う言ふ會合に外出する爲めに虛榮心が盛になる。從つて其の虛榮心を滿足せしめることに汲々として居る斯くの如く絕えず虛榮心の爲めに浮身を窶して居るので、知らず〱魔道に引き込まれて、一身一門の名を穢す樣なことが隨分起つて來る。斯う言ふことが一般婦人の模範となるべき貴婦人にあるに至つては嘆息の外はないのである。今の貴婦人に斯る問題が起つて來るとすれば、此點も確に今の貴婦人は昔の貴婦人に及ばざること遠しである。要するに昔の貴婦人と今の貴婦人とには各々長短はあるが、今の貴婦人は昔の貴婦人の美點は何所までも保存して行かねばならぬ。昔の貴婦人の樣に婦徳を重じ、質素で奢侈に流れないと言ふ點は確に貴婦人の貴婦人たるところで、今の貴婦人の大に學ぶべき美點である。今の貴婦人は昔の貴婦人よりも智識も優れて居るし、又昔の貴婦人の樣に世間と沒交渉でなく、相當に國家事業や公共事業に力を盡して居るのであるから、今一歩進んで昔の貴婦人の美點に習つて、婦徳を涵養し奢侈を止めて贅澤を廢すれば確に理想的の貴婦人と言ふことが出來ようと思ふ。今日の樣な世の中では總ての貴婦人が盡く理想的の貴

婦人となることも出來ぬであらうが、責めては幾人なりと此心を以て自ら勉め、又世間に向つても率先呼稱して貰ひたいと思ふのである。これが今の貴婦人の歩つた點の第二である。

美服を纏へるが故に貴婦人か

宮崎湖處子

◎貴婦人は虚榮の權化なり

單に貴婦人と言へば餘りに漠然として居るから、玆に言はんとする貴婦人と言ふものを明にし置かう。社會の最上位に在るいとやむごとなき眞の貴婦人に就ては何事も言ふべき問題がない。これは問題外として、本問題の下に言はんとする貴婦人は、中流社會若しくは上流社會の婦人にして、自ら貴婦人を以て任じて居る婦人を指すのである。この意味に於て所謂貴婦人の定義を下せば、貴婦人とは現代の教育に依り養はれ、助長せられ、增長されたる虚榮心を滿足せしめることに汲々として居る婦人と言ふことが出來る。この定義から貴婦人と言ふ者を觀察すると、立派な着物を着て、高價な持物を持つて、何々婦人會とか言ふものに關係して、社交界に出る婦人を指して世間では貴婦人と言ふのである。貴婦人と言ふものが果して斯う言ふものであるとすれば、貴婦人と言ふものは決して難有いものでもなければ、又一般婦人の羨むべき者でもない。それを世間の婦人が貴婦人と言ふものを難有がり、羨み、貴婦人と言はれるを以て婦人終生の目的の如く心得て居るのは、確に現代の教育が婦人の虚榮心を養ひ、助長し、增長せしめたる結果に外ならぬのである。貴婦人の虚榮は如何なる點に及んでゐるか、次に聊か說明してみやう。

◎物質的虚榮と精神的虚榮

現代の貴婦人の虚榮心と言ふものを分析して見ると二つに分れる、一つは物質的慾望が盛にして、善い着物を着て、甘しい物を食べて、面白いものを見て一生を送りたいと言ふ連中で、斯う言ふ婦人は總てを犠牲にして金のある男を夫に持たうとする。さうして金儲の巧い男を働きのある男と嘆美して居る。斯る婦人の脳中には金力あつて其他はないのである、今一つは物質慾には走らないで、精神的の滿足を得やうとする、博士の妻となり、學者の妻となり、政治家の妻となつて夫と共に名譽を得て人の尊敬を受けやうとするのである。それでは斯う言ふ婦人は全く物質慾を離れて、博士の妻たり、學者の妻たり、政治家の妻たる名譽のみを得て滿足して居るかと言ふに、そこは現代



曉と路に迷いし女 圖

式の女である、所謂貴婦人志望者である。斯る名譽のみを以ては決して滿足して居ない。斯う言ふ婦人の考では、博士たり學者たり政治家たるが故に世間から尊敬されて居る程の人物なれば、名譽のあるのは言ふまでもなく、從て其名譽に比例して定めて收入も多くあるであらう。露骨に言へば名譽のある人は必と金を持つて居るであらうと思ふて居る。さう言ふことを思ふて居るから、表面は精神的の滿足を得る爲に名譽のある男の妻になると體裁のよいことを言ふて居るが、其實は名譽を得て精神的の滿足を得ると同時に、金を得て物質的の滿足をも得やうとする慾の深い考へを懷いて居るのである。

◎美服を着るのを目的とす

貴婦人のみとは言はぬ、總ての女と言ふものは形而下の智識は發達して居るが、形而上の知識に至つては全く駄目である。その證據には昔から女の哲學者と言ふものもなければ、女の宗敎家と言ふものもない、形而上の知識に於て萬人に卓越した女は歷史に現れて居ないではないか、然し形而下の知識になると却々發達して居る。ことに依ると男よりも發達して居るかも知れぬ。手でする事や眼で見ることなぞは女は確に男よりも優れて居る。蚤を取らして見ても直ぐ分る、男は不器用で却々取れないが、女は實に巧なものである。この眼が發達して居ると言ふことが軈て女の虛榮心を助長せしむる原因となるのである。女は如何しても眼が本位である、眼の慾が本位である、眼の慾が本位であるから女の慾望の第一は着物である。女の最も誘惑され易いものは美服である。美服を以て女を誘惑すれば大抵の女は皆誘惑される、所謂貴婦人と言ふものも亦この美服を着るを以て目的とし、美服さへ着ればそれで貴婦人の能事終れりとして居るのである。女は美服を以て殆ど生命として居る樣である、故に女は大抵な不自由は我慢をするが、美服を着ることの出來ないと言ふことだけは却々我慢をしない。外のことは忍んでも美服を着られないと言ふことだけは非常に苦痛と

する、女の不平と言ふものは常に衣服の不充分より出るのである。女が誘惑されるのも、女が墮落するのも女が家の平和を破るのも主として衣服問題が大部分を占めて居る樣である。

◎身分よりも服粧

現代の貴婦人が美服に浮身を窶して居る適例として斯う言ふ話がある、其將校の夫人の話に、將將婦人會などに出席すると、宛然美服の共進會の樣だと言ふことである、帶から着物から持物に至るまで贅澤の極を盡し、各自に服裝の美を人に誇つて居る。これが夫たる將校であつたなれば、尉官は佐官に、佐官は將官に各々謙讓して、其の間に少しも分限を亂さないが、將校の夫人連に至つては、分限も官位もあつたものでない。一に着て居る衣服の價格の如何に依つて尊卑を區別するのである。夫人連が整列する時でも、當然なれば位の高い將校夫人が前に立つべき筈であるのを、假令位の高い將校の夫人でも、衣服が立派でないと前に立たない。反つて位は卑くとも衣服の美しい夫人が前に立つ、總てが斯う言ふ風で、最も階級の嚴格なる又最も質素であるべき將校夫人の會合でさへこの通りであるから、其の他の貴婦人の集合する會合の有樣は想像するに餘りあるのである。元來貴婦人と言ふ人達が何の仕事もなしで居ると言ふことは善くないことであるから、公共事業や慈善事業に盡力するがよいと言ふ人もあるが、無論眞面目に斯う言ふ仕事に從事することは結構であるが、貴婦人が集合するとなれば如何なる目的の會合でも必ず衣服の競爭となるのであるから、利益よりも害毒の方が多いのである。斯の意味に於て貴婦人の會合と言ふことは決して奬勵すべきことでない。

◎女を社交界に手放す危險

假令貴婦人の會合が眞面目な會合であつて、衣服の競爭など言ふ弊害がないとしても、女を社交界に放つのは大に考ふべき問題である。女と言ふ者は如何して

も家庭を守るべき責任があり、夫に節操を誓ふべき義務があるのである。其の一度社交界の女となれば、果して家を守るべき責任が盡せるであらうか、果して節操を守ることが出來るであらうか、確にこれは疑問である。家庭の主婦たる女が常に家の外に在つて社交界の女となれば、家庭を整理することの出來ないのは言ふまでもない。又女が社交界の人となれば節操に危險の生ずるのは已むを得ぬ。人間と言ふものは男にしても女にしても誠に意志の弱い者であるから、節操を守らうとするには、なるべく危險に近づかない樣にせねばならぬ。若し危險に近づけば餘程の人物でない限りは之を堅く守ることは六ヶ敷い、男でも氣の合ふた女と語つて互に意志が投合すれば、意志の全部が相手に移つて了うのである。これと同じく女でも氣の合ふた男と語つて、意志が投合すれば意志の全部が相手に移つて了ふのである。此場合に於て果して節操がたもたれ得るであらうか、頗る怪しいものである。故に夫たる者が自分の妻を手ばなして、社交界に投ずるとすれば、結局其の妻は社會に奪はれるものと覺悟せねばならぬ。妻を奪はれるのがいやであれば何所までも家庭の人として置かねばならぬのである。それを夫が自分の不注意よりして妻を奪はれて、單に女の不貞をのみ罵るのは少し無理ではあるまいか、無論女が節操を破るとすれば、其の女に罪のあるのは固よりであるが、又女をして斯る危險なる地位に置て平氣で居る夫にも亦罪がないとは言へぬ。何と言ふても女は弱い者であるから、夫たる者は何所までも妻の節操を保護してやらねばならぬ。夫は妻の節操を保護すべき義務があるのである。此點に於て現代の貴婦人は夫の保護を受けることが頗る稀薄である、それが爲め貴婦人の品行に就てかれこれ人に言はれる樣なことが起るのである。これは夫たる者が大に注意すべき問題である。

◎貴婦人たるより眞の婦人たれ

聖書にも婦人の虛榮心は戒めてある。國の亡びるのも婦人の虛榮心から起ると言ふことが譬を引て說てあ

る。現代の貴婦人と言ふと直ぐ虚榮心と言ふことを聯想するのは、現代の貴婦人と言ふものが現代の教育に依つて虚榮心を養はれ、助長され、増長されたる結果であらうと思ふ。現代の所謂貴婦人は貴婦人と言はれることを以て名譽とせず、寧ろ貴婦人と言はれるのを不名譽として、眞の婦人と言はれる樣に心掛けて貰ひたい。眞の婦人となつてこそ人間も尊いので、僞善で作りあげられたる婦人を稱して貴婦人など言ふのは以ての外である。眞の貴婦人は眞の婦人を指して言ふのであるから、現代の貴婦人希望者は僞善的貴婦人たることを志さずに、眞の貴婦人となることを心掛ねばならぬ。貴婦人が眞の貴婦人となれば最早貴婦人論など言ふ問題の起る必要がないのである。貴婦人に對してかれこれ言ふ問題の起るのは缺點があるかだ。

妻として母としての職責を忘る

田岡嶺雲

現代の貴婦人がどうしたとか斯うしたとか言ふ問題が近頃大分喧しい樣であるが、一體貴婦人とは如何いふものか、先づそれから先に定めてかゝらねば議論は出來ぬ。近頃の樣に貴婦人と言ふ語が濫用されては、勞働者や細民の妻女の外は總ての女が悉く貴婦人となる次第である。これでは餘りに範圍が廣すぎて貴婦人論などは容易に出來ない。そこで先づ貴婦人と言ふものから定めてかゝらう。玆に言ふ貴婦人とは地位、身分、財產等の人爲的階級に於て世間で上流社會の婦人と認められたる者を指すので、この意味に於て所謂貴婦人に就て少しく所感を述べて見ようと思ふ。

其前に一寸言つて置きたいのは、世には眞の貴婦人でなく自稱貴婦人がある、それは高價な衣服を着、贅澤な生活をして、何々夫人とか、貴婦人とか言はれた

さに家事も家族も顧みず、外見にばかり夢中になる處の虛榮のかたまりのやうな婦人で、此等邪道に奔る婦人の多いのは實に嗟嘆の極である。

貴婦人と言はれる資格のない女が、無理な苦面をして貴婦人の眞似をすることの愚なることは言ふまでもないが、其の身分に於て地位に於て世間から貴婦人と認められて居る者に對して言ふべきことがある。貴婦人と言はれる人は如何いふ事を日々して居るかと言ふと、化粧と交際と演劇見物と婦人會出席位が仕事で一家の主婦たり、人の妻たり、人の母たる職責を盡して居る人は少ないと思ふ。貴婦人と言はれる女は朝から化粧して、やれ交際、やれ婦人會、やれ演劇と言ふ樣なことに騷ぎ廻つて、それを以て貴婦人の業務と心得て居る。又さう言ふことをして居なければ貴婦人らしくないと思ふて居る。斯う言ふ考を以て居るから、妻となつて夫を慰め夫を勞り、母となつて子を育て子を敎育することを反つて貴婦人として爲すを恥の如くに思ふて居る。夫の世話をするのは小間使の仕事、子を育て子を敎育するは乳母の役目と信じて居るのである。斯る貴婦人を妻としたる男は果して幸福であらうか、斯る貴婦人を一家の主婦としたる家庭は果して仕合であらうか。斯う言ふ貴婦人を妻とせる男は多く素行が修まらない、斯う言ふ貴婦人を主婦とせる家庭は誠に冷かなものである。無趣味なものである。從つて家庭以外に慰安を求めようとする爲めに、一家の主人たる男が品行上に世間の非難を受けることが多いのである。近頃斯う言ふ話を聞た。或貴婦人と其の夫の述懷である、其の貴婦人は型の如く化粧と交際と演劇見物と婦人會出席とで日を送つて居る女である。この貴婦人が此節知人に嫁を世話したのである、そして其の新郎新婦が睦じく樂しく新家庭の趣味を味はふて居のを見て羨しくて堪られない。そこで斯う言ふことを言ふた。夫婦と言ふものはあんなに仲のよいものか知ら、實に羨しいものだと歎息した。これは確に虛榮に憧れて居る現代貴婦人の淋しみを語つて餘りあるのである。

國難を慮れ

日本女子大學校教授　松浦政泰

小暗い深閨の奥から、無理やりに明處へ引張り出したのは、ホンに此間の事だもの、日下に出された鼷鼠同樣、動作のじれつたいのも無理はない。然し我國も日本の日本――東洋の日本――世界の日本と、戰爭毎にズンズンと出世したのだから、何時迄も半身不隨では二十世紀の激烈な競爭場裡に獨立は出來ない。殊に二十億といふ重荷を脊負つてるのだもの、五千萬の同胞男も女も老も若きも、一生懸命己のが腕を磨き、己のが頭を練り己のが精神を鍊へ、勵みに勵み働きに働いて、此の困難な關所を切拔け、我が國運を磐石の安きに置かねばならぬ。然るに我國中流以上の貴婦人を見るに如何にも悠々閑々と、平氣の平左をきめられて居るのは、實に不思議の至りである。我が家の軒に火のつきかゝつて居るのを御存じないとは、呑氣といふにも程があるではないか。

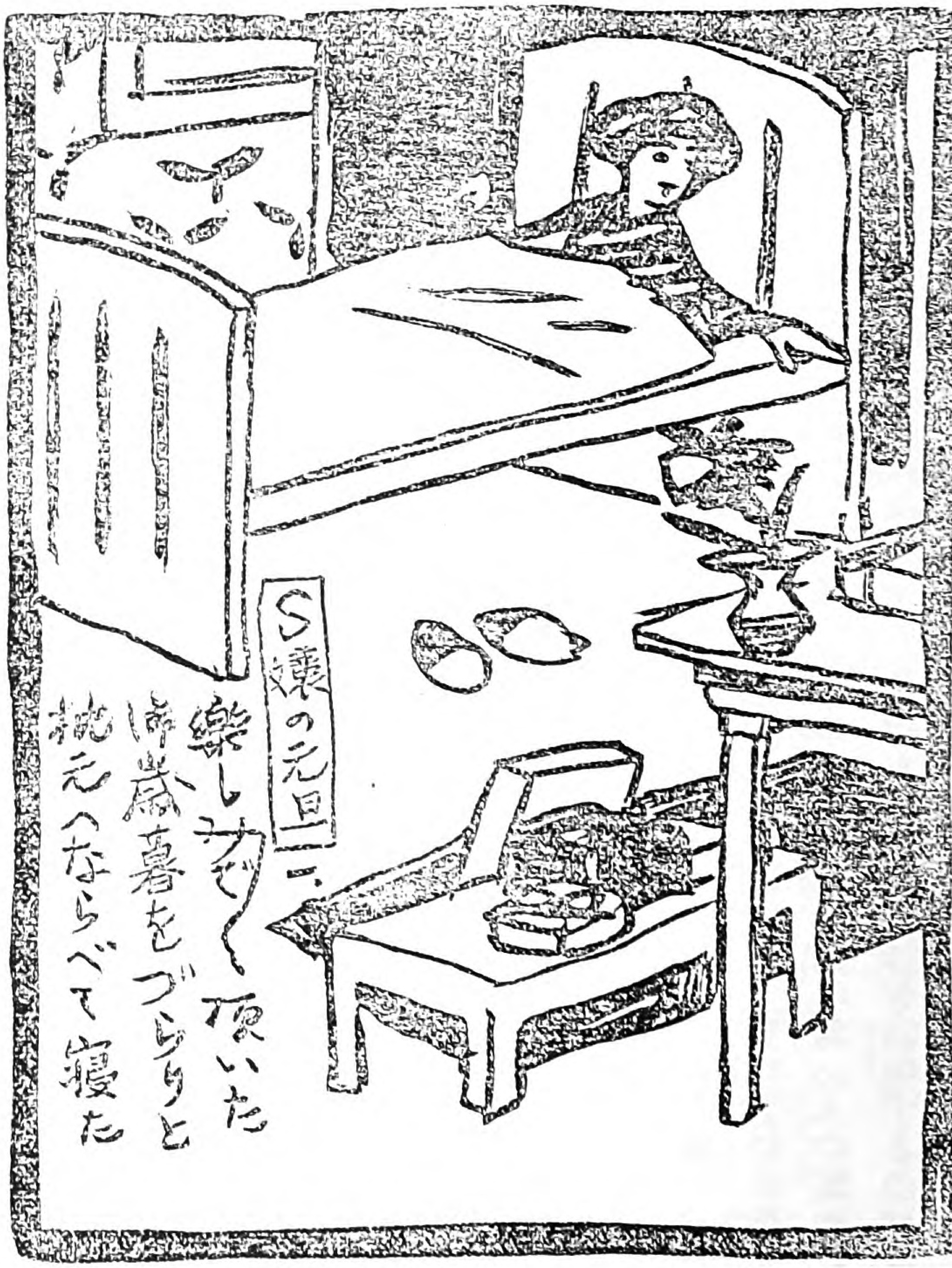
今日の婦人殊に貴婦人に缺けて居るのは自己の安心立命である。如何なる困難にも泰然として堪ゆる事の出來る確信力である。安心立命といへば宗敎の專有物のやうであるが、余は宗敎の與ふる安心だけでは、未だ完全なものといへないと思ふ。卽ち宗敎の與ふる精神的安心の外に、物質的安心ともいふべきものを加へたい。換言すれば獨立自營の力を有するといふ確信を持たせたいのである。物は何でもよい、幸に相當の敎育を受けて敎師たる資格を有するか、叉一藝一能の極意に達して居るか兎に角まさかの時には、我が腕一本で世に働き、見ん事自分の口は糊して見せる、否我が家人をも路頭に彷徨はせはせぬといふ確信があつたら、何んなに安心な事であらうぞ。此の確信さへあら

ば、世の波風は如何に荒くとも人の心は如何につれなくとも決して失望せず落膽せず磐石の上に立つ思ひで悠々と世海の波瀾を凌ぎ、彼岸に達する事が出來やう。若し幸にして順風に帆を揚げ、榮耀榮華の夢の中に此世を過し、己のが獨立の力を用ゐる機會がなかつたならば、世に珍らしい好運と、天祐の優渥を感謝しつゝ此世を去つて可なりでないか。ところが人間萬事塞翁が馬、好事魔の多い世の中であるから。五十人の内で少く計算つて三十人は不運の淵に陷る者と思はねばならぬ。

地方で殿様と呼ばれる程の某縣多額納税者に嫁いだ某富豪の教育ある娘は、夫が鑛山の失敗の爲め、きのふに變はる慘めな生活に日夜袂を絞りつゝ、四十路の坂を心細く暮して居る、某會社に羽振りをきかせて有望の紳士に嫁した某金満家の娘は子供の半ダースもあるのに夫が永の眼病の末に盲目となつた上に、義理の姉は乳呑兒抱へて不幸に逢ひ、歸つて來て厄介をかける始末に、今は僅か許りの財産も食ひ潰し、自づから昔習つたオルガンを教へて、纔に一家十人の露の命を繫いで居る。家に巨萬の產があつても、いつ烟のやうに消えるかも知れぬが、昔時は何うなさる。賴む夫に世に秀でたる才德があつたとて、一朝病氣になつて死んだら何うなさる。大枚何千圓で簞笥七棹長持八棹、派手に嫁入しようより、六百圓で三年間東京で遊學、一生涯身體について居る一藝一能を身に仕込む方がずつと堅くはあるまいか、殊に近年優勝劣敗の恐ろしい世界の風が吹いてきて、社會の潮流年を逐ふて激烈を加へ、昨日の錦今日の襤褸、貴賤貧富手の裏を返すやうにガラ〳〵と變り行く今の時世、今後の青年は男も女も一層獨立自營の力を備へなくては、岌々乎として實に危いであらう。女子の高等教育、乃至専門技藝教育の必要な理由の一は慥かに此處にあると思はれる。

自信力の外に、今一つ最も必要なのは、奉仕の精神である。尿裘は誰れに世話させた衣服は誰れが着せてくれた、握り箸以來の食費は誰れの額の汗の結果ぞ、小學以來の教育費は誰れの懐から出たか、今着て居

る着物は誰れが織つて、誰れが縫ふたぞ。今食べる米は誰れが蒔いて誰れが苅つたぞ。觀じ來れば、臍の緒きつて以來身につけたもの、腹を肥したもの、心に收めたもの、皆悉く父母の世話だ親類の世話だ友人の世話だ、他人の世話だ、我等世に負へる所かくの如く大なることを思へば我等が世に盡す所も亦大なるべきである。三寸呼吸の絶える時、負へる所と盡した所と差引勘定に、負へる所が多かつたら、其人無用の人だ盡した所が多かつたら、其人有用の人だ。そこで我等は二六時中『勤めても又も勤めても勤めても勤め足らぬは勤めなりけり』と、勤めに勤めて世の爲め人の爲め、何ものかをなさんと千思萬考すべきであつて、これ即ち祖先に對しては立派な報恩の志社會に對しては文明といふ松明を親の



手から受け取つて子の手へ渡す大切な役目。萬事萬端奉仕の精神即ち人の下に立ち人の足を洗はうとする謙遜な心掛が必要である。働かうにも働けないといふ嘆聲を時に聞く、これは働を選ぶからである、何でもするといふ精神になれば、働は到處に山のやうにあるものである。世には人に冠を被らせやうとする者はまだしもあるが、人に靴を穿かせやうとする手合が少ないのに困る。昔光明皇后は、御手づから一千人の垢を洗はうといふ願を立てられ、日々湯殿で洗はれて居たが愈々九百九十九人目を洗ひ、今一人で滿願といふ時、實に見るも胸惡い癩病患者が來た、手足といはず總身が爛れ壞れて膿血が流れ、惡臭鼻を衝くばかり。流石の皇后も逡巡せられると患者は我れも人の數には洩れないものを、脊の垢を掻取りたまはらぬかといふ皇后も此の一人で大願成就と、强て思ひ返して脊の垢を洗ひ落して居られると、患者は又我が惡疾は人に膿血を吸る者がない、お后樣どうかお慈悲に吸つて病苦を除いて下さらぬかといふ。皇后も切な願みに絆されて、首から踵の先まで吸られてから、決して人に語るなよといはるゝと、患者は忽ち大光明を放ち、『我れは阿閦佛なり決して人に語るなよ』といふを驚き見れば、妙相端嚴香氣馥郁であつたといふ。身、皇后には遙かに及びもつかないのに、今日の貴婦人は動もすれば美食に飽きたがり美衣を着たがり働は避けたがり面倒は逃げたがりして、而も一旦困難が落ちかゝり不幸が襲ふて來ると失望し落膽し人にもたれ掛り人に厄介を掛ける者が多いでないか。

之を要するに、國運開發の上より見るも、國家經濟の上より見るも、國民の一半を組織する女子組には他の模範となるべき貴婦人達は一方では何かの方法で最も堅固な安心立命の自信力を養ひ、泰然動せざる精神を鍛錬すると同時に、又一方では飽迄も謙遜に、如何なる卑しき働をも國の爲め人の爲めには進んで之を取るといふ犧牲的精神を涵養するのが急務中の最大急務であると思ふのである。

* * * *

戰亂の巷となれる支那貴婦人の熱狂性、

服部文學博士夫人　服部しげ子

◎日本の貴婦人と支那の貴婦人

貴婦人の御話でござりますが、日本の貴婦人と支那の貴婦人と比較して申上げましやう。然し日本の貴婦人にいたしましても支那の貴婦人にいたしましても、大體に於ては大した變りはござりませぬ。又日本の貴婦人でも支那の貴婦人でも、貴婦人と言ふ方、イヤ廣く女と申しました方が適當かと存じませぬ。總て女と申しますものに二樣の型がある樣でござります。活潑で進取的の方と、因循で引込思案の方とござります。そこでこの活潑で進取的の方は、社交界に立つて種々活動なさいます、そしてさう言ふ方面に於ては必と成功をなさる樣です、その代り斯う言ふ方は家政をお執りになることは、餘り御上手ではない樣です。これと反對で、因循な引込思案の方は、社交界に立つて花々しい活動はなさらない樣ですが、家庭の主婦として一家を治めると言ふことに於ては確に成功しておいでの樣です。斯う言ふ風に日本の貴婦人でも支那の貴婦人でも活潑な方と因循な方との二樣の型がでざりますが、支那の貴婦人にはこの二樣の型が一層明になつて居る樣でございます。

◎女子の教育の爲に自殺す

大體から申しますと、支那の貴婦人は日本の貴婦人よりは教育がない樣でござりますが、活潑式と因循式との區別が劃然として居りまして、活潑な方は無暗に活潑なかはりに因循な方は又無暗に因循です。斯う言ふ點は日本の貴婦人と大分違ふ樣でがります。事に

ふれて狂熱的勇氣を現すことは、到底日本の貴婦人の企て及ばないところでござります。一寸例を申しますと、三十九年頃でござりました、惠貞と言ふ未亡人がありまして、この未亡人が非常に熱心な女子敎育奬勵家で、支那の婦人が今日の樣な有樣では世界の大勢に伴ふて進んで行くことか出來ない。何としても女子敎育を盛にして支那の婦人を立派な者にせねばならぬ。然し何事にも犧牲になる者がなければ成功するものでないから自ら其の犧牲になると言ふて、女子敎育の必要なることを論じたる長々しい遺書を殘して自殺をなさいました。サーさういたしますと、上流社會の支那婦人は固より一般の支那婦人が非常な勢ひを以て活動を始めました。惠貞の自殺を犬死にしてはならぬ、何所までも其遺志を繼いで女子敎育を盛ににせねばならぬと、それは〳〵大變な勢で女學校設立の運動が始まりました。北京中の婦人と言ふ婦人が殆ど皆女學校設立に運動した樣な次第でした。この運動が烈しくなりまして終には俳優までが騷ぎだしまして、一流の俳優が寄り集りまして女學校基金募集の演劇を始めました藝題は惠貞の自殺を演劇にしくみまして、惠貞が親孝行をした事やら夫に貞節を盡したことを演じて最後に女子敎育の犧牲となつて自殺するところを演じたのです。總ての婦人が狂熱の高潮に達して居たときですから、其の演劇が始りますと、我も〳〵と押掛けるので劇場が破れる程の大入でした。斯う言ふ目的の演劇ですから、無論入場料は高價ですが、そんなことには頓着なく、毎日滿員の盛況を呈しました。そうして其の時の婦人の腦が如何に熱して居たかを證明するのに斯う言ふ事がでござります。

◎舞臺の上へ金を投げる

それは斯うなんです、惠貞が遺書を書て自殺する幕になると見物人が夢中になつて金を舞臺へ投げるのです、彼方からも此方からも投げ出す金を集めますと、それが却々尠なくないのです、斯う云ふ風で惠貞の自殺は遂に女子敎育の輿論を作りまして、それから女學

校も出來ますし、女子教育が漸次盛になつてまいりました。それから又惠仙と申します財產家の未亡人なども死ぬ前に自分の全財產を悉く女子教育費に充てるやうにと遺言して死にましたので、其の財產で惠仙女學校と言ふ立派な女學校が出來ました。唯一人の自殺からでもこれだけの事が起るのですから、支那婦人の狂熱に富んで居ることが分ります。その後水害の時にも斯う言ふこともございました。被害民を救助すると申しまして、妙齡の婦人が寄附金の募集を始めました。その方法が又奇拔なのです、最も人通りの多い城門外に立つて通行の人を捉へ、被害民の哀れなる有樣を熱心に說きたてゝ盛に寄附を募るのです、そして寄附をしないものがあると熱心のあまり、惡口を言ふと言ふ樣な始末で、遂に



は政府から斯る手段を以て寄附金募集をすることを禁せられました。

◎佛蘭西に似てゐる

斯う言ふ樣に支那の婦人は狂熱に富で居りますから、一度何事かあつて之れを刺戟すれば、忽ち興奮して如何なる事をも敢てすると言ふ風があります。殊に貴婦人に於てそれが甚しいのです、この點から考へて見ますと、支那の婦人は佛蘭西の婦人によく似て居る樣でござります。佛蘭西の婦人は狂熱に富で居りますから、ジアンダークや、ローランや、コルデーなど言ふ突飛な婦人が出ましたが、支那の婦人も亦狂熱に富んで居りますから、則天武后だの、西太后だの言ふ傑い婦人を出して居ります。斯う言ふ國柄ですから支那の貴婦人は一定の熱心を以て徐々に事を爲すと言ふことは出來ないのです。何事に依らず一時パッと狂熱的熱心を以て事に當るかと思ふと直ぐじき冷めて了うのです、日本の貴婦人は忽ち熱し忽ち冷める樣なことはありませぬが、其の代り支那の貴婦人の樣な花々しい仕事は出來ませんから、長短を補ひ合ひますと互に五分々々であらうと存じます。何故支那の貴婦人は斯う言ふ狂熱に富んで居るのであらうかと申しますと、支那と言ふ國は絕えず騷亂のある國で、自然婦人にまで斯う言ふ狂熱的思想を養ふに至つたのであらうと存じます。支那婦人の足を小さくして置きますのも、支那の婦人に斯う言ふ狂熱があるから、其れを矯正する爲めに足を小さくして置いたのであらうと思ひます。然しものには反動と言ふものがござりまして、初は支那婦人の狂熱を矯正する爲めにした壓迫が、後には反つて反動の原因となつて、事に觸れて狂熱を逞しうすることがある樣でござります。今回の革命運動にも婦人が活動して居りますが、全く平常の反動であらうと存じます、平常餘り壓迫されて居るもんですから、此度の樣な機會がありますと、忽ち爆發して佛蘭西婦人以上の勇氣を出して活動を始めるのです。なか〱因循ところではありません。

◎社交の巧み

支那の婦人は平生が餘り壓迫され過ぎて居るもんですから、一朝爆發しますと反動が一層甚しいのです。支那人は婦人ばかりではござりませぬ、男も亦佛蘭西人に似たところがある様です。今度の騒動も全く佛蘭西を眞似たので實に困つたもんだと夫も申して居ります。支那の婦人は平生壓迫されて居ると申しますと、定めて内氣な因循な婦人だらうと言ふ想像がつきますが、事實は之と正反對で、平生でも日本の貴婦人から比較いたしますと、支那の貴婦人は實に快活でござります。それと申しますのも、支那の貴婦人は日本の貴婦人よりも交際が廣うござりますから、自然人馴れて交際上手になつて居るのであらうと存じます。尤も支那の貴婦人が交際いたしますのは、それが社交界と申しますか、親戚交際と申しますか、一寸判斷に苦しみます、と申しますのは、支那人殊に上流社會になりますと、血族と言ふことを大變重んじますので、結婚は大抵親族間に於て行はれます。それからそれへ親族同士結婚して行くものですから、親族と言ふものが非常に大きく膨脹されて居ります。ですから支那の貴婦人の交際も自然頻繁になる譯でござります。然れども其交際は今申しました様に大きい親族間の交際でござりますから、社交的の交際とも見えますれば又親族同士の交際とも見られるのです。然し孰かと申しますと社交的の交際と申しますよりも、非常に膨脹されたる大きい親族間の交際と申しました方が、適當かも存じませぬ。

◎うちとけて語る

支那の貴婦人は斯う言ふ様に交際が頻繁でござりますから、自然交際も上手になるのでござりましやう。日本の貴婦人と支那の貴婦人と交際いたしますと、どうして〳〵日本の貴婦人は到底支那の貴婦人には及びませぬ。人をそらさない、人に快感を與へて、そして人と親しみ易いと言ふ態度は日本の貴婦人は眞似も出

來ませぬ。一寸例を擧げて申しましやうなれば、初對面の時なぞでは、日本の貴婦人でござりますと却々打ち解けて御話をなさいませぬ。それは何故かと申しますと、若し初對面の時に餘り打ち解けて話をしますと直ぐ惡口を言ふ方がありまして、彼の方は初めて御目に掛つたのに斯う言ふ打ちあけた事をおつしやつた、ずゐぶんだわ、と言ふ樣な事を申す方があるものですから、それで大抵の方は初對面の時は殊更打ち解けない樣になさるのです。それが支那の貴婦人になりますと全く正反對で、初對面の時から打ち解けて御話をなさるのです。其の打ち解けて御話をなさる態度が、却々巧みで、つひ釣込まれて此方も打ち解けねばならぬ樣になるのです。

日本の貴婦人は、外國語の素養のある方でも、容易に外國語を御使ひなさいませぬ。知つて知らない顔をして居るのを女の嗜としておいでになるのです、ところが支那の貴婦人は全くそれと反對で、一言二言より知らない外國語でも、テーブル中に振り廻して愛嬌をふりまくのです。支那の貴婦人が日本の貴婦人と初對面の挨拶をなさいます時でも、一言でも二言でも知つて居るだけの日本語を使ふて、私も一これだけより日本語を知りませぬから、と快活に御笑ひなさいます、斯うして相手を安心する樣になさるのです、假令初對面の時でもしんねりむつゝりして澁い顔して居りましては、相手も安心をいたしませぬから、自然打ち解けた話もいたされませぬが、支那の貴婦人の樣に初めから、知つて居る限りの日本語を使ふて打ち解けてかゝられますと、幾許引込思案の日本の貴婦人でも、知らず〱打ち解けた話をする樣になります。それから同じ支那の貴婦人でも、漢人と滿人とで如何言ふ相違があるかと申しますと、別にこれと言ふて取りたてて申す程のことはござりませぬ。唯滿人の貴婦人は皇室と接近して居る爲めに、何事も控目になさいますが漢人の貴婦人はさう言ふ顧慮すべき點がござりませぬから、隨分思ひ切つたことをなさいます。

＊　＊　＊　＊

上流婦人は凡て弱し

遠山稲子

上流婦人の弱點は、先づ身體の脆弱いと云ふことです、華奢逸樂なる家庭に成長して、深窓の下に琴を彈ずるとか、或は挿花、茶の湯、讀書など丶凡て體育上宜しからざることばかりを日課にして、其爲に難産になつたり、始終病身で居たりすることが、多いやうであります。

嫉妬と云ふことも、比較的上流婦人には多いやうです、つまりは虚榮心から起ることで、他人を羨むと云ふ心が強度に達して、嫉妬の炎を燃やすのです。昔から能くあるお家騒動も、此嫉妬から起る禍の一つでありました。而かも貴婦人社會の嫉妬と云へば、多くは外部の美から起るので、誰さんは容貌が美しいからとか、誰さんは美しい衣服を着てゐるからとか、云ふやうな點が、嫉妬の起因になるのです。

なほ精神上から貴婦人を見ますと、國文とか、和歌とかの文學的方面、繪畫とか、音樂とかの美術的方面には趣味嗜好を持つてゐる方も多いやうですが、物を推理する力とか、判斷する力とか、理性の方面には缺けた處があるやうに思はれます。それと申すも、入つては美衣美食に飽き、出ては多數の婢僕にかしづかれ、他に尊敬され、不自由と云ふものを知らない爲でありますまいか。純潔とか、寛厚とか、些事にあくせくしない、おほやうな性質は養はれてゐますが、其代り不道理なことに對しても抵抗する力がなく、また感激して自己の非を改めると云ふやうなことも出來ないつまり意志薄弱と云ふことに歸するのです。

人間は嬰兒の如く無邪氣になれと、昔の聖賢も云つて居られますが、無論一面の道理には相違ありません

併し嬰兒には親があり、保姆があり、其他いろ〳〵の人が、護り助けて居りますから、何うにか世の中に立つてゆけますが、一人前の人間になつてみると、さうさうは他から護り助けてくれません。上流の婦人には大人になつても、嬰兒のやうに何も彼も護り助けられて宜いやうに思つてる人もないではありませんが、其護り助ける近侍の人々の中には、隨分不良い人があつて、陥れやうとするのもあります。子供のやうに正直だからとて、其正直だけでは世の中が渡れません。千辛萬苦して鍊へ上げた正直でなければなりません。人間の品性はいろ〳〵にして鍊へ上げた處に値があるのであります。上流婦人には其品性を鍊へ上げる機會も乏しく、又自ら立つて鍊へ上げやうとするやうな人も少いやうであります。

自由を奪はれたる生活

日向きむ子

日本では門閥や財産のある家の人々を、直ちに紳士貴婦人といひますが、西洋では、紳士、貴婦人と云はれる人達は、強ち門閥や財産のある人々のみに限りません、婦人ならば、母として、妻として、完全な人格を具備した人を貴婦人と稱します。

然う云ふ意味でいふと、日本には眞の貴婦人といはれる人が澤山ないやうに思はれます。

日本で貴婦人と云はれて居る人ほど不自由な境遇に居る人はありません。何故と申ますに、凡てが形式的で、消極的で、不自然で、人生の幸福の大半は失はれてゐるからです。人生で最も貴ぶべく、愛すべき自由と云ふものを、わが貴婦人間からは奪はれて居るのです。一寸外へ出るにも伴を連れて出なければならぬ單獨で思ふ所へ歩いてゆくわけに行かぬ、電車にも乘

られぬ、途中で欲しいものがあつても、立寄る譯に行かず、食べ物屋にだつて、さう勝手に食べにゆけない假令立派な邸宅に住み、燦爛たる美服を纏ふても、一擧手一投足の形式に束縛されてゐては、幸福とは云へないでしやう、眞の幸福とはシンプルライフ、簡單にして自由な生活から生れるものでせう。



多額の費用を懸けたからとて、また多勢の人を使つたからとて、眞の娯樂は得られません、シンプルな生活から發見せられる娯樂を、子供のやうな心で感得するのも一つの幸福です。

海に行けば海の快樂があり、野に、行けば野の觀樂があります、自然は權勢の前に媚を呈しません、只一人の前にも充分な欣びを與へてくれます、貴婦人達は此

欣びを受けることを忘れてゐるのです。

　眞の幸福とは、家に在つては自由に讀書し、自由に友人と語り、外に出ては束縛のない旅行をし、家族と共に散歩をし、外の欣びを内へ歸つてきて家族達に愉快に語つたり、問はれたりするのが、眞の幸福のやうに思ひます。

　私の知つてゐる或る貴族の家では、主人や夫人が、毎月のお小遣ひを家族から幾何宛とあてがはれて、それを使つてゐられますが、私共の眼からは馬鹿らしく見えて一向合點がゆきません。

　私が若し門閥の家にでも生れたら、今までの家風とか習慣とかを一掃して、それこそ上流婦人界のレコードを破りたいと思ひます。そして虚榮や、形式に伴ふ多くの情弊を打破し、眞に幸福なる生活を營むでせう。

　人によりますと、自分は門閥家だから、自分は財産家だから、平民とは交際が出來ぬ、服裝が惡いから面會が出來ぬと云ふやうな心を持つてゐるのもありますが、そんな心で此の人生が了解出來るでせうか、人と人の親みが出來るでせうか、かゝる貴族式情弊を持つてゐる人の不幸は繰返し申すまでもありますまい。

　先年私が原敬さんの夫人に初めて面會しました時に夫人は、あなたのお里はどちらですかと聞かれましたが、私は料理屋ですと答へました。すると何だか意味ありげな顔をされましたが、能くこんな方があるものです。實家をしらべなければ交際が出來ないといふ譯もありますまいがね。

欺かれたる尊敬

某伯爵夫人

上流社會の婦人方は、面貌や、服裝や、態度で、人の品格を定めて、交際なされますが、私は、眞個の

人品と云ふものは、決して只表面に現れた處だけで、定められるものではないと思ひます、いくら表面を美しく飾つて居りましても、現實のことばかりに心を奪はれて、高い理想の缺けて居る方は、迚も上流婦人とは言へません、之に反し、理想高く、健實な思想を抱いて居る方は、假令上流の生活を爲て居ないでも、人をして尊敬せしむるだけの、品位を保つて行かれます。成上り者は品が惡いと申しますが、それは畢竟物質的に成上つても、精神的に成上らないからで あります。

貴婦人と云はれる人々の、一面を知りたいと思へば何かの婦人の集會に行くと、尤も能く分ります。何々夫人の傍に居たら、他が彼の夫人と親近と思つてえらく見てくれるだらうと云ふやうな風が、顯然と分ります。それから又會場の秩序なども亂れがちで、相當の位置に居られる婦人でも、他を押し除け、つき除け先へ出やうとなさるし、でつた返す亂暴さつたらありません。平素は懇意の間柄であつても、服裝が惡いとか顏が不美いとかだと、見ても見ないふりをして顏の美しい、服裝の立派な人の傍へばかり寄つて、平素から親近して居るかの如く、話し合つてる方がありますので毎も見てくれのわるい方は隅へおしよせられて、表面ばかり飾つてゐる人が持て囃されます。



と、申しても、私は何も上流社會に對して反目す

るのでも、憎むのでもありません、國民たるものは何れも努力して、上流社會の地位を占むるやうにならねばなりません。祖先の恩澤に依りて安逸の生活をしてゐるものは、經驗も乏しく、忍耐力も薄く、比較的無能の人が多いのです。ですから子孫の爲にも、財產や地位を殘すより、美しい立派な精神を殘したい。

林の落葉

小さなるすぐれしことを誇らひて過ぎし月日のはづかしきかな

右といふに左したりとて我心左といふにまた左せむ

いささかの常にたがひし事あれば寢られぬまでによわき我身よ

天地はこのままにしも默せよと思ふばかりのこのなやみかな

ああかくて我世はとはに安かれなこのよろこびのみてる心に

宵々に照る星かげを眺めつつ夢うつくしきこの四五日よ

安かりし今日の一日の幸ぉもひ仰ぐみ空に星のきらめく

思ふこと云はで過ぎなむ我が言の正しきをさへ知りまさぬ人

思ふこと今いひ果てしこころよさ今宵のゆめや安けからまし

月清き幾夜をここに迷ひ來し風なき冬の雜木林に

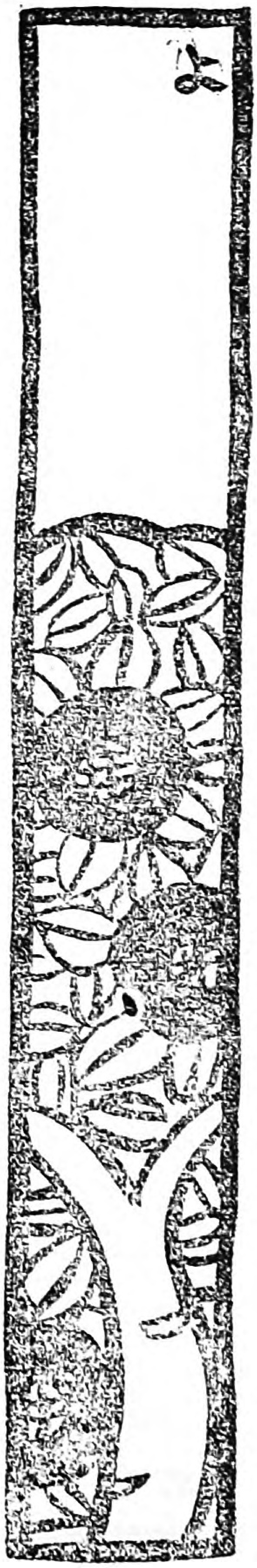
冬枯れの岡の林に群鳥しばなく聲す何のさがそも

月見草咲く砂山に一人居てあかず眺めぬたそがるる海

夜の色ひろこる海を白き鳥ひくうよぎりぬ波の淋しさ

何物か心にたらず求むれは何ものもなしさびしき日かな

何となきかけをまた追ふ夕ぐれの薄日の窓のしづけさに居て



花と人生

文學博士　姉崎正治

これから春になつてくると、冬の間は生命が無くなつてゐたやうに見えた木々の枝にも芽が出、葉が出、草にも花が咲いて、天地に充滿してゐる生氣がぼつぼつ發生してくるのを、春に於て顯著に見ることが出來る。

其生氣の發達發育は無暗に進むのでなく、皆各一定の目的、方法を備へ、其目的を達する爲め微妙なる仕掛が出來て居ると云ふことは殊に植物に見ることが出來る。昔の句にも『片枝に息や通ひて梅の花』と云つたり、或は南枝北枝花遲速不同など云ふ樣に植物の枝葉花皆日光のある方に向ふ。殊に日向草の樣に朝に東に向つて居るが、日脚の過ぐるにつれて同じ方向にまはるのさへある、さうかと云へば又根は日光をさけて、だん〳〵土の下の暗がりに向ふ。

それから、花の蕋は各々生長が異なつて、雌雄蕋時を違へて成熟する樣になつて、實を結ぶに都合よくなつて居る。實を結んだ場合には、其實や種子が四方に散亂して、發生するに都合のよい土壤を得てそこで根

を下す仕掛が出來て居る。例へばあざみの類の種子は、丁度子供の玩弄物で蜻蛉といつて飛び上がる樣に出來てるのと同じ仕掛で、風に乘じてどこへも飛び上ることが出來る。又桑の類の實は自分で飛ばない代り、雀などそれをついばんで持て歩くとか、又食べて其糞の中に交つて傳播される樣になつて居る。それら無數の植物は勿論、兎に角生物が各々自分の種族繁殖の爲めにあらゆる方法を備へて、其生命を擴張し樣として居る仕掛の巧妙なることは、よく觀察すれば驚くべきものがある。

　是等のことを、近頃植物學者の硏究もあるが、又詩人でこれを觀察した人も幾人もある。グーテの植物變形といふ講義と詩との如きは彼がイタリーに旅行して其植物の成長を觀察して如何にも變化の多いのに驚いて、硏究を初めた結果である。このことについては花摘日記に書いてある、フヘビネルも又ナンナ（スカンヂナビヤノ人）も花の女神と云ふ書をかいて、植物にも靈魂があると說いて居る。又近くはマーテルリングの『生命と花』の中にも半ばは植物學者として、半は詩人として、葉や花の生育をかきあらはして居る。兎にかくこれらのことは必ずしも學問的にあらずとも、これから正月以後、雪中に草の芽のふき出す頃から、觀察をはじめて夏秋の實のなるまで、つゞけて觀察して見れば、其注意一つで、色々の點を發見することが出來る。そしてそれを單に植物計りの餘所ごとゝせず人間の生活、卽ち肉體の上にも、又社會の生活にも歷史上の生活にも、植物より一層複雜で一層微妙な生命の力が至る處に生動して居る事を見ることが出來れば、人生の活動には常に一陽來復の正月があると云ふことが見えなければならぬ。

　一年の中には正月丈を正月として迎へるが、每日每日每時間一陽來復の正月を迎へる覺悟を以て進めば又始終人生に春を作り出し、花を咲かせ、實を結ばせることが出來るのである。

　偶ま新年に際し、眼前の自然に就いて、何人も感じ想はなければならぬことを一言したのである。



壁畫の話

文學士 澤村胡夷

壁畫と云ふと壁の表面に畫かれたものに限るやうに思はれるのですが、其性質から考へますと、單に漆喰土などの面に畫かれたものゝみが壁畫とは云はれないのであります。場合によつては板の面に畫かれたものや、又或場合には紙に畫かれてそれが板だの壁だのに張附られてゐるものも、亦壁畫と同種類のものに數へなければなりませぬ。然し嚴密な意味で云へば壁に畫かれたものゝみを指すのですが、是には二種ありますその一つは乾き上つた壁の表面に畫かれたものでありまして、他の一つは乾き上らない濡れた壁に水彩で畫いて、夫が乾き上ると、其漆喰の色と繪具の色とが混じて一種の調子を出すもの是であります。日本には此第二に屬するものはありませぬ。日本のものはこの第一のものばかりであります。即ち日本の壁畫は乾いた壁の上に畫かれたのでありますから、板に畫かれたものと比べても繪畫の上から大なる相異がないのです。板や柱の面に畫かれたもの、即ち木材の表面に畫かれたものにも種々の區別があつて、板の上に直接に淡く線畫をしてその上に胡粉を塗り更に其上に畫起してゐるものもあり、板や柱に漆を塗つた上に畫いてゐるものもあります。

元來壁畫の目的は裝飾といふ事が其主要な部分となつてゐるので、畢竟その場所を立派に見せると云ふ事が、多くの場合、壁畫の作らるゝ主意となつてゐます然しながら場合によつては裝飾と共に又紀念といふ意味で作らるゝ事がないでもない。日本に於ては紀念の

意味を以て壁畫がものせられた事は全然ない事はないが、あまり多くはないやうであります。然し壁畫の作らるゝ場所に依つて裝飾といふ事にも多少の相異があるのですが、今その場所を區別しますと大體二種類に分れます。

第一は宗教に關係のある場所であります。是は申すまでもなく寺院の類でありますが、此場合にも勿論裝飾的の意味を離れないのであるけれども、裝飾と同時に信仰上の意味が加つてゐる事が尠くないのです。日本の古い壁畫は多く此部類のものが殘つてゐるのであつて、其畫の題材も佛教に關係したものが多いのであります。然し宗教に關係ある場所の壁畫は何れも信仰に直接の關係を持つたもの許りが畫かれたとは云ふ事が出來ません。例へばその當時の風俗又は歴史的の事實などが畫かれてゐる事もあるのです。又場合に依ては動物などが畫かるゝ事もありますが、是等は純粹に裝飾といふ意味から出立したものでなければ、紀念的なる意味を有してゐるものと見ることが出來るのであります。

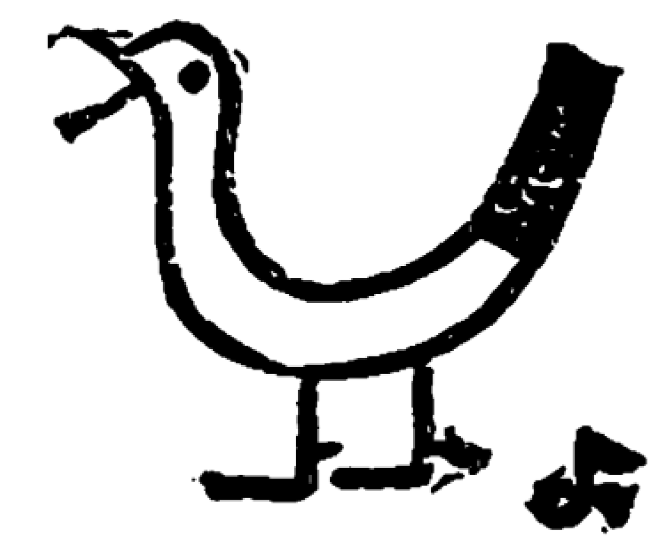
第二は非宗教的なる場所に畫かれたる壁畫であつて是れは宮殿とか貴族その他の住宅などに畫かれてゐるものであります。此部類は純粹の裝飾といふ意味を發揮したものに外ならぬのであるが、或場合にはその裝飾するといふ動機が大に威儀を示すといふ必要にせまられた事に存するのもあります。とにかく此方面に屬するものは裝飾といふ事のみがその製作の實際的の要求となつてゐただけ、其題材として種々なるものを畫いてゐるやうであります。今日吾々の日用の調度としての屏風衝立などに畫かれてゐるものも壁畫と同種のものと考がへねばなりませぬ。屏風や衝立は其性質上壁と少しも相異する所はないのでありまして、唯便宜上之を運搬する事の出來るやうになつてゐるものであります。つまり位置を自由に置換る事の出來る壁だと云ふ事が出來るのです。此意味に於て襖の繪も亦壁畫と同種のものと見なければならぬのであります。

大體以上二種の壁畫の中で、主として寺院の壁畫の

事を手近な例をあげて少しお話ししておきませう。寺院と云つても單に建物ばかりではない。洞窟寺と云つて岩穴を作つて之を寺としたのもあります。印度の壁畫は多く此洞窟寺にあるのであつて、有名なアヂヤンタの壁畫は實に此の洞窟寺の中にあるのです。丁度其洞窟が約二十九個あつて、その中にある壁畫は西暦紀元前第二世紀から紀元後七八世紀、卽ち約一千年間に亘る間の壁畫が此洞窟寺に保存せられてゐる譯になります。

日本の寺院の壁畫で有名なものは先づ法隆寺の金堂内のものであります。是は堂の四方の壁に胡粉を塗つて、其の上に阿彌陀の淨土寶生佛の淨刹、藥師の淨土釋迦の國土、菩薩羅漢の像が畫かれてゐるのです。其作者に就ては種々の説がありますけれど　何れも確ではありませぬ。その一部は鎌倉時代の書補でありますが、大體は少くも一千二百年以前のものであつて、畫の技術の方面から見ましても立派なもので、是が今日までよく保存せられてゐる事は實に藝術史上世界に對する大なる誇であります。それから山城の宇治にある平等院鳳凰堂の畫も現存のものとして有名であつて、是は四方の壁や扉に九品の來迎を圖してゐるのでありますが、剝落が烈しく、但所々明白に見らるゝ場所があるのです。其他現存の壁畫として注意すべきものは大和の室生寺の金堂、山城の醍醐三寶院の五重塔、大原の三千院極樂院、日野の法界寺の阿彌陀堂、豐後の富貴寺、奈良の興福寺の南圓堂、高野山の多寶塔、近江の石山寺の多寶塔、西明寺の三重塔、大和の九體寺の三重塔、岩船寺の三重塔等甚だ多いのであります是等は現存の壁畫でありますが、滅びて了つた壁畫も勿論少くないのでありまして、殊に滅びたものゝ中でも有名なのは藤原道長の建立した法成寺である。その金堂の扉や壁面には釋迦の八相成道の圖や金剛胎藏兩界曼荼羅、天人奏樂の圖などが畫かれた。又その阿彌陀堂の扉には極樂淨土九品蓮臺の圖などが畫かれてゐたと云ふ事である。（つゞく）

＊　　＊　　＊　　＊



彌生の誕生

河井酔茗



「何うも然うらしく思ひますから、起きて下さいよ」と云はれて、眠い眼が一ぺんに覺めて飛び起きたのは一時頃だつた。

何より彼より寒くて堪らない、木片を火鉢で燃して炭をついだ。烟が室内に滿ちたから引窓の戸を一寸ほど明けた。妹はかひぐしくブラ提灯を點けて、お向ふのお内儀さんを呼起して車屋へ走つた。お内儀さんは穢いことでも、綺麗なことでも、私の家の事とさへ云へば能く世話をしてくれる。

産婦は起きて櫓炬燵に凭れて居たが、

「其處の押入を開けると張籠がありますから、出して置いて下さい」

と云ふ、私は重い張籠を下して、蓋を取つた、中には充滿切類が入つてゐる。小さな赤い着物や、綿の厚い可愛らしい蒲團や、襤褸切や、引き出してみたが私には何うして宜いか分らないから、又元の通り收つた何をして宜いか分らないので、鐵瓶に水を充滿入れて火鉢にかけて置いた。

妹とお内儀さんは歸つて來た、お内儀さんは襷掛で働き出した。

「奧さんはお早いと云ふことだから、早手廻しをして置かなくちやあ」

と云ひながら、蒲團を敷きかへたり、張籠の中の物を持つて行つたり、手ばしてく立廻つてる。

産婆は少し遠いのでなかく來ない。今かくと車の音を待つて居る内の不安な心持、私はじつとして氣

を揉んでゐた。妹は湯を沸すために竈の下をたきつけた。

産婦の陣痛は刻刻に增して行くやうだ。一種の呻吟は、壓迫されるやうな強い力で響く或る夫人は、子供の生れる苦しさは身體の中で飛行機が上つたり下つたりするやうだと、云つたが然うかも知れぬ。

威勢の好い車夫の掛聲と共に、產婆が來た、上ると直ぐ產婦の傍へ行つた、一寸樣子を見てゐたが、

「もう直きでございますよ」

と、羽織を脫いで襷を掛けた私は俄に心强く感じて、起つてランプの火を明るくした。餘り明るくなり過ぎたので、又起つて少し細くした

「此れを一寸其處で煖めて下さい。煖い處から俄に寒い處へ出て來るのですから」

と產婆は、私に小さい着物を渡した。表は紅木綿、裏は白い木綿、



眞似みたいな襦袢〻襲ねてある、産婆は此小さい着物を着る人が、然も其處に居るやうに云つて私に渡したが――。

私は其小さい着物を火鉢の上で暖めながら、不思議な感に胸の揺めくのを覺えた。未だ人間は生れないのだ。形もない、聲もない、母胎の暗中に何ものかゞ力任せに出ようとするだけで、彼の世界は何處にもない世界の何處にも無い一つの新しい生命が、今生れようとするのだ。生きようとする張り切つた心が、自分にも傳はるやうで思はず着物持つ手に力を入れると、また一しきり大波を被つたやうな産婦の叫び聲と殆んど同時に――産聲高く人間が生れた。

家の中はおちついたやうになつた、おちついて皆まごくしてゐたが、流石に産婆は着々として後の始末をした。

何も彼もきちんと片附けて、

「お目出度うでございます」

改めて産婆は私に挨拶した。

「可愛らしい女子がお出來になりました、奧樣はお輕くてゐらつしやいますから結構でございます」

もう松魚と白米とを風呂敷に包んで歸り支度をしてゐる。それでは又明日お伺ひいたしますと云つて、車に乘つて産婆は歸つて行つた。

ちやうど四時過になつた、細君の里に安産を知らす葉書を書いたり、捲莨を喫んだりしてゐた。生れた子の顏は如何にも小さく、いた〳〵しかつた。妹と、お内儀さんは代る〳〵産兒の顏を覗いて、何か言つてゐる。

私は何か想はうとするのだが、産兒が急しさうに泣き出すと、其方に心を取られ、取られしてゐた。

頓て夜が明けかゝつて來たので、産室の方は其まゝに暗くして置いて、座敷の雨戸を開け放つた。

靜かな朝だ。ランプを消すと、青い光が室の中に流れ込んだ。

庭の老木の紅梅は今が盛りである。此邊はあたりが空地だから樹が多い、空も廣く見える、家のごたご

た建てゝんだ處は嫌ひなものだから、此牛込の奥の詫住居を動かずに居たが、近所は藁葺屋根、自分の家は半分板庇で、外から見たら如何にも小さな假住居だ、それでも此朝子が生れたのだと思ふと、自分がお父さんになつたと云ふ氣持よりかも、何だか世の中が新しくなつたやうで、若々しい心持になつた。

紅梅の咲いた上に、クリーム色をした朝の月が殘つてゐる。空が青いだけに色彩がはつきりして、舊い繪草紙の口繪を見るやうだ。



納豆賣の女の聲が遠くから聞えて來る、私は彼の聲を書生時代から聞いてゐる、根津にゐた頃、毎も彼の聲に眼を覺まされて、學校へ行く支度をした。其頃まだ私は、東京で住めるやら住めないやら其すら分らなかつたのに——ああ時の力よ、私は人間を造つた。

此美しい春の曙に生れて來た女の子に、私は彌生と云ふ名を附けやうと思つた。



光源氏の一生（上）

外島涙之介

源氏物語は今より約一千年以前、藤原氏の全盛時代當時の宮廷生活を背景とし、平安朝の歡樂の空氣に包れてゐた上流男女の思想を描寫した我邦有數の一大小說である。作中に現れる人物は、光源氏を主人公とし女主人公には紫の上あり、其他女には葵の上を初め稍主要人物五十餘人、男女合て篇中には約三百五十人の人物が出て居る此大作を完成した人は、云ふまでもなく紫式部である、彼女は夫の殁後、遺兒大貳三位を養育の傍ら、未だ三十にも足らぬ年齒で、都の片はづれに住居して此物語を書き初めたのである。三分の二ばかり書いた時に其文才を認められて、宮中に仕へたが、其後も物語を書きつゞけて、遂に五十四帖を書き終つた。

世に源氏物語あるを知つて、源氏物語は何を書いてある書物か知らぬ人が多い、光源氏と云ふ名を知つて何んな人であつたか知らぬ人が多い、源氏物語の梗概を書いたものは、澤山世間に在る、皆一部の書物になつてゐる。自分は此處に依囑されて、源氏物語の主人公、光源氏の一生を出來る丈け短く、要を摘んで書くことゝなつた素より筋書同樣のもので、興味を喚起させるほどの餘裕もないが、只源氏物語を知らず、光源氏を知らぬ人達に、おぼろげながら其輪廓だけでも分ることが出來たら、自分の之を書いた目的は果されたのである。

桐壺の帝に十人の御子があつて、長子が朱雀院（母は弘徽殿）、次子が源氏（母は桐壺の更衣）である。更衣の父（大納言）は位置が低かつたけれど、更衣は頗る美人であつたから、帝の寵愛は一方ならず、其ため弘徽殿や其他の女達に妬まれて內氣な更衣は、源氏が三歳の時に死んでしまつた。それから源氏は祖母の家に引き取られたが、六歳の時祖母も死んだので、源氏を可愛がつてゐた帝は、引取つて宮中生活をさせた。源氏は其頃から容姿秀麗、天下唯一の好男子であつた。唐から來た人相見が、「天下の後見にすれば國家が安全である」と云ひ「光る君」とまで讃美したので、それから後は人に光君と呼ばれた。父帝は太子にしたい程愛



して居たが、兄(朱雀)があるので、光君十二歳の時、元服させて源氏の姓を賜ひ、臣下にして中將にした。その時の假親が左大臣、其娘が源氏の正妻になる葵の上で四つ年上の十六歳であつた。源氏の父帝は源氏の母(桐壺更衣)の事が忘れられないで、容貌の似た人を求めて藤壺の女御を得た。源氏から見れば年は叔母さん位に當るけれど、母に似て居ると云ふのが懷しく、子供心にも唯の懷しさでなかつた事は後にわかる。

十二歳で葵と結婚して、其後五年たつた。十七の美少年、地位はよし、才氣はあり遊藝に通じてゐる。ただは居られない、此からが源氏の放逸華美な生活が初まるのだ。五月雨の降る夜宮中の一間に若い男達が集つて浮世の女の批評が始まつた、各の好惡や、面白をかしい戀愛談に夜を更した。源氏は其翌々日方違で伊豫介の家に泊つた時、伊豫介の妻空蟬を見て、その弟を手懷けて近づいた。其後、事に托しては中川の家に行つたが、或夜空蟬と其繼娘の軒端萩と碁を打つてるのを物陰から覗いて見ると、空蟬はもてなしがいゝから近づいてゐたが、それほどの美人ではない、それに比較すると、軒端萩は美しいと思つた。其夜空蟬のつもりで間違つて軒端萩に會つてしまつた。

秋に近い頃、葵の許に行く途中で、乳母の家に寄つた、隣家の垣根に夕顏が美麗に咲いて居た、其家の娘が「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへぬる夕顏の花」と云ふ歌を少女に持たせて來た。源氏は歌に心が動いて、其日は歸つたものゝ、乳母の子を介して其後夕顏の女を或る家に置いて通つてゐる内に九月の十六日の夜、葵の上の生靈に取りつかれてあはれや夕顏は死んでしまつた。悲しみの間に四十九日の法事も濟ませ物淋しい心持でゐた、空蟬は夫伊豫介に伴はれて任國伊豫へ下る葵の上は恐しい氣がする。かくして十八歳の春になつて、夕顏を戀しく思ふ心が未だ消えない處へ、或る人が夕顏の樣な人だと云つて、其女の琴を源氏に聞かせたので、親しく會つて見ると、頗る不器量、殊に鼻が赤くて長い。普賢菩薩の乘る象の樣だ。然し情に脆い源氏は時折は此女に通つた。此女は末摘

花と云ふ。

春の末、源氏は瘧を病んだので、北山のお寺に療治に行つた、其時或庵室の小柴垣を窺くと、十歳許りの女の兒が居た。其兒は、兼て母に似て懐しいと思つて近づいてゐた藤壺女御に能く似て居るので、誰の兒かと思つて調べさした。此が後に葵の歿後、正妻になる紫の上である。

其冬、都合のいゝ事には紫上の祖母が死んだので叔父さんに引取られる事になつたのを聞いた源氏は、其前夜、家人を北山につれて行つて、紫を無理に奪ひ取り、自分の車に乘せて二條の家につれて歸り、可愛がつて遊藝などを敎へて居た。

源氏の父帝の五十の祝の時源氏は青海波を舞つた。其次の年藤壺の女御は冷泉院を産んだ、帝は老年の子なので大變喜ばれた、然し源氏に能く肖て居るので、藤壺の女御は獨り胸を痛めて鬱々して居た。

源氏二十の春、櫻の盛りに宮中に花の宴があつて、源氏と頭中將(葵の兄)とが櫻の枝を持つて、又青海波を舞つた。その夜、源氏が廊下を通ると「朧月夜にしくものぞなき」と、歌つた女がある。誰とも知らずに逢つて了つたが、後で聞くと常々自分及び死んだ母更衣を憎んで居た弘徽殿の妹(朧月夜)であつたから内々露見しなければいゝがと思つて居た。

二十二の夏、父帝は讓位して院となり、兄朱雀(弘徽殿の子)が、天子、冷泉が太子、源氏が太子の後見、弘徽殿が太后、弘徽殿の父が攝政になつた。其夏賀茂祭の時、葵の上は姙娠して居たが、源氏の美装を見たいと思つて進まぬながら見物に行つた。それより先に前々帝の中宮で、今は寡居して居る六條御息所(秋好中宮といふ)と源氏とも知つて居たが、その六條御息所も葵祭を見物に行つて、共に路上で會つた葵の上は六條と知りつゝ、源氏の權威を笠に着て、車爭ひをして、六條の車を後へやつてしまつた。何にも見られないで歸つたから六條は面白くなかつた。

産が近づいたが氣分が惡い、遂に難産をした、それは六條御息所の嫉妬の生靈が附いて葵の生む兒を取り

殺さうとしたからだと云ふ事が葵の譫言で知れた。が未だ年は十五であつた。玉の樣な男兒が生れた。之が夕霧（後に大將になる）である。初めての兒なので源氏は歡喜した。然し難産が原因で葵の上は死んでしまつた。時に源氏二十二、葵二十六歳であつた源氏は六條御息所が急に恐ろしくなつた其後あまり通はなくなつた。葵の佛事も濟まし、久しぶりで二條の家に歸て見ると紫上は急に大人びて居た。藤壺に似て美しかつたので第二の正妻にした



さて六條御息所は淋しさに堪へかねて、自分の娘が伊勢に下るのに附いて行く時、源氏と最後の會見をした、時に六條は三十、源氏は二十二、其冬父帝が崩じ以前から何とか思つて居た朝顔姫も齋院になつた。藤壺とは毎日面を合しては居る樣なものの、後見と云ふだけで近よれない。然し猶、麗景殿の女御（源氏の繼母とも云ふべき人）の娘三の君や、朧月夜との間は絶え

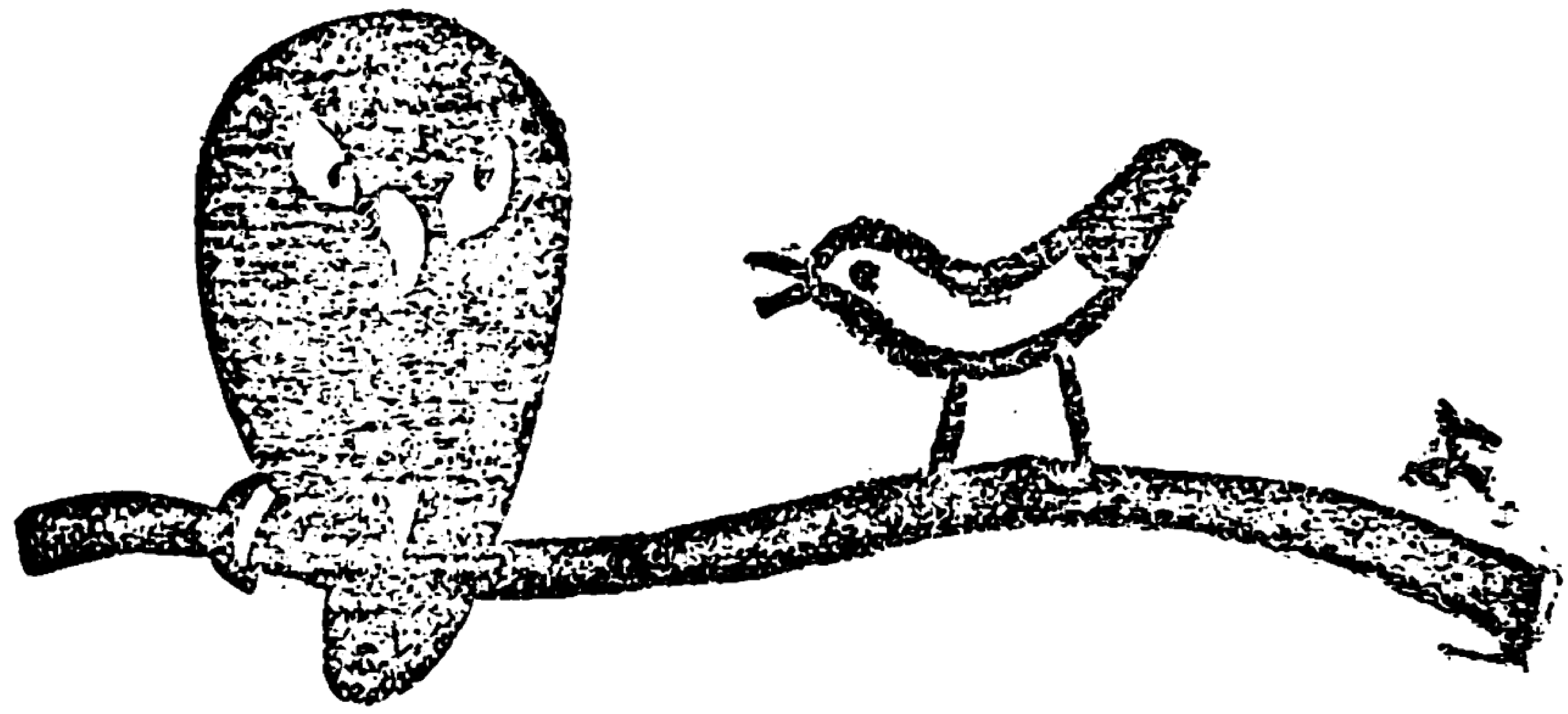
なかつた。朧月夜の事が弘徽殿の耳に入り、其上源氏を憎んでゐる左大臣なども源氏を好く言はなかつた。源氏には逆心ありとさへ云ひ觸らした人もあり、それや之で、左遷でもされさうな前兆があるので、源氏は須磨へ行く事にした。

華美放逸な生活に馴れた貴族の眼は、天さかる田舎の風景が何んなに面白く思はれたらう。

或日舟遊びをして雨に降られて歸つて來たが、雷鳴烈しく遂に落雷して家が燒けた、其夜「こゝを去れ」と云ふ夢を見た。翌日明石から明石入道が迎が來て「夢の告げの爲に迎に來た」と云ふ渡りに舟なので早速明石岡部の里に行つた、其處でも入道の娘「明石の上」と相見えた。間もなく明石の上は姙娠した。翌年朱雀帝が病氣勝ちで春宮冷泉院を立てたので、やはり源氏が有要な人物となつた。とう〳〵後見役として源氏に都へ返れと云ふ宣旨が出たので、明石と別れて紫上の居る都へ、三年振りで歸つて來たのが二十八歲の秋である。

（次號完結）





女性の姙孕力（一）

大阪高等醫學校教授　田中祐吉

△はしがき

動物に雌雄、人間に男女の別がありますのは、生物學上より觀ると、全く種族繼續の目的を達するが爲めで、女性の双肩には、姙娠分娩及び育兒といふ自然の任務が負はされてゐるのであります故、女性の一生涯は、つまり生殖的生活と稱すべきものであります。然るに近時、歐米諸國には、所謂女子運動なるもの行はれ、妻たり母たる代りに一個の國民として政治教育科學等あらゆる國家社會の事業に活動して、男子同等の權利と地位とを獲んとする者が出づるやうになり、又た吾邦に於ても歐米の思想にかぶれて女性の自覺とか稱へ、自活獨立の必要を唱ふるものも尠くないやうでありますが、併し此等の事實は必竟社會的現象の異常變態と稱すべきもので、女性其者は元來生殖作用の天職をつくすべく形成せられたものであります故、女性が此天職を忘却して男子と同等の權利位置を得んと欲するが如きは、自然の約束に背いた擧動であると評しても差支はありません。女性の存在の意義と價値とが子供を產み、子供を育てることに在ることは、其身體の解剖的造構及び生理的機能を研究すれば容易に了解することが出來ます、就中其生殖器關が男子のそ

れに比して頗る複雜であること、又た其生殖機能が直接間接に身體精神の兩方面に種々の影響を及ぼすこと等を仔細に研究してみると、女性はどうしても生殖者たるべきことが明であります這般の事實に就ては、何れ逐々說明することに致しますが、爰には先づ女性の姙孕力といふことに就き、自分の今日まで聊か調べた學說を述べ、諸君の御參考に供したいと存じます。

▲男女生殖生活の長短

抑も女性が生殖生活の時期に達しまするのは、溫帶國では十四五歲頃で、卽ち此時期に至れば生殖器關が成熟し、姙娠し得るやうになるのでありますが、併し女性が姙孕力の存在持續する期限は、比較的に短く通常四十五歲より五十歲の間に至て停止するものであります。されば、若し十五歲より姙孕性を得て、四十五歲に至て之を失ふものとすれば、其の生殖生活の年限は三十年を出でず、之に反して男子の生殖生活の年限は遙かに永く、八九十歲の高齡に達しても尙ほ女子を姙娠せしむることが出來ます。斯樣に男女の間に於て其の生殖生活の期限に著るしい懸隔のありますのは蓋し自然の刻機と稱すべきもので、女子は姙娠分娩の他に其の子供を哺育せねばならぬ自然の任務を有して居りますから若し老境に至つて分娩するやうなことがありますと、此の自然の任務を果たすことが出來ない故、女性の生殖期限には一定の限界があるのであります、之に反して男子には哺育の任務がありませぬ故、何十歲の高齡になつても依然として其生殖力を失はず成るべく多くの種族を生產するやうに出來てゐるのであります。

▲懷姙の年齡

女性の姙孕力は生殖腺たる卵巢の成熟と密接の關係を有してゐるもので、女子が十四五歲頃に至つて、姙孕性を得るやうになるのは、つまり卵巢の發育成熟した結果であります。故に卵巢の早く成熟する者は從つて姙孕力も之に伴ふて早く發現する道理であります。

熱帶國の婦人は、姙娠すること頗る早く、印度の如き國では、既に八九歳の頃より月經を漏らし、十二三歳にして子を生む者が澤山あります。プロッス、バルテルスの著書を讀んで見ますと、「パレスチナ」「サモア」の女子は十一歳、英領「ギアナ」「ヂヤマイカ」島の婦女は十二歳「キユバ」島、新「カレドニー」島の女子は十三歳にて人の母となるといふことであります。併し歐洲諸國に於ても、早く姙娠分娩した實例が無いではありません。モリトール及びハルレルは九歳、カルスは八歳カスペルは十二歳、テイロルは十二歳六ケ月の少女の分娩したことを報告したことがあります、併し此樣な實例は素とより稀有で、吾人の屢々遭遇し得べきものでありません。

前申した如く女子は、四十五歳乃至五十歳頃に至つて、其生殖腺萎縮し、姙孕力の廢絶するものでありますが、而かも必ずしも之に限つたものではありません時としましては、五十歳以後に至ても姙娠するが如きことがあります。就中、北歐の婦人に於ては此樣な實例が屢々報告せられて居ります。「デンマーク」に於ける統計に依りますると、一萬人の女子中、四百六十五人は、五十乃至五十五歳にて子を産み、又た瑞典にては一萬人の婦人中、三百四十五名は五十歳後にて分娩し、英國にては四十八萬三千六百十三人の分娩者中七千〇二十二人は四十五歳乃至五十歳の間に於て、百六十七人は五十歳以後に子を儲けたといふことであります。尚ほ之れよりも極端なる實例を擧げまするると、佛國の醫士マルサは、六十歳の老女の姙娠したことを報告し、ハルレルは八十三歳及び七十歳にて、子を擧げたるものを觀、ブリオンは七十二歳にて流產したものを實驗致しました。

▲女子は幾人の子を持得るか

女子が大約三十年間の生殖期限内に於て分娩し得べき兒供の數の最大限は幾許位であるかと云ふに、今假に結婚後直ちに姙娠するものとし而して姙娠分娩及び哺乳に要する時日を十五ヶ月乃至二年と定めまする時

は、三十年間に十五人乃至十六人の小兒を擧げ得る勘定になります。併し生殖的生活の永きに亘り或は双胎三胎を產み、或は頻回結婚せる女子にありましては、更に、より多くの小兒を生むことがあります。今其の甚だしき實例を擧げますと、千九〇一年の際、獨逸の伯林に於て、四十一歲の婦人で二十三人の子を有し、又た千九百〇二年には二十四人の子を有した婦人があつたといふことであります。獨逸の皇帝アルブレヒト一世の皇后が、二十一人の皇子を生まれたことは、世に名高い實例の一でありますが、併し此樣な子福長者の婦人は實際上甚だ稀に見る所で、社會の狀態、夫婦間の疾病、生活法等の關係に由て、前申したやうな最大限の兒數に達するものさへ多くはありません。

▲姙娠の時期

私はこれより百尺竿頭一歩を進めて、種々の事實に基づき、女性の姙孕力の强弱長短等を論ずるに當り先づ姙娠の時期に就いて一言したいと思ひます。

女性の姙娠する時期と月經との間に密接の關係あるとは、從來より人々の說いてゐる所で、蓋し月經時は卵巢より卵子の排泄せらるゝ時期である故、月經の前後が姙娠に恰好なる時期であるとの考は、誰も胸裡に浮でくることであります。高等の哺乳動物にありましては卵巢より卵子の排出する時期に於て、姙娠するのが常でありますが、此際人間に於けるが如く、月經に類する現象が起り、就中類人猿には人間と同樣に月經があらはれて參ります。併し動物に於ては交尾期の來る時期は殆ど一定してゐるもので、動物の種類及び其生活法の異るに從つて春夏秋冬の別があり、又其の持續する時日も數日間位のものもあれば、又た家畜動物（牛、羊、馬）等のやうに、三四週間に及ぶものもありますが、併し野生の動物では通常一年一回に過ぎません。而して人間も之に相酷似してゐることは、既にビショツフ、ヘカール及びストラスマンの如き學者の證明したる所でありますが、併し人間では其の來ること早く、キッシュの說では、姙娠に最も適當なる時期は月經後十日乃至八日なるが如しとあります（未完）



私の顔

☆ くに子

私は私の顔に、人並以上に深い親しみを持つて居ます。

私は、幼ない時から鏡を見る事が大好でした。──それは、いくつの年でしたか、暖い誰れかの脊に負はれて居た事だけはおぼえて居ます、夜でした。赤いランプの灯が、暗いそこらをポッと照して居ました。泣て泣て唯もう泣て、焦れて焦れ抜いた心の上に、「バア!」といふ聲がして刹那にパッとした火の──驚きに見はつた瞳にキラ〳〵と涙が輝いて居た──直ぐ消えた──不思議な、これが私の、自分の顔に對する第一印象でありました。

五年──十年──二十年──此時見た、微かながらの私の顔は、此短い様な、長い月日の間に、かげもなく變つて居る。そして其變つた顔に、曾てのまゝの眉と目と鼻と口とがこればつかりは、餘り形を代へずに付いて來て居ります。これは私の親ゆづりで、眉の終ひに張りのあるのが母親に似た處、輪廓の丸いのも、目じりのやゝ上つたのも、鼻の、女にしては高いのも、そうして口の勝れて大きいのも、これは皆な父親からゆづられたので、此形はやがて又我子にも傳つてゆくだろうと思ひます。

然し、私の「時」に殘し「時」に歩みゆく顔の印象は、いろ〳〵に移つてまゐります。

私は一體顔の表情が烈しすぎると或る人が言ひました、そして私の此烈しすぎる表情は、決して仕やうと豫期してするのではない、無意識のうちに現れるのであります。

信濃の山の山の中に、祖母に養はれて居ました頃は、それはほんの野育ちで、あけつぱなしな、とりとめのない、唯樂しい平和な「野のをとめ」の顔で有りました、祖母が逝つた十八の年の十二月、始めて住みなれた信濃の國をあとに、海を渡つて北海道の、父母のもとに移り住んだ頃から、私の顔には我れより外の何人にも許さない――それはたとへ、第三者が如何に苦心してさぐるとも、髪の毛の一筋の其端程も、解する事の出來ない或る物――！Xが現れる樣に成りました。そして今迄のあけつぱなしな、とりとめのない「をとめ」といふ、大きな型の中に有つた顔が、此大體の形から引はなされて、女の一人「私の顔」を始めて造つたのであります。

足かけ三年目で再び信州へ歸つた、其時友も知人も同樣に「變つてね――」と私の顔を見ました。「前の邦さんの顔には可愛らしい處が有つたが、此頃はしげしげ顔が見て居られない樣な氣がしますよ」と姉の言つた言葉は、今も其意味を深くして居ます。

私の顔に現れて居るXは、私に有つて最も尊い光でもあり力でもあり「良心」でもあります。そして此Xをのぞきに寄つて來た人の多くに依つて、幾多の誤解は私といふものを、さま〲の嘲りと奇怪との種にして、勝手な斷定を下しては、これだ〲と各々解つた樣な顔をして居ます。我れは知る、私のXは私に於て眞の良心であつた、又ある、そして之は第三者に有つては到底解るものではない、唯自分と同じ心の友にのみ、うなづけるので御座います。

都會に住んだ過去の三年其私のさすらひの淋しい歴史を、私の顔は、私の心に殘してくれました。

春の夜の月の光の中をゆく
わが顔はいたくやつれたるかな

何となく衰へ心つもり來て
鏡のわれのあはれに見入る

番町の暗い家、其三疊をぼんやりと射して居る無言のランプ、それに照されて鏡の面のみしろく冷く輝いて居た。じつと見つめて居る私の顔……私の性格Xが社會と戰つてはゆく苦い冷い心のあとに、目のふちがやゝ凹んで沈み切つた血の色、一分……二分……三分……ハラ〲と涙がこぼれる、「バカ！最後まで戰へぬのか！」そつと涙をぬぐつて身じろいた時、朝出がけに蕾のまゝの唯一輪、挿しておいた白百合が、半ば開

いてポッと香つたのに氣が付いた、そして私の顔のXは、ますます孤獨に輝いたのであります、……かういふ日が續きました。

家に這入つた、私生れて始めて自ら許した自分てふもの丶全部、夫に對して私は此の孤獨のさすらひXを息こはせる事が出來ました。夫がそれを解してくれて居るか居らぬかは、私には餘り重大な事では有りません私は私のXを始めて心安く夫の胸に寄たのであります。かくして苦がかつた過去をふりかへつて見ましたそして其顔の變遷がありありと浮ぶ背景に、勝利のほゝゑみを禁じ得ませぬ。

妻と成り、母と成つてゆく私の顔、やがて私は再び同じ題でかはつた私の顔を書きます、今其背景を一々造つて居るのですもの。

☆

ふで子

北風よ起れ、南風よ來れ、わが地上の樂園に滿ち渡る香氣の中へ再び還り得たならば、始めて私は美しい瞳と薔薇色の頰とを得るであろう……。

おまへは聲を立丶て笑つた事がない、とよくさういはれる通り、すべての感興をあからさまに若くは華やかに表現すことが出來ない、從つて表情などのあらう筈はなく、不遇な身體は同じ樣に淋しい血の薄い神經質の狹つた眉が、變ることなく朝寒の化粧鏡に映るのであつた。

思ひ捨て丶は居るけれど、幾度か束髮の形を變へて見た。たまには薄紅の花を翳して見たもの丶、矢張私の顔は變つた事もない、其樣な時は堪らなく苛々なつて壁に掛つたわが袴を呪ふ樣に見詰て了ふ。

ある日、鉛色に曇つた午後の五時、荒布橋を渡る。冬の光は恐く河水の底に滅入つて了つた樣、うそ寒い風が私を吹く、瓦斯燈がともる、急はしない往來は暮靄の中に幾多のほの黑い人影が動めいてゐる。私はいつでも、行き場のない立ン坊や何かと同じ樣にて の橋の袂に立留まつて、疲勞た吐息をする、と、極まつてボーとぼやけた樣な汽笛が聞えて、遠見の鎧橋のあなたから、濃い藍色がゝつた煙がもくもくと湧く、大方月島の造船所あたりかも知れない……。

今私の顔を水に映したなら、そこに堪へられぬほど衰頽の影を宿して居るであろう、濕んだ眼と力のない口許が什麼意味をば、吾自身に囁くであろう……。

私はそれが餘りの恐ろしさに、どうしても石垣を洗

ふ濁つた水を見る事が出來なかつた。

煖房のあたゝかみに、櫻色の顔した若い同僚だちは寄ると觸ると何か面白いことを云ひ出しては、破烈した樣に笑ひ轉ける、職務の間の休みには皆自由の吐息を恣にする賑はしさ、誰かゞ唱歌を歌ふ、かけ構ひなく人の噂や、不平でも歡喜でもあから樣に暴露して居る。けれど私の顔を見ると、皆は云ひ合はした樣に口を噤むで鹿爪らしくなる。階級といふものゝ上に置かれた私の顔は皆には煙たいからだ、定められた規律を踏まねばならぬ私の前には、阿諛追從、淺ましい利己の面影ばかりが活動して居る。私はどうしても笑顔することが出來ないのである。

日々變化もなく幾春を過せし私は、更に興味のない冬木立に似た女であろう……。そして分別らしい眞面目な樣子が、「老孃」なぞいふ冷評を受くるのであろう十年もあとの昔は振分髪に結ひつける樣に、緋房の下がつた花簪をさして、むらだらけのお化粧の顔で、飛んで歩るいた面ざしは、あとかたもなく一點の柔しみさへ失せた刺々しいこの顔を、矢張駄々をこねる子の通りに見て居るのは、世の中にあゝ吾母上唯一人であつた。

……そして榮ある少女ともなりました。何時とは云へませぬ。せめて時を云へばそれを判然と自覺した時がそれでしやう。春は歡樂の餘韻を引いて暮れて行く頃だつた樣に思はれます。キラ〱と太陽は鏡が浦の岬に消えて、あの荒んだ玄海の水が、恐しい記憶を叫び返した樣にドッと影の色に染つて默した上を、艫の音もなくユーラ〱と左に右にゆれて船は岬をかくれました。

日暮飛鳥還、行人去不息

さうした夕に若い女の心をそゝのかすある物、漠然したある物を探す願はしい思ひ、それを染々と感じてくれた夕でした。私は初めて染々と自分の顔を眺めました。（別れて行つた其男が云つた言や、物語に見た不思議な世界の男と女の話やを考へながら）。

どんな驚と喜を私が味つたとお考です。

それ迄物耻して鏡を思はなかつた女には、それよりは朝々起き出でるのが自分の顔を眺める望の樣に思はれて來ました。輝くギヤーマンの姿見に、うすほの暗い密室の腰硝子に見る顔、そしてさまよふ巷に不圖道

行く自分の影に、うれしい驚を味ふことも多くなりました。

殊に朝の化粧の後では、只何となく其儘にキチンと自分の影に向つて何時迄も坐つて居る事がでざいます。その時には別に戀とも人とも思ひませぬ。例へば誠を追ふ人の、其到着點を認める時に感じると云つた樣な只もう漫然と造物主の美妙な働の一端を自分に見た滿足、さうした貧しい物を喜んで居ます。

以前の樣に自分を憎む事もなくなりました。過ぎて來た年と年とは、自然と人生を教へて、あの小休もなく忙しかつた女の顏に、ある種の修養と經驗と苦心のシムボルとも見らるゝ、平和と柔和と粘着を示して居ります。

人智の發達史を始めた美色エバ、トロイの女王ヘレン、ソロモンを生んだバテシバは今でも妬しいとは思ひますけれど、只其間の意味は違つて來ました。「斷崖の匿處にをる鴿」に自由の羽を妬み、「紅色の線維の如く美しき」脣に天地を呪ふ氣息をあげるをのぞみ、沒藥の袋に不斷にひゞく詩の袋を望みます。アルテミスの女神が何故に拜せられたかを知る者に、歌はなければ美姫小町が何の價が有りましよう。

そして一歩を一歩と踏みしめ味つて行く向路に、恐怖と愛着と、快樂と苦痛は程近く相對して來ました。そして時としては戀人として、妻として、母として祖母として移り變り行く自分の面影を、一々判然と思ひ浮べる不思議な日もある樣になりました……。

☆

よし子

幼き瞳にも恐いやうに輝いてた白日の影が、うすれる頃には、きつとひる寢から覺めて母樣とお風呂にはいつて居た。

赤い金魚だの、青いはとぽつぽ等を浮かして、湯氣のなかに遊んで居ると、よく蜩がないた。遠くの森の方で蜩のなくのが、かすかに聞えて來ると、私はうつとりと母樣に抱かれてる事も忘れて、あゝ美いお姫樣が眞白なお茶碗を、金のおはしで打つて居らつしやるア、美いお姫樣が、眞白なお茶碗を、金のおはしで、とあまりあざやかに、ゑがゝれるので、母樣にも告げず、ぢつときゝほれるのが常だつた。

無心の憧憬にかたむけたその面ざしは、どんなに可愛かつたらう、どんなに淸らかであつたらう。

あゝ忘れ得ぬ幼き日の我が面ざしの幻影よ。

私の嬉さうな顔は、父母の笑ひをさそひ、私の悲さうな顔は、父母の憂ひを湧かす。あゝ私はなぜ一人子に生れたんだらう、このかひなき叫びを上げぬ日があらうか。父様よ、母様よ、背向に居る時の私の心を何時までも何時までも知つて下さいますな。笑つて居られる時は親みませうけれども。ふとんかぶつて泣く時や。野にまよひ出て悲しむ時の、私の心をさとつたらさけるでせうお胸が。

あゝ天地の廣さに、一人子より重き責任を持つて居るものがあろうか。一人子には決して生れる者ぢやあない事よ、苦いからつて妙ちやんにすがつて泣いたら何時でも唯弱い／＼つてあざける妙ちやんも、涙ぐんでだまつて居た。

私は何時でも、つとめて顔のみは嬉さうに樂さうに笑つて居よう。悲い時でも。苦い時でも、淋い時でもあゝ死んで終つた後までも。

涼き姿して螢をおふて遊んだ夢を、いまだあざやかなるに、懐しき、いねの香は、永遠に葬られ、幾百人かの力によつて、作り上げられた貧き町は、白い女の顔のみがはびこつて、三丁とは放れぬ我が家のあたりとは、まるつきりちがつた空氣に包まれて居る。

ひろ／＼と青み渡れる田園を胸にゑがいて、ある夕べ唯一人丘にのぼつて、その新開地を見下した時。

私の顔には、どんなに深い、大きい悲みをふくんで居たらう。

☆　きみ子

嘗て――十年程以前――私の父は、ある手の鋭いた佛師に頼んで、高さ二尺七八寸位の佛像を刻ませた事がありました。

それは立像の御釋迦樣で、潔齋し精進して佛師は熱心に、彫刻にかゝりました。御釋迦樣は。其の後可なり長い時日を費して、美事に出來上りました。父は幾日かそれを奥座敷の床の間に飾り、親族知己を呼び、互に其の出來榮を稱してゐます、母も傍から伏し拜み伏し拜み

『ほんたうに尊い御顔でござりますことねえ』と、頻りに香等をたいてをりました。

當時の私は、唯何の事なしに、新らしく大きな御釋迦樣が、出來たのが嬉しく／＼、尊い御人が見えたといふ樣な心持でいそ／＼として、他の叔父さん叔母さんや

小さい友人に語りました。
その時でした、家中の誰いふとはなしに、私の面ざしが、其のお釋迦樣の御顏の何處かに似てゐると、いひ合ふのです。そして母は何かの瑞象でゝもあるかの樣に、喜びました。然し私は、さうかしらと、思つたのみで、嬉しいとも嫌だとも、餘り深くは感じませんでした。
唯今から思へば、其の頃の私は、怜悧で美しい感情を持つた、少しの不自由をも知らぬ、幸福な少女でありましたから、或は御釋迦樣の尊い美しい表情の幾分に通ふ處があつたかも知れません。
それが、曲折變化に富む幾年を經過した今日、私の顏にはどの樣なものが仄めいてゐませう。
實生活といへば、如何にも充實した意義を思はせませう、けれども、其の裏面を覗いたら、痛ましい努力の影が、傷痕の樣なすゝ黒い姿をひそめてゐるのを見出すでせう。そして時々刻々私の感情は硬ばつて行き豐かなりし頰肉は少しづゝ削がれつゝあるのです。
目の色、額の波——それは丁度勞働者が、鶴嘴の一振り一振り、疲れてゆく樣な、淺ましい恐ろしげな表情を乘せて、私の面一面に廣がりませう。そして其の頃、此の胸はどの樣なものを包んでゐるでせう。

☆　　つげえ子

あかるい顏！から人は云つて下さる。私も鏡の虛僞でない限り決して、くらい顏ではない、とそう思つてゐる。濃い眉と大きい目、それは何誰でも逢つた人が口にする。私のすべては父から受けたのである。眉と目と口と、幼ない時からお父さん子ねーと云はれたのもよく覺えてゐる。幼ない時からの寫眞のいく枚かを見ても濃い眉と大きい目とは變つてゐない。男似は出世するから云ふ人もあつた。まだ生先長い私の事であるから未來はすべて未知である。そこに私の希望はつながれてゐる。
一たい私の顏は寫眞が死んでゐる、と云はれる。寫眞にうつり得ない所がどこかにあるに違ひない。私は人の顏を今假りに二樣にわける。一つは靜止美、一つは活動美と、これはどんな人でも生れると授けられる天分である。京の女はまづ靜止美である。はなやかな燭の火に、靜止してまばたきもしない處に美しさが深い。最も周圍の空氣も古めかしい、どちらかといふと人形をかざるに適したパックであるかもしれぬ、うま

味がない。東京の女は比較的活動美である。目も眉も口も意味をふくめるに充分活動する。解りやすく云へば表情が上手なのである。うま味がある。

私はこの意味でフランスの初夏の夜などを憧憬する薄色の羅衣着た巴里の女のうたひ舞ひつかる丶美しい月夜、野天の歡樂場、瀟洒といふ美はこんなところに見出せやう、この點では京の女は零である。しかし巴里の女でも總てがそれではないと。同じに東京の女でも隨分、表情にうとい者もある。まして私は未開のやうな東北の女である。表情美に熟達しやうがない。けれど只、まばたきもせずに靜止する事は私の顔の生を奪ふやうなものである。すべての物が靜止するよりは活動する。まあ目先をかゆれば人の目を引きうるやうに、不完全な私の顔は、手を膝にして首をすゑた限りでは餘りかたい。少しほぐす時、私の顔は、眉、目、と活きてくる。幸に私は內心に憂のないせいか、はれやかにあかるい。これが私の顔全體の使命であろう。只人にやわらかい感じをあたへたい、無理なねがひであるけれど私は常にそう心がけてゐる。此の心持が幾分か顔に色をつけてゐやうかと思ふ。「賢なる妻の眉は常にひそめり」私はかう云ふ點に至つては大落第である。けれど巴里の女の如く歡樂本位ではない。

着物は綠だとか、黃がかつた色か水色のやうに、薄いそうしてはなれた色が似合ふらしい。

あかるい顔！これが私のすべてを現はした適切な評であろう。

☆　　しやう子

麗な小春日は幾日となく續いた。

嬉しい程靜かな谿間の盆地の草原に、母さんと其日もちぐさの芽をつんでゐた。白い羊毛のやうな雲が峰をこえ草原の上を渡り又峰にかくれて、あゆんで居る其あゆみが一日續くのである。又あしたも續くのであらう。それだのに楡の梢、櫟の梢からは、絕えず病葉が、カサコソと終焉のうめきを白日の草野に捨て丶はちる、落つる。

「淋しい様ですね」「だけれど嬉しい」母さんと私は、斯うして人影なき、幸福なる天の下に、恰も親鳥の、羽がひに安んずる雛鳥の一疋が領せる喜び、そんな喜を握りながら、青い綠の葉を好につまんで歩いた。私は人界のすべてを忘れて居たであらう。歩んでせまい峽道へ達した時、波もなき一つの小湖を望んだ。のぞ

んで二人は微笑を湖面に交した時、私は私の親にあまへる顔の如何に平和ないかに嬉しさうなさまであるかを、初めてみたのである。そうして此顔は私の生れた時からの顔である事を知つてゐた――。

私は外山の原から一直線に、大久保の町を暮方の慌たゞしさに、追かけられながら、町はづれ迄落のびてきた。とある朽ち懸つた家の軒に盆栽のいくつかゞもう夜の安眠をよばうとして、土間に焚く蚊遣火が靜かな跳をして軒をくゞる、私は尚も歩んだ。阪がつきると軒燈が妖精のうめきにおびゆる樣に、八月の夜の風を啣んで赤くまたゝいてゐた。寺の周圍は一團の林であつた。林をでると森が蛇足を加へてゐた。橋があつた、それから野は西幾里に開け樣として草原の一帶が腕を伸ばしてゐる。八月の草は、いたづらに丈を餘して豐富なる葉綠に心持よき、色彩の充實を展開してくれる。夕月が丘の大木に懸つて、茅屋の燈火が誰やらの瞳の樣に朦朧と輝いてゐた。天には星もみち。

八月の薄暮の綠野に包まれた我顔は、眼にも、頰にも額にも綠を敷いて、青ざめた心に強い詩を思つたのである。青い顔よ。これが私のうたはんとする顔であるらしい。

嬉しい物に對する時無情な所業をとがむるな。私は私の幼ない顔を寫眞に見る時、いつも兩の手を眼に當てゝ見樣とはせぬ。あのむつちりとした顔、あののがすまじき瞳、それは七つ頃の私の顔であつた。二つの我かげを見る時、自分は別々の二人としてみて居たい十二の姿と、十五の姿と、それは別々である。然し轉變の姿の中にも久遠の心はある。私の顔は成長と共に幼なき影がうすらぐ。去りゆく往年のかげよ私は慕はしい。

それは好であつた。森の寺鐘が鏗鏘な音をもたらす時、一夜にて死するおはぐろとんぼの群につゝまれて芝生に横たはりながら、赫々たる夕づゝの偉大なる笑を送つて、夕べのうたを聞くのは、薄暮の闇が一種のパノラマにみる樣な光影を含むでくると、邊りは靜寂にかへつて、月は照つたと知られる、と霧吹の樣に月みぐさの香はしのびやかにこぼれてくる。私は其影にかくれ幸福なる一日の感謝の祈を捧げる。それらの時私の顔は四邊の空氣に色化されてある。それらの時、

私の顔は恐ろしくまじめである。

☆　はな子

朝御飯喰べながら、兄は私の顔をしきりに見ては、うす笑ひをする。さあ氣になつて仕やうがない。御飯粒でもついてゐるのか、と思つて自分の顔をなでて見た。それともゆふべ日記を附けたとき墨でもついたかとも思ふと、髪がをかしいのかとも思はれて氣がもめるのだ、仕方がないから『鏡見てくるわ……』ともつてゐた箸を投げ出した。

『なんにも附いてはゐないよ――』とまじめになる、『エゝほんとうについてはいまいてとよ……』と妹もまじめに云ふ。『をかしいわねえ――』私がすませば兄さんは私の顔を見る。

かつがれたのか……と氣がつくとむやみに腹が立つて、プク〳〵怒りながら御飯をすましてしまつた。

『成程――なる程、人相がいゝ……』と兄は初めて聲出して笑つた。妹もプッと吹き出してしまつた。私もきのふの妹のいつた事を思ひだして思はず笑つてしまつた。

『オホ……今迄私の人相を見てゐらしつたの……』とおもはず聞たら……。

『ばか、にしてゐるわ……』と云ふけれど私も妹も茶碗なげだして笑つてしまつた。

『つうちやん、姉さんのことを、人相が悪いの――闇うちくはすのつて、いつたのは誰れだい……』と兄はまじめに言ひだした。私と二人で妹を責めるけれど、どうしても言はない。

『をしへれば兄さんが先きに闇うちしてしまふのだがなあ……』と兄は笑ひながら障子を締めていつてしまつた。

『ほんとにだれがいつたのよ――』と私がなじれば、『だつて姉さん怒るでせう……きつとだわ……だから悪るければ私が代つて謝罪しますわ……ね、いゝでせう』と云ふ。

『お前の謝罪ぢやつまらないわ、……言ひ出した本人を引ぱつて入らつしやいよ……』『だつて姉さん、姉さんの顔一目見ると三日も頭痛がすると云ふのですものオホ……でも姉さんの……あの人、オホ……聞えたら大へんだわ、怪からん僕の……だ、怒るでせう……』ばか――と云ふけれど仕末が悪い――。だけど私には人相が悪いといつた本人は解つてゐる。

『お前には心あたりはあるんだらう……』と出勤時間が迫つたので、帽子もつて立つてゐた私をふりかへつて兄は云ふ。靴の紐を結び終へた。

『私にだつてわかりませんわ……』と私は隱した。

『でも兄さんはどう判斷なさること――』『さうさね妹連中は口が惡いけれど、まさか人相が惡いの、闇うちのと、云ふからには女ぢやないね、猛烈すぎるよ……さうさ、つうちやんの餘程親しい異性だね、お前が手てずらしたのだらう……』と笑つた。

いつものくせの身體を動かして見て、ありもせぬ帽子の塵をはらふ、ネクタイをなほして見て、いゝかい……と聞く、微笑ながら大股でいつてしまつた。

親しい異性――と私は柱に寄りかゝつたまゝ、ガラス障子に映つてゐる自分の顔を眺めてゐた。私は二十二年間自分の顔は變らぬ積りだが……或る人は變つたと云ひ、或る人は變らぬと云ふ。けれど優しみの失せたのは全たくだらうと思つてゐる。

きのふから二言目には人相が惡いぞ――と兄に冷かされるからそつと鏡に映して見るわが顏は、昨日も一昨日もさしたる違ひを見出さなかつた。

生れたまゝの私の顔、父そのまゝと人が云ふ私の顔だ

『夜雨集』の出版に就て

横瀬夜雨氏の文集は愈よ出來上りました。收むるところの文章は、『七もと櫻』を卷頭に、本號の誌上に載せる筈であつた『歡喜』を卷末に、凡そ長短二十篇ほどの文章を集めてあります。皆此四五年來の努力のあとです。尤も長いものは『お才の國』と『蘇生』です、『五月雨草紙』『筑波雲』などの本誌の讀者が全く知らない長篇もあります。偖て體裁は、クロース本綴天金つきで、立派に出來ました。卷頭には夜雨氏最近の撮影になつた肖像と、筑波山、本書に挿入する爲め特に氏が住居の近所より撮影した山影とを寫眞版にして挿入してあります。表紙の文字も、其他著者自らの筆で書きました。紙數は三百頁になりましたが、用紙は舶來のラフ紙を用ひましたから、開いた眼の快いことや、手ざはりの好いことは申すまでもありません。校訂も亦嚴密にしました。近來の出版物として斯の如く理想的なものは少からうと思つて居ります。

一人の價値（一）

太田喜志

出京といふ事にみじかい我過去の一段落をつけた忘る可らざる生涯の一角から、足踏み出して早くも六ケ月にならうとしてゐる。

「吾が出京といふ事は何といふさびしい事であつたらう」

まづ筆を執る始めに是非これだけ記さねばならぬのであつた。

われは東京に來て始めて、「葉のちる時の物思ひ」覺る。

われは東京に來しが故に、「ひとりの價値」を識る事を得たり、

東京の白き路上に、渡り鳥かげを落すは、
木の葉の落ちて、さまよひゐるは、
かぎりなく、さびしき事かな。
東京の白き路上に。

こゝに帝都の西の入口、野に連なつてゐる路である晝より夜へ、夜より晝へ、と始終なく連れ立つて一脉の物音、其調子は高く低く太く細くはかなき音波を空に葬つてゐるが、とりわき夜の十二時すぎてからの一體の空氣といふものは、何といふ哀訴的な律呂をなし

た音調であらう、夜更けと云ふても此處の通りは人の跫音が絶えない。

また、今夜も「夜のチヤルメラ」が同じ方からきこえはじめた。それは恰度こゝへ引越して來た晩であつた亦新らしくなつたといふ旅心地によくも寢づかれなくて、ふと目醒めた夜半、あのチヤルメラをきいたのであつた。その時私のこゝろは吸ひ出されるやうであつた。しかも暗い晩で。

モーシ一ッでも買つておくれ——



——よ、向ふ通るはア新造衆でないかア——よ、くるわのウお客にイ買つておくれよオ——、

たつた一ッがアおまいさんのオ——なさけ——……

斯ういふやうだ「買つておくれ——よ」……と消え入るかと思ふと、「たつた」と強く息を吹きかへして生きかへつて來るやうな、それが強い壓迫の下にゐて無理矢理出す聲のやうで、笛の一曲一曲が裂くやうである。電車も自働車も通る賑やかな

通りであるけれど、まだどこか昔日の驛路の面影がのこつてゐるこの通り、——その中に軒を割りこんで、紺、淺黄、または、お納戸地に唐草模様などの長暖簾を垂れた暗い木戸をたくさん見うける。黄昏くればまたその奥に折戸も立てられ、入口の石疊には水も撒かれて、二階三階と高い部屋々々にまで灯の入つたのもほのかにそれと知られる。

そこは男子ならではくゞらぬところ。

赤、青、紫、などゝすべて濃厚な色彩に目を射る灯のもとの女、思ひきつて大きく結つた「たてひようご」といふ赭熊のまげに、緋房のかんざし、スル／＼バタリと長い廊下を重ね草履の音のなまめかしさよ、雨などの降る夜だつたら、まアどんなだらう、など思ふ。

いつか「お二階の姉さん」と私の事を呼んで懷いてくる宿の子をつれて、菊川といふお職の部室へあそびに行つたとき、菊川は大きい犬張子をくれた、丸に抱き茗荷の定紋付いた萌黄色の油團、茶だんすの飾り方などすべて珍らしい容子に、私のこゝろは醉つたやうな息づまるのを覺えた。

『自分が藝術といふかたい信仰に對つて握つてゐる尊とい力は、何ものか侵す事ができよう、わが心奥にゐてまろび出づるは寶玉であつたもの、その光りを何が消す事ができよう、柔らかいわが心のヴエールこれを脫ぐ事はしまい!!!　自分に誓つたことであつたわ。』

と薄暗い廊下をひた／＼と中庭へぬける時、私のこころは、はてしなき綠の曠野を踏む心地であつた。

「あいよ、お信どん昨ばんはどうもおかげ樣でした、ちよいと、はゞかりさま、受取つて頂戴な、ほうら」

といふより早く白紙に包んだものは階下の廊にちやらり。

櫛卷にしてゐる、お信と呼ばれた人は、あはてゝ拾ひ上げ、「いつでもようでざんすのに、あれぽッちのもの……アラ、こんなにして下すつてよ　どうもすみませんねエ」

二階の手すりに、すうと裾ひいて行つた赤い蹴出しの人は菊川らしかつた。

妹脊山アでは、雛鳥さんに久我の助、エ中をオ流アがるウる吉野川ではないかいな………

ふりかへつて見たときはもう誰の姿もなく、遠い廊下をバタ／＼、キヤツ／＼と呼ぶかと思ふと、高い笑ひになつたりするのがきこえた。

少年少女達への歳末年始によい贈品

東京市京橋區大鋸町十一
振替東京壹七貳九

文子文壇社出版

どこの本屋でも取次販賣して居ます

滑稽
奇抜
珍本

佐々木邦先生著

二人やんちゃん

全一冊

初版八月下旬發賣
忽ち好評賣切の處
再版 十一月中旬出來發賣

中判美裝 武田壽氏石版彩色畫 木版色刷插畫六葉入

定價金參拾五錢 送料金六錢

目次 二人やんちゃん。あまのじやく。仙ポコ。お猿さん。昔と今

大人にも、小供にも面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも爭ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。幸に左に掲げたる新聞雜誌の評判記を御覧下さい。

二人やんちやん

新聞、雜誌の評判記拔萃

◎『少女世界』へ これは趣味ある少女小說です。太郎さんと花子さんといふ兄妹が、好きな叔父さんと一しよに、思ひ切つて無邪氣なことをする、その面白いことの數々が、輕い筆でさながらに描き出されてありますので、讀みゆく中に笑はずにはおられません。それからあまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇もまた面白い讀みものといふを憚りません。これを少女諸子にすゝむ。

◎『東京日々新聞』 二人やんちやん初め、あまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む、惡戯小僧にはお馴染多き著者の筆なれば面白いこと！請合ひ中には子供に解る樣な諷刺や敎訓を含むだ話も交つて居る。

◎『少女の友』 これは、滑稽小說に有名な佐々木先生が、子供の滑稽な有樣を書かれた少女小說です。集むるところ、二人やんちやんの外、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の四篇、をかしいおもしろい本です

◎『やまと新聞』 二人やんちやんあまのぢやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を收む太郎と花子とのやんちやん愈々出でゝ愈々甚だしく而も一點の邪氣を存せざる流石に子供の神子たるを思はしむる少年少女の讀物として極めて面白きのみならず藥になればとて毒になる氣遣ひ無し。

◎『中學世界』 曾て惡戯小僧の日記を譯して大好評を得たるはこの著者なりとす。少年少女の天眞爛熳たる自然性を見ること明敏、これを筆に移してまた無邪氣なる精彩あり、斯くの如きは、實に著者の獨擅なるべし。「二人やんちやん」以下數篇皆な面白し。

◎「都新聞」 二人やんちやんいたづら小僧で子供衆に御馴染の佐々木邦氏の作である、滑稽の裡に諷刺あり面白味の間に敎訓を籠めてあるよい本。

◎『婦人の友』 太郎さんと花ちやんとはなか〱やんちやんで、十日ばかりお留守居をして居た叔父さんは隨分困りました。此の十日間の出來事を面白く輕妙に書いたもの。

◎『中央新聞』 いたづら小僧日記を出してより此著者の名は頓に坊ちやん孃ちやんの間に知られたり、此の書はあの樣なおもしろい得意な文章にて書きまし少女小說、二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今の五篇を蒐めたるものにて既に御馴染の坊ちやん孃ちやんもあらんが初秋の讀物としてはこよなきおもしろきものなり

◎『少年雜誌』 これは美くしい少女小說であります。目次は二人やんちやん、あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今とみんなで五つありますがどれも〱面白くて〱溜らない御本です

◎『帝國新聞』 二人やんちやんの外あまのじやく、お猿さん、仙ポコ、昔と今、等雜誌「少女」に掲載したもの。斯う纒めてみると一氣に讀むことも出來れば、忙しき人も亦樂むを得可し。僕は試みに「あまのじやく」を讀みたるが、傳記保存の上よりも、著者に謝すべきもののあるを覺えたり。文は輕快平明。

恭賀新年

石版
三色版
寫眞版
コロタイプ
活版
凸凹版

製版
印刷

不鮮明に製版して劣等なる繪畫寫眞の類を挿入するは寧ろ無きに如かず、挿入するならば宜しく『女子文壇』の如く美術的に且鮮麗なる製版印刷を要す
（本誌の表紙、原色版、寫眞版、石版畫は皆當所の印刷なり）

大江印刷所

東京市麻布區笄町八十一番地

電話芝四百六番

◀文学に現れたる娘時代の表情▶

女子文壇 増刊

娘時代

十月十日發行
二百頁美装
執筆者寫眞入
定價廿錢
郵稅壹錢五厘

―(小說六篇)―

◎本郷の兄……前島優梨子
◎お奈津……さかえ
◎伯母……加藤筆子
◎海水浴場の女……千鶴子
◎最後の日……月草
◎初舞臺……若葉

◎あらしの夜……神近市子
◎夢二式の眼……初雁
◎火影……若杉濱子
◎義太夫を聴く夜……珠野すゞ子
◎破れたる友情……初鹿野道子
◎月の出るまで……かうほね
◎現實から離れたい……ふさ子
◎薄明……港の女

◎白き手の謀叛者……望月野薔薇

◎たゝかひの跡……小宅てふ子

◎若きやすらひ……ひざくら
◎男の手紙……梨花
◎面白い月日……胡蝶

◎生きた人形……波の花
◎十六の娘心……藤田きく
◎誘惑に勝つ……しうん子

◎娘時代の純潔無邪氣なる日記……拾三篇

◎生氣潑溂たる女の和歌……數百首

◎課題 わが故郷……わが親友……わが手文庫……(散文)

發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社

【振替東京壹七貳九番】 賣捌全國各書店

終の夢

Last Dream

はやぶさ

神よ我心は貧し、
わが胸は渇けり、

十八の彼女が胸を打つて出るひゞきは、こんな苦しい乞丐の子の歌でありました。

監獄の原を越えなほ奥深き隠れ家を出て、時折、電車の窓から華やかな街路に大屋根の聳えてゐる生れた家をみかへる時、あの古い黒塗の土藏の三階にこもつてゐたミスチックな匂ひ、蒼ざめた色のトタンの塀にかこまれた箱庭のやうな中に立つて遠き瞳を趨らせた空の深さ、それより知らなかつた自分の夢がなぜあのやうに浩く美しく神々しかつたのであらうよ、とそゞろ彼の女は今の姿がふりかへられます。

その昔、幼き心の貴族であつた彼女は、心の餓を覺える頃になつて、物質上にも、饑饉の運命に遭遇しました。電話も瓦斯もない巷のどよみもはるかな郊外の生活は、文明からだん／＼退歩してゆくやうに思はれるのです。或る宵、蠟の火をさゝげて、ひとり暗い佛間に行つた時、彼女は「我が姿を見た」と思ひました身を顫はせて、敗殘の家の頽廢した空氣は燃ゆる玉をおしつゝみ、つひにその核をまでも侵すであらうかと

彼女はまた淋しい時、やるせない時、地に落ちて埋れた鬼瓦の碎片の下から、わづかに頭を擡げたものゝ芽のさゝやかなみどりの色を、胸の奥に秘めて、幾度か接吻しました。

今年の夏、はじめて迎へる監獄のほとりの夏、わが最後の夏休み、それもさりながら、弱いものには好ましい、ほしいまゝな生活を、心の自由をと、その憧憬によつて待たれた七月二十一日、彼女が花園の入口だ

と思つたのは、沙漠のまぼろしにすぎませんでした。五年間の誤解をといて、去りゆくひとりの眞の姿を明らかにして學校にとゞめたいと思つた休暇日誌も、數日を經てやつとこれだけ書いたばかりでした。

胸に抱く玉なき空しさ、あたゝめはぐむもののなき淋しさ。花を盛りたる籠の如き卽興詩人のもの語りは、机の上にひらきてあれど、その側には愛する子の紺色のひとみかゞやけど、眠れる生活より何をかつみ出すべき。

あゝ空虛ならぬ沈默よ、ねがふはたゞそれのみ。

彼女は每日、あつい日中を座敷の簞笥のすゑにすはつて過しました。目に痛い白絣のきぬ。彫刻家が鑿をとる時のやうに、一つの針目にも精をこめて汗の泌むのも忘れてしまふ。不安も思索もない、たゞ單純な心になれるその刹那の幸福。「針とれば女のわれのつとめぞと強ひて心をなだめてみれど、」これは苦しい內心への云ひわけであつたのでせう。「さびしき門の郵便箱に待てども〳〵人の便りは來ず。下より覗けばみ空の白き光、空しきめにしむ」彼女の貧弱な心では、自動的に沈めるモノトニーの底からうづまく旋律をおこし、灰色の壁に花を飾ることはとてもできないと思はれました。その中にあつてせめて色彩のある世界をあたへてくれたのは「ジリアノ」と「卽興詩人」と朝每にしめやかな幼物語りをさゝやく新聞の「一枚の瓦」とでありましたが、しかしそれも心吸はれるやうに讀み入つたあとでは、あゝ自分には何んにもない……戀知らぬものゝ戀ものがたりきくやうな儚さに知らず知らず嘆息が洩れるのでした。

強烈な白日の光と人の視線に恐怖を覺えるやうになつてから、彼女にはもう四度目の夏であります。葭戸の蔭にかくれて、暑いのにと母にとがめられると、彼女は痛いやうな眼つきをしました。それがしばらくすると、恍惚と柔い光を帶びてくる――ミラノの大寺院の五色の窓硝子を洩れてくる日光は、アントニオの憂愁の胸に流れ入つて、どんなに優しいハーモニーをかなでたであらう。――若しも自分が思ふまゝに居室を作るのであつたら、星の光も稻妻のひらめきも眉に落ちるやうに天井は玻璃にしやう。勿論白日は幕をはつておく。氣分の調子の浮いた時、沈んだ時、緋に黒に

水色にカーテンの色をも忘らんで――こんなことゝも夢みるのでありました。

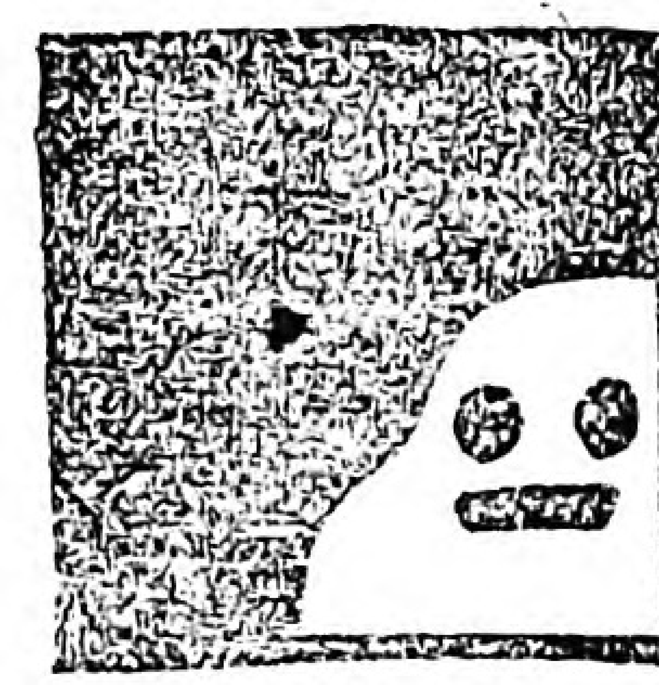
四年の末から今學期にかけて、級の皆樣のお顏のきはだつて白くなつてきたこと、固くあはせてあつた襟もとから、花模樣がこぼれるやうになつたこと、衣の着こなしの、肩から胸のあたり、何となく曲線のとゝのふてきたことなどに眼を瞻つた彼女は、此の頃、ゆく道こそちがへ、自分もおなじ時代に入つたのではあるまいかと思ふことがありあす。絶えず何ものをか囚へやうとする心は、いつか美に對する憧憬のために、まつたくとらはれて居ることがありますもの。

あはれスパルタ人よ、汝が角技場こそよけれ。
わきて少女らのそれぞよき。衣もまとはで
男の子の群にゆけど少女らは
嘗てたはれたる姿もなし。

「ジユリアノ」の中のアルシノエが亞麻色の髮を日にさらして圓板投げをするところを、彼女は胸わなゝかせてよみました。その時見て居た詩人と、おなじ嘆美の情のたかまりに、あゝ古への白き衣、日は光る大理石の像、素肌の女神にあこがれる人は黑衣をまとへる僧侶の群を夕ぐれの影だ、死の影だと叫んだ。

「アテ衣にて、アルテミス像のまへにて語りあひしことを忘れはせじ、彼の誓ひを忘れはせじ。やがて獅子は驢馬の皮を棄てなん。その日まで、吾らはナザレ人の敎への如く鴿のごとくやさしく蛇のごとくさかしくあらむ」とアルシノエに書きおくつたジエリアノ、終にケーザルの紫衣をまとうたのち、ローマ全國を犧牲にしてヘラスにさゝげやうとした背敎者、その短い生涯を貫いた熱誠は、しづかな彼女の血管を燃えさせるほどの魅力をもつてをりました。「あゝ若し、チタンの眞理と、ガリラヤ人の眞理とを統一し得れば、そなたは女の胎から人間以上なのだ」しかも終に女の胎から生れた人であつたジユリアンの苦悶は、小さい彼女の胸にもありました。たゞ彼女には彼のフラヰウス家の武斷の血のかはりに、より多く野羊の乳がその血管をみたして居た、彼女は生れながらのピユータンであつたのでせう。髮洗ふ時、浴みして出た時など、ふと自分の丸い肩に觸れると、乳の色の白いのをみると堪へられない淋しさが、嵐のやうに彼女の全身を脅しました。

　すべてにオプンな夏、刺すやうな光の夏は、水色の霧の淡きが中に包んでみたいと彼女はいつも思ふのでした。（長くつゞく）



新年の巷

長曾我部菊子

遣り羽根の上手

是れは櫻木町のある路次を少し入つて行つて見たのであつた。彼方に可成の廣場がある。右の方はお醫者樣で松竹梅の門松が嚴しい。左の方は新築の店でしめかざりが清らかに見える。其處に白い手拭を肩に打かけて、新しい印絆纒に勇み肌を見せた若い男が二十三四の低い島田に結つた意氣な女と遣羽子の眞最中……カチリカチリと冴えた音が調子よく起つていつまで立つても突きはづしがない。其の周圍には人立がして、大人も子供も老人も皆あんぐりした口付をして巧妙な手際に見とれてゐる。ちよてちよてと馳せて來た丁稚らしいのがひようきんな顏をしていきなり、「あれまア、何て間が好いんでせう。」と叫んだ。それに見惚れて居た皆を一時に笑はせた。けれども二人はまだ羽子を落さぬのであつた。

華美なひとり笑み

ゴム輪の俥が南の方から音も立てずに飛ぶ樣に公園をさして來る。乘つて居るのは十四五歳の舞妓であつた。紫の着物に紅の錦の帶を胸高にしめて居る。拔き襟をした雪の樣に白い頸が着物の色とうつりのよい事いづれは新年の宴會の席に侍るのであらうと思はれる其の花の樣な頰に包むにあまる微笑をもらして居る。無邪氣なひとり笑の顏は思はず誰の目にもとまつた其の女は池田焦園の畫いた美人の俤に似通つてゐた。

ゆひわた

店員が十五六のお孃樣の羽子の相手を云ひつけられてまご〳〵して當惑してゐる自轉車店の前を通つて神保町の方にゆく。今日ばかりは人道を庭にしてあそこでもこゝでも、カチ〳〵と羽子板をふり上げて居る間をくゞりくゞつて微醉の人は急ぐ。私のあとになり先になりして結綿に結つた娘が一人行く。赤と紫とで濃く色をかはしてあるふとい布を二重に髷にむすんでゐる。戀物語によく聞かされた江戸の娘の白木屋お駒、でなければ八百屋お七の優しくて美しいお駒も、激しく、

美しいお七もこんな髪にゆつて麻の葉がたの帶をだらりと左右に垂れて、さうして江戸の初春の年をかうして歩いたらうか。

此處に歩く娘には艶麗な眉目も華美な姿も、狂熱な情もありやうはなかつた。ただ髪にばかり昔の夢を結んでゐるのであつた。

娘猿ひき

九段坂に上つてそれから富士見町の方にあるいて行つた時田安橋の前で「娘猿ひき」にあつた。赤い袖無をきせられて子猿は、娘の脊のつづらの上にちよんぼりと丸くなつてのつかつて居る。店から店の入口を娘は出つ入りつして行く。子猿はキロキロとして覗いてゐる。いたづらな丁稚がそつとしのびよつて猿の毛をつまんでワツとおどかすと、グルリとむきかへつてしきりと怒るのをまた笑ふておどろかす。けれども娘は叱りもせずに店から店に問ふて歩く。然しどこでも珍しがる家はなかつた。

富士見町から番町の方に行く角まで來た時むかふから同じ程の年頃の娘がこれは紫の袖無を猿にきせてある。すたくと歩をよつて二人は聞いても私らにはわからぬ在なまりで、早口に話し合つて互にのみこんだ顔をして左右にわかれた。赤の猿は紫の猿があるいて來た方に、紫の猿は赤の猿のまはつて來た方にとゆく

あゝ、どこであの猿は娘の背からとびおりてちよこちよこと舞ふのであらうか。昔に殘された猿ひきの俤を今四五年もすれば求めても見られぬものとなるのであらうに。

砂にまじる初刊の繪

須田町に來て見ると風が出た。もみたてられる道路の砂は宙にとんで晴衣の人をためらはせる。門松が皆しきりに搖れ立つ。ぞくぞくと寒くなつた。空を見ればさきまで美しく白かつた太陽がもうかくれて灰色の天にかはつて居る。

「オヽ寒ぶ」と女がコートの袖をかきあはしてふかれて行く、砂がざらざらと顔にあたる。あはれであつたのは新聞の賣り子で、十字路の電信柱を脊にして、刊の美人畫やら新年の新聞をならべて小石でおさへて賣つて居たのが此風に吹立てられて、飛ばうとするのを押へつけて誰か買つてくれやうかと待ても誰も見もかへらぬ。

まけずおとらず　三ヶ津自慢競（さんかのつじまんくらべ）

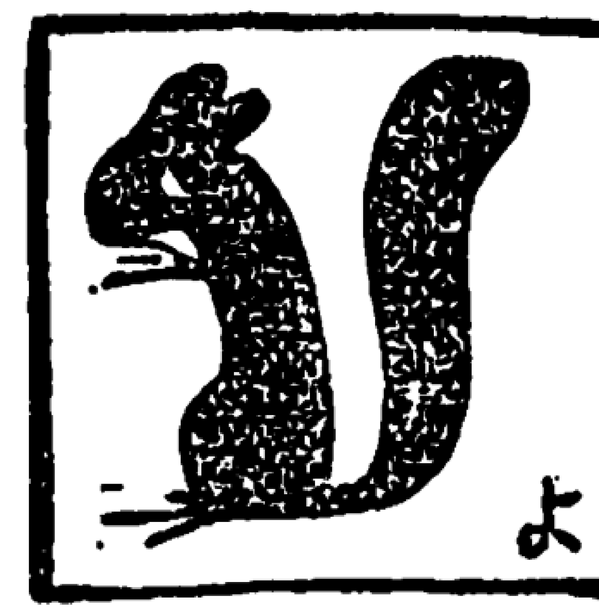
此の番附は和田信次郎氏秘藏の『尚古雜帖』より拔萃したるものなるが、江戸の終ごろに出來たるものならん

江戸之部	京都之部	大阪之部
諸大名方	諸宗本山	佛法最初天王寺
山王祭	祇園會	天神祭
飛鳥山	嵐山	天保山
隅田川	加茂川	よど川
不忍が池	廣澤池	阿彌陀池
淺草の市	伏見稻荷初午	十日戎
深川の山開き	松茸狩	住吉汐干
本鄕お茶の水	下河原の菊水	逢坂の水
神田祭	西陣織屋	堂島の米市
両國の川びらき	三十三間堂の矢數	天王寺まひ

江戸之部	京都之部	大阪之部
ゑびす講	山げい子	手打れん中
火けし	顔見世	芝居
長うた	壬生狂言	浄るり
淺草八百善	丸山	天王寺ふくや
深川の二軒茶屋	ぎをん二軒茶屋	玉造二軒茶屋
淺草雷神門	東寺羅生門	天王寺猫の門
駒とめ石	外山方丈石	住吉さゞれ石
梅やしき	軒端の梅	浪花の梅
麻布の傾城松	北野影向松	福島さかろの松
澁谷金王櫻	月の輪時雨の櫻	住吉車かへし櫻

比翼塚	大佛みゝ塚	淀上江村のぬゑ塚
湯島の天神	北野の天神	天満天神
王子の稲荷	伏見稲荷	玉造の稲荷
六阿彌陀	御室の八十八ヶ所	毎月の大師廻り
日本橋魚市	宇治の茶園	ざこばの魚市
白木屋	下村	三井呉服店
むらさき	呉服物	せいもん拂小ぎれ
金龍山の餅	大佛餅	虎屋まんぢう
通り町の山本茶	道喜ちまき	三臓圓のねり薬
調布の玉川	井手の玉川	卯の花の玉川
兩國ばし	五條のはし	四ツばし
ちよきぶね	高瀬舟	上荷舟
すぢかつを	桂川の鮎くみ	はせつり
よし原	島ばら	新町

麹町の井戸	露の井	天王寺の亀井
有馬の火の見	智恩院の傘	二つ井戸
車力	車うし	だんじり
たばこ入れ	なはての元結	淀や橋たばこ入
京傳の化粧るい	小町べに	小倉びんつけ
苧さし足袋	京ぞうり	堂島下駄
にしき繪	御影堂の扇	四ツばしきせる
淺草やうじ	六條じゆず	長町のかさ
ゑびや	かしは家	坂町三卯
兩國あは雪	南禪寺丹後屋	高津大清ゆどうふ
吾妻男	京女郎	浪花の男だて
しらみひも	無にかう	長命丸
向島夕すゞみ	四條のすゞみ	大川山さき涼み
すみ田川花火	大文字	大川の花火
願人坊	あだちの鬼ばゝ	すみよしおどり



詩人と結婚する勿れ

引佐細江

◎詩人は婦女の一般的配偶にあらず

詩人と殊更云ふまでもなく、一體に詩人肌の人や、又文學者氣質を有する人達は、東洋でも西洋でも同じことであるが、普通の世間並の人々よりもどうしても日々の生活や、其他いろ／＼の事情から受け入れる刺戟が多い。多ければ多いだけそれ丈また普通の人と違つて、絶えず動搖してやまない所の鋭敏な心を持つて居る。所でさう云ふ性質を持つた人が、世間一般の婦女子が求めるやうな、立派なる夫となるべき資格をそなへて居るか、どうか。と云ふとそれは大に疑問であると思ふ。

けれども一般に若い婦女子——殊に小説の一つも書いて見ようとか、詩の一つも作つて見ようと云ふやうな人は、とかく詩人とか文學者とか云ふ表面ばかりの華やかな名前に魅せられてしまつて、さういふ詩人とか文士とか云ふ人達にのみ特有な或る感情に心付かぬ者が多い。それが爲めに後でとんだ取りかへしのつかぬ後悔をするやうな場合に立ち至る者が多々ある。

今一寸した其一例を擧げて見ると、近頃米國の或る新聞に載つてゐた事であるが、詩人マーベル、スイフト夫人は夫から離縁されたと云ふ。何ういふ譯で離縁されたのか、その邊の詳しい事は判らぬが、とにかく離縁されたと云ふ事だけは確かな事實である。何でも夫人は日々の生活費として一日分僅かに一錢の三分の一——いやそれよりももつと少ししか夫から貰ふ事が

出來なかつたと云ふ事を告白して居る。
二人は一九〇五年にミチガンと云ふ所で結婚式を擧げて、後ち間もなく僅か半年たつかたゝぬ中にもう分れてしまつたのである。このマーベル、スイフト夫人は自分で生涯つれ添ふ夫として、特に詩人を選んで結婚すると云ふ事は、いかに危險な事であるかと云ふ事に就て次のやうな忠告めいた事を言つて居る。



△戀人を作ることは上手でも妻は忘られてゐる

世間の娘たちは決して迂濶に詩人と結婚してはならぬ。少しでも詩を讀み、又作つて見ようと思ふ程の者は、いつでも詩人と云ふものは常日頃自分が勝手に空想に描く詩人と同じ者のやうに考へて居る者が有るや

うであるが、それが抑も間違のもとで、却々どうして詩人と云ふ者は、世間の歳端も行かぬ若い娘たちが氣隨氣儘の心の中に描くやうな、そんな注文通りのものとは違つて、互に戀しあつて居る中は詩人程よいものはないでせうが、一旦結婚して、さてそれから共に永の年月を一緒に暮すと云ふ日になつて見ると、九分九厘までは今まで自分が小さな胸の中で、獨り思ひ暮して居つた所とは違つて、それが爲めに寧ろ思ひ懸けない不愉快な、冷たい興味のない一生を送らなければならんやうになるでせう。一體に詩人と云ものは無口で氣むづかしやで、いたつて氣嫌の取り憎い、そして妻の云ふ事なぞは却々たやすくは聞き入れて呉れない者のです。一方では詩作なぞに劇しく頭を使ふ爲めに、感情が始終興奮して居るし、殊にさう云ふ狀態の時などは、自分に妻と云ふ者があるのか、ないのか、殆んどそれすらも忘れてしまつて居る事が多い位です。そして戀すること、又戀人を作ることは上手であつても**その代りいつでも貧乏許りつゞけて居ます。**ですから詩人のさういつたやうな一種特種の心持ち——つまり普通人の心持ちと相違した點を能く呑み込まずに結婚した人や、又そんな事とは知らずに、無暗にいゝもののゝやうに思つて買ひかぶつた人達は、後できつととんだ後悔をするでせう。劇場の切符を買ふ事は誰れより能く知つてゐても、御馳走を言ひ付けるにはどう言へばいゝものか知らない方——まあさう云つたやうな方が詩人と云はれる人々の中には多いのですから。と、まあ詩人マーベル、スイフト夫人は言ふのです。

▲良夫たる資格

誰でも同じ事であるが、凡そ一人で夫としてもよく又詩人としてもいゝと云つたやうな資格をそなへると云ふ事は到底望まれぬ事で、一方夫として成功し得るやうな人は、それは唯あたりまへの人であつて、詩人ではないので——眞の詩人の心は世間の多くの人々の心に比較て絕えず動搖して居るのは言ふまでもなく、**又殆んど人々の氣附かぬやうな微細の點にまでも働い**

て居るもので、所詮普通の人には望む事が出來ないのである。

そこで一體よき夫たるには何ういふ人でなければならないか。言ひかへて見ればよき夫となるに最も適當した資格は何かと云ふに、第一に正直な人、餘裕ある人、家庭を愛する人、克己心を持てる人、男らしい人忍耐強い人、これ等の資格の一をそなへた人はまあ善い方である。それから此度は何ういふ性質を持てる人がいゝかと云ふに、それには親切な人、善き習慣を持てる人、氣前のいゝ人、智的な交際に富む人、忠實な人、同情心に富める人等であつて、これ等以上に擧げたやうな人の中の何れかであり、又これ等の性質の一つを持てる人は何れも立派なる夫として、尤も適した資格をそなへた人である。ところが詩人には是等の資格を持てるものゝ少いと云ふ事は殆んど云ふまでもない。

▲文學者の不幸な結婚の例

そこで今度は有名なる詩人の中で最も不幸な結婚をした人々の名前を擧げて見ると、

シエクスピア。ミルトン。ドライデン。バンヤン。ゼエルダン。バーンス。スコット。ソーセー。コレリッヂ。シエレー。バイロン。ランドー。ロセッチエドワード、ヒッツゲラルド。ゼー、エム、ベリー。リチヤード、ル、ガリエンヌ。

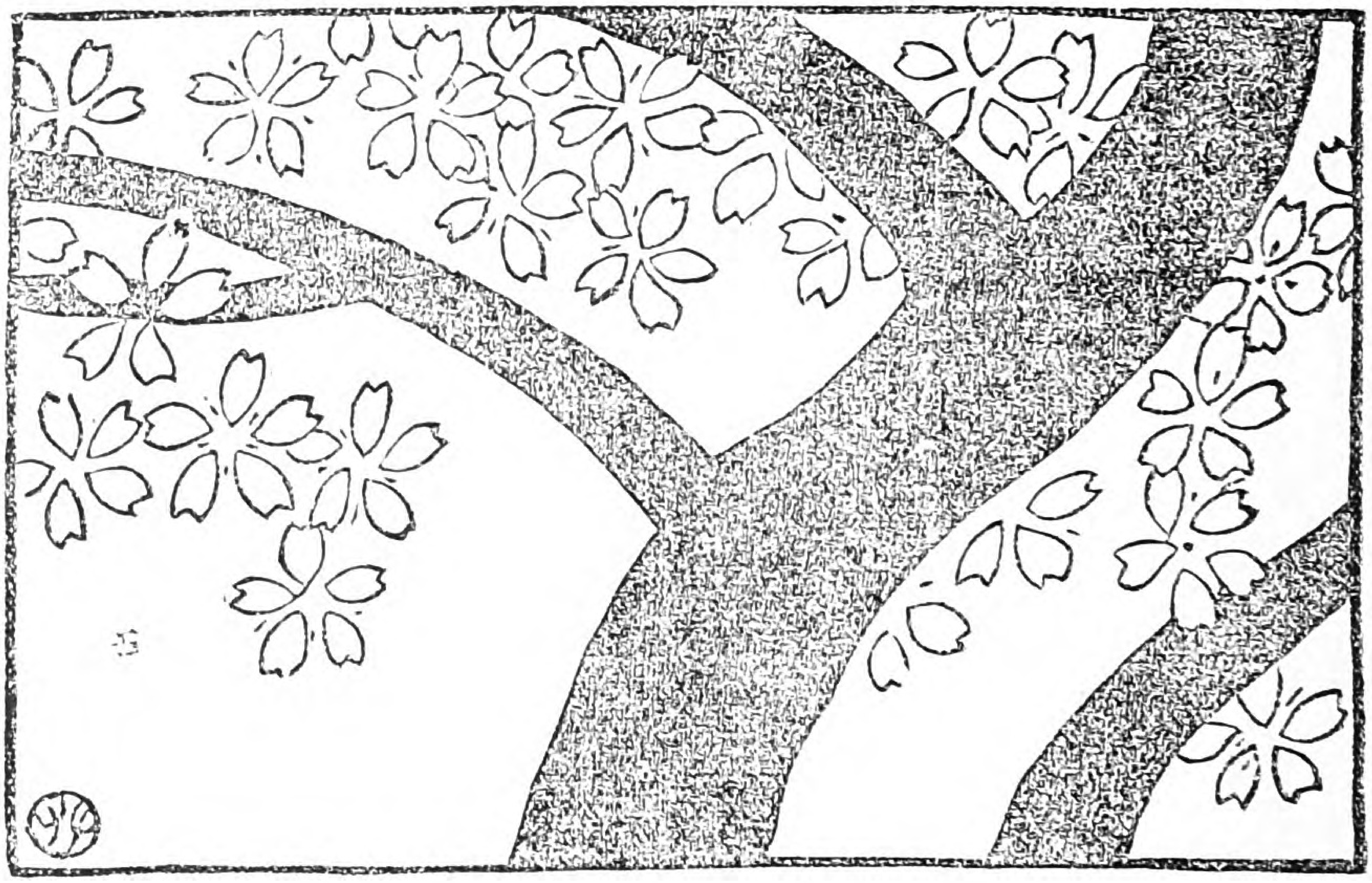
等である。右の人々に就て順次に結婚の年齡と、其幸不幸の狀態を書いて見るとしよう。

シエクスピアはどちらかと云ふと早婚の方で、十八歳の時、自分よりは八歳も年上な女と結婚して居る。おかしな事には此の二人は始終寄ると觸ると喧嘩をして居つたと云ふ事で、その原因と云ふのが又頗る面白い。と云ふのは二人共立派な夫婦でありながら、どう云ふものかお互に他人交際でもするかのやうに、少しも打ち解けず、お互によそ〳〵しくして居つたせいで遂にこの二人の仲は終ひまで和解しなかつたと云ふ事である。その癖、シエクスピアのソネットは皆悉く戀愛に關したものばかりと云つても好い位、戀愛に關した事が澤山歌はれてある。けれ共それは結局愛する夫

人の爲めに――ではなくつて、或る若い愛くるしい娘に向つてゞあるからおもしろい。ミルトンも結婚問題では大分困つたらしい樣子が見える。彼れは若い時美くしい若い妻君を娶つたが、その妻君は詩人と結婚したその日から、唯だ幸福でありたい、幸福でありたいとのみ思つて居る事二三週間の後ち、とう〳〵分れてしまつた。そこで彼れは再び結婚したが又不幸であつた。三度目も又同じ樣な結果を繰り返へした。ドライデンも不幸であつた。バンヤンは二遍で、二遍とも自分の過ちであつたと云ふ事を自覺した。ゼルダンもスコットも亦お互に不幸な結婚をした。バーンスは不幸であつて其上夫人に對する彼れの態度が甚だ不忠實であつたとさへいはれた。ソーセーは二遍で二遍ともあまり面白くなかつた。そして最初の妻は氣狂になつてしまつた。シエレーは早婚で、そして大變不謹愼であつたさうだ。其後彼れの妻は自殺して果てた。バイロンは非常に罵つた上離緣した。『ルバイアット』の反譯者であるゲラルドも離緣した。現今の詩人の中でも詩人の結婚が不幸であると云ふ事は殆んと何等の疑ふ餘地もない程、一般の通則のやうになつて居る。ゼー、エム、ベリーも亦不幸を脱れることは出來なかつた。リチャード、ガリエンヌは現今のロマンチックの青年には非常に尊敬されて居るが、其實彼れも此頃其妻を離別した。彼れの妻と云ふのは數年の間巴里で小間物屋を開いて、殆んど獨立の生活をしてゐた。

なぜかういふ風に概して詩人の結婚が不幸に終るかと云ふ事は世の若い婦女子の一考すべき事だらう。

又他の方面では詩人は概して長生しない。チヤッタートンは十八、キーツは二十六、シエレーは三十三、バイロンは三十六、ポーは四十、バーンスは三十七、未だ其外にも一々擧げればきりはないが、一體に詩人が普通の人に比べて短命であると云ふ事は爭はれない事實である。一體結婚そのものが人生に及ぼす樂しみは數かぎりもないだらうが、其中でも夫婦うち揃つて生涯無事に、目出度長生きすると云ふ一事は其中でも最も重なるものであるが、悲しい事に詩人はあまり長生しない。けれ共さうは云ふものゝ無論多數の中には多少の除外例がないでもない。中には長生した上に幸福な一生を送つたものもあらう。けれども戀そのものは詩人が理想化したものはいゝが、詩人自らがそれを實行したものになると、いつでもあまりいゝ結果を見る事が出來ぬと云ふのは如何にも殘念な事である。



磁器國の記憶

ぺんぺんぐさ

「東の櫻さく三味線の國」にわれは生れき。

「濱路」とは、呼びならはせし我名なり。

梅の木に、鈴さげて緋の緒を引けば、乳母まかる。

「伊勢詣」行輿のかげより「廣重」の、紺青色の海も見き。

「紙の家」京染の振袖おもく「歌麿の少女」ごころは袖屏風、はづかしきこと知てけり。

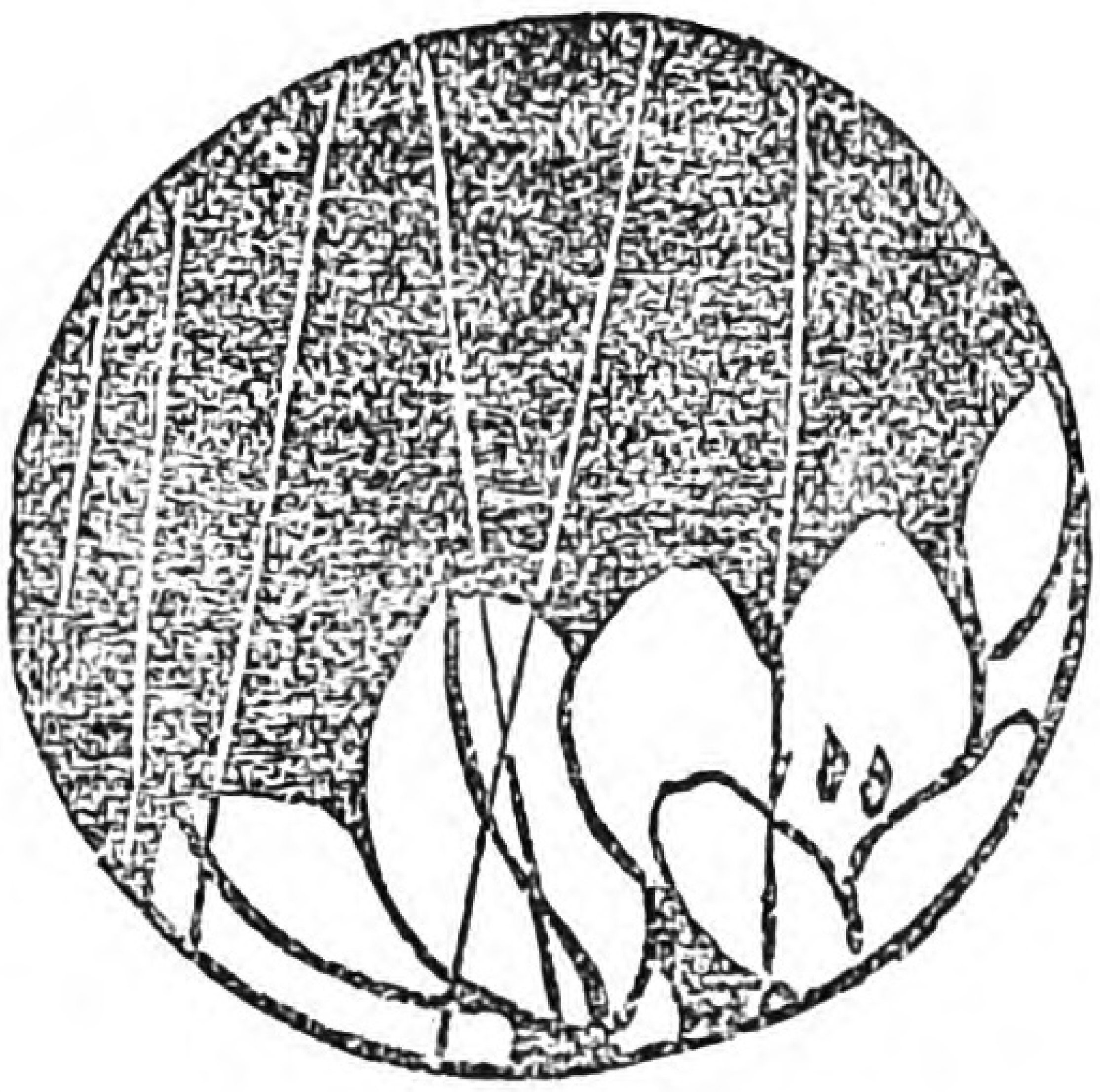
夏來にければ、七夕や洗ふ「硯」も紫の、歌よむこともおぼえしか。

雪の夜は、「行燈」のかげに、不思議なる悉達太子の物語、悲しさは「賽の河原」のかぞへ歌。

鉦うち鳴らし、四國八十八箇所を遍路する順禮の後姿を門に見て、漂泊の佗しさに泣ぬ。

あゝ、夢多き少年の幻影と、不可思議なる傳說よ。

「淡青き記憶のかはたれ」より、「悲しき銀色の忘却」へ。



俯向いたムスメ

中窓の欄干に凭れて雨だれを見てゐるムスメがあつた。

肩揚のある羽織には椿の模様があつた。髪はおたばこぼんに結つてゐたやうにおもはれる。そして左の眉の上には黒子があつた。俯向いてゐたれば、顔はどんなであつたかそれはわからない。けれど、五月雨の頃とて、淡青い空氣に包まれたその横顔をほんりのと浮いて見えた。戸外にはカリンの木が植はつて、淡紅の花の香が、暗い雨の庭をたち迷ふてゐた。

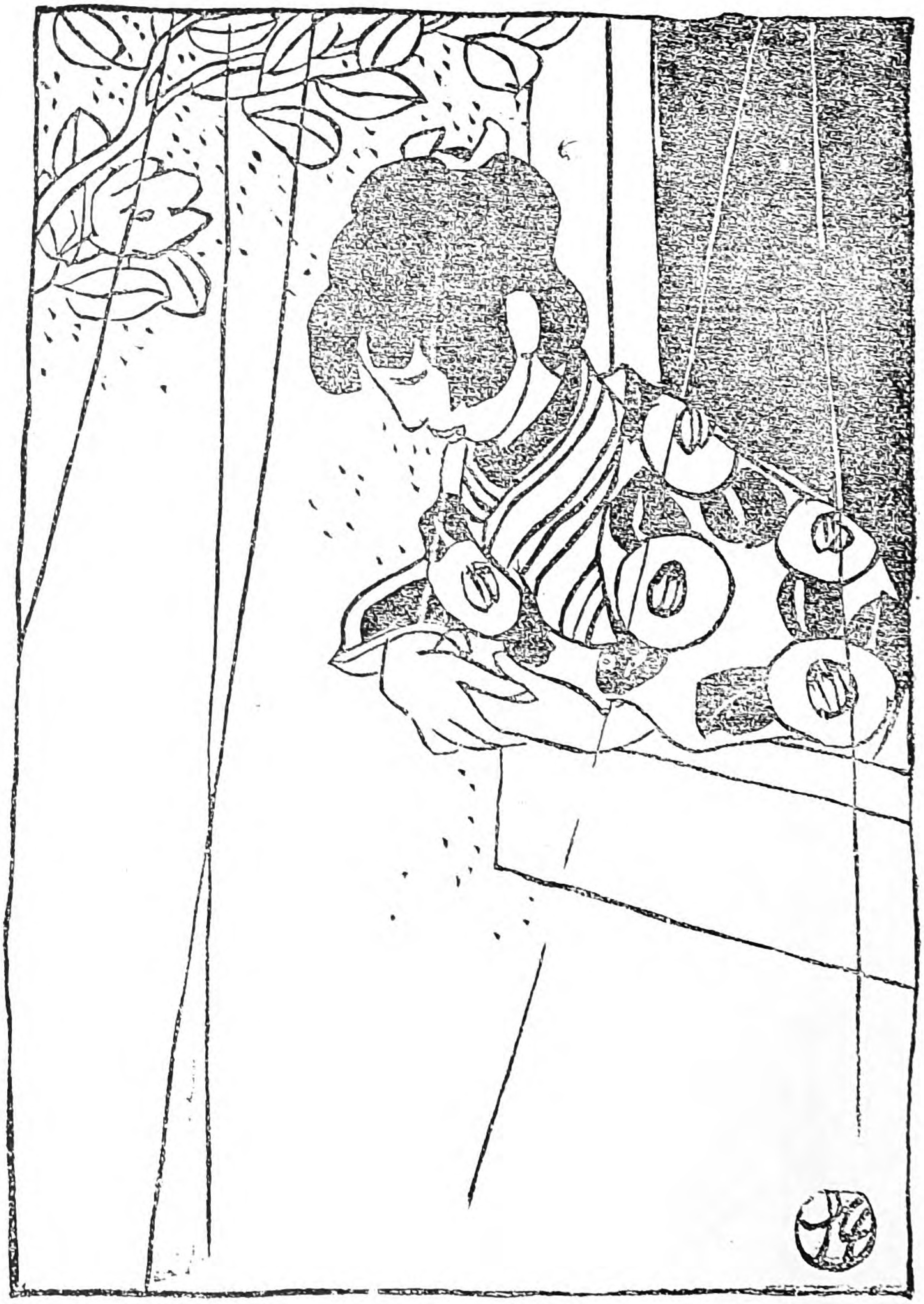
それが何處であつたとも、そのムスメが誰であつたとも、今は知る由もない。

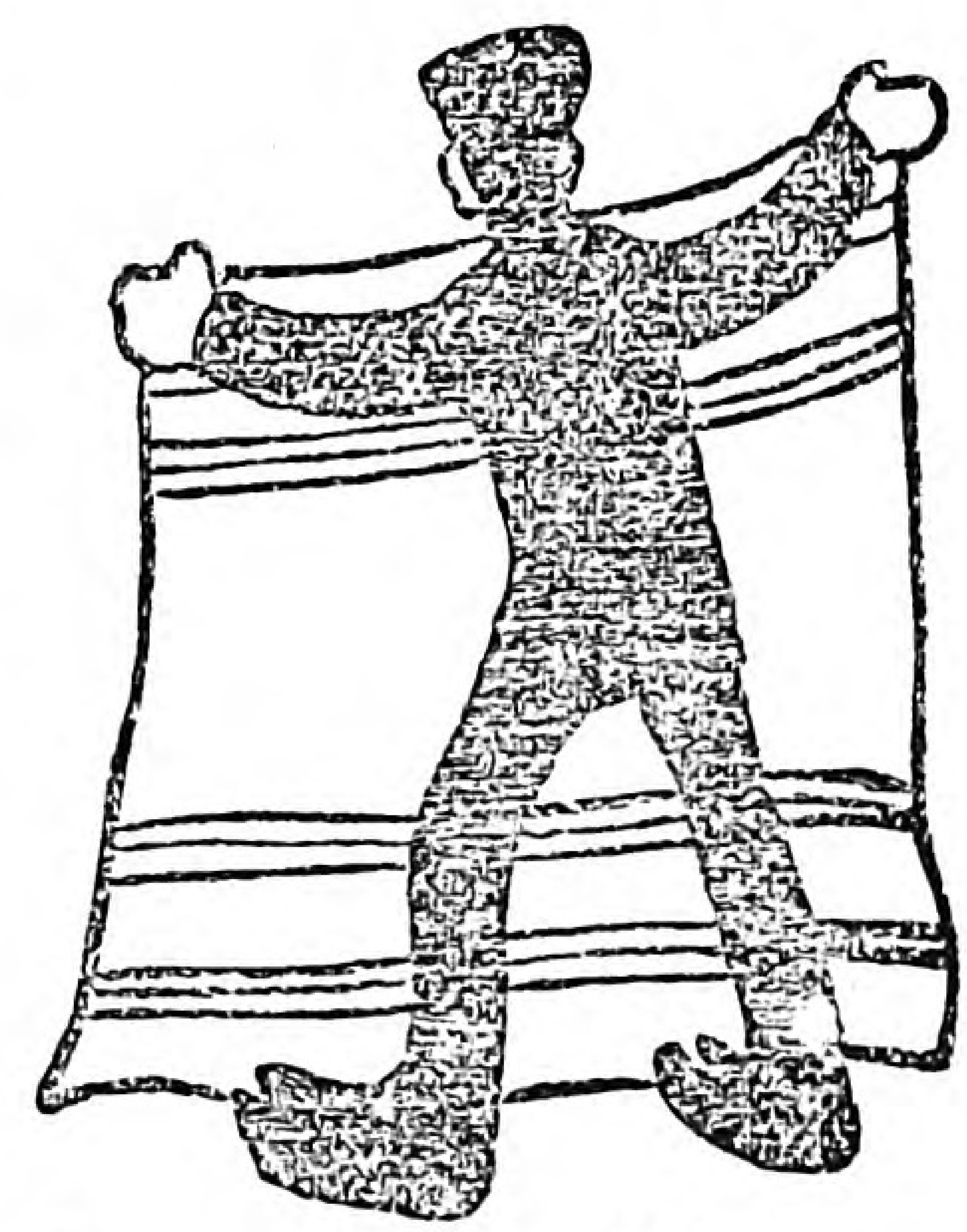
母に聞けど、かゝる窓、見しこともなしといふ。

姉に聞けど、眉の上のほくろなる女を曾て知らずといふ。

その頃讀みしリイダアなどの繪の女かとぞ思へど、それもたしかならず。

ムスメは、遂に俯向きしまゝ、いつまでも〳〵私の記憶に青白い影を投げ、黒い心の上を銀色の雨が降りしきる。





最初の戰慄

花道の上へかざした「造りさくら」の間から涙ぐむだカンテラが十ばかり輝いてゐた。はやしがすむのをきつかけに、思はせぶりな釣鐘がゴオーンと鳴る。

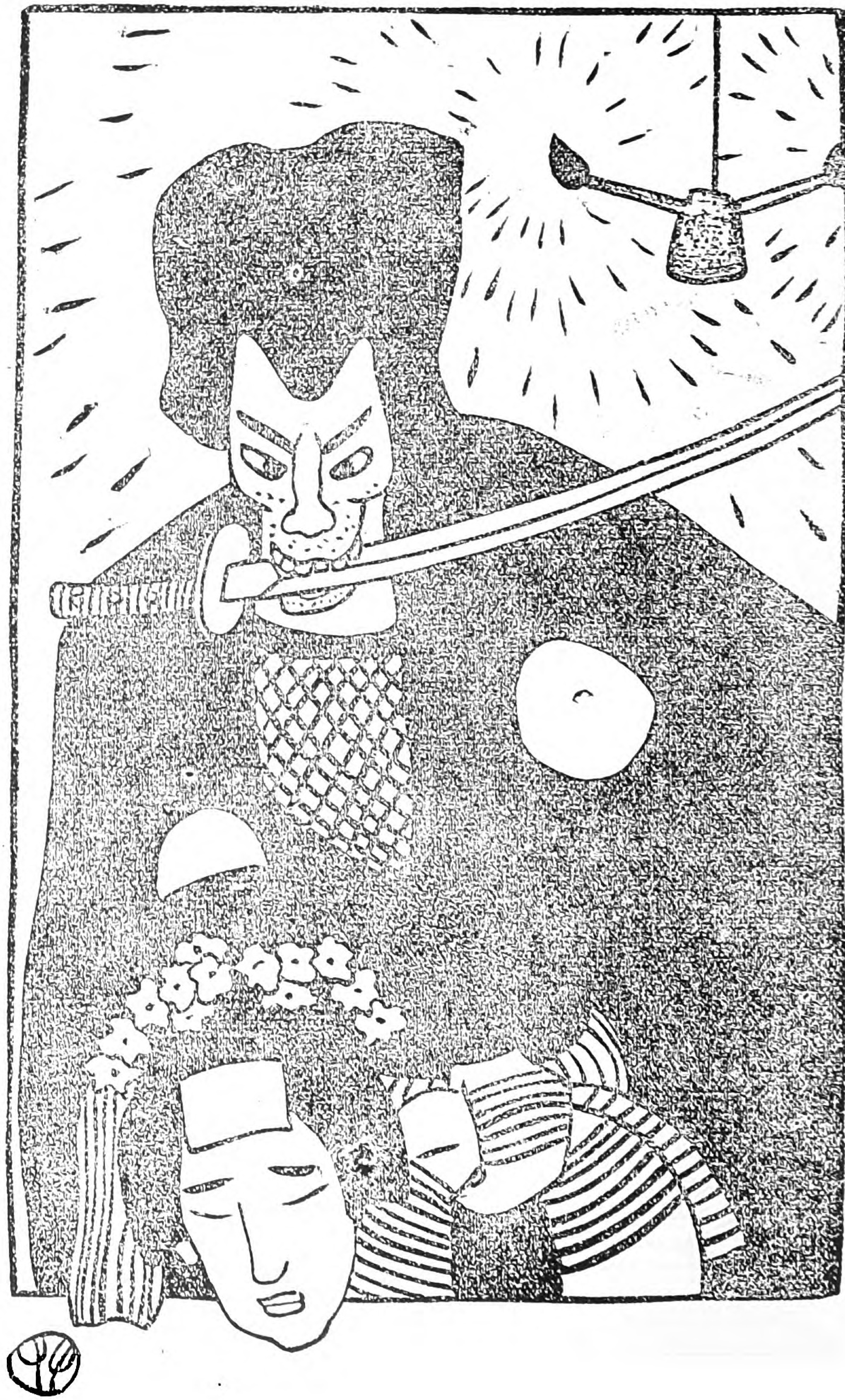
金の小鳥の姫君は、百日鬘の振翳した刃の下に手を合せて、絶え入る聲にこの世の暇乞をするのであつた。……南無阿彌陀佛……キラりと光る金屬の下、黒髪美しき襟足ががつくり前へうちのめる。と血汐滴る生首を引下げ、百日鬘は口をゆがめて、カランカラと黒く笑つた。

あゝ、お姫様は切られたのか。

それは、少年のために「死」といふ最初の發見であつた。あはれ姫君はもう死んだのだ。涙は少年の胸をこみあげてみあげ頰を流れた。「死顏」も「黒き笑」もカンテラも涙に溶けて、金色の光は舞臺に漲つた。

折しもあれ、黒裝束に覆面した怪物がぬつと現れ出で、赤い毛布を垂れて姫君死骸をば襖の裡へと掃いて往つて了つた。

死んだのではない。死んだのではない。あれは芝居といふものだと母は涙を拭いて呉れた。かくて少年の破れた心は繕はれたけれど、舞臺の上で、姫君の切られたといふことは忘れられない事實であつた。また、赤毛布の裡をば、死んだ姫君が歩いたのも事實であつた。

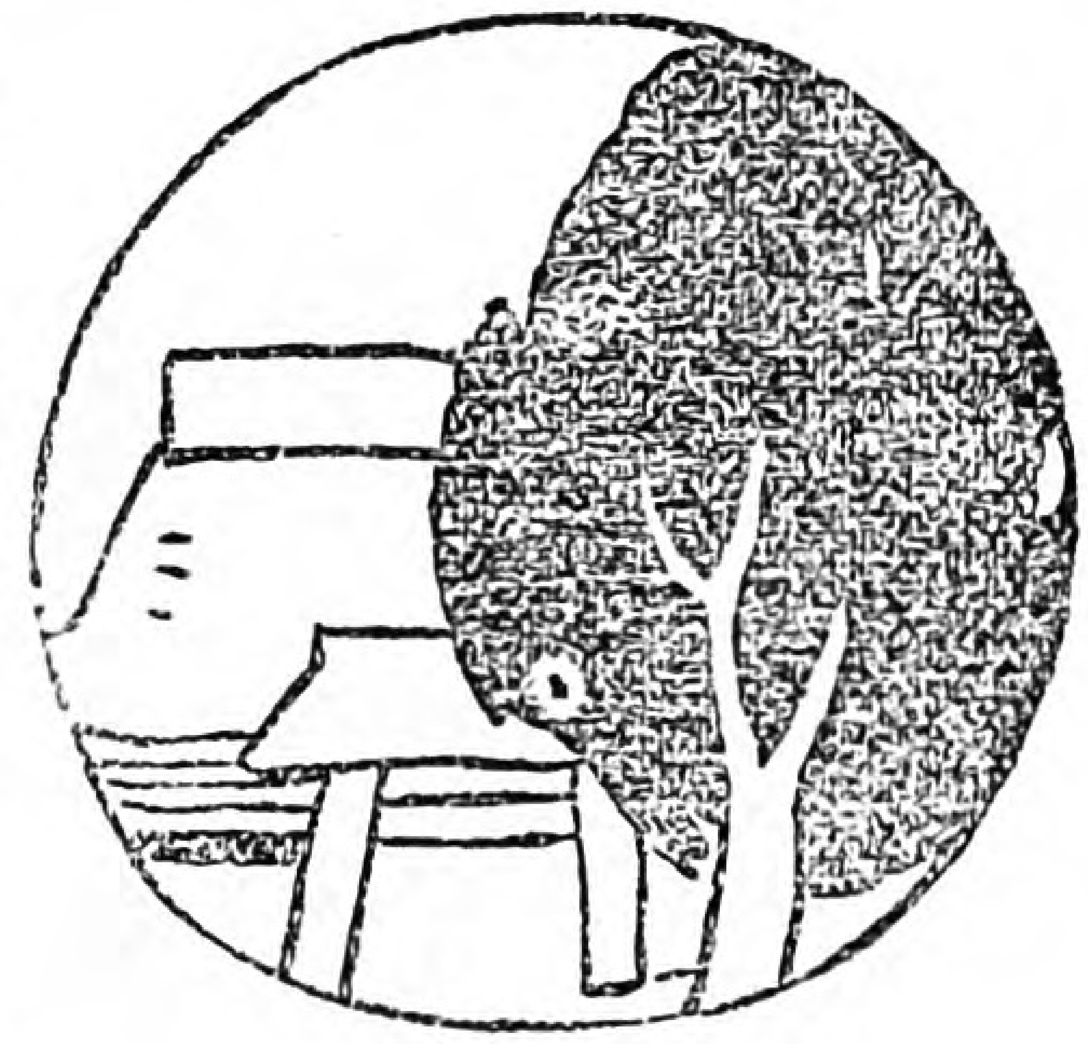




路

青い野の中を、白い道が長く續いた。
母とも、姉とも、乳母とも今は覺えもない、
おぶさつたその女が泣くので、私も悲しくなつて、譯はしらずほろり〳〵と泣いた。
女の肩に頰をよせると、キモノの花模樣が淚の中に開いたり蕾んだりした。白い花片が芝居の雪のやうに青い空へ、チラ〳〵と光つては消えた。
つげのさし櫛が落ちるよと見れば、それは三ヶ月であつた。黑髮のかげなる青い珠は星のやうに輝いた。
また、赤い簪のふさは、一つ一つ草原へ落ちては狐扇の花に化けた。
そうして不思議な少年の夢は、白い路を際しもなく辿るのであつた。





母

二人の少年が泊つた家は、隣村に名だたる豪家であつた。大きな柊の木が門のわきに立つてあつた。

杜や障子の骨の黒ずんだ廣い座敷へ通された。

『健作の母でございます。學校では常住もう健作がお世話になりまするとてね』と言はれた時、私は譯もなく悲しくなつた。眉の青い、齒を黒く染めた人で髪は切りさげてあつた。縁側のところで南天の實を見てゐた時、小母さんは、後から私の肩を抱くやうにして。

『濱路さんは、なんぼにおなりやんしたえ』ときかれた。十二だとお答へすると、

『まあ』と言つて涙ぐまれた。

千代紙や江戸繪をお土産にもらつて、二人は村へ歸つた。

祭りの日が暮れて、友達の家へ泊つた一分始終を祖母に話した。けれど、『涙ぐんでと』だけは何故か話したくなかつた。祖母は眼を瞠つて、その方は父の最初の『つれあひ』だつたと驚かれた。

少年の小さい胸には大きな黒い塊がおかれた。嫉しさに似て嬉しく、悲しさに似て懐しい物思を覺えそめたのであつた。

人のゐない物陰にかくれて、あんな懐しい人を母と呼んで見たいといふことを、そつと心に思つて見た。けれど、あの人が今日まで父の連添であつたとしても、その兒に生れるたが果して私であつたらうか、少年の疑ひは永くつゞいた。

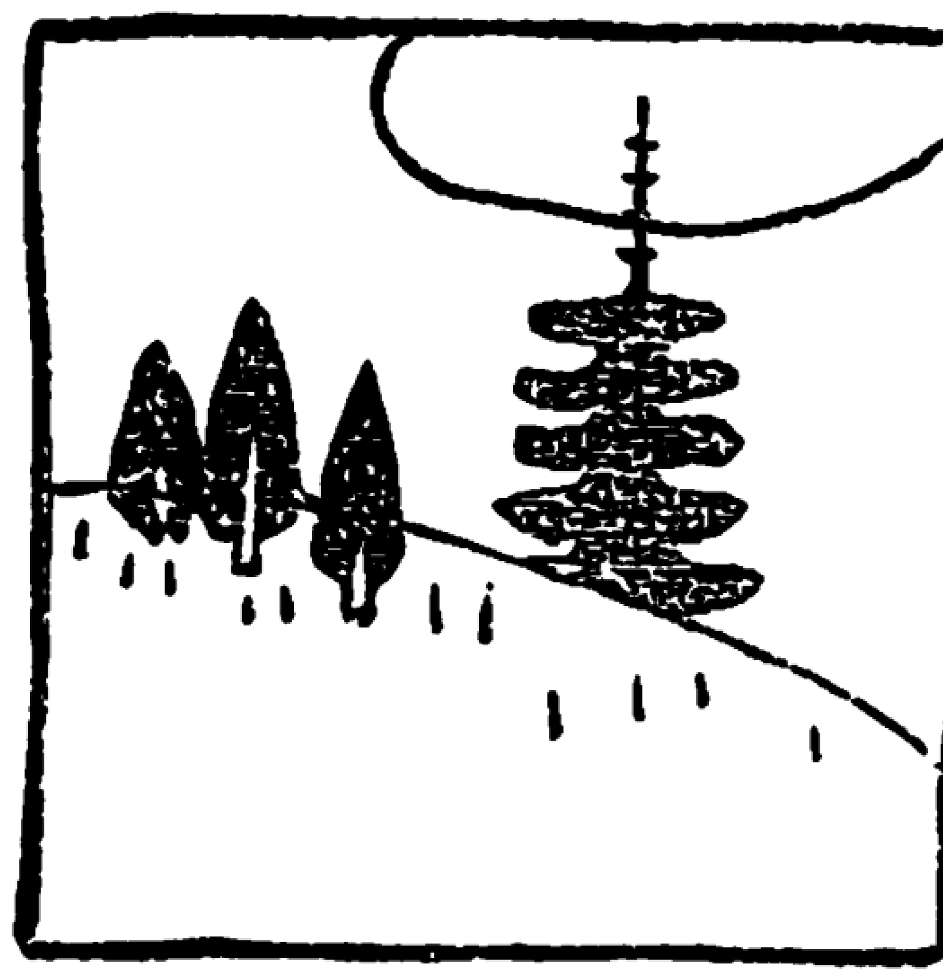


『……大阪を立退いて、私が姿眼にたてば借行輿に日を送り……』

口三味線の淨瑠璃に、五十三次の繪双六を投げだして、庭の障子を細目にあけると、そこはまだ見ぬ世界であつた。

四十許りの男、頭には淺黄の頭巾を被り、

傀儡師



墨染のキモノに脚絆、甲掛。その眼は、遠い國の藍い海を思はせる樣に輝いた。棒の先には、鎧を着た武士や、赤い振袖を着た女房が、だらりと死んだやうに手をたれてゐた。男は淨瑠璃に合せ、情の移つた身振をして人形を遣つた。赤い襠を着た人形は、白い手拭の下に黒い眼を見ひらいて、遠く來た旅を思ひやる樣に顔をふりあげた。

『……奈良の旅籠や三輪の茶屋……五日三日夜を明かし……』と指を折り『……二十日あまりに四十兩、つかひ果して二歩殘る、金より大事の忠兵衛樣……』と言つて、忠兵衛を見やつたガラスの眼には泪があるかと思はれた。『……科人にしたも私から、嘸憎かろう、お腹も立たう……』思ひ迫つた梅川は、袖を抱いてよろ〱よろと、私の方へよろめいて來たので、私は怖くなつて、泣きながら奥へ走つた。





歌麿の女

『……お庭のまへの龜岡に
　君をはじめて見る時は
　千代も經ぬべき心地して』

美迦野さんは、炬燵布團の綴絲を、まるい白い指で彈きながら、離室の琴歌に聲を合せた。

『あたし「越後獅子」あげたらてんどは「春雨」だわ。好いわね。はるさめ…………』

『さ、一がさいた』『二がさいた』
『三がさいた』　『四がさいた』
『五がさいた』　『六がさいた』
『七がさいた』
『蜂が刺いたブンぐブン……』
『いや！美迦野さんはあんまり、ひどくつねるんだもの』
『いたかつて？ごめんちやい』

春の波かや、しんなりと、なだれかゝつた肩越しに、赤くなつた私の手は、熱い唇に吸はれてゐた。布團を眼深に被つた少年は、その臆病な身と心とを、波の誘ふにまかせた。

屏風の影なる『歌麿の女』よ。おまへは『はづかしさ』といふことを、私に敎へてくれた最初の女だつた。



耳袋（一）

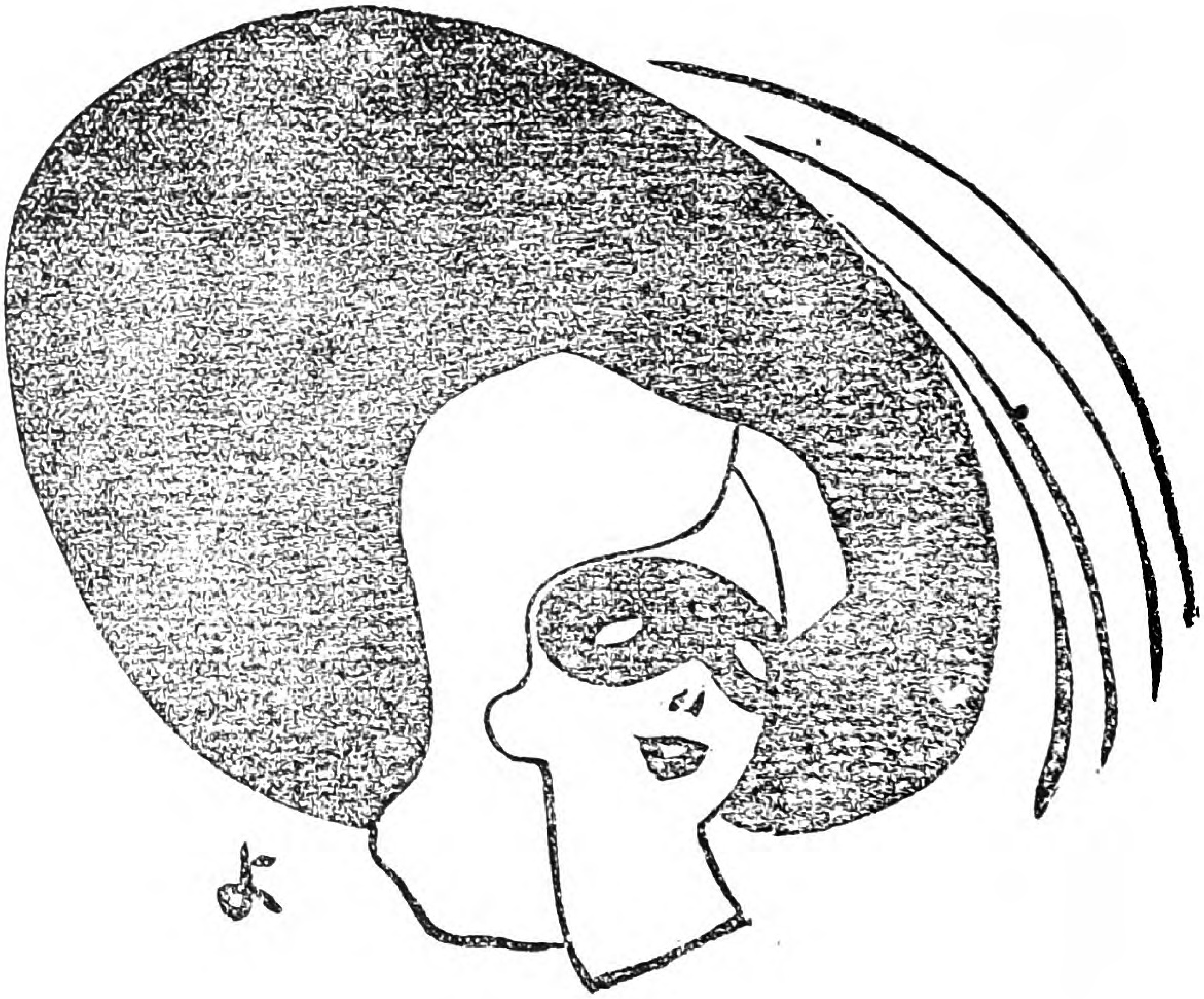
猿丸太夫

▲回敎のコーランは、男女を問はず、斷じて獨棲を許さず、男が獨でベットに入れば天叫び地怒ると敎へてある。そのくせ土耳其では男女三歲半にして席を同うせず、湯屋は無論、電車も嚴重な仕切がある、日本といふ國の溫泉場の「男女並ぶや秋の唐錦といふ、美しさは見られないしかし土耳其の女は妻、妾いづれにしても、能く入浴するさうだ。▲お轉婆の開山本荘幽蘭女史の處世秘訣といふに曰く、一に愛嬌二に鐵面皮三に氣轉これはあんまり秘訣でもあるまじ。▲先ごろ辭職せし大阪府知事高崎親章氏、夕陽岳高等女學校に臨みて滅法な演説をしたことがある曰く、「女子は畢竟男子の翫弄物にして」物議囂々として起つたが、坪井學校よりは運が好かつたと見えて別に懲戒處分も喰はずに濟んだらしい。▲佛蘭西に二人の畫工があつた、甲は金持だつたが乙は貧乏で繪具とては黑と白との二種しか持つてゐなかつた。一日甲が乙に訪ねるとあをい顔をしながら丁度描いてゐる所で、カンバスには不思議な色が使つてある、君この色はどうして出したのだと訊くと乙は、微笑したまゝ沈默して、（原文うなだれて）描き續けた。明くる日も蒼い顔して描き續けた。描き了へた夕まづしき美術家は世を去つた、左の胸に疵があつた。色は血だつたのである。▲岡山藝者小岸「自分は年齡二十三に達し既に結婚の機熟し候、今や良縁に接し人生の要義逸すべからず茲に愈々婚姻を決心し」との廢業屆を出した。醜業婦すら然り、況んや我結婚せんが爲に世に在るきみ達。▲獨逸人が封筒に貼る切手の貼り具合で受取人に意志を通ずるといふことは早く何かで見たが、巴里では封じ目に溶かす蠟の色で感情を示す風がある。戀人からの手紙に薔薇色の封蠟があれば「依然あなたが戀しい」といふ事。灰色だと「ちつと倦いてよ、顔が見たい程ではないの」綠は「賴む」鮮明な紺色は「うんよし〳〵」。若しそれ最初に戀を挑む時の封蠟はといへば巴里も日本にかぶれたと見えてやつぱり菫である「お情は身に沁みて難有いがまあお茶でもめし上れ」といふには焦茶色を使ふ

との事これだけは、鐵砲を書いてやればいゝに。▲「われと其許は五つと七つ、十二違ひの年かけて耻かしや」ましてこれは二十八ちがひ—四十一の女と十三の男とである、日本情史の一片影としては上も無き好材料なれど二人は耻かしからう、楠目昌子は憂き名を『萬朝』に流せし後日暮里を退くとて、井口二郎と相抱いて泣きに泣いた。それを隙見した同級生が二郎を責めると二郎は只すまないことをしたと詫るばかりだつた。かたびらこそ重ねざれ、元祿の槍の權三はまだ荒川の岸に生れたのであらう。▲ながらへばまた峰さはに迷うらん消てはれなん野邊の白露」の辭世を殘し愛妓を斬つて死んだ男が水戸に在る、女は十五、抱くと折れさうなきしやな體格を持つてゐた。それまでは寂しかつた待合が、少年少女の美しき死にあとを見んが爲に押かける客が多くなつたが、抵當流れに家屋所有權の移れる銀行では持て餘してゐる。昆山の歸世善が妻、亡夫を慕ひて自刎ねようとしたが、姑に留められ、號哭日を累るので、其處は支那人だけにそれほど死にたくばと聽されたらしい。曰く、我女流、死即殯、不可露尸、と母と相對して葬の衣を縫ひ了り、且殯を治め、棺を市ひ、尋浴、更衣、出拜舅姑、是夜徑於床

「喉間聲如鋸」とあるから、死ぬ時は苦しかつたらう。近松門左衛門の心中はどれもこれも酷たらしく殺してある。「女も同じ道筋に引かれ粟田口の露草とはなりぬ九月二十二日の曙の夢さら〳〵最後いやしからず今も淺黄の小袖の面影見るやうに名は殘りし」と書いた西鶴はうれしい。▲關東べいは春先になると田螺を拾つて煮て喰べるが、お才の話には越後つぽーは喰べない。蜆も喰べないと見えてずつと前、村の丑造が家へ働きに來た越後者があつた。蜆汁を煮た晩一杯與つて、あとを又與らうとしたら、もう澤山だといふ。汁と納豆を大牢の味とする百姓にさりとは不思議だと思つて顔を見ると涙がぽろ〳〵落ちる。椀の中はあらまし空いてるが蜆の殼は見えない、先生殼ごと喰べたのだ。いかさまこれは一杯で御免を蒙る筈だ。▲アルゼンチンでは丁年の男子は必結婚の義務有り。三十歳にして結婚せざる者は年六十弗の税を納れざるべからず。二十五歳にしてなほ獨身なれば百二十弗四十歳より五十歳の者は二百四十弗、さらに七十五歳までは四百三十弗。七十五歳以上に至れば降りてたゞの九弗となり八十に達して初めて免税の恩典に浴するを得。これは原のまゝ書いてはおくが事實は保證しない。こんな無

法な法律が今の世に有りとすれば、四十萬人の降卒を坑にした王様などは、餘程聖人だ。そして女の獨身はどうするのだ、なんぼアメリカだつて馬鹿にしてる。▲さき頃山梨縣女學校の先生が轉勤になつて告別演説をやつたら生徒が聲を揃へて泣き出した、それを舍監が虚僞の涙はお廢なさいと言つたとかで一同ふくれて了ひ、次の日不貞寢をやつた事が『朝日』にある。涙は女のたしなみ、武器兼裝飾品だと敎ふると共に、先生を送る時はプラットホームにブラリと立つて、汽笛一聲車がうごき出すと一度にワッと泣き出してばらばら跡を追ふやうにとをしへてゐるのださうだ。某女學校に居たBといふ男などは悲壯極まる告別辭を並べてやつたら感激の結果一人一人縋りついて固き抱擁を以て報いてくれたと嬉しがつてゐた。▲決鬪しようとする二人が二人共醜男の天邊切であつた。一人が相手の顔をつく〴〵と見つめてゐたが、やがて「僕は君とは鬪はないよ」と言ひ出して劍を鞘に納めた。「どうして……こりやどうしたことだ」と相手を詰ると「僕は君とぢやいやだといふのだ」「何だと、君は僕を侮辱するのか」「僕がもし君を侮辱したならそれはあやまるがね、決鬪を止めたのは理由が有るのだ」「それを聞からぢやないか」「まあからうさ、鬪りさへすりや僕は屹度君を殺すが君が死んで了ふとフランスでは僕が一番のぶをとこになるからなア」相手はをかしくて失笑さずには居られなかつた。とうとう二人は祝杯を擧げて佛蘭西の爲に大いに呑んだくれた。▲伊那の某が子供に乳をしやぶらせ〳〵したら乳が出るやうになつたと珍らしさうに書いたのがある。醫書にはいくらも例が有る、子供をほしい〳〵と思ふ女が時とすると妊娠の徵候を感じ違和を覺えることのあるのと同じである。子供の時は女なのが何日の間にか男に化つたのなども昔は一大事變と信じられたと見えて『史記』にすら出てゐる。男子にも乳房と子宮の有るを考へたら眼を瞠るにも及ぶまい。▲札幌病院の窓より飛下りて死したる拓殖銀行員某の死因は哀れむべきものなりき。其兄は白痴に近いのだ、寢ても覺めてもお新ちやんでなけりや納らず弟の言ふことは聞かぬばかりお新ちやんには懷いて、赤子の母を慕ふが如くその傍を離れず、外へ出れば外へ、室に在れば室に、始終影のやうに附いて歩く、お新といふは弟嫁なのだ。雪の夜雨の朝夫婦はしめやかに語らひたくても其兄を避ける機會は殆ど無いのだ。其爲に弟は發狂して自殺した。



正宗白鳥氏作　『平和』

中村吉藏氏作　脚本『同窓會』

田村俊子氏作　『紫いろの唇』

森鷗外氏譯　『驅落』



平和

正宗白鳥

（一）

倉田武造は若い雇人を一人連れて、夜汽車で上京した。毎年この十一月には春の仕入れに出て來るのだが、今年は商用の外にも大切な用事があつた。この春ふとしたことから牛込へ片付けた、末娘のお梅に會つて、その後の樣子を聞きたかつた。

「無事に暮し居候」と云ふお梅の手紙は、毎月見てゐるし、四谷の妹からも「兎に角折合つてゐるらしい」と知らせて來たが、まだ安心出來ぬことが幾つもあつた。娘の婿についてはいろ〳〵好ましくない噂が耳に入つてゐた。この夏仲人夫婦が田舍へ避暑に來た時にも話の端々に、思つた程生活の氣樂でなさゝうなことを微めかしてゐた。

「兎に角自分で會つて見なけりや、確なことは分らない」と、汽車の中でゝも幾度もそう思つた。

新宿で汽車を下りると、休息もしないで、日本橋から淺草へ掛けて、取引先を廻つた。「以前は電車がなかつたから、歩くだけでも大變だつたが、今は便利になつた。居睡をしてる中に彼處から此處まで來たが、これで歩いてたら一時間の餘もかゝるだらう」と、雇人を勵すやうに云つて、一日の間に商用を濟ませた。そして、日暮方に一先づ四谷の妹の家へ寄つて、風呂へ入つて疲れた足を



伸した。例年になく氣忙しく、何處へも無駄な道寄りしないで、廻れるだけ廻つたが、さてこれからどうしよう？。遲くなつて牛込へ行くのも迷惑を掛けるやうで、氣臆れがされる。

「お前は折角東京へ來たんだから、明日は一日何處でも見たいと思ふ所へ遊びに行つたらいゝだらう」と、雇人に向つて云つた。

「海は此處から餘程遠いんでせうか」と、雇人は突如に訊いた。

「海かへ。海の側へ行きたいんなら、電車に乘れば直ぐ行かれるが、そしてどうするんだい」

「いえ只海を見たいんです。一度も見たことがありませんから」

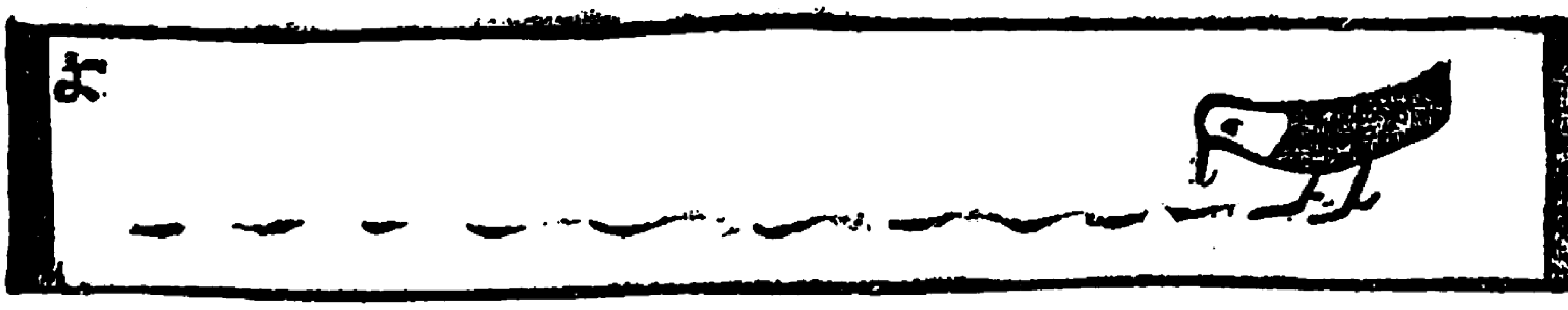
「成程。お前は海を知らん譯だ」と、武造は今氣付いたやうに首付いて、「その歲で海を知らんのも肩身が狹いと云ふものだ。見といで〳〵。土產話にならあ」と笑つた。

雇人は「はい」と畏つた返事をした。

其處へ夕餐の膳が出て、妹は側へ來て給仕しながら、暫振りの話に耽つてゐたが、話は何時か牛込の江馬の家の事のみとなつた。

武造は「ウン〳〵」と應へながら、妹の話に耳を留めてゐたが、「兎に角時々は樣子を見に行つて呉れなくちやいかんよ。もう半年を過ぎてるから、落着くことは落着いたんだらうがね。……しかしお梅は辛抱強い方だから、腹に思つてゝも云はないことがあるんだらうと思ふよ」と、何かしら物足らぬらしかつた。

「さう心配しなくつてもいゝんですよ」と、妹は萬事呑込んでゐるやうに云つて、「あれは九月の末だつたか知ら……何でも冷しくなつてから、一日だけ不思議に暑かつた日に、江馬が一人で不意に



やつて來ましたよ。顏付が面白くないから、何か變つたことでも出來たのかと一寸氣になつたんですが、さうでもなかつたの。……今の家は周圍が騷々しいから、此方の方に靜かな所があつたら、年内に越したいなんて云つてましたが、どうするのか知ら」

「一體幾ら位の收入があるんだらう。お前には分りさうなものだが」

「さうねえ」妹は當推量をしてゐて、大略な金高を數上げて、「お梅も些とも知つてゐないやうなんですよ。そして、何時だつたかお小使ひが足らないなんて零してましたつけ。江馬も時々は戸外で無駄使ひをするんでせうよ」

「どうも」と、武造は一寸考へて、「結婚してからも獨身同樣な氣持でゐちや家のためによくない。今の間は誰れか傍から氣を付ける者がある方がいゝんだが」と、妹の顏をぢつと見た。

「だけど、傍からあまり差出口を利くのもよくないですからね。それに他人の忠告など聞きさうぢやありませんよ。あの人は」、妹はさう云ひながら、ふと思出して微笑して、「でも、江馬は先日から云つてたんですの。僕はこれまで親の云ふ事だつて滅多に素直に聞いたことはなかつたけど、女房の云ふ事は聞いてやりたくなるつて、さう云つて自分でも笑つてるんですよ」

武造も聲を出して愉快さうに笑つた。「今夜行つても邪魔だらうから、明日の朝一寸寄つて來ることにしやう。淺賀町の主人が歌舞伎座へ案内したいと云つてたから、都合で正午からその方へ廻つて見てもいゝ」

話してゐる中にから極りをつけて、早くから寢床に就いた。



（二）

翌日武造は雇人と一緒に家を出た。四谷見附まで來ると、品川への道筋を敎へてやつて、「飽きるだけ海を見て來い。そして何處へでも行つて、食べたい物があれば食べるし、見たい物があれば見るがいゝ。芝居を見たけりや、お臺から歌舞伎座へ來て追込みへ入つてゐなさい。おれも多分見に行つてるから」と云つて別れて、自分は牛込へ向つた。一度通つたきりのうろ覺えの道を、思出し思ひ出して榎町まで來た。

江馬の家の格子戸を開けて、其處に靠せかけてゐる女下駄を見ながら、聲を掛けると、見覺えの目の惡い下女が出て來て、「何方樣です」と顏を見ながら訊いた。

「倉田です」と嚴しく答へると、お梅がその聲を聞付けて、奥から驅けて來て、微笑しながら手を突いた。導かれて奥へ入つて行つたが、お梅の背丈の著るしく伸びたのが先づ目に着いた。簞笥や鏡臺の置かれた部屋へ通されて、座につくと、

「まあ御機嫌よう」と、娘に向つて輕く挨拶した。そして、直ぐに「御主人は」と稍聲を低くして訊いた。

「居ますの」と、お梅は主人の部屋の襖を少し開けて、改まつてそれと知らせた。主人は「どうぞ此方へ」と晴々しく聲をかけて、急いで四邊を片付けて坐り直した。武造は襖の間から入つて來て、火鉢を隔てゝ畏まつて坐つた。

「此處は日當りがよくて温かいですな。それに大變靜かだ。東京もこの邊になると、田舍と少しも

異りはありませんね」と、左右を見廻した。古い本箱に小い机、本箱の側には薄い碁盤を据ゑてゐる。八疊の部屋の中には金目のありさうな物は一つもなかつた。廣い床の間に狹い掛物が不格好に垂れてゐるばかりで、外に何一つ裝飾品とては見えなかつた。

「相變らずお忙しいんでせうね」と、視線を元へ戻して訊いた。

「いえ、さうでもないんです」と、主人は輕く答へて、「お店の用事でお出でになつたんですか」と訊いた。

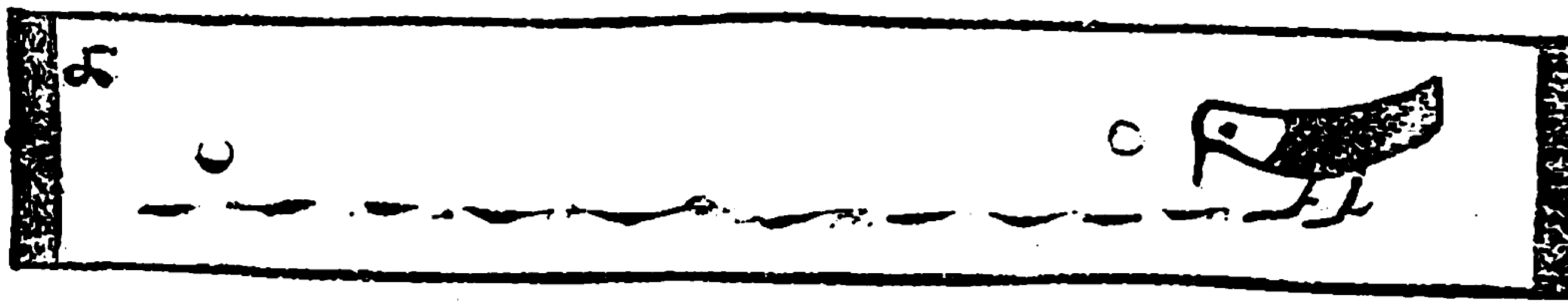
「なに、用事つて程でもないんですがね。今は便利になつて、わざ／＼自分で來なくつても用は足りるんだが、まあ小僧に東京見物させる位の氣でやつて來たんです。この頃は世が變つて主人の方から雇人の御機嫌を取るやうにしなくちや、店に居付く者がなくなりさうです」

「さうですかね。よく店の金を誤魔化して、東京へ逃げて來る奴があるやうですね」

「ありますとも。だから私の店でも少し方針を變へて新式にやつて見ようと思つてるんですよ。これまでは十年首尾よく勤めた者には、二百圓賞與をやると云ふ遣方でしたが、そんな氣の長いことぢやこの頃の若い者は承知しませんて。そこでこれからは一年に幾らと極めて、何事も現金で手取早くしようと思つてるんです」

「さうですか。もう田舍の店にでも昔のやうな主從の關係はないでせうね」

「先づないと云つていゝでせうな。此奴は少し見込みがありさうだと思つて目を掛けてやると、そんな奴に限つて落付いちやゐないで、直きに東京なんかへ出たがつて仕方がない。よく新聞に店員募集と云ふ廣告が出ますが、あんなのが非常に誘惑になるやうです。此方へ來たつて、誰れでも成



功するて譯ぢやないんだが」

武造は言葉を強ゐて「どうも困つてしまう。」と歎息した。そこへお梅が茶とお菓子とを持つて來たが、それを前に置いたきり、話の座には加はらないで、直ぐ立つて行つた。主人も引留めやうとはしなかつた。座を崩して煙草ばかり吸つてゐた。煙は部屋を曇らせた。煙草嫌ひの武造は手持無沙汰でもあり、相手の吹く濃い煙に噎びさうにもなつた。

で、彼れは障子を開けて庭の方を見てゐたが、やがて縁側へ出て溫かい日を浴びた。楓は色づきかけてゐる。百日紅は葉を落して裸になつてゐる。下女はその落葉を掃いてゐたが、目を蹙めて此方を見てから、微笑しながら會釋して「先程はお見外れ申しまして失禮致しました。奥樣にはいろいろお世話になりまして」と云ふ。

武造は輕く受應へして座敷へ戻つて、何か話しかけやうとしたが、相應しい話題は見つからなかつた。

「あれは何方のお寫眞でせう」と、ふと本箱の上に立掛けてある小さい金緣の寫眞に目をつけて訊いた。それは或友人が洋行土產として江馬に與へたニーチエの肖像だつた。

「あれですか」と、主人は目を上げて笑ひを含んで「あれは西洋の名高い學者ですよ。發狂して死んだんです」

「ふうん」と、武造は感動して立上つて、寫眞を手に取つて見詰めて、「立派な顔ですな。狂人とは見えない」と云つて、元の位置を崩さぬやうに大事さうに立掛けた。

それから、本箱の前に蹲んで玻璃戶越しに、金字の刻まれた、それ〲に表紙の色の違つた洋書



を見てゐたが、その中に色合も大きさも同じいのが十幾冊と並んでゐるのが目についた。で、それを指差しながら、

「この青い書物は一人の學者の著述らしいですね。續物ですかい。１２と數字で符號がついてる」

と云つた。それは主人の愛讀してゐるモーパッサンの全集だつた。

「それは佛蘭西の名高い小說家の小說です。一人で一生にそれだけ書いたんですが、その人も終ひには發狂したんです」と、主人は何の氣なしに答へた。

「へえ、この人も發狂したんですかい。學者は腦を使ひ過るでそんなことになるんですかね」と、武造は眉を顰めた。本箱にはまだ幾人も狂人が潜んでゐるやうに思はれて不氣味だつた。で、その側を離れて、「著述業も樂な稼業ぢやありませんね。……しかし勉強も適度にやらなくちや」

「えゝ。これで腕一本で東京で生活を立てるとなると、何をしたつて樂ぢやありませんよ。私なんかいつそ田舍で呑氣に暮さうかと思ふこともあります」

主人は自分の故郷の風景を語つて、「どうせ何時かはあんな所へ引込んでしまふんでせう」と云ふ。

「だけど、あまり遠方ぢやありませんか。」武造は自分の國と江馬の國との距離のあまりに遠いのを手頼ながつて、「同じことなら東京に住んでた方が得ぢやありませんか。娯樂は多いし出世は出來るし……私達ももつと若いと、當地へ移りたいんだが」

「しかし、東京で成功してる店は少いさうですね。見掛けは立流でも內輪は苦しいつて云ふとだ」

「さうですとも。大通りの大きな店で、二重抵當になつてるのもあると云ふから驚く　都會でも昔

はさうぢやなかつたが、この頃は一體に前後見ずに借金をするらしいですね。見得を張つて衣食に奢つて、先々のことはあまり考へんらしい」

「考へたつて先のことは當にならんからでせう。僕等の知つてる人は大抵その日暮しその月暮しで明日のことを考へてる人はあまりないやうですよ」

「さうしたものかね」。武造は大な息を吐いて首を傾げて「皆な自分さへよければで、子孫の事なぞどうでもいゝつて云ふ氣になつてるんだね。私達の家ぢや女の子が一人生れると、庭に桐の木を一本植ゑてたものです。嫁入時分にやその木が大くなつて、それで簞笥が一棹出來ると云ふ昔風の考へだつたのです」

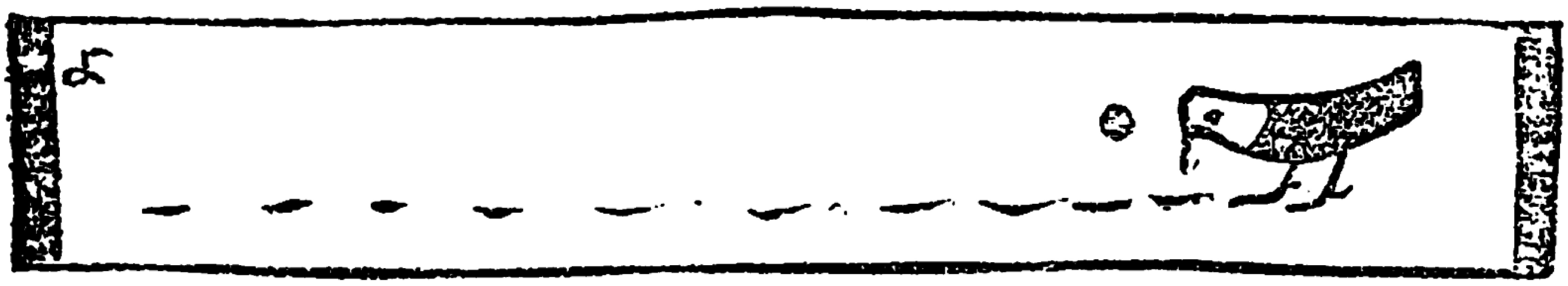
「それは面白い思付ですね。僕も女の子が生れたら早速桐の木を植ゑませう」

二人は暫くこんな話をしてゐた。そして、江馬夫婦のこの頃の生活の有樣については、主人も話さうとはせず、客も立入つて訊くのを憚つた。暫くすると、お梅は紅茶を容れて來て、父の顔を見ながら、

「今夜は此家へお泊りになるんですか」と、懷つこさうに訊いた。

「さあ」と、武造は一寸考へて、「今日は正午から外へ行く約束をしてるんだが、夜遲くなるかも知れんから、矢張四谷へ泊て貰ふことにしませう」と、時計を出して見て、「もう十一時からそろそろ出掛けなくちやならない」

お梅は腰を浮せながら、立ちもやらず何か云ひたげに父の顔を見てゐた。主人と客の話も止切れて、座敷には一寸聲が絶えた。臺所から下女の米を磨ぐ音が聞えた。



「まあ今夜は此方へお泊んなさい。幾ら遲くつたつて構ひませんから」と、主人は口を出した。
「ぢや御厄介になるかな……實は歌舞伎座へ誘はれてるんです」
武造は微笑しながらさう云つた。そして、今夜此處へ泊るのなら、今愚圖々々してゐる必要はないし、芝居を一幕でも多く觀たいやうな氣もするので、午餐の準備を斷つて出掛けた。

（三）

淺賀町の問屋の主人に連れられて、改築の歌舞伎座の棧敷に入つた時は、最早や序幕が濟んでゐた。武造は檜造りの新しい天井から手をつくした右左の構造を注意して、改築前を思出してゐた。見物は三階から二階土間と溢れるばかりであつた。問屋の主人も「大變な入ですな」と云ひながら場内を見廻してゐたが、ふと、向ひの二階棧敷の中程を指差して、「御覽なさい」と敎へた。
「彼處にハイカラに結つて目鏡を掛けた女がゐますね。あれが有名な村山の娘ですよ。その隣の顔の長く色の白い男が娘の婿でせう。百萬圓の養子だつて盛に新聞に書かれたのがあれですせ」
「成程」と、武造は暫くその方を見詰めて居た。ヲペラグラスを持つて、男は此方を見ながら、女と睦じさうに何か話してゐる。女中らしい女が二三人後にゐて、何か云つては笑つてゐる。
やがて、幕が開いてからも、彼れは時々目を二階棧敷へ向けてゐた。そして、一番目が終つて電氣が眩く照つて、見物の興の湧く時分にもさして面白く感じなかつた。まだ汽車の通じない頃には年に幾度も商用で出掛けて來たが、その度に足休めに假託けて、評判の芝居を大抵覗いて見た。團菊や先代の芝翫や家橘の藝は身に染み〴〵と味つてゐる。暫く見ない間に役者の顔も大分變つてる



ゐが、演ることも餘程異つて來た。どうも見應へがしない。羽左衞門の「盛綱」が薄手で、左程思慮の深い名將とは受取れない。

「しかし、小屋や舞臺は綺麗になつたものだ」と、その方を連れに向つて褒めた。

そして、幕間には三階やら二階やらに目をつけて、若しや知人が來てはゐないかと搜廻つたが、何處にも見當らなかつた。

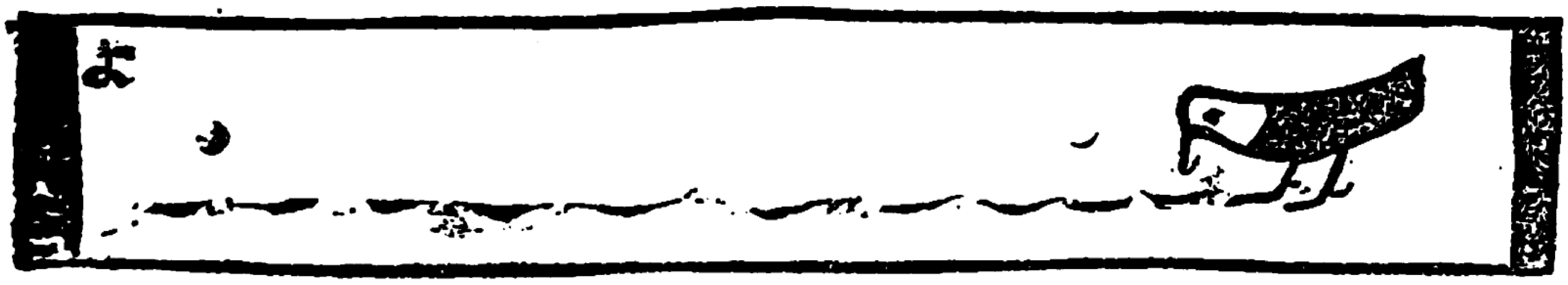
「改名披露」に「道成寺」。歌右衞門の口上には、彼れも連れの男と一緒に、手を拍つて祝つてやつた。最負の役者でもないが、古名優の名跡を繼いで、新に出世するのは、他人事でも嬉しかつた。所作事では忠臣義士を寫した時代物ほどに、彼れの心は動されなかつたが、目に映る美しい舞臺は女子供に見させたらと思はれた。

「こんな奇麗な道成寺は珍らしいんですよ」と、連れの男も褒めてゐた。

が、その幕が下りると、武造は時計を見て、「あまり遲くならぬ間にと、一人戶外へ出た。後の幕を見ないのが殘り惜くはなかつた。

（四）

俥を急がせて、江馬の家へ歸つたが、今度は玄關へ上ると、直ぐに茶の間へ通つた。茶の間ではお梅と下女とが、明るい置ランプを眞中に置いて針仕事をしてゐた。彼れは羽織を脫いで寬く坐つて、長火鉢に手を翳した。そして、二人が其處等を片付けやうとするのを押止めて、自分で茶を入れて飮みながら、二人の指先の動くのを微笑々々しながら見てゐた。



「寒くなり出したで、冬物の仕度をしなくちやならんね」と、下女に向つて云ふと、下女はイヒ、と尖つた笑聲を出して、

「襤褸でも綴くり合しとかなくちや」と云ながら、悪い目で針眼を透かして見た。が、絲は幾度も穴を外れた。それをお梅は見兼ねて、「私が通して上げよう」と、手を出したが、下女は剛情に斷つた。

武造はこの茶の間にかうしてゐるのが、何となしに快かつた。微笑は絶えず顔に溢れてゐた。ふと氣付いて、紙に包んで袂に入れてゐた芝居の菓子を取出して、二人の前に置いた。

そこへ主人が手荒く襖を開けて入つて來て、眠さうな顔をして眞向ひに坐つて、「大變早かつたですね、芝居はどうでした？」と訊いた。

「さう。隨分立派ですね。役者も今の選拔なんでせう。大芝居は大芝居だが、しかし、どうも昔の方がよかつたやうに思はれるね。私がまだ二十歳以前だつたが、確か新富座で宗十郎の盛綱を見たことがありましたよ。どうもあの時の方がよかつたやうだ」武造はうろ覺えの昔を思出しながら答へた。

「しかし、今度の歌舞伎座だけは私も見たいんですよ。改築して非常に綺麗になつたやうですね。暇が出來たら一度見たいものだが、場代は隨分高いやうですね」

「おや、今日御一緒に行けばよかつた」と、武造は遠慮して誘はなかつたのを悔いた。

「なに、何時でもいゝです」と云つて、主人は客に芝居話を促して、暫く耳を傾けてゐた。自分の觀たこれまでの芝居の樣をも話した。今度の歌右衛門が福助から芝翫になつた時の改名披露を見た



が、その時は團菊二人が左右に控へてゐた。「その時の新聞にこんな事が出てゐましたよ。菊五郎が口上に出る前に。合鏡をして、頰に白髪を拔いてると、側で見てた者が冷かして、そんなにいゝちつてると、頭に毛が一本もなくなるよと云つたさうですよ。あの時團十郎も菊五郎も頭が禿げてピカ〳〵光つてた。」

主人がその話をして笑ふと、武造もお梅も笑つた。芝居話から移つて食物の話。瓦斯を引くとしての便不便などを話したりして、十時が打つまで茶の間は珍しく賑つた。下女はそれを不思議さうな目をして見てゐた。

（五）

やがて、武造は中の間に敷かれた寢床へ入つた。主人はまだ寢もやらず、机の側で茫然して、客の心安げな寢息を耳に留めてゐた。お梅は自分の部屋は客に取られ、茶の間は下女の寢間になつてゐるので、詮方なく主人の部屋へ入つた、燈光の届く所で首俯いて新聞を讀んでゐた。周圍は寢靜まつて寂としてゐる。主人は暫く默つてその方を見てゐたが、やがて、

「明日は親爺によく話して安心させるといゝね」と云つた。

「何をです」と、お梅は顔を上げて目を見開いた。

「何でも氣休めを云つとけばいゝんだよ。お前の口から出れば、親爺は安心するんだから。傍で何と云つたつて構やあしない。お前が面白く暮してると云つとけばいゝんだ。何しろ結婚後初めて來たんだから、幾らも訊きたいことがあるに極つてるよ」



「私、父に何を訊かれたつて、心配さすやうなことは申しません」から云つたお梅の聲には力があつた。

「兎に角明日は親爺を見送りがてら、四谷へでも行つといで」と、主人は氣輕に云つたが、お梅は氣乘のせぬらしく、

「だけど、四谷へ行くと、また色んなことを叔母に云はれるから」と、獨言のやうに呟いて首垂れた。

この頃はそれ程でなくなつたが、結婚當座は、それはいろ〳〵の事を叔母に訊かれたり聞かされたりした。顏を赤くするやうな事をも眞面目な調子で云はれた。朝起きてから一日中妻として爲すべきことを、折に觸れて細に敎へられた。で、一々敎へられた通りにしやうとしたが、相手の夫がそれを受けて呉れぬので、折角の心盡しが何の甲斐もなくて亂されてしまつた。十時頃にもなつたら戶締りをして、お茶でも入れて行つて、夫の一日の勉强を慰めるやうな口を利きなさいと云はれたが、相手が機嫌よく調子を合せて呉れなければ接穗がない。第一十時頃に家にゐないことさへ多いんだものを。……今夜のやうに一つランプの下で物を讀んだり話をしたりすることは珍しい。

「來年の春にはおれの兩親が東京へ來るんださうだぜ。先日さう云つて來た」と、何か考へてゐた主人は突然に云つた。

「あら」と、お梅は驚いた。

「別に驚くこともないぢやないか」主人は微笑しながら、「おれの母親は近所へ出掛けるのさへ大儀がるんだが、それがわざ〳〵東京まで來ようと云ふんだから、よく〳〵の思ひだよ。餘程お前の顏

よ

が見たいんだね」

するとお梅は顔を和げて、「私も一度お郷里のお母さんにお目に掛りたい。暫くお手紙を差上ないから、怒つてらしやるかも知れない」と云つたが、主人の母から嘗て寄越した情の濃い手紙の文句を思出して、「私お母さんは優い方だと思つてよ」

「さあ？。まあ會つたら分るさ……おれの母もお前と云ふものが此家へ來たゞけで安心して、身體も少しよくなつたつて」

「何故？」お梅は口元に笑ひを浮べてゐたが、やがて、「夫婦つてこれまでのやうにしてゝ一生暮すんでせうか」

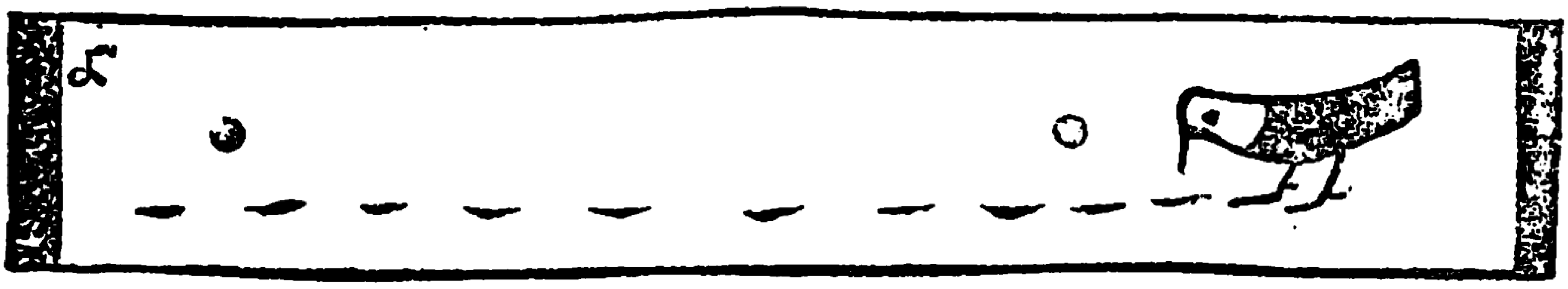
「これまでのやうにつて何が」

「…………」

お梅は明らかに言出すことは出來なかつた。結婚當座の心の動搖が稍靜まつて、周圍が明らかに目に映り出してから、いろ〳〵の疑惑が芽を吹いてゐて、それを今夜のやうな場合に明樣に云つて見ようと思つたが、言現はすべき相應しい言葉が見付からなかつた。で、

「私、娘の時分に習つたことを忘れさうな氣がしてよ。忘れるくらゐなら習はなければよかつた」と話を外した。

「それは忘れたつて仕方がないさ。その代り今に新しい樂みが出來て來るだらう」と云つて、主人は前の話に戻つて、「親爺も來年此方へ來る時分には、家の事もちやんと極めて、おれに分けて呉れる財産も大略極めるんださうだよ。矢張お前と云ふ者が出來ると、親爺も捨てゝ置けもしないんだ



ね」

「私だつて、父からもつと私の分を貰つたつていゝと思つてよ。結婚の時分どつさりお金がかゝつたけど、それでも故郷の身代を兄妹五人に分るとすると、私の分は幾らにも當つてゐないの」

「だが、そんな財産を貰つたら、お前どうするつもりなんだい。ブラ〱遊んで歩くつもりなんかい」

「あら。私遊んでゐたくはないのよ。だけど、お金が足らなくなると心細いやうな氣がしてよ」

「それはさうさ。お前はまだ經驗がないけれど、おれなぞは何年間も心細い經驗をして來たんだぜ」

主人はさう云ひながら欠伸をして「お前は明日早く起きなくちやならんから、先へお休みよ」

「私、今夜は眠くないの」

「でも眠さうな目をしてるぜ、おれはこれから手紙を二三本書くんだ」と、主人は向直つて、机の上に巻紙を廣げた。

お梅は寢もやらず、隣の父の鼾を聞きながら、ジッとしてゐた。見ぬやうにして手紙の方をも見た。

（六）

翌日主人の起きた時分には、武造は食事を終つて火鉢に寄かゝつて、お梅のいそ〱立働いてゐるのを默つて見てゐた。

「今日もいゝ天氣ですね」と、主人は縁側から澄んだ空を見上げながら云つて、茶の間を横切つて



顔を洗ひに湯殿へ行つた。
「ぢや、おれはそろ〳〵出掛けようか」と、武造は中の間へ行つて羽織を着て足袋を穿いた。
「まあ、待つて下さい。私も其處まで一緒に行きますから」と、お梅は慌て云つた。
「御主人に伺つたのかい」
「えゝいゝんですよ」
お梅は身仕度に取掛つた。仕舞込んであるお召のコートをも引出して着た。鏡に向つて顔をつくつて、指環をも嵌めた。仕度が整ふと、主人に向つて小聲で、
「四谷へ行つて、それから瓦町の佃煮屋へ行つて、姉の家へやるお土産を買ひたいと思ひますから少し手間取るかも知れませんが」と、豫め言譯した。
そして武造に連られて、家を出て行つた。主人は玄關へ出て、客に向つて田舎の親類への言傳てを頼みながら、見送つたが、お梅の姿が不斷になく美しく引立つて見えた。自分が一二度連れて出た時よりも見榮がするやうだつた。
武造は門を出ると、一度振返つて江馬の家を見詰めて、「此頃は些とは落着いたかね」と訊いた。
「えゝ」と、お梅は曖昧に云つた。
「まあ一二年辛抱する間にや、主人の氣風もよく分るし、家の切廻しに馴れて上手になつて來るだらう」武造はかう云つて、目を娘の方へ移して、「時々は何處かへ一緒に出掛けるのかい」
「いゝえ些とも。四谷へ二三度行つた位ですわ」
お梅は足早に歩いた。秋の日は懐しく照つてゐる。目の先が遠く廣く見えた。神樂坂の電車へ出



ると、そのまゝ四谷などへ行きたくはなかつた。が、大人しく電車に乘つて四谷見附で下ると、父はふと思出したやうに、

「東京の芝居はまだ一度も見ないんだね」と訊いた。

「えゝ見たことはありませんわ。芝居なんか見たくはないんですの」

「芝居なんか見なくつても濟むものだ」

さう云ひながら、武造は昨日の芝居の樣子を思出して、「だけど、話の種に一度ぐらゐ見とくのも損にやなるまい。子供でも出來ると、見ようたつて中々見られやしないぜ」と、相手の氣を惹くやうに云つた。

が、お梅は進んで特に芝居をと望みもしなかつた。只何處へでも父と一緒に遊歩いて見たかつた活動寫眞へでも動物園へでも。……

「芝居だとどつさりお金が掛るんでせう。不經濟なことをしちや詰らないから」

そのませた言葉が、父の耳には異樣に響いた。

「そりや不斷不經濟な事をしちやいけないね。生活はどんなのだい」

「主人はどうですか、私、お小使錢に困ることがありますの」

「さうかい」と、武造は眉を顰めて「一體月々の收入と支出とはちやんと極めとかなくつちやよくない。一家を維持して行くにはやりつ放しであつたら、先になつて動きが取れなくなつて來るものだ」と氣遣はしげに云ひかけたが、「當分小使錢の不足ぐらゐおれがどうかしてやつてもいゝが」

「えゝ」お梅は低い聲で云つた。



そして叔母の家へ着くまでには、歌舞伎座行の約束が成立つてゐた。

其家では江馬の家とは違つて、三人の子供が騒いで賑かだつた。雇人は昨日一日遊び暮して、主人の歸るのを待つてゐた。

「海はどうだつた？」と、武造は笑ひながら訊いた。

「面白う御座いました。廣いものですね。船に乘つて遠方まで行たら面白いだらうと思ひました」

雇人は淺草上野と賑かな所を見廻つたが、何處よりも品川から見た海が面白かつたと話した。

「それはよかつた。次手にもう一日遊んどいで、今夜十一時の夜行で歸ることにするから」と、武造は幾らか紙に包んでやつて、まだ雇人の見落してゐる東京の名所の道筋を敎へて、急いで出て行かせた。

お梅は小い從妹と二階へ上つてオルガンを彈いてゐた。

「どんな風です」と、武造に向つて、その妹が訊いた。

「あれで折合つて行くだらう」と、武造は自分の危がつてゐるのを打消すやうに云つて、「學者はおい等のやうな商人とは考へが異ふんだらうな。家風が異ふんだから仕方がない。行つた者もその家家の氣風に從つてやらなくつちやなるまい」

妹は相手のさう云つた心の中が分らなかつたが、「それはさうですとも」と雷同した。

「穩かに收つてさへゐりや滿足しなくちやなるまい。……兎に角今日は一日あれに保養させることにしよう」

武造はお梅を連れて、日比谷公園を一廻してから、歌舞伎座へ行くことゝした。



（七）

昨日村山の養子夫婦のゐた所には、異つた男女が坐つてゐた。左右にゐる着装つた女も皆昨日とは異つてゐた。幕が開いてから閉ぢるまで、武造は立派な鎧武者や、華やかなお姫樣やが出入りして、只目先が變つて舞臺の奇麗になるのを喜こんだ。

お梅は人目を眩がるやうにして見てゐた。そして、父に何を問はれてもあまり口を利かなかつた。生れて初めて觸れた芝居の空氣は只心をわく〳〵させた。娘の時分自分の習ひ覺えた「道成寺」が一列に並んだ華やかな唄手の口から巧に唄はれてゐる。……………



脚本

同窓會

(A.Conversation)

中村吉藏作

登場人物

某女子大學體操教師　江上厚子
外交官補夫人　森田八重子
文學者夫人　宮本組子
教育家夫人　新井蝶子
實業家夫人　爲口安子
マスターオブ、アーツ　荒川透
老婢

時　現代

場所　江上厚子宅應接室

○

舞臺、質素な西洋應接室、正面上手は、四枚のガラス障子を入れたる見晴らしの窓そこから低い垣越しに、テニスの運動場の一部が見え、午後の日光を受けた大學の建物の半面が森影にのぞいてゐる、下手寄に、庖厨へ通ふ戸、隅には器具棚が置いてある、舞臺上手にはピアノ、書物棚、下手には戸口、壁には大小の扁額が二三枚、舞臺の中央にはサラサ形の布をかけた横に長い卓が五三脚の椅子と、肱掛椅子とに圍まれてゐる。床は板の間の上に狹く毛氈を敷いて主人の瀟洒した様

手堅い氣風とが見えてゐる。カーテンが上ると、戸口の鈴がしきりと鳴る、老婢、庖廚の口から踉蹌を斜めに横切つて取次にで て、やがて外交官補夫人森田八重子を伴うて歸つて來る。

老婢（花束を手にして）「まア奇麗なお花でございます事、先生も嘸お喜びで厶いませう。サア何卒お掛け遊ばせ、眞實にお珍らしう厶いますね、先生ももう直に學校からお歸りなさりませうから」

八重子（二十四五才、ハイカラの束髪、白薔薇の簪をさしてゐる、お召のコートに、白いボア、絹の手袋を穿め、流行を追ふた身裝）「否、つひ御近所へ來たものですから一寸とお尋ねしたのだがね今日は土曜日だから先生はもうお歸宅になつてゐる事と思つたの」

老婢「もう直にお歸りで厶いませうとも（置時計を見て）……何卒まアお掛け遊ばして下さいまし」椅子をすゝめる）

八重子（室内を見廻はしつゝ）「矢ッ張昔と一寸とも變つた事はないのねえ、婆さんもあれから歳を取つたやうには見えないのよ、相不變壯健で、何よりだね」

老婢「ホヽヽ歳を取らん事がありますものか、貴方等が御卒業なすつてから、もう六年か七年かになりますの、眼は耗くなるし、抜は齒けて來ます、段々心細くなる一方でござりますよ、貴方は眞實に見違へる程立派な奥様におなり遊ばしました、此でも途中で御摺れ違ひした位では、何處の何誰樣か、私には夫人、貴方が分りつてはないと思ひますよ、何んでも先生のお話では大層結構な方の處へお嫁付になりましたさうで、お幸福な事でございますね」（花束を花瓶に活ける）

八重子（得意な調子で椅子に凭り）「あれからも折々お尋ねしなけりやならないんですけれども、外交官の家なんかいふものは何や彼や忙しくつてね……先生には先般、音樂會で偶と御目に蒐つたの

よその時、近日お尋ねしますと云つて、お約束して置きながら、つひ延々になつて了つたんだがね、實は一昨年布哇へ赴任した夫が、近々歸つて來ると云つて寄越したので、それを待つ準備にいろ〳〵手が掛つたの、處が又延期になつたといふやうな手紙が來たものだから一寸と隙になつたのよ」

老婢「オヤまア左様でございますか、旦那様は布哇の方へ……あの公使とかいふお役目をなさつてるのでございますか？」

八重子（一寸躊躇ふ）「エ、公使？……ア、まアそんな風の事をしてるのだがね」

老婢「で、夫人はその方へ御一緒には入らつしやらないのでございますか？」

八重子「エ、行くに行けない事もないのだけどもね……何しろ布哇といふ處はあまり氣候も善くないさうだし……第一暑い處だつていふからね、私、氣が向かないのよ、何うせ今度歸つて來れば、巴里か、倫敦か歐羅巴の方へ赴任する事になろうと思ふの、その時は一緒に行くつもりよ」

老婢「眞實に、結構な事でございますね、貴方方は御夫婦連れで、さういふ善い處許り見て御廻りになるのでございますから、お聞き申した丈でも、お羨しうございますよ」

八重子「そりやね、巴里だの、倫敦だのいふと、眞實に素晴らしい繁華な都なのよ、街幅だつて東京の四倍も五倍もあつて、家屋は皆煉瓦石や大理石で造つてあるし、それが四階とか、五階とか、中には十階、二十階といふ高いのがあるんだつてね、それから又ダイヤモンドだの、ルビーだの金銀の飾り物だのいふもの許、商してる店がギッシリ列んでる町まで出來てるさうなのよ、そんな處へ行つて見る丈でもねえ」

老婢「眞實に、お話を聞きました丈でもねえ」

八重子「それに私等は外交官だから、外國の大統領だとか、天皇陛下とかに、直々に御目に苑る。大臣方にも親しい御交際をせなけりやアならないし何や彼や氣骨が折れる事だろうとは思つてゐるけれども、お庇で又他人の見られない面白い目も見られるといふものだからね」

老婢「眞實に、貴方は御立身なさいました、貴方が、御友達の中で、一番御幸福でございませうよ」

八重子「然うお思ひかい」

（鈴鳴る）

老婢「オヤ、又御客樣らしうございますよ、一寸と失禮します」（立去る）

八重子（巻烟草を吹かし始めながら起つて窓の方からしきりと戸外を眺めてゐる。テニスの運動場には、一、〇……二、〇……三、〇！ホ……と高笑ひの、若やいだ聲が聞えてゐる、戸の明く音で八重子は周章しく、吸さしの烟草を灰皿へ落し込む）

老婢「一人の丸髷の、金鎖、金指環で、身邊を燦めかせた二十四五才の婦人を導いて入つて來る）「サア、何卒……恰當い丶處でございました……（頂戴物は先生へ御目に苑けませう」（と布呂敷包を小脇に抱へて、會釋する）

八重子「オヤ……まア……爲口の夫人でしたか？」

爲口安子「ヤ……暫らく」（二人丁寧に挨拶する）

老婢「私は先刻から森田さまの夫人のお相手をして、一人でお喋舌許りしてゐました。紅茶でも入れて參りませう」（庖厨の口へ退く）

安子「椅子に倚りながら快活な調子」「布哇公使の夫人だつて、老婦が云ふものですから、私、一寸と分らなかつたんですよ……いろ〳〵考へて見ましたけれども、旦那さんが布哇の領事館へ行つてらつしやるのは、森田さんの他にはないと思ひましたから、ぢやア森田さんかと聞くと、それで老婦も漸と名を思ひ出しましたの！」

八重子「アラまア、布哇公使なんて、いゝ加減な事を云つたのですか？忌な婆です事ね」

安子「お近い中に、巴里とか、倫敦とかへ御一緒に御越になるんださうですね！」

八重子「まア、そんな事までお喋舌して了つて……何アに、だれも獨で、いゝ加減な事を云つたんでせうよ」

安子「貴方には音樂會から始めてゞすね、私は一寸この近所の、華族さんの家へ伺つて、その序に久しぶりで先生のお顔を見に上つたのですよ、直にお歸宅なさるんだとか老婦が云つたやうですが、眞實でせうね」

八重子「然うでせうよ、私もこの近所へ用事があつて、旁々寄つて見たのですが、いゝ處で落合ひましたのね」

安子「矢張同級の方は何時逢つてもお懐かしいんですね。その上、貴方と私とは、卒業後まで暫らく先生に舞踏を敎つた仲ですしね」

八重子（不安さうに）「然う云へば私まだお宅へは御無沙汰許りしてゐますが、私は結婚當時、貴方に大さうお金の御無心を云つて、適へて下すつたのを、それ限まだ御挨拶にも出ません、濟まない〳〵と思つては居りますが、何しろ外交官なんていふものは唯外面倒でして、何や彼や入費が嵩

む一方ですから、まだに御返濟の方法も附きません、その中何んとかする考へで居りますから」

安子「まアお止しなさいよ、そんな事……あれつ許しのお金は夫なんかぢやア何んとも思つちやア居ませんよ、貴方なんかのは一度限の事ですから構ひませんけれども、方々から同窓の舊誼といふので、いろんな寄附なんか、度々持込まれるのは、隨分困る事がありますよ、あの新井蝶子さん、よく御存じでせう、ホラ米國から歸つて來た哲學博士の處へ嫁付いた人！その旦那さんは今度高等女學校を起すといふので、私の處へ夫婦お揃ひで尋ねて來て、筆頭に三千圓附け込んでくれといふのぢやアありませんか？、一度は斷はりましたけれども、毎日のやうにうるさく詰めかけるのですから、漸つと夫を宥めまして、承知させたのですよ、まア兎に角公共事業といふのですからね」

八重子「へヱ、ぢやアあの蝶子さんの旦那さんが、眞實に高等女學校を起したのですか、私の處へも手紙で寄附してくれとか云つて來ましたが、夫が留守だからと云つて斷つてやりました？そうすると今度は、名儀丈でもいゝから贊助員の中に名を藉しくれと云つて來ましたが、私はそれ限り返事も出しませんでしたよ」

安子「蝶子さんも何うせその學校で教師をなさるんでせうが、考へると何んだか忌ですね大勢の娘子の守をして一生暮して了ふのはね」

八重子「それに、内々では方々へ行つて、金を貰つて來たり、名儀を借りて來たりして、表向は教育事業だなんて世間へ威張るのも滑稽ぢやアありませんか、ホヽヽヽ」

安子「ホヽヽ私なんかには、とても眞似が出來ませんね、併しその眞似の出來ない事をなさる人が

歳いのかも知れませんわ、第一、此家の先生だつて然うでせう（少し調子低く）四十幾つになるまで獨身生活で、それで體操を敎へたり、舞踏を敎へたり許して暮して來てゐらつしやるんでせう、私、時々不思議に思ひますよ。あれで折々は、寂しいといふやうな感は起されないものでせうか？」

八重子「ホヽヽ、それは時々は然うお思ひなさるでせうよ、私だつて一人留守をしてると、何だか便なくなつて、泣出したいやうな事がありますもの、貴方記憶してらつしやるでせう、此處の先生が私等の學校時代に、生慾を愼まなくてはならん、それには每日度々冷水浴をやつて、後でブランコに乘るとか、馬に乘るとか、激しい運動をするに限ると、よく仰つたぢやアありませんか」

安子「然うでしたのね（笑顏で）先生は夜中にでも、臥床から、はね起きて、冷水浴をやる事があるとお話しなすつてたやうですね、まア何んなに冷いでせう、私なんかにはとても眞似が出來ませんわ」

八重子「それは始めから獨身生活の人でなけりやア出來ますまひよ」

（老婢紅茶を運び來る）

安子（笑顏で）老婦さん、此家の先生はこの頃でも夜中に起上つて、湯殿へ冷水浴に入らつしやる事があるかい？」

老婢「ヘエ………湯殿へでございますつて？」

八重子「夜、水をかゝりにお行きなさるかつて聞くの！」

安子「冷い水を頭から引かぶるといふやうな衛生の講義を聞いた事があるから、それで先生が實地に

行つてらつしやるか、汝さんに聞いて見やうていふのよ！」

老婢「ハイ……私はよく存じませんが、然う仰ればこの頃は毎晩、夜中にザア〳〵水の音がするやうでございます、ぢやア、それが冷水とかいふのでございますか？」

（二人は顔を見合せてホヽヽヽと笑ふ）

安子「毎晩夜中に……ヘエー……併しそれは內證よ、先生にこんな事を云つちやアいけないよ」

（老婢退く）

安子「そんな思ひまでして、獨身生活なさる必要もありますまいと思ふのですがね」

八重子「眞實に然うですよ、結婚すれば女子はその日から人間といふ資格を男子の手に奪はれて了つて、唯妻とか、母とかいふ不具者になるのだつて、折々氣焰を吐いてお聞かせなすつたけが、私等はその不具者になつたお庇で、冷水浴をしなくても濟みますのねホヽヽヽ」

安子「ホヽヽ眞實ですよ、一時は私等も大分かぶれて了つて、週覽雜誌に獨身論なんか隨分書いたものですが、女は女らしく生活するのが矢つ張幸福ですのね、先生のやうに體格が善くて、四十以上になつても顏の色艷の若々しい、宛で處女時代の通に見えてる方は猶の事、獨身生活は辛いものでせうよ」

八重子（シガーを吹かし始め）「眞實ね」

安子「オヤ……さすがは外交官の夫人ね……布哇公使の令夫人と見えますよ、私もお交際にね」（云ひつゝ自分もシガーを吹かし始める）

八重子「オヤ人の惡い、貴方もシガー黨ぢやアありませんか？」

安子「これぞ爲口商會主の令夫人ですもの……實際交際社會へ出るのには、ロシヤ煙草と埃及煙草の差別位分つてませんとね」

八重子「それは然うですとも」（鈴鳴る）

安子「又御來客ですよ」

八重子「眞實に、人が多勢來るんですね」

（老婢走り出て、戸口に行く）

安子「今日は先生の御面會日とでも云ふのでせうか？」

八重子「私は些とも存じないで、御立寄りしたのですが……」

安子（聞耳立てゝ）「オヤ、此方へ來るやうですよ」（周章てゝシガーを捨てゝ）

八重子「然うですか？」（之はワザとらしく平氣で吸うてゐる）

（老婢、二人の來客を導き來る前のは三十歳位に見える、老けた、色艶の惡い婦人、身には安物ながら、小奇麗に服を着け、袴を穿いてゐる、後のは神經質らしい、色の青ざめた婦人、子供を抱いて質素な身裝をしてゐる、文學者の妻君宮本細子である）

老婢「皆樣御存じの方といふ事でございますから」（と安子等に云ふ）

安子「オヤまア……新井さんと、宮本さん、これはまア奇遇ですのね」

八重子「眞實にまア申合せたやうに此家へ落合ふなんて、今日は餘程お日廻りがいゝと見えますね、臨時同窓會ねホヽヽヽ」

曉子「今、老婢さんに聞きますと、布哇の公使の森田さんの夫人さんと、それから爲口の夫人さんが

來てゐらつしやるといふのでせう、始めは俥が二つ門口に列べてあるから、御來客のお邪魔をしてはと思ひまして、引返さうとしたんですがね……其後は何うも暫らく……」と會釋

組子「何うも御機嫌よう……御無沙汰しました」（と挨拶）

（老婢は椅子をすゝめて退場二人は席に就く）

蝶子「爲口の夫人さん、先日は何うもいろ〳〵と御心配かけまして難有う御座います、お庇で大分捗取りまして、もう學校の敷地も借入れる事になりました」

安子「それは結構ですね、併し始めのお話では、土地を買入れるとかいふ御手筈だつたのぢやアありませんか？然う行かないんですか？」

蝶子「ハイ、その考へでゐたのですけれどもね……斯う申しちやア何んですか、貴方のやうな方が、も少し御奮發して下さらないぢやア、邊の者が氣がさして、思ふやうに出せないといふ苦情が出るので厶いますよ、今日も朝から方々へ駈けずり廻つて、行く先々でそんな苦情許り聞かされたのですが、その途中で、宮本さんと、ふと逢つたので御一緒に先生の處へ上つた譯なすですよ、こゝで御目に懸らうとは思ひがけませんでした」

八重子「新井さん、私はその後申譯ない御無沙汰しましたが、何んですか、學校は愈御出來になりますのですか？」

蝶子（印刷物を取出して）「サア、これが趣意書ですから御覧なすつて幾らでも御思召次第御寄附なすつて下さいな……布哇公使の令夫人だつて、老婢が云つたんですもの、ね、貴方、それに對してもね、ホヽヽヽ、私は外交官以上でせう、實際、體裁に構つちや居られませんからな」

八重子「ホヽヽ、隨分お手きびしいのですね、私なんか夫がその布哇の公使にでもなつたら一萬圓でも二萬圓でも御寄附しませうよ」

蝶子「オヤ……ぢやア何時迄經つてもお願出來ん事になるのですね、布哇が又獨立國にでもなる日が來なければね」

八重子「ホヽヽまアそんなものでせうよ、兎に角貴方は學校時代から何んな會でも幹事になつて切廻してゐらつしつたが、さういふ方にかけては愈々凄いお腕におなりでしたよ、爲口さんから三千圓も出させなすつてまだその上に背中をおたゝきなさらうといふんですものね」

蝶子「オヤ……御串談を……三千圓ならいゝが、三百圓を十ヶ年賦といふお話ですもの、さう云つち濟まないが、も少し何うか尾鰭を附けて戴き度と云つて、願つてるのですよ、貴方も何卒御加勢なすつて下さいな」

八重子「オヤ……でも只今、爲口さんから伺つた處では三千圓といふお話しでしたに」

蝶子「然うですか、それぢやア早速御訂正して戴きませう」

（子供をあやしてゐる安子）「蝶子さん何んですねえ、こんな處でもうそんなお話はお止しなさい宅で三千圓出すとか、出さぬとか云つてたやうですから、私は多分三千圓に定まつたゞらうと思つて森田さんにお話した譯よ……まア、この坊ちやん　御覽なさい、よく眠てゐらつして、お可愛い事よ」

八重子「……オヤ……眞實にいゝお子なのね……宮本さんはもう〳〵理想のスヰート、ホームをお作りになつて、無、お樂しみでせう、お宅の御書きになる小説は私チヨク〳〵拜見しますのよ、白

然派ですのねえ、隨分女の惡口許り出てるやうですが、筆と御本人とは裏腹でせう、隨分お優しいのでせうね」

紐子（微笑）「サア、何うですか……併し書いてる時は、傍へも寄附けませんのよ、それで今日も子守として、鬼子母神まで遊びに行つてかへりがけに、新井さんと會つて、久し振で先生の宅へ御伺ひした譯なのですよ」

蝶子「私等は途々いろんなお話をしたのですがね、矢つ張宮本さんは幸福なのよ、精神的の生活だつて云つてゐらつしやるんですものね、金も、位も、事業も、そんなものは塵程にも思はない、夫がインスピレーションに打たれたやうな顔で、卓に凭れてペンを走らせてるのを見ると、自分までインスパイヤ――されるつていふお自惚方ですものねホヽヽ」

紐子「アラ、貴方、お口が旨いのね、私そんな事を云ひやしませんけれども、お金が取れるかつてお聞きだものですから、イヤ隨分貧乏生活はしてるけれども、夫が著作をする苦勞を思ふと、そんな事を氣にかけちや居られないつて云つた丈ですね」

爲子「ホヽヽ一層お手放しぢやありませんか、そして貴方はあの時分、小說や脚本をよく廻覽雜誌へお書きでしたが、この頃、作の方は如何ですか、お書きになれば御主人が添删して下さるでせう、今にそれを合作なんかと銘を打つて雜誌へ發表なさる事になるんでせうね、夫婦のお自惚が原稿料になる　だから、讀む者は隨分馬鹿にされた話ね、併しそれも理想的だわ」

蝶子「併し、私等夫婦のやうに、二人で學校を建てるのも理想的ぢやアありませんか、學校といふ建築物が、つまり私等の精神的結婚の產物なんですからね、實際こんな事は男許りぢやアとても弁

走がし切れませんよ、斯して御知合の方の處へお百度を踏むのも、私ならこそ出來たのだと思ひます、そこは宅でも察してくれて、日が暮れたりなんかすると、電車の停留場まで迎へに來てくれますの、それで二人で一緒に角の八百屋で、私の好なバナヽだの、林檎だの、龍眼肉なんか買ひましてデザードに持つて歸るんです、お湯へ入る時には宅が自分で湯加減を見てくれますしね、長年アメリカにゐた丈ナカ〳〵信切ですよ」

安子「オヤ〳〵、堪りませんね、もし獨身の先生の前でそんなにお惚なすつちや、罰則に禁足位喰ひませうな、尤も今は皆學生ぢやアないからいゝやうなものゝね……それから貴方方御夫婦の結婚の紀念碑代りの學校なら三百圓出すのも惜しい位ですわ、宅がそこを察して、減らしたものと見えますな、矢ッ張宅の眼は高うございますのね」

八重子「眞實に、蝶子さんは隨分ですわねえ、併し、アメリカ歸りの男子は皆信切だといふから、今度私の處でも布哇の方から歸つて來ましたらそんなに信切にしてくれるかも知れませんのね！」

安子「ぢやア今までは、お宅ではあまり御信切ぢやアなかつたんですか、正直な處ね？」

蝶子「外交官なんていふものは、隨分交際がお廣いから、夫人さん一人に、附き切りにしてゐらしつやる事が出來ないのかも知れませんね、舞踏會の時なんか見ましても、皆他所の夫人さんやお嬢さんの手を取つて、さも親しさうにお世話をやいて上げなさるやうですからね」

八重子「オヤ、それは交際界の禮儀ですもの、仕方がありませんわ、宅なんどそりやア信切は信切です、このボアだつて三越の店員が彼方へ仕入に行つた時ワザ〳〵巴里へ注文して取り寄せてくれたのですもの、この指環も矢張、大使館の人に賴んでオペラ街の第一等の寶玉商の店から、買つ

て歸つて貰つたのですよ、こん度瓜哇から歸る時は、眞珠の首飾を土産に持つて返るといふ手紙が來てますのよ」

安子「ぢやアお宅では隨分御收入がいゝと見えますね」

八重子「アラ……決して然うした譯ぢやアありません、少しも餘裕はないのですよ、隨分切詰めてやつてゐて、苦しいんださうです……だが貴方の方へまでも御迷惑をかけてるのですが！」

安子「イヤ、そんな事を今申すのぢやアありませんが、そんな中から貴方にそれ程の贅澤をさせて下さるやうだと、餘つ程、夫人さん思ひね」

蝶子「爲口さんの處の御主人だつて矢張然うでせう」

八重子「そりやアもうそれに極つてますわ」

組子（不安さうに）「爲口さんは始め金持の家は忌だつて仰つてたやうですわね、富と幸福とは仇同士だなんて、感想文を何時か拜見したやうですが、矢ッ張御兩親の命令で、商會の御主人と御結婚なさるやうな運命になつたんでせうね」

爲子（ピク／＼顏面神經を動かし）「ホヽヽ、あんな感想文があれば、娘時代の夢のやうな考ですもの、今になつて考へ直して見ると何してアンナ馬鹿らしい事を云つたり書いたりしたゞらうと私ながら不思議に思ひますのよ、何しろ私之が世帶の苦勞といふものをしやうと思つても出來ないんですから、この上何も云ひやうはないでせう、流行の衣物が欲しいと云へば電話一つで直ぐ眼前に持つて來ますし、自動車が流行るから、乘つて見度いと云へば、又直ぐに乘る事が出來るのでせう、芝居へ行き度けりや芝居、溫泉へ入りたければ溫泉、何一つ不自由といふものは夢にもした

事がないんですからね、斯う云つちや何んですが誰が幸福だと云つても私位ね……ホ……」

蝶子「だつてそれが必ず幸福とも云へますまい」

安子「エ……それが幸福ぢやアないんですか？」（顔色をかへる）

蝶子「ホ……イヤ、矢張お金の事ですね」

八重子「皆、これで幸福な身分といふものでせう」

組子「ソレ〴〵に幸福を持つてるのですよ」

安子「こゝの先生のやうに、夜中に起きて冷水浴をしない丈でもね」

蝶子「ア丶冷水浴ですか？ホ……」

（八重子も、組子も笑ふ）

蝶子「併し、まアあの運動場のテニスを御覧なさい、若い、はしやいだ聲でさも樂しさうに笑つてゐる娘等をね」

組子「然ね、私等もラケットを持つて片手に詩集を携げて歩いてた頃はね？」（感慨に堪へぬ樣子）

八重子「矢ッ張あの頃が一番花ですね」

爲子「そうですね、お互に未來を樂んでゐたのですものね……いろんな夢を見てね」

組子「何んだか、あの若い娘等は、私等の影ぢやアないかとも思ひますのね—」

蝶子「何んだか昔の若い時の事を思ふと、涙がこぼれて來ますわ」

（四人感に沈んでゐる）

（玄關口が江上厚子歸り來る四十餘歲、顔色冒切つて赤黑く體も手も肥滿してゐる、體操服をつ

けフオート、フオリオを小脇に挾んでゐる。四人は同時に椅子を立ち會釋する）

爲子「今日は……今、老婢やが門口まで迎へに來てくれたのですよ眞實によくこそ……お揃ひですのね……サア何卒椅子へおかけなさい……ア、奇麗な花ね、森田さん何うも難有う、爲口さんも敎員會議があつてつひ遲れたのですよ」

安子「先生、音樂會の時、御約束をして置きながら、つひ御無沙汰しまして、何うも申譯ありません」

厚子（微笑）「イエ、何しまして……矢張り一家の主婦さんにおなりですと何や彼や御忙しい事でせうそれはもうお察し申して居りますよ」

八重子「私も何うも相すみません、伺はう〳〵と思つてはゐましてたのですけれども、宅が布哇から歸るやうな事を云つて寄越しましたので、いろんな準備をしましてねえ」

厚子「オヤ、もうお歸りでございますか？それはさぞお嬉しうでございませう、結構ですよ」

八重子「處がまだよく定りませんので私も落着かないでフリ〳〵したやうな氣持で暮してゐるのでございます」

厚子「おやアまだお定りでないのですか？併し遠く離れてゐて、お互に思ひ合つてらつしやるのも亦面白いものでせうよ、結婚式を待つてる花嫁さんのやうな氣持が永くつゞくんでせうからね」

蝶子「アラ、先生もこの頃はチョイ〳〵御串談を仰るやうにおなりでございますことね、先生は段々お若くおなりのやうでございますよ……ア、あの、この間はいろ〳〵御注意下さつて難有うムいますお庇で學校の方も敷地を借入れる約束が出來ましたのでムいます」

厚子「それは結構ですことね、體操敎師の候補者は二三名ありますからその中御相談しませう」

組子「先生、私はつひ御近所に居ながら、貧乏隙なしで、折々御門の前を通りながら御立寄もしないのでございます、不惡御赦し下さいますやうに！」

厚子「ホヽヽヽ然うお改まりなさらなくつてもようございますよ、坊ちやんは寝てらつしやるんですか（見て）可愛事ね、……宮本さんの處なんかは、御主人が嘸可愛がりなさつて下さる事でせう、一人では他人の家へは上げないといふ方でせうね」

組子「アラ、まア先生御戯ひなすつちやア忌でムいますよ、文學者なんかいふ者はナカ〳〵氣六づかしくつて、眞實に弱る事があるのでムいますよ、原稿を書いてる時にこの子供が泣だしでもしやうものなら、眞赤になつて怒り出しまして、何處かへ連れて行けつて云ふんでございますもの、それでこの頃は一日、戸外へ出て子守をして暮してゐまして、御飯時丈歸つて、膳拵をしますと、又直に出かけるつていふやうな始末でムいますからね、眞實に何方様へも伺ふ隙もないのでムいますよ」

厚子「オヤ〳〵、眞實に、そんなのですか？私は宮本さんのやうな、文學者と結婚した婦人が一番幸福か知らと思つてたんですがねえ、矢張、カーライル夫人の云ふたやうに、天才と結婚するのは不幸だといふのが眞實でせうか？」（考へる）

咲子「先生は大さう眞面目に考へてらしやるのねえ、併し何と云つても先生のやうな獨身生活が一番幸福に相違ありませんよ、誰れの束縛も受けないで、御自分の自由にお暮しなさる事が出來るんでございますものねえ」（四人の眼はハッと合ふ）

厚子「獨身生活が幸福だつて仰るんですか？アラ、私の前だからつて、何も然う皆さんが御遠慮なさ

るには及びませんわ。そりやアあの頃は……貴方方が學生時代には、私もしきりとそのやうな事をお話して、貴方方の氣を引いて見たのですけども、實は日本の之までの舊い習慣に囚はれて、唯親の命令だとか、世間への體裁だとかに、見合結婚をしたり、賣買結婚をしたりして、一生取返しの附かぬやうな不幸な目にお逢ひなさらぬやうに、老婆信切から云つたのに過ぎないんですよ、貴方方が皆さんで、それ〴〵御自分の理想に適つたやうな御主人をお持ちなすつたのですからもう斯うなつちやア、私のまだ經驗しない、お羨ましい結婚生活のお話しでもして聞かせて下さいな。今日は偶然、斯して同窓會が出來たのですから、御一人御一人、僞らざる御感想談でも承はらせて下さい、今日こそ私が生徒で、皆さんは、その方の先生ですものね」

爲子「アラ、先生隨分お人が惡う厶いますのね、私等に結婚生活の懺悔談でもやらせて、後で手を打つてお笑ひなさらうといふ腹で厶いませう……」

厚子「アラ、私はそんな人間ぢやアありませんわ、眞實に眞面目で聞くのですよ、皆さんの樂しい御經驗をね」

爲子「樂しい經驗なんて、ありやしませんわ、私は今更後悔してる事許りで厶いますわ、實業家なんかいふものは、ヤレ交際たとか、掛引だとか申しましてね、年中、青樓へ入りびたりで厶いますもの、偶に家へ歸つた時一言二言いやみを云つてやりますと嫉妬くんだとか何とか云つて、一層嵩にかゝつて、藝妓ののろけ談をしたりしましてね、眞實に先生の前で御談の出來ないやうな事許りですもの、唯、子供が一人ゐますので、それに引張られて、つまらなく暮して居るやうなもので厶いますよ」

厚子「まア眞實に、あれ丈望まれて入らしつて、もうそんなですか？何だか信用が出來ませんわ。」

八重子「そりや先生、男子つて、隨分薄情なのでムいますよ、私の處のだつて、外交官といふ役目の上で外國へ行くのは仕方がありませんけれども、私を連れて行つてくれといくらせがんでも聞いちやアくれないんですもの、ヤレ費用が嵩むとか何んとか申しましてね、うるさがつてるんでございますよ、留守の間にも折々仲間の外交官の方なんかが入らしつて、そりや夫婦連れでは自由行動が取れないから、一人で行き度がるのだ、外國へ行つて、眼の青い婦人を相手に樂んでる間が外交官の生命のせんたく時だ、始終糠みそ臭い細君につき廻されてちやア堪らないからなんてからかふんですもの、皆そんな經驗をしてるのも見えますよ、こんな事なら、先生のやうに始めから獨身生活をしてゐた方が、何んなに氣樂だつたか知れません」

厚子「眞實に、男子つてそんな氣儘なものでせうか？併し皆が皆然うといふ譯でもないでせう、よく氣心を知り合つた人で此なら大丈夫だと信用の出來る男子なら、そんな事はしまいよ」

蝶子「先生は、又急に男子の肩をお持ちなさるんですね、男子つていふものは、皆さんのお話なさるやうな、我儘なものでムりますよ、結婚當座こそチヤホヤして親切にしてくれますが、三月經ち四月經つともう横着に本性を出して來るのでムいますよ。自分では俥で乘廻してゐる癖に、私には可成テク／＼歩しろといふんでございますもの、此度の事業だつて、女學校の設立には、矢張女が走廻る方が手廻がいゝなんて勝手な事を云ひましてね、自分では家で書齋へ立籠つてゐて、私許り頤で追ひ立てるんでございますもの、それでゐて今朝は御飯の仕度が遲いなんかやかましく云ふもんですからつひ口論までやつてプイと飛出して來たのでございます、皆さんもこれで夫

婦喧嘩の御經驗はタンと積んでゐらつしやるのでせう」

組子「私なんか喧嘩してもとても相手になれないんですもの、直ぐ一言二言云ひ出しでもすると、頰邊をなぐられたりなんか、そりやア癇癪持ですから隨分ひどうござんすよ」

八重子「私なんか、斯う離れてゐりやア、その喧嘩も出來ないんですもの、心細いわね」

安子「ねえ、先生、矢ッ張一人に限りますよ、先生が何んなにお羨ましいか、皆で然う申して話し合てゐたのでございますよ」

厚子（苦笑）「然うですかねえ、併し私は皆さんがお羨ましいんですよ、夫婦喧嘩なんかいふものは後で直ぐ仲直が出來るんでせう、イヤ、私なら、決して喧嘩はしませんよ。自分の方で謝つて出たら、夫の方で、自然と謝つて來るんでせう、私は然う思ひますよ」

蝶子「處がナカ〳〵そんなものではございません、男子つていふ者はそんな時には却て圖に乘つて、つけ上つて來るんですからね、その度毎に女は一歩一歩自分の立つてゐる足場を縮められて行くのでございますもの、ねえ皆さん、然うでせう」

八重子「そりやア全く然うですよ、交際社會なんかへ出る時は、さも大切さうにして下へも置かぬやうに見せかけますけれど、家庭に入つて、シルクハットを脱ぐと直ぐに又暴氣になつて了ふんでございますもの」

安子「私なんか、近頃、交際社會へ出ても、そんなに大切さうにされた覺もありませんね、全く結婚なんてつまらないものですね」

組子「私なんか、夫が眼中に置いてくれないんですもの、結婚當時には、小說の原稿も見てやるなん

か云つてましたけれども、その頃書いたのはまだ床の間の隅にそのまゝにして目も通しちやくれません、この間塵ハタキにしろつて、投げ出した反古を見ると、それが私の昔の原稿の一部ぢやアありませんか、私は下女と子守と、兼帯に、無給金に働いてゐるやうなものですねえ」

厚子「オヤ〳〵いろんな不平が出ますのね、併し然う悲觀許ししたものぢやアありますまい、少しは景氣のいゝ方のお話の裾分もして下すつてもいゝでせう、私眞實に、參考のために聞いて置きたいのですよ」

爲子「全くお生憎さまでございますもの、ねえ皆さん……先生のやうに獨身生活に、も一度なつて見度うございますわ」

安子「そりやアねもう一度娘時代に返つて見度うございますわね」

（テニス運動場のラケットの音、若やいだ笑ひ聲一座憮然……戸をコツ〳〵と叩く音）

厚子「カムイン！」

（戸が開いてマスターオブ、アーツ、荒川透、入來る、ハイカラな脊廣服、四十前後の肥滿した男子）

荒川「ヤ、大勢のお客樣ですね、お邪魔樣ぢやアありませんか」

厚子「イヱ、些つとも……皆、昔の生徒さん等ですもの」

荒川（花束をさし出す、厚子無言に受取りキスして、卓上の花瓶に入れる）

（四人チロ〳〵見る）

荒川「皆さん今日は……何卒よろしく」（マゴ〳〵した挨拶）

（四人、をかしげに、會釋する）

厚子「皆さまに御紹介します、此は一週間前に、米國から歸られたマスターオブ、アーツ荒川透さん……私は留學時代からの友人です……皆さんはこの間御話しましたとき私の元の生徒さん等で、森田さん、新井さん、爲口さん、宮本さん……」

荒川「ハア、何卒よろしく〳〵」（と椅子に倚る）

厚子「實は皆さん……私は荒川さんとこの度約婚が出來ましたのです、急な事で、皆さんがお驚きかもしれませんが、十年前私の留學時代からお知合つてる仲ですしね、いろ〳〵御都合があつて御歸朝が延々になつてたのですから今日までその儘にして居りましたが、斯ういふ事に運んだので近々式を擧げる事に定りました、折角お出で下すつたのですから序に御披露して、そのつもりで御紹介申します、何卒私同樣によろしくお願します」

荒川「何卒よろしく……」

（四人挨拶そこ〳〵顔を見合せて眼をパチ〳〵させてゐる）

厚子「荒川さん皆さんのお話では、男子つていふものは結婚當座丈信切で後は皆暴君になるんだつていふ事ですか、貴方は然うぢやアありますまいね、よく、皆さんからも一度今のお話を聞かせて置いて下さいな、お頼みですから」

蝶子「ヘエ……まア先生お人の惡い……荒川さまがそんな事をなさるといふたのぢやアありませんもの」

櫻子「でも矢つ張り男子ですからね」

八重子「併し、今のお話は、唯氣にかゝる事丈け申したのでございますもの、宅などはナカ〳〵親切にしてくれる處もあるのでございますよ、この指環は巴里のオペラ街の寶石商の處へワザ〳〵注文してくれたんですものね、それからこのボアは、矢張三越の店員に頼んで買つてくれたのでムいますから」

蝶子「それから布哇のお土産は眞珠の首飾と定まつてをつて、先刻お話しでしたもの、先生のゐらつしやらん中は、アレでナカ〳〵御安くない事を仰つてたのでございます」

爲子「然う云へば、新井さんの處の旦那樣は、お湯加減を見て下さるつていふんぢやアありませんか、これから毎日、停留場までお迎ひに來て下さるさうですからね、先生、アレで先生の前では隱してゐらしやるんでございますよ」

厚子「オヤまア、矢張、そんなに御親切なのですか、皆さんは私をかついで入らしやるのね」

蝶子「谷口さんでも、芝居と云へば芝居、溫泉と云へば溫泉、旦那樣が何一つ御不自由な目はさせなさらないんださうですからね」

組子「私の處だつて、然う〳〵むづかしい顔許りしてもゐませんのでございます先生」

蝶子「精神的生活だつて、大そう御自慢してらつしやるのでございますもの、ね先生宮本さんはアレでナカ〳〵人が惡いんですよ」

厚子「まア〳〵……ぢやア皆さんから奢つて戴き度い」

四人「先生こそ……先生こそ……何かお奢り下さいませ」

荒川「ハヽヽぢやア只今は、双方で帳消しにしたらいゝんでせう、私等はこれから皆さんにお羨ま

せするやうに、話の種を造へなけりやならんのですから
ね」

厚子「然うですともね……」

爲子「先生、隨分ひどうございますわ、私等に試驗問題を出して、答案をお書かせなさろうていふんですから」

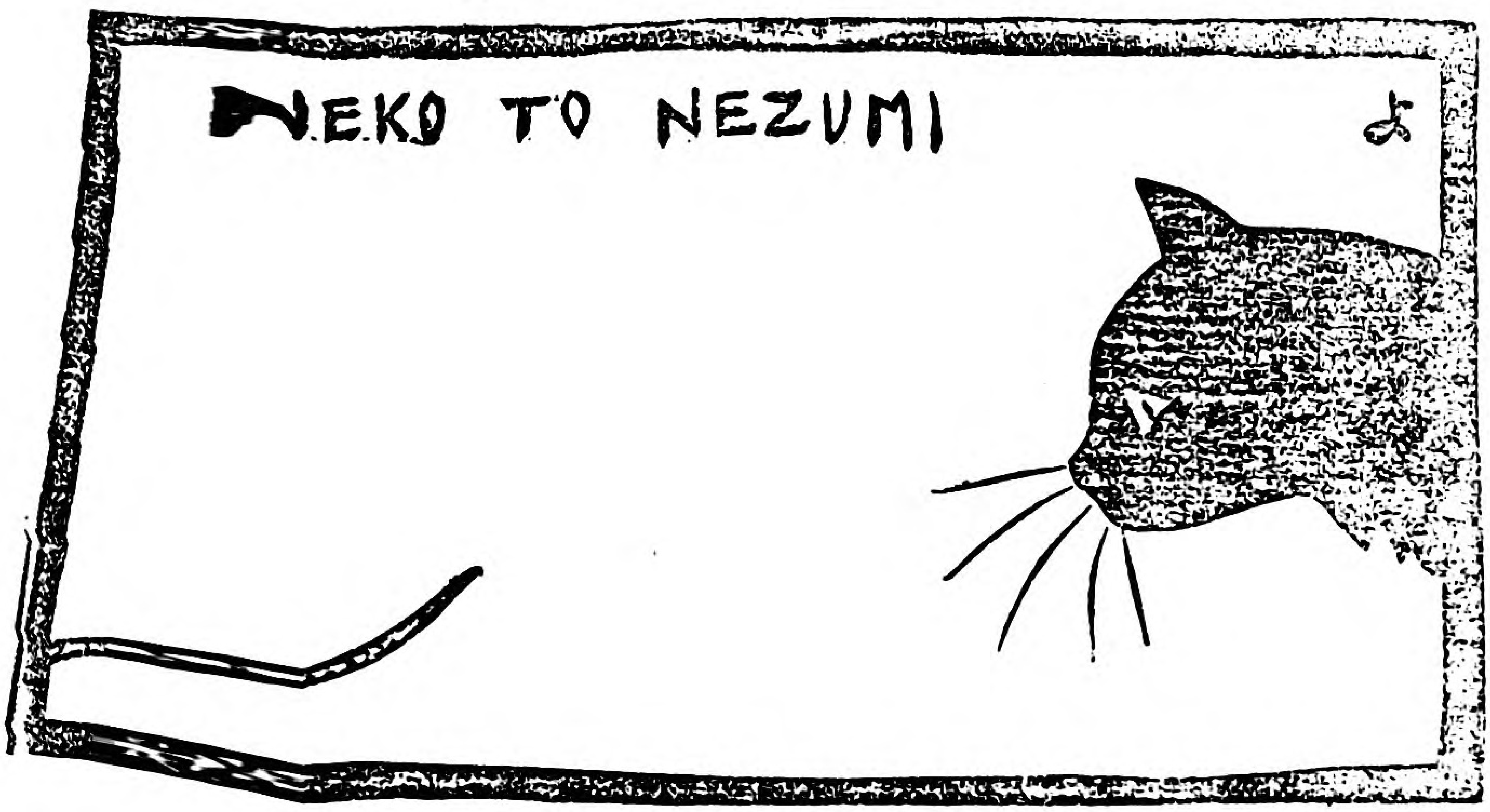
蝶子「眞實に、スッカリ人を舁いでお了ひなさるんですもの」

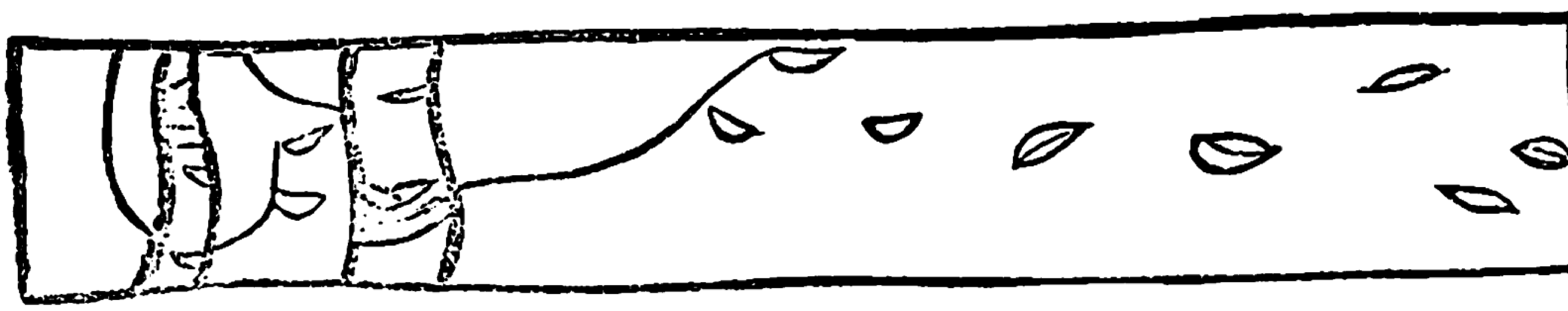
八重子
爲子「然うですよ……然うですよ」

厚子（微笑）「貴方等こそおひどいぢやアありませんか……まア紅茶でも持つて來させませう、そして荒川さんの米國土産のビスケットの罐を切りませう」（鈴を鳴らす）

（老婢、紅茶を持運ぶ、荒川立つて一々注いで廻る、厚子ビスケットの罐を切始める、一座顏を見合せて微笑

（カーテン）





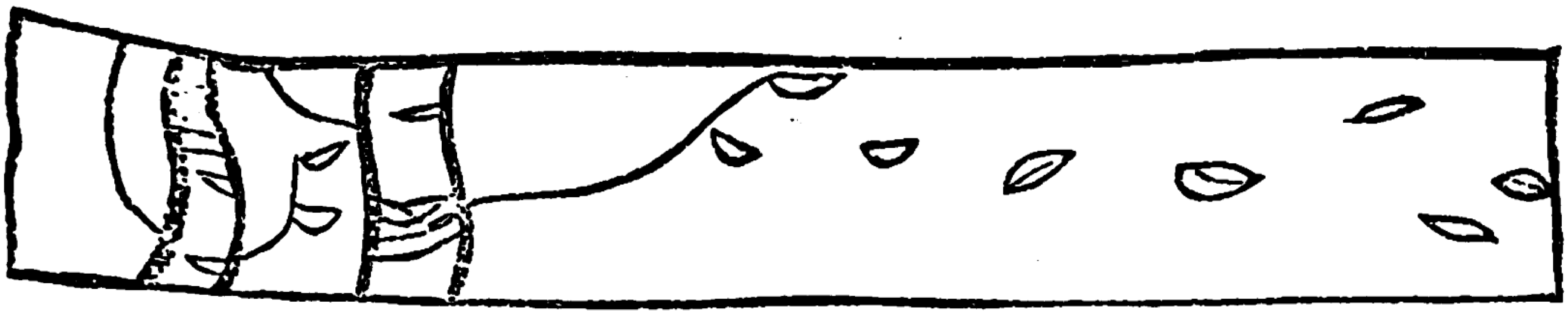
紫いろの唇

田村とし子

みね路は公園の活動小屋の前をぶら〳〵あるいて行つた。

毛の擦りきれてしまつたボーアの心だけが、ぴり〳〵と頸にあたつて丁度木綿の手拭を一とすぢよれ〳〵にして巻き付けてるやうだ。そのボーアと着物の襟の隙から風が染みこんで、骨のとがつた肩の上あたりは皮膚を鉋で削りとられてゐるやうに冷えついてる。みね路はもう一枚風呂敷でもいゝからこの上から引つ被りたいやうな氣がしながら、兩方の肩をぎゆつと寄せ合ふやうにしつかりと懐手をして――よく自分の身體の中にこれだけの温味があると思ふやうな乳房のわきへ兩手を組み合はして、腮と口をボーアの中に埋めこんでゐる。けれどボーアの中も自分の呼吸で濡れたところが風に凍つてしまつて、まるで霜柱でも立つたやうに唇と頬の肌ざわりがひり〳〵と痛んでるさうして綿の入つてゐない新お召の薄つぺらな一枚の裾も、風は砂をすくつて叩きつけながら、女の兩足へ足掻きのつかない樣にその薄い裾をくるりと巻きつけて見たり、又くるりと引つ剝がす樣に中間へさらい上げたりして、その餘勢を女の横鬢のところへ持つて行つて抛りつけてる。二枚しきや纏つてゐない女の脛は時々露だしになる。その膨らつ脛は鋸の目を刻み込まれたやうに肌が皹われてきた。

何所の小屋ももう閉館つて、二たつ三つつ殘して看板前の灯だけが、暗くなつた往來に薄赤い汚



點をこぼしてゐる。男に蹴られて倒れかけてる女の青い着物赤い蹴出し、胡粉でぬつた白い脛、矢口の渡しのお船の眞つ赤な衣裳、眞つ黒に亂れた髮の根から何所かにまつはつてちらりと翻れてゐる緋鹿の子のきれ、女の曲つた赤い口、――その看板繪が暗い色に包まれながら明りを受けた部分だけ、毒々した色彩をぽつと浮かしてゐる。みね路は通りすがりに振返つて見た。紫いろの燭光が高いところから、みね路の顏の上に流れてきた。

その時に男の外套の袖がみね路の腕をかすつて通つた。みね路は鳥が翼を振ふやうに薄い袂をぶる〱させて急いで男の方に身體を返すと、男も片足を宙に浮かすやうにして女の方を見たが、女が嗄枯れた聲で、

「今晩は。」

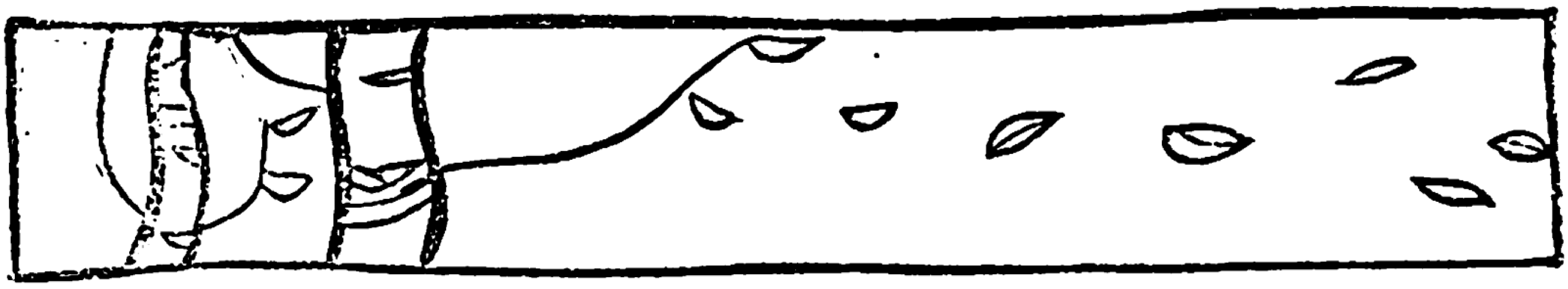
と云ひながら傍へ寄つてゆくと、又ぷいと彼方をむいて肩を上げて歩きだした。

「どちらへ。」

みね路は追つかけて然う云つたが咽喉がつまつてしまつて聲がでなかつた。男は花屋敷の方へ折れてずん〱行つてしまつた。みね路は男の後から大きな石でも打つ付けてやり度いやうに、いらいらしながら舌打ちした。

風に向いて口を開いたばかりに、咽喉がまた熱を盛つてきて、擦りむけた肉の上を輕石でこすられてゆくやうに痛み始めた。みね路はふところの中の手で咽喉のまはりを撫でた。耳の付根の下のぐら〱にさわると、其所だけが燃えてる火の玉をつかむやうに熱くなつてゐる。

眞直ぐに十二階の横に入つて、さくらやの臺所口からみね路はそつと上つた。茶の間には誰もゐ



なかつた。長火鉢の鐵瓶がおろしつ放しになつて、今炭をついだばかりのやうにみどりな炎を立てて火がよくおこり掛けてゐる。みね路は火を見ると急に耳の根を引きちぎられた樣に顏の半面が痛くなつて、そうして止め度もなく足の爪先が戰へながら、すべての身體中の血がみんな顏から頭の上へのぼつて了つたやうにくら／＼とした。

三尺の入り口の唐紙を開けて座敷の方から女中のおふぢが顏を出して此方を見た。狹い額と人を馬鹿にしてゐるやうな角のある小さな眼が、斜つかけに唐紙の横から見えたと思つてゐるうちに、直ぐまた引つ込んだ。

「お客なんだよ。」

みね路は然う思ひながら、火鉢のふちへ寄つかゝつた腕の上へ顏を埋めて隣りの樣子を覗ふ樣にぢつとしてゐた。少したつて隣りの室で壓しつけられるやうな女の笑ひ聲がしたと思ふと、直ぐおふぢが茶盆をもつて、先刻の唐紙のところから出て來た。

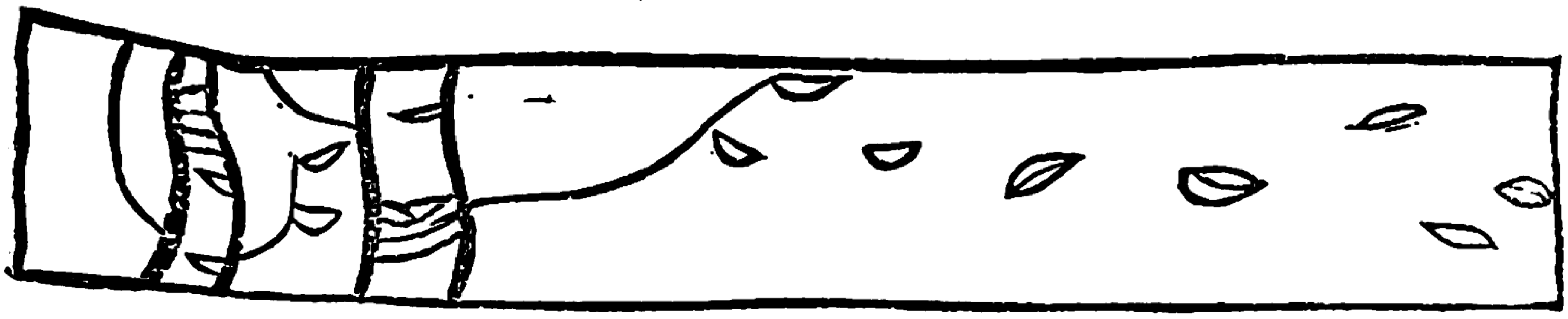
「今晩は。」

みね路が顏を上げると、おふぢは何とも云はずに長火鉢のところへ來て、すつかり火の上へ灰をかぶせて鐵瓶を乘せてしまつた。

「意地がわるいねえ。おふぢさんは。」

みね路は身體を起しながら、おふぢの着物の袖で膨まつた筒袖半纏の横を憎さうに見詰めながら出ない聲を搾るやうにして云ふと、おふぢは振向きもしないで臺所へ行つてしまつた。

「田舍つぺい。」



みね路はどす黒い紫が染みついたやうな唇を嚙みながら、鐵瓶をはづしてわざと火をほじくつた
隣室はひつそりしてゐる。茶の間だけに點けた電氣が柔らかい色にお上さんの赤い座蒲團を照らしてゐる。茶簞笥の上に飾つた穴守樣の小さい御神燈の眞鍮ぶちが黄金色に光つて、お燈明の灯が小指の爪の先きのやうに可愛らしくちら／＼と灯つてゐる。その前に積んである銀貨を、みね路は勘定をしやうと思つて頸を長火鉢の上から向ふへ突きだした。

後から博多の前掛をしめた男がそつと入つてきて、みね路の横に中腰になつて兩膝を火鉢のふちに押つけた。みね路は男を見ると默つて笑つてボーアを取つた。下から白粉でふちを取つたやうになつてる緋縮緬の襦袢の襟が出ると男はそれをじつと見た。

「しばらくねえ。」

然う云はれた男は、丁寧に頭を下げてから、腰から縫ひの切れで出來てる卷莨入れを出して中から敷島を一本ぬくと、女の方へ莨入れの口をむけて默つて出した。

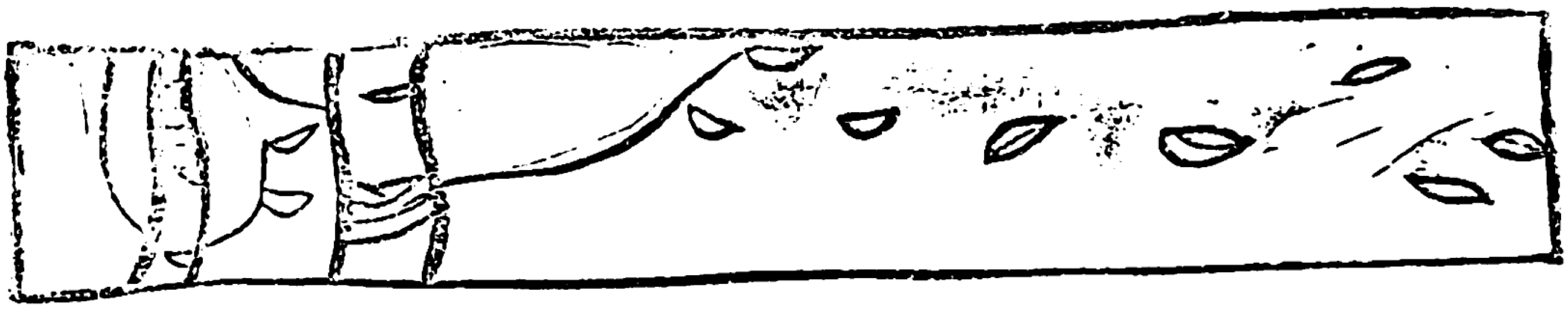
「駄目よ。いたゞけないの。」

みね路はかすれ／＼の聲で然う云つてから、自分の咽喉を指で叩いて見せた。男は莨入れを中腰の膝の上に乘せると、ゆつくりと卷莨に火をつけて、それから鼻の頭が人と云ふ字に開いたやうな平つたい顏を仰向けて莨を吸ひだした。

「咽喉へくるやうになつたかなあ。幾歳だい。」

男は矢つ張り仰向いた儘で然う云つた。「馬鹿にして。かゝさがやありませんよ。」

みね路はまた咽喉に何か引つかゝつてる樣な聲で怒るやうに荒つぽく云つた。



男はだまつて笑つて、何時までも〳〵一本の煙草を仰向きになつて吸つてゐる。みね路はぶつぶつと總毛立つた。ねずみ色の粉をまぶしたやうな顏の生地を明りにさらして、乾き切つた黄色い濁りのある白眼を斜にして男の顏を見詰めてゐた。

「この人には二度呼ばれたことがある。」

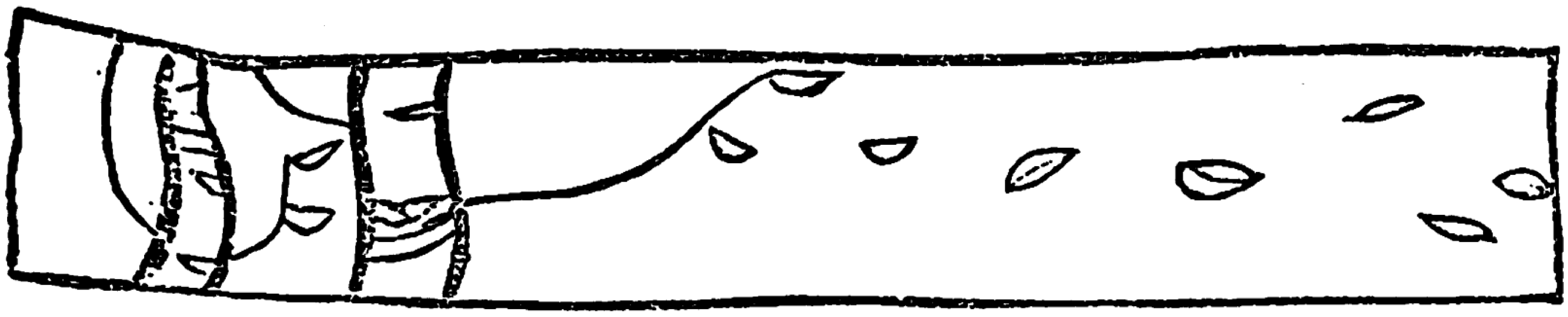
然しそんな强味も今のみね路には何の役にも立たない。

みね路はもう一と月も咽喉をわづらつてゐる。始めは醫者にも通つたが、それも續かなくなつて今は唯打つ遣りつ放しにしてある。惡血が骨の髓を休みなしに腐らしてゐるやうに、始終うごめき廻つてゐる。小さな動物に、柔らかく肉と骨の間を透してぢく〳〵と蝕まれてゐるやうに、みね路の身體は懶くつて倦怠るくて、然うしてうづく〳〵と性根のない痛みが身體の何所とも云はれずにはびこつてゐる。鼻の中がねばついたものを注射されてゐるやうに鼻の穴が小さく腫れふさがつて、唇の色が染みついたやうなどす黑い紫を含んできた。みね路はそれを氣にしてよく前齒で嚙み〳〵したが、どうしても眞つ赤なあざやかな血は唇のはじに滲まなくなつた。

「病氣のなほるまで。」

然う云つてさくらやからも斷られた。

女の顏を見ながら落着いて茶の間に屈み込んでる男の樣子を見ると、みね路には嗄枯れた自分の聲にも氣がさして、あんまり思ひ切つた口も開けなかつた。然し、今日も友達からかりた絲織の前掛を十五錢で屑やに賣つてしまつて、一日に一度の食にあり付いたことを考へると、男の懷中に手を入れても若干の金が欲しかつた。



然して男の手から自分の掌へ、一と片の銀貨を乘せられるまでの苦しい時間を思ふと、若いみね路は病氣ですがれ切つた自分の身體にそれだけの考へと力を滿たせるだけにもわな／＼と胸が震へる樣な氣がした。みね路の眼は引つ切りなしに瞬いてゐたが、俯向いてしまふと何も云はなかつた。

丁度障子の陰の梯子段をそつと上つてゆく足音がした。すぐ其所から茶の間の方へ顏をだしたおふぢが、小さい聲で男の名を呼んだ。

男はだまつて茶の間を出ると、追つかけるやうにまた梯子段を上つて行つた。

「何しに來たの。お前さんは。」

おふぢが然う云ひながら、長火鉢の前に坐つて手をあぶつた。みね路は返事をしなかつた。

「お上さんは何うしたんだらう。」

おふぢが又然う云つて欠伸をした。

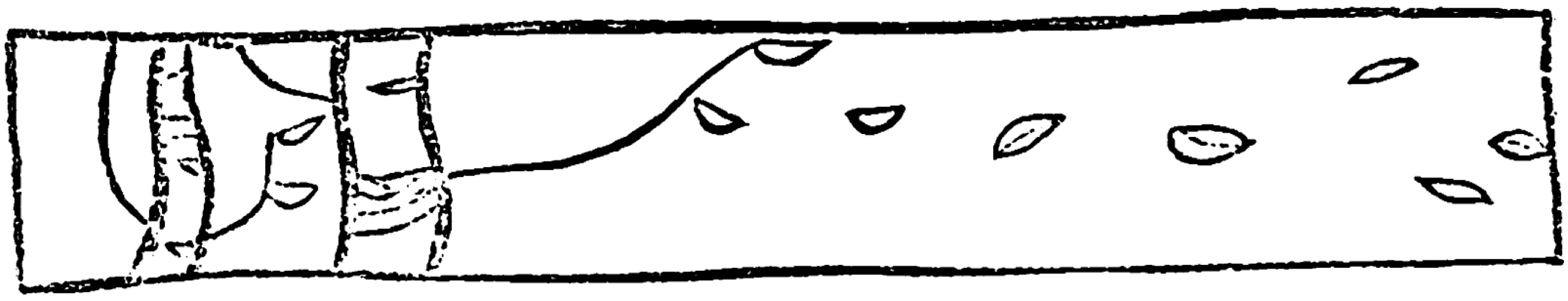
「何所へ行つたの。」

「お湯さ。」

みね路の蒼ずんだ顏と、おふぢの赤らんだ何かつぶ／＼と吹出ものゝしてゐる顏とが長い間見合つてゐた。

「容貌がわるくなつたよ。髮の毛が……まあ何うしたつてそんなに薄くなつたの。」

おふぢは片手づゝ、掌と甲とを引つくり返し／＼してあぶりながら、眼を上の方へやつてみね路の生際をながめてゐた。



「あたし、貧乏してゐるのよ。」
みね路は然う云つてゐる間に何とも云はれぬ悲しさが胸いつぱいになつて來た、病氣が重くなつた果てに、鐵道往生でもしやうとしてゐる自分の姿をふいと眼に浮べた。
「ちつとも身體はよくならないの。」
「あゝ。」
みね路は赤つちやけた髮のばらついた頭をがつくりと俯向けてゐたが、突然ふところから出した片々の手で、おふぢの腕をつかむと、
「この熱――」
と云つておふぢの顔をどんよりした眼でぢつと見た。
「お止しよ。」
おふぢは狼狽てその手を振り放した。
「まあひどいねえ。何うしたつてんだらう。」「急に發てきたの。」
みね路は其の手で額を押へると火鉢のふちに突つ伏した。
「おみねさん、おみねさん。」
おふぢは無暗とみね路の身體を搖つたが、みねぢは起きなかつた。
「お歸りよ。よう。此所で病氣にでもなられちや困らあね。お上さんの不在に私が困るからさ。」
「あゝ。」
みね路は自分の身體を何所か遠くの高いところへずつと運ばれてゆく樣な氣がした。だん／＼遠



くなつてゆく程、自分の耳の周圍で、、わや〳〵云つてた騷々しい音も遠のいてゆく——然うして四邊が眞つ暗になつた。

「おい。しつかりお爲。」

脊中をきつく打たれて、みね路は目が覺めたやうに顏を上げた。自分の横におふぢと女將のおくめが立つてゐた。

「何うしたんだね。だらしの無い女だね。さあさ歸るんだよ。」

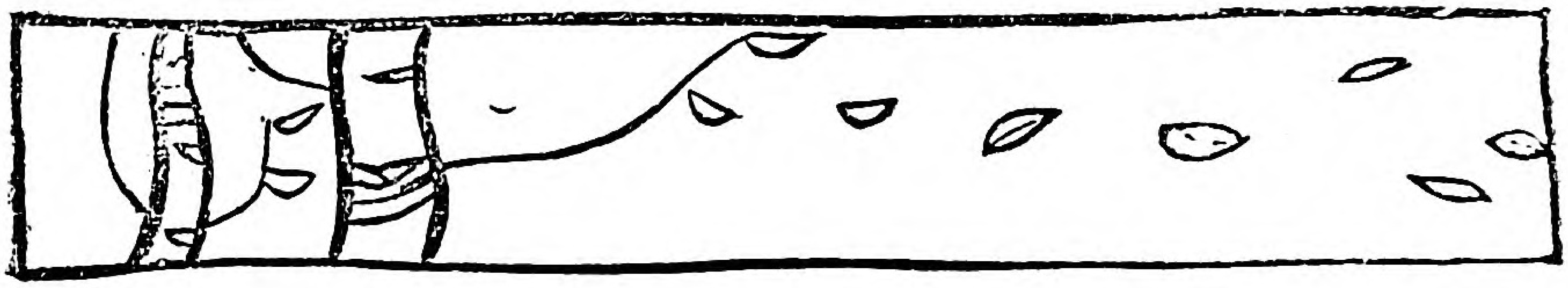
一寸の間にみね路の身體に粘つた汗が浮いてゐた。額を押へた儘でゐたと見えて、額にも掌にも汗がついてゐた。おくめは手に持つてゐた石鹼と手拭をおふぢに渡すと、火鉢の向ふに坐つて、湯呑みに茶をついでみね路に出してやつた。

「餘つ程惡るいんだね。」

みね路はだまつて其の茶を飲んでゐたが、思ひだしたやうに頭を振つた。おくめはみね路の黄色つぽい荒い新銘仙の羽織を見ながら、長い煙管に煙草をつめてから、火をつけるときに眼を上げてみね路の顏を見た。

「早くお歸り。」

みね路は傍に置いたボーアを取つて、それを頭に巻き付けた。いつもよりは心が確乎とぴんと刎ねを打つて、氣の利いた戲談の一とつも云へる樣な開いた氣分になつてきたやうに思つた。みね路は何とつかず白い前齒をだして笑つたが、おくめは不氣味さうに眼を避けて口をきかなかつた。それを見るとみね路は餘計、派出々々した態を作つて、せめて人好きのする樣子だけも人の目に



殘して歸りたかつたが、すぐに氣分が黑い雲でも被さつてくるやうに重苦しく、うつとりとして、矢張り物を云ふのも大儀になつてゐた。みね路は默つて立つた。いくらか借りて歸らうと思つたことも、ぴたりと蓋をされたやうに口に出なかつた。

臺所口から外に出ると、丁度向ふの家の裏木戸から男と女が出て來て、右方の拔け裏の方へ曲つて行つた。表へ出るまでみね路は、寒さに刺されて身體の戰えがやまなかつた。



驅落

ライネル・マリア・リルケ作
鷗外譯

寺院は全く空虛である。

贊卓の上の色硝子の窓から差し入る夕日が、昔の畫家が童貞女の御告の畫にかくやうに、幅廣く素直に中堂に落ちて、階段に敷いてある、色の褪めた絨緞を彩つてゐる。それからバロック式の木の柱の立つてゐる、レクトリウムを通つて、その奥の方に行くと、段々暗くなつて、そこには煤けた聖者の像の前に點してある、小さい常燈明が、さも意味ありげに瞬をしてゐる。それから一番奥の粗末な石の柱の向うは眞の闇になつてゐる。

そこに二人は坐つてゐる。その頭の上には古い受難圖が掛けてある。色の青い娘は、着てゐる薄い茶色のジヤケツを、分厚に出來た、黒い樫の木のベンチの、一番暗い隅に押し付けるやうにして坐つてゐる。娘の被つてゐる帽子の薔薇の花が、腰を掛けてゐるベンチの背中の木彫の天使の腮をくすぐると見えて、天使は微笑んでゐる。

フリッツといふ高等學校生徒は、地の惡くなつた手袋に嵌め込んである、ひどく小さい娘の手を、丁度小鳥をでも握つてゐるやうに、柔かに、しかもしつかり握つてゐる。

フリッツは好い心持に、現の夢を見てゐる。大方今に己達のゐるのを知らずに、寺院の戸を締め

るだらう。さうしたら己達は二人切りになるだらう。夜になつたら化物が出て來さうだなどと思つてゐるのである。

二人はぴつたり身を寄せ合つた。そして娘のアンナが、心細げに囁いた。「もう遲いでせうか。」

かういふと同時に、二人はいづれも悲しい事を思ひ出した。娘の思ひ出したのは、自分が明けても暮れても縫物をしてゐる窓の下の座である。そこからは厭な、黑い石垣が見えてゐて、日の當る事がない。少年の思ひ出したのは自分の爲事をする机である。その上にはラテン文の筆記帖が一ぱい載せてある。丁度廣げてある一冊の中にはPLATON, SYMPOSION と書いてある。二人の目は意味もなく前の方を見てゐる。その視線は丁度ベンチの木理の上を這つてゐる一疋の蠅の跡を追つてゐるのである。

二人は目を見合せた。

アンナは溜息を衝いた。

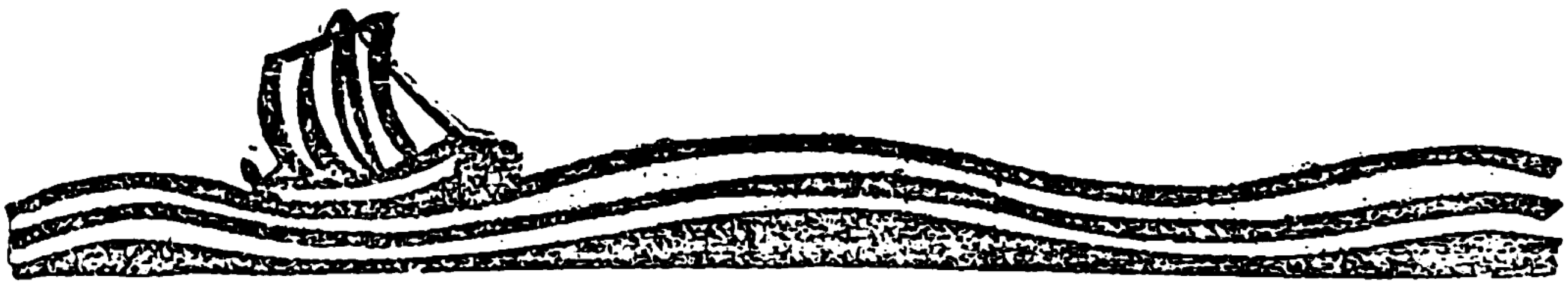
フリッツはそつと保護するやうに、臂を娘の背に廻して抱いて云つた。「逃げられると好いのだがね。」

アンナは少年の顏を見た。そして少年の目の中に赫いてゐるあこがれに氣が付いた。

娘が伏目になつて顏を赤くしてゐると、少年が囁いた。

「一體内の奴は皆氣に食はないのですよ。どこまでも氣に食はないのですよ。僕があなたの所から歸る度に、皆がどんな顏をして僕を見ると思ひます。どいつもどいつも僕を疑つて、僕の困るのを嬉しがつてゐるのです。僕だつてもう子供ではありません。けふでもあしたでも、少し收入がある

やうになりさへすれば、あなたと一しよにどこか遠い所へ逃げて行きませうね。意地ですから。」
「あなた本當にわたくしを愛して入らつしやつて。」から云つて娘は返事を待つてゐる。
「なんともかとも言ひやうのない程愛してゐます。」から云つて少年は、何か言ひさうにしてゐる娘の唇にキスをした。
「そのあなたがわたくしを連れて逃げて下さると仰やるのは、いつ頃でせうか」と、娘はたゆたひながら尋ねた。
少年は默つてゐる。そして無意識に仰向いて太い石の柱の角を辿つて、その上の方に掛つてゐる古い受難圖を見た。その圖には「父よ、彼等に免し給へ」云々と書いてある。
それから少年は心配げに娘に尋ねた。「あなたのお内ではもう何か氣取つてゐるのですか。」
娘が默つてゐるので、少年は「どうです」と重ねて尋ねた。
娘は默つて徐かに頷いた。
「さうですか。大方そんな事だらうと思つた。お饒舌り共奴が。僕はどうにかして。」から憤然として言ひ掛けて、少年は兩手で頭を押へた。
娘は少年の肩に身を寄せ掛けて、あつさりとした調子で云つた。「あなたそんなに心配なさらなくても好くつてよ。」
こんな風にもたれ合つて、二人は暫くぢつとしてゐた。
突然少年が頭を擧げて云つた。「僕と一しよに逃げて下さい。」
娘は涙の一ぱい溜まつてゐる、美しい目で、無理に笑はうとした。そして頭を振つたが、その様



子が奈何にも心細げに見えた。

少年は又前のやうに、惡い手袋を嵌めた、小さい手を取つた。そして竪に長い中堂を見込んだ。日はもう入つてしまつて、色硝子の窓が鈍い、厭な色の染みになつて見えて、あたりはしんとしてゐる。

その内天井の高い所で、ぴいぴい云ふ聲のするのに氣が付いて、二人共仰向いて見た。一羽の燕が迷ひ込んでゐて、疲れた翼を振つて、出口を搜してゐるのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

少年は歸途になると、まだせずに置いたラテンの宿題の事を思ひ出した。そして隨分疲れてもゐるし、厭でもあるが、それを片付けてしまはうと決心した。その癖わざとしたと云つても好いやうな不注意から、餘計な迂路をしたり、好く知つてゐる町で、ちよいと道に迷つたりして、自分の小部屋へ歸つた時は、もう夜に入つてゐた。

机の上のラテンの筆記帳の上には、小さい手紙が一本ある。それを取り上げて、覺束ない、ちらつく蠟燭の火で讀んで見ると、こんな事が書いてある。

「何もかも知られてしまひましたの。だからこの手紙は、わたくし泣きながら書きます。お父う樣はわたくしを打ちました。わたくしどうしようかと思ひますわ。もうとても外へ一人でなんか出しません。あなたの御やつた通りだと思ひます。御一しよに逃げませうね。アメリカへでも好いし、その外どこでも、あなたのお好きな所へ參りますわ。わたくしあすの朝六時に停車場に參つてゐます。六時に出る汽車がございます。いつもお父う樣がそれに乘つて獵に行きますから知つてゐます。

どこへ行くのが宜しいか、それはわたくしには分りません。誰か參るやうですから、もう書かれません。わたくしきつと待つてゐてよ。六時ですよ。どうしてもあなたとは、死ぬまで別れません。アンナより。わたくし誰か參るかと思つたら、參りませんでしたの。あなたどこへ入らつしやるお積りなの。お金はあつて。わたくし貯金は八圓しかなくつてよ。この手紙は、內の女中に持たせてあなたのお內の女中に渡させます。わたくしもうちつともこはくなんかなくつてよ。あなたのお內のマリイをばさんが饒舌つたらしいのよ。やつぱり日曜にあの人に見られたのね。」

少年は手紙を讀んでしまつてから、大股に室內を步き出した。なんだか今までの苦痛が無くなつたやうな心持がする。動悸が烈しい。兎に角一人前の男になつたといふ感じがある。アンナが己に保護を賴むのだ。己は女を保護する地位に立つのだ。保護して遣れば、あの女は己の物になるのだと思ふと、ひどく嬉しい。血が頭に昇つて來る。そこで椅子に腰を掛けた。その時、どこへ行つたら好からうと云ふ問題が始めて浮んだ。

この問題の解決は中々付かない。そこでそれをぼかす爲めに、跳り上がつて支度をし始めた。少しばかりのシャツや衣類を纏めて、それから溜めて置いた紙幣を黑革の紙入れに捻ぢ込んだ。それから忙しげに、なんの必要もない抽斗なぞを開け放して、品物を取り出しては、又元の位置に戾したり何かした。机の上にあつた筆記帳は部屋の隅へ投げた。「己はもう出て行くから、こんな所に用は無い」と、壁に向つて息張つてゐると云ふ風である。

夜中過ぎに寢臺の緣に腰を掛けた。眠らうとは思はない。餘り屈んだり立つたりしたので、背中が痛いから、服を着た儘で、少し橫になつてゐようと思つたのである。

橫になつてから、又どこへ行かうかと考へた。そして聲を出して云つた。「なに。眞の戀愛をしてゐる以上はどうでもなる。」

時計がちくちくと鳴つてゐる。窓の下の往來を馬車が通つて、窓硝子に響く。時計は十二時まで

打つて草臥れてゐると見えて、不性らしく一時を打つた。それ以上は打つ事が出來ないのである。

少年はその音を遠くに聞くやうな心持で、又さつきの「眞の戀愛をしてゐる以上は」と云ふ詞を口の内で繰り返した。

その内夜が明け掛つた。

フリッツは床の上で寒けがして、「己はもうアンナは厭になつた」と思つてゐる。なんだか頭がひどく重い。「兎に角アンナは厭だ。あれが眞面目だらうか。二つ三つ背中を打たれたからと云つて、逃げ出すなんて。それにどこへ行くといふのだらう。」それからアンナが自分に行く先を話した事でもあるやうに、その土地を思ひ出さうとして見た。「どうも分からない。それに己はどうだ。何もかも棄てゝしまはなくてはならなくなる。兩親も棄てる。何もかも棄てる。そして未來はどうなるのだ。馬鹿げ切つてゐる。アンナ奴。ひどい女だ。そんな事を言ふなら、打つて遣つても好い。本當にそんな事を言ふなら。」

五月の朝の日が晴やかに、明るく部屋へ差し込んで來た。その時フリッツは「どうもアンナだつて眞面目に考へて、あんな手紙を書いたのではあるまい」と思つた。それと同時に、少し氣が落ち着いて來て、この儘も少し寢てゐたいと思つた。併し又一轉して考へて見ると、やはり停車場へ行つた方が好いやうに思はれる。行つて、あいつの來ないのを見て遣らうと思ふのである。時間が來ても娘が來なかつたら、どんなにか嬉しからうと思つて見るのである。

まだ薄ら寒い朝の町を、疲れて膝のがく〳〵するやうな足を引き摩つて、停車場へ出掛けた。停車場の廣場は空虚である。なんだか氣味の惡いやうな、まだ希望の繋がれてゐるやうな心持をしながら、フリッツはあたりを見廻した。

茶色のジャケツはどこにも見えない。

フリッツはほつと息をした。それから廊下や待合室を驅け廻つて搜した。旅客が寢ぼけた顏をし



て、何事にも無頓着な樣子で步き廻つてゐる。赤帽が柱の周圍に、不性らしく立つてゐる。埃だらけのベンチの上に、包みや籠を置いて、それに倚り掛つて、不機嫌らしい顏をしてゐる下等社會の男女もある。

茶色のジヤケツはどこにも見えない。

驛夫がどこかの待合室を覗いて、なんとか地名を呼んだ。そしてがらん〳〵と、けたゝましく鐸を振つた。それから同じ地名を、近い所で呼んだ。それから又プラットフオオムへ出て、もう一度同じ地名を呼んだ。厭な鐸の音が反復して聞える。

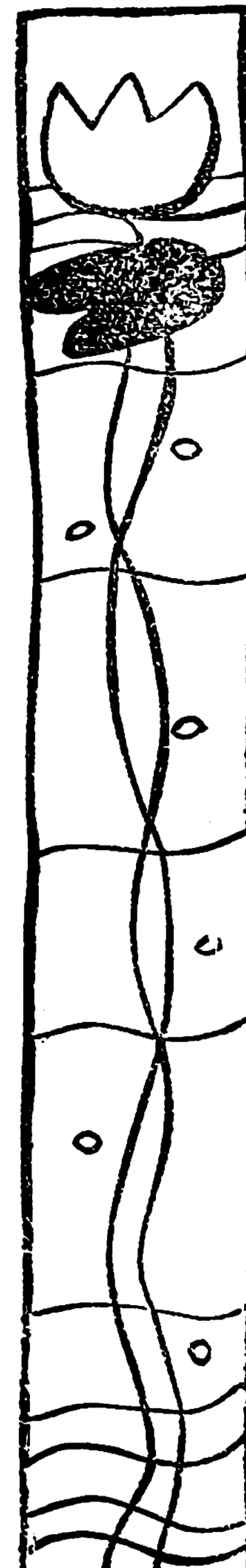
フリッツは踵を旋らして、ポッケットに兩手を入れた儘、ぶら〳〵廣場へ戻つて來た。心中非常に滿足して、凱歌を奏するやうに、「茶色のジヤケツはどこにも見えない」と思つて見た。「來ないには極まつてゐる。己には前から分かつてゐた。」

なんだかひどく氣樂な心持になつて、或る柱の背後へ步み寄つた。一體午前六時の汽車といふのはどこへ行くのか見ようと思つたのである。そして器械的に種々な驛の名を讀んで、自分がたつた今轉ばうとした梯子段を、可笑しがつて見てゐる人のやうな顏をしてゐた。

その時床の石疊みの上を急ぎ足で來る靴の音がした。

フリッツがふいとその方角を見ると、茶色のジヤケツを着た、小さい姿が、プラットフオオムの戶の向うへ隱れるのが見えた。帽子の上にゆらめいてゐる薔薇の花も見えたのである。

フリッツはぢつとそれを見送つてゐた。その時少年の心に、この人生をおもちやにしようとしてゐる、色の蒼い弱々しい小娘に對する恐怖が、壓迫するやうに生じて來た。そして娘が跡へ引き返して來て、自分を見附けて、知らぬ世界へ引き摩つて行くだらうかとでも思つたらしく、フリッツは慌てゝ停車場を驅け出して、跡をも見ずに町の方へ歸つて行つた。(完)



意外

佐藤萬壽子

叔母が何處かのお内儀さんと話し込で居るので、お葉は一足先に湯屋を出た。

『――其女はお葉がよく知つて居る筈ですと』と兄が叔母に話したと聞てから、彼女、此女と記憶から引張つて來て見るが、其らしい若い女の顔はどうしても見當らなかつた。

　誰だらうと？。云ふ疑問がお葉の好奇心を挑發した彼女は湯につかり乍ら櫻色の艶々した爪の色を見ても姿見の中に浮出る自分の顔を見ても、白い柔かな乳の上を洗ひ乍らも、其が皆自分とはかけかまひのない他人のやうな氣がして、自分と云ふものを全然意識しない程茫然して居た。

『どうしても藝者をした者は駄目だなんて……そんなら始めから約束なぞしなきやいゝんだ――あゝ私、喜代松さんに何てお詫したらいゝんだか？』お葉は何時か靜かに暮て行く姿見橋の上に立つて、なだらかな水の面を凝とみつめ乍ら斯な事を考へて居た『あゝ焦つたい、いくら考へたつて解りやしない……

だけど――誰なんだらうなあ――』
口の内で呟やくやうに言つてお葉は疲れて來た頭を調へるやうに空を仰いだが、直ぐほッと溜息をして烈しく頭を振乍ら、重さうに足を引摺つて歩き出した。
『姉さん、兄さんから手紙が來て居てよ。』
お葉が格子を開けると、妹のお文がすぐ飛で來てかう言つた。
『え、兄さんから手紙?、まあ厭だ、此處へ來てからまだやつと三時間計りしか經ないのに…可笑わねえ。』
『眞個にどうしたんでせうね、餘程變てこだわ――』
お文は眼を圓くして居る。
お葉は濡手拭を疊の上へ置たまゝ手紙を受取つて、何とない不安に胸を動悸つかせ乍ら

葉子殿　御手元　　　喜三郎より

とした封をピリ〳〵と破つた。

使の者が歸つてから御讀み下さい。

として又封がしてあつた。

先程叔母さんが來た時に話さうと思つたが、言出し惡かつたので默つて居た。

實は自分に心當りがあるから叔母さんの方は斷つて呉れ、とだけ先刻叔母さんに話して置いたのだが、其の女と云ふのは驚くなかれ、內の安なり、嘸皆な喫驚するだらうが、私は彼女に見處があつて定めたのだから、叔母さんがよく納得するやう宜しく頼むよ、安にはもう云聞せてある。

誰が何と云つても是非〳〵妻にせねばならぬからお前もそのつもりで居て下さい、では何分賴みます。

妹へ　　　　兄より

お葉は不意に鐵棒で胸を打たれたやうな氣がした。
ドキドキと打つ胸の脈の響、刹那に起つた驚きと、怒りと、憎惡とが入亂て兄へ對する嫌厭の情を燃すと其を煽るやうに下女の傲慢な態度や、粗暴な言づかひなど[illegible]が思ひ出されて、[illegible]顫ふ、喜代松の可憐い泣き顔が刹那に閃くと、炎のやうな想を消すやうに沈んだ絶望がうめく。

鬱と血の上つた頬は、食込程強く噛んだ唇の色と同時に蒼白て行く。全身の力が集つた手紙持つ手の上に熱い涙はぽと〳〵落ちた。

見るともない手紙の文句が繰返される。一秒は一秒と胸の炎は全身を這つて行く。

お葉は堪らなくなつて手紙を丸めて投付ると、思はず體を搖つて泣き倒れた。

姉の聲を洩して泣たのを始めて見たお文は、おろおろして落付ない眼の色で偷見て居たが、慰める言がなかつた、そつと忍び足に座敷を出て行つた。

『泣てるつて?、何がどうしたつて?。』例の賑かな聲を先に立て、叔母は男のやうな歩き方を爲乍ら這入て來た。

『え、何うしたと云ふのさ、泣てちやあ解らないじやないか、え、何と言つて來たのさ。』から言乍ら叔母は、投出すやうにぐたりとして泣て居るお葉を見ると餘にその小供らしいのにお可笑く思ひ乍ら、自分もそゝられるやうに不安さうな瞳を光らせて妙な笑ひ方をしながら、投付られた手紙のしはをのばして讀始めた。

『えゝ——何?ンまあッ………』

半分讀みかけて呆れたと云ふ表情と同時に、思ひきり息をすつてそれを吐出すやうな言方をする。其が又お葉の悲しい、情ない思を誘ひ出して彼はその聲を聞くと身悶へして泣いた。

『叔母さん! わ、私、もう……』しやくりながら訴へるやうにから云つたまゝ又泣く。

叔母も鼻をすゝつて居た。

『あッあ、私は喜三郎を全然誤解なつたよ、こ、こんな奴たあ思はなかつた……何だつてまあ選に選てあんな女を……えゝ何の夫婦になんかさせるものか?下女に置てあるだけだつて私あやつと堪へてるんだのに、畜生奴!、彼奴あ母親の事をもう忘れて了やあがつたんだ、親不孝、碌でなし奴!……』

涙に聲がかすれる。力からはづれた上ッすべりした音がはなれ〴〵になる。

『あゝ佛の事を考へると……を、叔母さんは、胸が張

裂るやうだよッ――え丶もう、何うしても彼奴と夫婦になると云ふんなら、叔母、甥の縁を絶つて貰ひませう！何がくそ、喜三郎計りが甥ぢやあないや、彼の世話に成ないッたつて眞逆野倒死する事もあるまいさ、――ねえ葉や、お前だつて叔母の一人やそこらたとへ他家へ嫁つたからつて乾干にするやうな事はあるまい……眞個にもう頼りにするのはお前計りなんだからね――何卒……』

『おばさん？』お葉は引たくるやうに呼かけて、

『其麼事いふと、私、心細くつて……』とやつと涙を拭て叔母の方へ振返つた。

『あの私ね、是からすぐ歸つて兄さんによくわけを聞かうと思ふわ、そして、その答によつては、もう……兄さんが別になるまで家へ歸るまいと思ふの……』

『そんな奴があるものか？、あんな女ッちよに家を引掻廻されておたまりこぼしがあるかつて、次第によつちやあお父さんが嫌な顔したつて構はないから追出て貰はなくッちやあ……』から言作ら立上つた。

『じやあ叔母さんも神田へ來るの？』

『行くとも、行かなくつてさ。』叔母は涙の眼で凝とお葉を見て言つた。

裏の家へ留守を頼んだり、お文を預けたり、そこらを片付たりして手間取つた兩人は、灯の輝きそめる頃やつと家を出た。

冷々した風が熱した頬をなでると、お葉は思ひ出したやうに持て居た絹半巾の襟卷をして、急に總毛立た體を縮ませた。

兩人は人影のない戸塚の原を默したまゝ歩いて居る春の夜のやうな朧な月に目白臺や早稻田あたりが烟つて見える。下町に育つたお葉は灯の見えないかうした處の、草を踏んで歩くのがわけもなく嬉しかつた。

清らかな、うつとりしたそこらの空氣が靜かにお葉の胸を落付せて行く。

[illegible]僞、彼は自分の[illegible]を誰か[illegible]身の輕さを覺えた。

一時間前の自分のはしたない姿や想が浮ぶと思はず

苦笑して俯向た。刹那の眞ではあるけれど餘りに芝居めいて居たと考へる。そして叔母の言が妙に胸に殘つて居た。

『あゝ〱餘り皆なが心配計りさせるから叔母さんはもう死んで了ひ度よ今考



へるとお前のお母さんは早く死んでかへつてよかつたんだね。』先に立つて歩いて居た叔母は、突然情けなささうな溜息をして呟やくやうにかう言つた。それが

何となしにお葉に不快な感じをあたへて、彼は仕方なさゝうに笑つた。

『だつて今に樂が出來ますわ。』

何の氣もなく拍子で出たこんな言が叔母には嬉しかつた。然し彼は後の事より現在に困ると思つた。

『そりやあねえ……何だけど——まあさ、打明た話がなくつちやあならないからね、叔母さんはたゞそれだけが心配なんだよ、……それと云ふも皆な淺次郎が意氣地なしだからさ、あふらく〱仕事もしないで遊んで居るくせに、汝が財産を神田の家へ預けてゞも居るやうな氣で、何金貰つて來いなんて太平樂を竝べちやあ酒を食つて居やあがるんだからね。

なんぼ叔父で候の、叔母で候のッたつて私しやあ眞個に厭で〱仕様がないんだよ。そらでらんな、ねえ、から云ふ[illegible]時に叔母らしい口がきけますかつて？——今もさ、それを考へたら喜三郎に逢のが辛くつて、此處から何處かへ驅出して行つて了ひたいやうな氣がしたんだよ……』遣瀬ない思のこもつた眼で足元を見乍ら言ふ。

『本當にねえ……』沁々した風で調子を合せた。それッきりで又沈默に返る。暫らくはたゞ下駄の音ばかりが夜の寂寞を破つた。

横鬢に大きな禿のある薄い髮の毛や、大きな口や、顴骨の高い、鈍い眼の卑い顏を思ひ出してお葉は思はず微笑を洩した。

『ねえ、』ヒヨイと呼かけた自分の聲に調子づいて、嘲るやうな風で笑ひ乍ら叔母に言つた。

『だけど、安は常識のある女じやあないわね、いくら馬鹿だつて少しは考へさうなものだのに……自惚もここまで來りやあ澤山ね、ホヽヽ、喜代松さんのやうな美しい、優しい、あんなに想つて呉れる人を藝者をしたものは駄目だと云ふのを口實にして約束をほぐにしたくせに、あの女はどうだらう、[illegible]居たといふじやありませんか……』

『ふん、』叔母は鼻の先でせゝら笑つて、

『下女もいゝさ、だるまもいゝさ、たとへ何をして居たからつてその人の心掛一ッでね——だから私しや決して野暮は云はないつもりだ。ねえさうだらう？、喜代松の事をお前から聞た時はかへつてよろこんだ位なんだからね……だけど、彼女は何だい、そりやあんないゝお母さんだから何にも云はないで居たけれど、恰度死ぬ時だよ、怜悧なお母さんだから態と私を呼ばずに叔父さんを呼んでね、淺さん、喜藏の身内は澤山あるけれどたつた一人の義弟の貴下に皆な小供を預けるから何卒立派に育てゝ下さい、たゞどんな事があらうと喜藏の身内の手へは渡して下さるな、と外の事は何も言はずにたゞそれだけを遺言にして眼を眠つたのだよ、あの姉さんがそれだけの言を云ふのはもうよくよくであればこそなんだからね』ともう涙聲になつて『眞個にお父さんさへ居なかつたら思ふさま、苛つて苛つて苛りぬいて、もう二度と再び家へなぞ足踏の出來ないやうにして呉れるんだけれど……』

お葉には其の惡たらしい言が快よく響いた。

父の養子である事も、從姉の、はとこのと言つて若い女の絶間なく出たり這入たりして居たのも、よく覺えて居る。

座敷に吊した洋燈の光に照されて薄明るい臺所の隅に根のぬけた丸髷をがつくりさせて、おみそを摺作ら啜泣く白い顔と、淺黄色の襷と、細い腕との印象が瞭然して來た。

『母ちやん、なぜ泣くの？』お葉はよく竊と後からその肩へつかまつて顔を覗込では心配さうに聞た。

『なに母ちやんが泣くものですか？、さ、早くあッちへ行つて寢ねして頂戴！。』何日も顔をそむけてはかう言つた。

痛ましい影から影へと聯想が引張て行く。悲しい、懷しい涙が睫毛を濡した。

『何卒私の身についたものは皆な二人の娘にやつて下さい』と言つた衣服から頭の物は初七日に父が從妹とかいふ女の所有になつたと云ふ話しも聞た。

お葉は、兄が金にあかして造らへさせた、あの立派

な簞笥や、火鉢や、茶簞笥や、鏡臺や、用簞笥や、其等の物品が皆憎んで居たお安のものとなつて、自分等の目上に立つ人に成るのかと思ふと、堪られない反抗が物質上の嫉妬を誘つて又しても胸が燃える。

そして彼は無智なお安の頭に刺戟するやうな強い言を浴せてやりたいと思つた。

『その後、喜代松さんから何にも言つて來ないかい』ちら〳〵灯の見える細い通りへ出た時、叔母は思ひ出したやうにしめッぽい聲でかう言つた。

『えゝ、ちつとも。』お葉はふいに言はれてハッと爲作ら振り向せられたやうに喜代松を思つた。

『可哀相に……あの人だと眞個にいゝんだけれど――ねえ葉や、何かして夫婦にさせてやる工夫はないかしら？。』

『だけど、それじやあなほさら彼女が可哀相だわ、叔母は流石にふしだらな喜三郎を思つて默つて了つた。

喜三郎は母親から受た美しい容貌を、女のやうに化粧ては多くの汚れ女を玩弄にした。

彼はよく夜おそく歸つて來て、まだ本を讀んで起て居るお葉の前へ、縮緬づくめの體をぐつたりと横つ坐りに据て、勝誇つた瞳を輝かせ乍ら、女の話をしては甘へたんだぜ？、と笑つて居た。

お葉は苦々しく思ひ乍ら、纏りかけた自分の縁談の成た日には誰よりも此の兄の世話にならねばならぬ事を考へて『まあひどいてとを……』位にあしらつて居た。

然し、今日の手紙に對しては何日ものやうに、河向ふの火事だ位にすまして居る事が出來なかつた。

自分等の胸に深く刻まれた母と云ふ名が、お葉のゆるんだ心を締付る。彼は今までの兄に對する態度が水の泡となつて了つた、やうな氣がした。

赤い色と、暗い色に彩られて電車に搖られながら、お葉は今までにない安心した、そのくせ詰らない顏で時[illegible]時叔母と眼が合と、[illegible]つた。

若き自然

ひざくら



それに氣のついた時、懐しい友よと、その横顔を眺めて居た。

☆

眼の下は五丈もあらうと思ふ斷崖に腰を下した、腰を下す時ひざに重ねた八ツふりの緋の美しと眺めた。私はさらりと衣ずれの音させて、友も腰を下した。持つてた帝國文學をくるりと卷いてさへぎる物もなく自由に見らるゝ雲の形、雲の色の不思議に變るのを眺めて居た。友は、蘆花さんの思ひ出での記を讀で居るので。なみにくい形、みにくい色してまだ散らぬ枯れ葉が風にはためく度、きちんと合つてる襟もとを氣にしてはふり仰ぐので、淋しいの、と、かたはらの友に問はれて答へるかはりに、一寸笑ふと、淋しがりのくせに、淋しい所が好きなのね、憐むやうにたしなめるやうに私語て古木のやうに立つてる私を、片袖でかゝへる樣にして笑ふ、肉づきのゆたかな友の、溫か味が柔かに移つて來る。

夢の樣に目覺めた懐しさが、しだい〳〵に深くなつて來て、握るともなく、ふれ合つてたゆび先に、力が集まつて知らぬまにぢつと握り合つて居た。

せ見ないの、あの美しい雲の自由さを、と言はふとして、ふとやめた。
下町の方のさわぎが、まるで別世界の樣に思へる。あゝ靜に暮れ行くこの斷崖は、二人の天地よ。私の醉ふた樣な心の中には、この友よりほかのものは無かつた。
友も何時しか眼を上げてうつとりとして居る。眼に見ゆる物にみとれて居るのか。心に浮び出でし何物かに憧憬て居るのか。
ふくよかな白い手は何時か私の肩にかゝつて居る。はるかに見ゆる林端に月代のさせし頃、若き二人のひろやかなる自然にとかされし感情は、何時か二人で世界を旅しませうと約束した。

☆

ふと二人はくちびるを閉ぢて、ふと見出た鳥の行へを追ふて居た。妙に惜まれる鳥の姿がすうつと夕べの空に消え去つた時。あゝ行きたいは私も。と夢のやうに上げた友の聲に私はゆくりなくも醉はされて無言のうちに、あゝ自然の聲よ、と唯くり返した。其の刹那の友の心がどんなに懷しかつたろう。

遠き林端をかすめて長く流れてゆく黒烟の上に輝ける星を美しいでせうと言ふ。畫の樣ねと私は答へて夕闇のなかにあつさりと墨畫の樣に見える二人の影を想像した。
近よる人もなき夜の斷崖は、二人の爲にどんなに安らかであつたらう。
ほのほの樣に熱して來る言葉をふと氣づいては幾度制し合つたらう。
大洋の如く平和にかへつた胸に、一人は未來の×××ゑがき、一人は未來の×××をゑがいて歩を返す時全身は氷りの樣に冷へきつて、震へて居た。

☆

母樣がどんなに喜んで居られるでせうね、唯一人限りの芳つちやんが、こんなに大きくなつて、着物も長く着るやうになつたし、帶も結べるやうになつたし、前髮も出すやうになつたしつて大きなお體でゆつたりと抱くやうにして頂から御自分の妹の喜びを喜ぶやうにお伯母樣も仰しやつた。
一年もお目にかゝらなかつた方は、誰も誰も我が妹の伸し事を祝ひて、母を笑しめ給へと、親にたいする

我が悲みは常に新しき涙を湧しめて袖をぬらせり。

母様は、やつぱり妙ちやんの様に、お嫁入の時の着物を心配するやうな子のはうが、ほしかつたでせうつて、伺つたら無言で笑つて居らしつた。

けれどもね母様、お嫁入の時の着物を心配するやうな子よりかも私達のはうが



（天賞）　姑と嫁　赤坂　中村弘子

よつぽどえらいのよつて言つたら、やつぱり笑つて居らしつた。

來年は肩上げを取りませうか、さうするともう甘へられなくなるからつて、言つたら、前とはまるつきり、變つた笑みかたをなさるんだもの、どんな惡い事をしても御免なさいつて言ふと笑つて下さる戀しい父樣よ、母樣よ、どうぞ私の決心のゆるがぬやう祈つて下さい。あゝ十年の後私の此の希望は親に悲みを捧げるであらうか。喜びを捧げるであらうか。お呼びになつた時、やさしくお返事してさへも嬉さうなお顔を眺めては、あまりに親の心の憐まれて、私のすべては碎かれて終う。

私は父樣と母樣の子なんだもの、自由になろうか。人形の樣な子にと思ふ時もあるけれど。

唯愛しみて育てし子の、ノートにしるされる文字が父樣にだつて母樣にだつて、どうして御想像が出來やう。

冷笑する者は冷笑せよ、公明なる我が良心のゆるせる行爲を何んで恥ぢやう。

☆

小草にも石にも目にふれぬ小さな〱ものにまでも生ようとする力はあふれて居る。

私にも生ようとする力はすべてに張みちて居る。それは唯呼吸して居るばかりでなく。何時來るか何時迫るかは、分らぬけれども終りの床に横たはる時、それと、さとつても、安心して眺められる自己に、生たいのである。

あゝ死すべき瞬間には、始めて天地にも、もりきれぬほどの、愛しみをあたゆべき、自己を作りたいのである。

自己の空虚な生涯を痛切に恥しう思ふのは、やつぱり自己の前に對しての時であるから。

虚榮心をみたしめやうとするためでもない。奇蹟を作ろうと思ふためでもない。思へばなんて寂しい。なんて尊い願であろう。

靜な心にてんな事を考へてる日は、どんなに自分が有意味であろう。

生きとし生ける者皆が生きんとする努力を忘れた時に、世界はほろびるであろう。

大いなる完全は大いなる破壞を意味し。大いなる破壞は大いなる完全を意味す。

世界の始めとは、終りとは、いづこにあろう。あゝ神はおもちやに人を作り給へるのではあるまいか。こんな事を思ふ日の私の心は、とりとめもなく大膽にひろがつて行く。

☆

あゝ愛しむこの若さもほろび、この愛しむ生命もほろぶる日あるは燒印を押せるが如くなれど、唯其の時の、測れざるのみにて、かく安んずるを思へば不思議にもなる。つまり私はどうしたつて死なゝければならぬ。

母樣から生れた私は、どうしたつて死なゝければならぬ、けれど、私の生ふとする私を完全に生得たならば、なんでほろびる日があろう。なんで死する時があろう。我が生の意義とは、私が死しての後に始めて完全するのではあるまいか。あゝどうしたつて生きなければならぬ。つとめて有意味に。

恐れずに言へばジーザスさへも、釋迦牟尼さへも、古はやつぱり人であつた。

何事も決心と努力の大小によるのではあるまいか、思へば人のライフも樂しきものなるかな。

つまり自分の運命は自分で作り得るのだと叫びし君を懷しむ。

☆

得られやすき幸ひのためには、心のうちの寶をもほろぼし、いとも尊き智識をもほろぼし、いとも美しき戀愛をもほろぼす。

あゝ得られ安き幸ひのためには、すべてのもの、、葬りさらるゝを見よ。なぜに人は死するべき日の及びなき幸ひを祈らぬのであろうか。あゝ得られやすき幸ひのためには、得られがたき尊きもの、葬りさらるゝを見よ。

不斗夜半にはつきり眠が覺めたので、闇のなかをぢつと見つめたまゝ、一字一字心に記るして居るうちにあまりあざやかに自分の決心が眺められたので、急に淋くなつて悲くなつて聲上げて泣きたくなつて終つた。けれども私は決してまよはない、崩さない、うたがはない。と何者の前にともなく誓うやうに枕を强く强く押しつけて居た。

☆　☆



×××寄宿舍

冷雨

○○○！私は如何に此名をしたひ且是に憧憬たでせう！忠實なる考へと一層専門勉強したいといふ希望とを持つて、此校に這入らうと可成勉強しました。其甲斐あつてか無事に入學ました。此後は樂しみにしてた學問も出來、又是迄にした事のない寄宿生活もできると思ふと、もう眞實に嬉しいのでした。若き眞紅な血の燃ゆる人のみ集つて好きな文學の話も思ふやうにでき、常に慕うてた人々を師として仕へまつることゝ思へば、さすがに嬉しうございました。しかし是は一時の夢！唯一炊の夢にすぎませんでした。今はもう一刻も此處に居るのが厭になりました、あまりに期待してた事が大きすぎた爲なのでせうか、見る事聞く事が皆眉を顰める事ばかりです。私の心が氣儘だからと被仰る方があるかもしれませんが世の中の大方の事は實際自分が其事に立ち入つてみねばわからないものでございます。かう思ふのは私ばかりではございません、ああつくぐ厭になつたと心から嘆息の聲を御出しになる方がございますもの。若し事情がゆるしますなら私は疾うに此處には居なかつたでせうけれど、もう甚麽に踠いたつても檻に縛がれた獸、如何することもできないのです。悲憤の涙を流しつゝも尚留まらねばなりません。そして此寄宿舍の中にはずゐぶん種々なことがございます恰度荒浪猛り狂ふ社會に居るも同樣、御蔭樣で憂世の味も少しは知りました。

あゝ世間に知られた○○の寄宿舍！皆樣は什麽に御思ひ遊ばしてるでせう、定めし樂しい立派な所と御考へ遊ばしていらつしやるでせうね、けれど事實を申上げましたら甚麽にか驚きなさるでせうそしててんな事がと意外に思召すでせう。浮薄な殘忍な利己的な二十世紀の風は此處にも吹きあれてます、其上思想は一體に陳腐な十八世紀位で何でも彼でも皆女大學流で律しようとしてますの。

先生方には高い人格の高い徳行に於て學問に於て師として仰ぎみるやうな先生はほんとに少なうございます神でない以上缺點のない人はでざいません、けれども生徒の御機嫌を取つたり今の世に融通しない時代お

くれの言葉を振りまはして妄りに叱り飛し、ニヤ〳〵笑ひながら世間話などで貴重な授業時間を半分もつぶしたり、又或生徒がてゝはかういふ意味なのでせうかと質問すればそうと御返事遊ばし、同じ處を他の一人が今のはかういふのが正しいのじやないでせうかと伺へばそうですねとそれに御賛成遊ばしたりする先生、私は如何しても敬ひ信ずる事はできません、

もう〳〵厭で〳〵なりませんの皆様はどう思召して？

でも是等の先生方には、其時間々々の授業をうけます許りですからまだよいのですけれど、舍監の先生は寢ても覺めても一處でございますからね………舍監には獨身婦人は反對でございますよ私、尤も人によるのでせうけれど大方のオールドミスと名のつく人は同情心の深い溫情の溢れてるといふ人は少なう御座いますね。事あれと朝夕に見まはる



（地賞）山の女　長野縣　秋丘こずゑ

る舎監の御目の恐ろしきかな。と誰やらの御歌、全くでございます、所謂舎監根性とでもいふのでせうか一寸接してもヒヤリとするやうでございます、そしてそれは細々しいのですよ、眞實何か事あれと思召しなさるわけでもございますまいけれど、くだらぬ事にまで御注意遊ばしますの。ゑえ？皆の爲を思からですつて？ええ、それはもう深く感謝してます、しかし相當に皆普通教育をうけてきた人達ですもの、些細の事にも態態呼びつけられて頭からガミ／＼言はれて如何なる氣持がするでせう、十二三の子供じやあるまいし、なんで大人しく唯と言つてませうや必ず反抗心を起します又あんまり細々した事を言はれては心持よくはありません、御金を幾何以上持つてならぬ財布には紐をつけておけのなんて被仰るのですよ。そのくせに生徒が病氣になつたつてたまに如何しました位なもの故郷を去り溫き父上母上の膝元を遠く離れてる身は常日頃木の葉の落つるを見てさへ何となく涙ぐまれますものをまして病氣の時は一層心細いものです、それに舎監が一言の溫言もかけて下さらないのですもの、甚麽に悲しくなりませう！此麽時はつく／＼翼があつたらと思ひますよ。又他所を訪問しますにも親類以外でしたら大變、如何なる事から知るやうになつたか家内の模樣職業等を聞かれますの、又大學病院へ見舞に行かうとすれば、獨りで行く所ではありません誰か一所に行く人がありませんかつて、誰がしらない人の病氣見舞に行くものですか、ございませんと申上げると難かしい御顏で、そんなら仕方がありません、行つて被入い、しかし直歸るのですよ、三十分以上居てはいけませんと宣告されるのです。例へどんなに嚴重にされても惡い事をする人はどんな方法でするかしれませんわね、此處には其麽人はございませんけれどあんまり束縛しすぎるじやないでせうか、一通りの教育はうけて而も○○○にならうといふ希望を持つてるのですもの、そこには思慮といふものがございますわ、小遣帳を見て戴いても少しでも變だとなると、早速呼びつけられて強い御尋ね、一葉全集を買つたつては招ばれ、藤村詩集をつけてあるとては白眼まれ、もう〴〵何も小遣帳にはつけぬこと、それが一番安心ですわ、是位の小說詩集を買つて睨まれては文科の價値はどこにあるのでせう、但し源氏物語のやうなものはかまひませんの増鏡は教科書になつてます、是等の中にも隨分いかゞはしい所があるじやございませんか、ねえ！でも現代

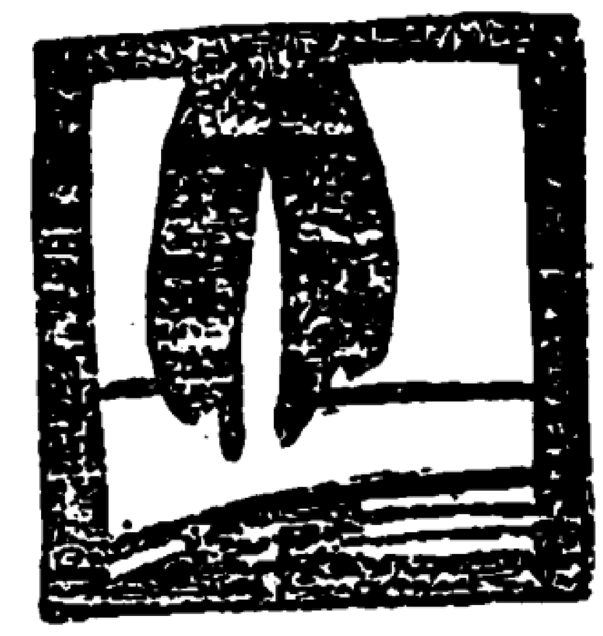
言葉でないので宜いのかもしれません。手紙も三度に一度は外出の序に出します、出すのもくるのも一々はがきなら下検分がございますので、男の人からだと一一帳面に書き控へてございます、面會人も若き男の人は一寸注意されます、ですから叔父でも從兄でも若い人にはなるべく會はぬ方がよいのです、これでも大方は推されませう。

　儉約にせよとは耳に蛸のできる位聞かされる言葉です、目だゝぬものを着よ、香のある油はつけてはならぬと、それはやかましいのですよ。香のない油なんてどこにありませう、未だ見た事がないので少々困りました、着物も年相應なのでは派手だから、ずつと質實なものにせよとあんまり情ないじやありませんか、何も私飾りたいとは思ひませんけれど、同じ御金をかけてわざ／＼見にくい姿をしなくともいゝと思ひますわ人生の花の時代ですものねえ。ですから皆妙な姿ですの。ほんとに可笑しいのですよ。しかしさすがに靑春の女でございます、陰ではこつそりレートやクリームやら朝々鏡に向ては大騷ぎです、でも白粉だけは遠慮してますの。

　發育盛りの私共三度の食事では少し不足を生じますの。ですから時々御菓子屋に參ります、又此頃は書生の羊羹とさへいはれてます物、あの煙のボツ／＼とたつてるのを見ては殿方でさへやりかねないこと、まして女オホヽヽヽですものね、御腹の虫はたゞでは承知しませんわ、早速ＳＰ會を開きますの、え？袴をつけてゆくのかつて？まさかね割烹の方に賴みますのよ

　此處に入學る位の人ですから、隨分質朴な頭の人間が多うございます、惡く言へば融通がきかないのですね、夢見てるやうな人もございます、それで利己主義で、そのくせ不仕末です、好な所になら我先にととびでる代りに、厭なことにはお互にゆづりあつてます。女の美德として稱へられてる綿密なんてことは御家に忘れて被入つてるのか、我物をそこらに打ちやつておいて、どこそこにおいたのがなくなりました、と申出ることは毎日たえません、箱の中でも机の中でも亂雜さ加減一寸物を拜借しようとすれば、上を下への大騷ぎとんだ御氣の毒な思ひをする事も度々でございますまあ隨分惡口を申しましたのね、後の祟りが恐しうでざいますからもう止めませうよ。

　卒業してからの事を考へますと涙がこぼれるやうです、誰やらが此處は後妻養成所ですつて……。



處女より妻に

磯村春子

わが眞の價値ある生活はこれからである、處女より妻に――私は眞面目である。將に人生の一階段に昇らんとする人と人の……………天地に二人が瞳こそ、最も輝け。親よりも、同胞よりも。ゆれゆるゝ時の響は、刻々に築きゆく我信の樓臺くづさんとすれど、たゞ一向に、我々を支ふるくるしき努力よ。我「女」なる悲しみに、君「男」なるわづらひに、み手よ、手よ、共に蹈み行く土の永久に青なるを頼まれまじき世なるを知れゝば…………

われ、人生の眞味を悟れりといはゞ、よしやよし、我は共に我心を見まもり、育くみつゝあるを信ず、噫感謝すべきは藝術の德よ、我生は尊し、君も尊し、かるが故に藝術の光は最も尊し。尊き愛に生くる我等は幸なるかなといはねばならぬ筈なれど…………われらの苦しさ、我等の悲しさ、結婚は決して、傳習的に祝福すべきものではあるまい。

我が衣は、凡て我が手でと母に請ひて仕立上げし裾模樣の松よ、松の緑よ、古い呪の涙かざれる我國の植物は、苦しい松の胸つゝむべく、あまりに單純な繪草紙めいた感じをしか與へぬ。あか〳〵と燃え立つ炎にこそ我が生は輝け、うす暗いさびしき陰の安息におのゝき、いましめつゝ、われら二人、常に光ある路を歩まんことを願へど…………

黃ば味たる正午頃の光に影迄はせて、ちり〳〵にゆく我が血緣の人々…………この道のはてには、お祖母樣の墓があるのだ。…………としみ〴〵思ふ。法要なので。

(おとなしい)とか、(内氣な子)とか世に評せられる私は、たまに家を離れると、陰欝な林から、ふいと廣い湖にでも出たやうに、かつと胸が明るくひらけてちり雲のゆらぎにも、動き易い神經は絡はり顫ふ。冷たい華やかな新開地の空氣のこゝろよさ。

表情の沈默した絶望の女の顔を思はせる動かぬ水の底の深い〳〵空を見入りながら石橋を渡る。實をもつて衰ろへた草老成なる暗默の美よ。早く戀ひ、早く衰ろふ女なるが故にわれは愛す。

あゝ、澄徹せる水のごとき白き淋しみ。純黄色の刈

稲は、とつしりと縮緬の重味を、畦の榛樹に垂れて、消耗しつゝゆく、筋肉の報酬を勞働者に與ふ。無智即幸福と道破せる人を思へばかなしい、わがこの乳房、この心。お祖母様のお墓へ――それだのに、どうして私の顔は笑んでゐるのだらう。二旬經たば姑となるべき人と肩を比べて、帝劇の噂なぞ、しながら。

我生を我は深くよろこぶ。尊嚴なる衣冠の人の幸をもあはれみ。人語に超然的態度を持し、われ明かに我踏むべき土に立てるを信ず。天よ地よ、幾世紀の歴史よ、わがこの呼吸よ…………。

「サア……サア……どうか貴女、お先きへ……サア………………」

せつゝく様な×町の伯母の聲に振返ると、みんなは未だ、石橋を渡りかけてる處だ。赤い齒莖みせて笑ふ猫背の人で、キヨロ／＼動く三角目は、實によく、彼女が過去を語つてゐる。

「おかしな人達ですね」前なる人は、ちらと冷笑の目を私に閃めかせた。

境遇に變化せられた人の目を思はせるキコク垣を曲つて、大きな石門から、常磐樹の蒼暗い光と影の疲れかゝつたなかを、各々異なる下駄の音に淋しく心をかき亂されながら、寺男の、しきみの枝を持つてゐる庫裏の傍の廣間に通る。見なれた水引や丈長よりは西洋的な紅白のコスモスが丈高く咲いた金魚池のある廣い庭で、鼠もちの垣の外に黒い汽車の柵がみえる。明るい庭だ、こゝろよい庭だ、しかし、床の間の黒水晶の置物や、春堂の名筆に對しては例の現代的矛盾を示してゐないとはいへない。

「やア、どうもおまたせしましたなア………。

へだてのふすまをする／＼と開けて、つる／＼した顔を出した。住持だ。生活の爲め、黒い衣きて、珠數繰つて、空想を語つて天晴れ宗教家顔せる四十男の瘦せた顔をみて、しみ／＼運命の力を思つた。この人にも子がある妻もある、その上妾もあるんであるもの軈て方丈に導かれて、檀家の人の油でつる／＼した廊下を通つて本堂に入る。方丈は、緋の衣をゆるがして俳優のやうな態度で、どんすの重蒲團に坐り、例の寂びた聲で、經をはじめる。施主は凡て十五人程、男は彼方、女連は此方。

金色の本尊、白蓮造花、天女の掛物、友禪重蒲團この鐘みなこれ「死」を飾るべく供へられたものであるあゝ、かつてわがいやしめし物質の光彩は、かくの如

く華かなかなしみを、本堂の内に漲らして、我等が今を包んでゐるのだ、生きてゐる内だ！どうしても、どんな苦しい思ひをしても、我等は強き者とならねば止まぬ。やがて我爲に無意味な嗚嗚は濟んで。住持は、ぴら〳〵パタと經本を閉ぢ、きらりと少さな瞳を光らせて、

「どうか、お燒香を！」

父は、がり〳〵頭かき〳〵、ついと立つてお燒香をする。

「やア、どうかあちらから、」「なに、そちらから！」

例のゆづり合ひが始まる。

「ハヽヽ、兩方に花道があるんですから！」父がいつた。どつとみんな吹出してしまふ。

私も共笑ひしながら、意味深い裴哀の音波の波動に胸をひたされた。感じ易き身は禍なるかな。

「てけてつてう………」

遠くの方で………のんびりした夢のやうな雞の聲がした。其をきくと、まださめない女の幸をおもふ。若ければよき美かさね　紅の帶してありて幸をよろてふ。あやうき安らひ………

さて燒香も濟んだ、君にと定まりし日の我胸に、かつと明るく日の當つた障子を開けて、いそ〳〵と庭に下りる。窮屈な鐵窓から開放された囚人のやうに。

少さな菌の生滅にすら神經を動かさるゝといふ、單調なる生活の不安よ、沈澱せる灰色の空氣よ。やちまたの火は火の華は美しけれど、われかまへて、夫をして家を寂しと思はせまじとつく〳〵思ふ。

これ女の第一の務である。神聖なる任務である。

小鳥よ、お前がゐると胸の巣が暖かい。

しかし、私は汝を住せる爲にばかり生きてはゐられないのだ。

冷たい水のそゝぐこともあらう。

そうしたら、汝は逃げ出すだらう。

痛切なる諷刺である。われよく夫の心を解す。「われ君、」「君、我」

ふと目を上ると垣根ごしに△△稻荷の大公孫樹の象のやうな太い灰色の幹がふと目につく。〆飾の紙がちら〳〵と白く冷たくふるつて、黃ばんだ葉がふら〳〵と枝でとふるふ。あゝ、かわきゆくわが涙………

ちら〳〵と青く、黃に、ちら〳〵と、人類の一世紀はひるがへれ、われ廿才にして、始めて我が具の姿を見る我生は尊し。



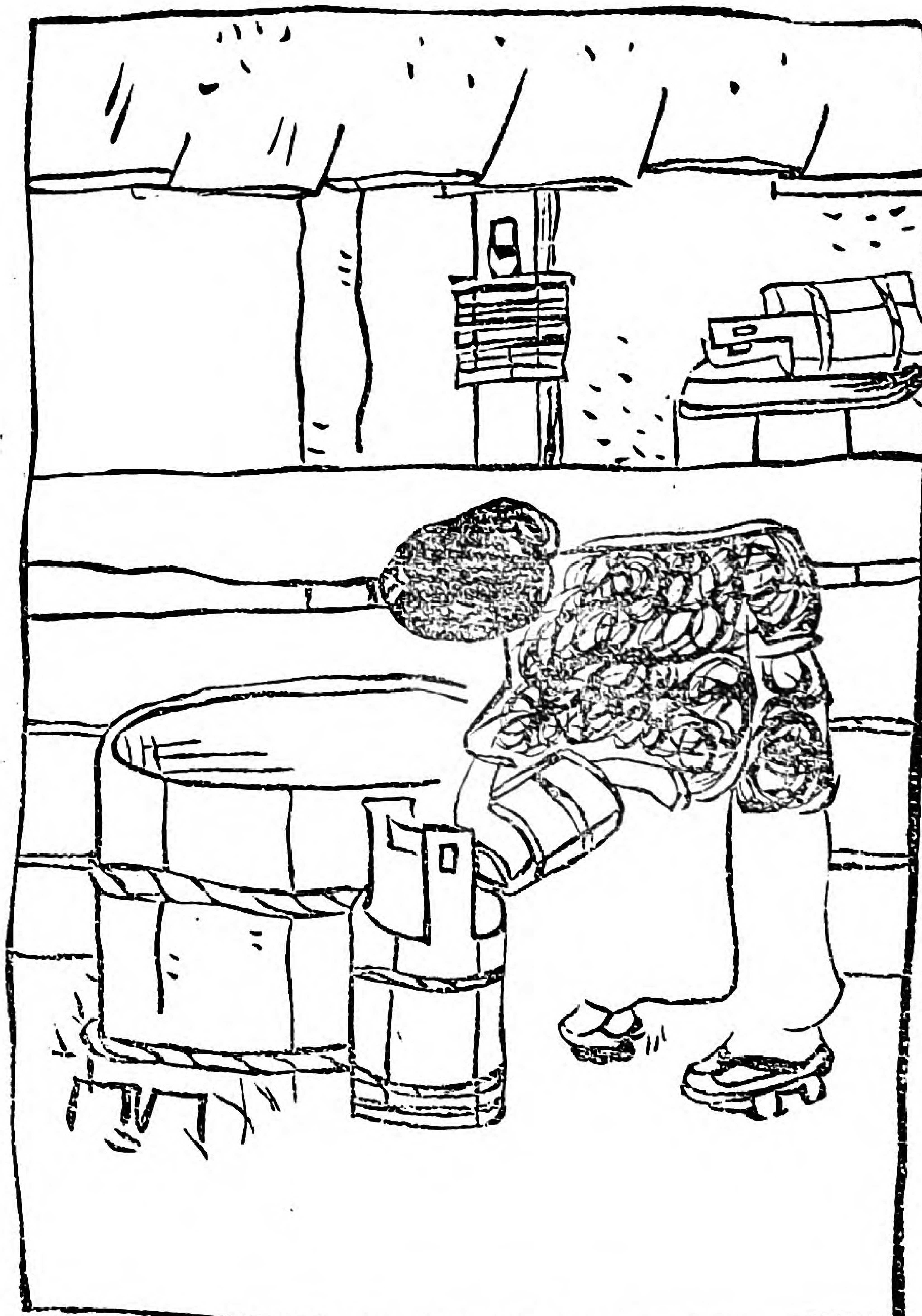
思ひ出の窓

賤花

オヤ何をそう今更らしく私の顔をお見つめ遊ばすの山車でも通つて居りますか、およし遊ばせよ。低い鼻が尚低くなるやうですから、ホヽアラ幾つかつて、幾つに見えるでせう、あてゝごらん遊ばせ。これでもまた處女の香は殘つて居りますわ、あんまりおばあさんにごらんなさつちやいや。こんな私にも華な時は有つたかつて、そりやありましたわ、甘いラブストーリこそなけれ、まあ鬼も十八番茶も出花、おはしのころんだのさへおかしいのは、十七八ですわ、まあ人生の春でせうね。十七、ほんに夢のやうですよ、思へばね。今でこそこんな名を聞いてさへ狸や狐の出さうな草深町だなどいふ處に、くすぶつて居りますけれど、これだつて、そう馬鹿にや出來ませんわ。あの都大路を我もの顔に飛び歩るいたこともあるのですもの、まさか此の間の娘時代の誰か樣のやうに、道ばたの犬ころをも蹴飛ばす勢とまでは行かずとも、石ころ位は何のそのとはねつかへして歩るきましたわ、スクール時代の私ですか、もうからきしねんねさんでしたよ。髪？ええいつもね豚の尻尾〳〵とからかはれて居ましたつけよくもないこんな棕梠箒のお化のやうな毛を、それでもこれみよがしにお下げにして春夏秋冬一日として、淡紅色のリボンでないことはなしでした、此い淡紅色にはちつと理由があるのですよ。ホヽ、それはね、今考へれば馬鹿げてるのですが、乙女時代のポットりとした、何か夢みつゝあるやうな、やわ〳〵しい心を代表して居る色は、此の淡紅色だとか何とかこじつけを申ましてね、襦袢の襟も袖本の縮の包、お辨當の風呂敷まあ何から何まで淡紅色づくめ、オヤぢや袴も淡紅色でせうつて、まさか袴までは、ホヽ、何しろ思出の多いのは、スクール時代でせうね。私の學校、御存知でせう否ですつて、駄目々々私の通つてた學校を御存知なくちや、春は霞たなびき、秋はもみぢのあやをかざる、名も床しい上野の岡の片ほとりなる、高等女學校こそは……ア、ぢやあの豚小家スクールかつて、覺えてゐらつしやいましよ、人を馬鹿にして、……十六、そうですね、十七の夏頃までは、何と云はれても長い袖の着物をきたことなし、荒い柄の元祿袖で紫の袴それも

袴は裾から、櫻島の大根のやうな足をニヨツキとばかり突出してなきや承知が出來ないといふのですから、恐入つて仕舞ひますわね。小さい兄などに「お前は女かい男かい」つて笑はれましたつけ、そんな時は「エヽ私、女にもらあず男にもあらず、たゞ人間よ」なんて申してましたわ。㊂それではさぞかし、クラス中のおはね連中の、牛耳をとつて居たろうつて、處が案外冬などストーブ會議が開かれて、お定まり校友の品定めが始まつたつて、決して列席した事はないのでした。Mといふ人と、窓にもたれて、まるで夢のやうなことをいふては、喜んで居たのでした。私は數學が何より嫌でしたの、下手だから嫌ひなんぞいふのだつて、兄は申しますけれど、いくら滿點を頂いたつて、嫌なものが好になるわけはありませんわ。殊に五年になつて、三角に……幾何のことゝなつたらもういやで〳〵三角の時間が來ると、私一尺づゝ命がちゞまるわ。なんて申てましたの。三角についてこんな事が有ましたつけ、シト〳〵雨の降る五月の或る日、たしか月曜でした、第二時間の英語の先生が御病氣で突然おやすみなさいましたので、皆勝手に自修をして居りますとヒヨツコリと三角の先生がいらつしやつたのでせう。私達四五人はもうウンザリして、「いやです〳〵今は英語の自修です」とさわぎ出しましたので、先生は「今日は、皆さんに注文がある、何でもよいから幾何について感想を書いて下さい」、とおつしやつたので、私は得たりかしこしと始めました。何でも始めにこんなことを書いたと思ますわ、「私は一寸障子でしに人の云ふて居るのを聞いてさへ、身體中粟つぶだらけになる程嫌なのは、わらじ虫とおけらに、なまかぢりの女の漢語づかひ、歯の浮くやうなヴイオリン、それと幾何學である。幾何、何といふ角だらけの、ゴチゴチしたものだらう。幾何と一寸聞いてさへ私は熱病に成りさうだ幾何をやる人の頭を、一つづゝ割つて見たい。きつとひからびたかち栗のやうに、かち〳〵になつて、何のうるほひも、味もないに、ちがひない、幾何は女性にや不適當だ、あまりにひからびて居る角が多すぎるもの。」などゝ思切つたことを書いて、㊃三角の先生を驚かしたこともありましたわ。こゝまた或る夏の事でしたSと云ふ先生の監督で伊豆の西海岸に自炊を五十日程したことがございましたよ、私は其の仲間の最低年者でした母の側をはなれて外で寢るのは何にしろ始めてなのですもの、今までは、寢るにしても、皆の眞中に

ねこ、淋しくなりや坊主枕を抱いて「母様いれて頂戴」なんてころげてんだのが急に離れたのですものね。ホヽおかしい事が有りましたのですよ。或る星も月もない宵でした、八時もやや過ぎた頃、皆より早寝の私は大形のねまきにかへて、先生の御部屋へ「おさきへ」と御挨拶に行かうと立ち上つて室の外に出ると、すぐ前の芋畑に、一つの火の玉がうでいてるのぢやありませんか。私はもう聲も出し得ず、たゞ先生の御部屋へ夢中で飛び込んで、いきなりワーッと泣きながら先生に御首にしがみついたのです、ホヽ先生喫驚なさつてねどうしたのつて御聞き下さるのですが「火がく」先生といふてもうまつ青になつて居たのですの。しばらくすると芋畑で「ホヽ、Kさんてはかつて」と云てTとかいふ二人のおはね嬢が紅提灯を持つてお腹をかゝへて笑ひてろげてるのですもの。私くやしくつて、くやしくつて、ほんとにいきなり提灯をむしやぶりとつてやつたのだつても「いつもKさんは、あんまり弱虫たから面白半分に近處で提灯を買つて來て、おどかし



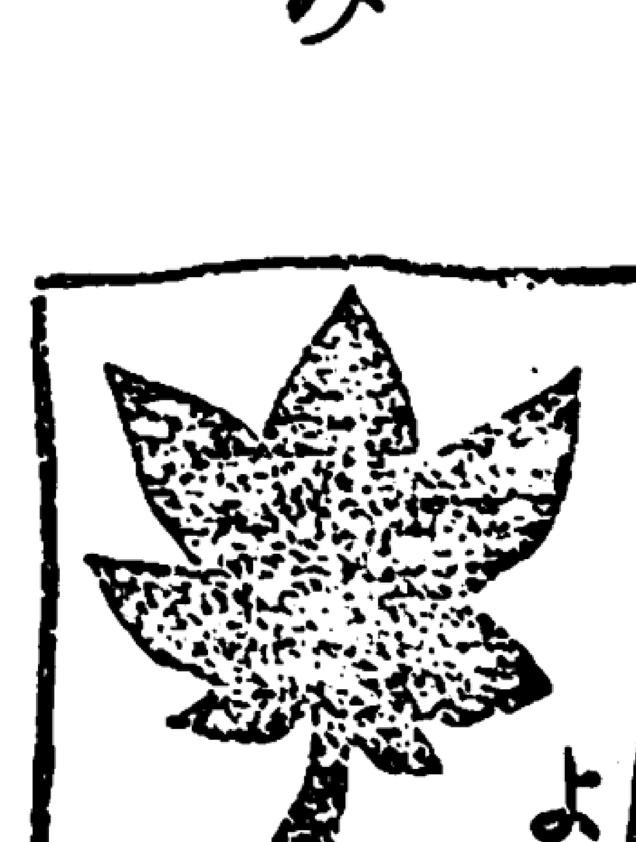
（入賞）水くみ　岩手縣　黄川田かよ

たのだつていふのですもの、二人えゝもう目の玉の飛び上る程の御灸を頂いたの下級生をおどかして遊ぶなんてね、ですけど私もよつぽど膽が小さい、Kさんの膽は一分位だつて笑はれましたわ其の晩はTと同室でしたが、またおどされるのがこはさに、先生の處へ枕かゝへてもぐりこんでしまひました。幽靈の正體見たり枯尾花とやら申ます通り、何でもないものがたゞこはいのですのね。それからこれも其の時のことです或る暑い日の午後さんぐ泳いで來て、海水着を裏の小川で洗つて居りますと「Kさんく小包がお宅から來ましたよ」つて呼んで居りますので、シャツを流がはにはふり出したまゝ、飛んで行きますと、葉書と小包が來て居まして、葉書には「早くあけてごらんよ、いゝものだよ」と兄の手らしいので書てありましたので私はてつきりお菓子と思つて、鬼の首でもとつたやうに、小包をこわきにかゝへて「先生々々ホラよい物が來たでせう、お菓子ですわ先生ね」つて飛び込んでまゐりましたの。そして、いきなり開くとがつかりしてしまひました。中に小さな紙へ「先生と皆様の御食料に」としてあるのですもの、干た椎茸がぎつしりつまつてましたの、私は始めの勢はどこかへ逃げだしたかのやうに「アヽつまらない、先生つまらない」とポンヤリしてしまひました、それからしばらくして、流に行つてみると、シャツは、もう影も形もありませんきつとはふりつぱなしにしておいたのですもの、下へ流れちやつたのでせう。私はちやんとおいといたのに影もないので、「アッ大變々々、ね先生、Kさん私のシヤッ鳥がさらつて行きましたよ」つてわめいたので、油上げぢやあるまいし鳥がシャツをさらつて行くものですか、Kさんは赤とやまねつて、おへそが引くりかへる程笑はれたことが、有ましたつけ。其の後からはもう私の事はベビーちやんだのベビーK子だのつて、誠に結構なニックネームを頂戴して仕舞まして、卒業するまでベビーK子のシャツ流しといつては笑はれましたわ。ホヽ思出しますわ。もう一度あの窓によつて綠の森を眺めたうございますよ、あの窓とはもう五十幾里をへだてられて仕舞ました、けれど忘れられませんわ。教室のあの窓、春は櫻冬は雪の清い景色、ほんに私にとつてはなつかしい思出を與へます。あの窓によつて夢みるやうな心で語り交はした友は皆離れてしまひました。あゝあの小さな窓から社會てふものを一寸のぞゐて居た頃が花でございました。



空飛ぶ鳥

夕やみ



七色の美しい追想の絲くりかへしたさに、空飛ぶ鳥の行方を見たさに、紫のはなをの上草履のまゝ音せぬ樣につと縁をはなれて、裏づたひに甘藷の葉の廣がつた畑道へと出た。

桑といもとの間の巾のせまい道を少しゆくと、もう人氣のない浮世離れのした樣な淋しい崖のきはに出る下をのぞきこむと幾ひろあるかしれぬやうな谷の中から、杉や、竹や、雜木が鬱叢としげつて、幾百年の昔の戰の跡の物凄き悲哀を覺えしめる。谷の向ふは小高い山で其むかふにも、其むかふにも谷をおいては、幾重か山が、かさなつて。一番向ふに遠くみえる山には一直線にみどりの林が空と境して、其上を夏には白い烈しい光をもつた、丁度水彩畫にみるやうな雲がとぶ。冬は灰色の、朝はねざめの倦怠した心を一掃するやうな、美しい色彩の雲がたなびいて、日一日とすさんで混濁てゆかうとする私の胸を新らしく、靜寂にものを思はする餘裕をあたへてくれるのである。

やるせない想ひの胸にあふれた時、そつとぬけ出てこゝにかうして泣く事を誰が知つてませう！　我安息は實にこゝある許りでございます。

少しものを思はして下さい。左から、右から、前から後から、私にまつはる、うるさい事のすべてを暫時なりとも忘らせて美しい追想の繪卷物を、くりかへすを許して下さい。はづかしい理屈をならべる事もいりませぬ、何の意味を見出さうとあせらずとも私はたゞかうした、情緒の放縱な、思ひのおもむくまゝ……此時が一番うれしうございます。

灰色の雲みる度に、遠く波音をきく度に、思ふは雪ふる出羽の海邊でございます。生れたのは水清き京は加茂川の邊りでございますが、私をあの沈んだ暗い淚

つぽい少女としたのは實に、北のはての寂れた一小都會でございました。波も空も灰色な限りのない日本海の沿岸に立つて、彼の人を思つた事も、筬の音をきゝつゝはら〳〵と散るいてふの大木によりかゝつて、遠き上を思ふて泣いた事も、今は僅に思ひ出のひとふしとして折々くりかへさるゝにすぎずなりました。

かなはぬ戀を罪としもいふものならば、何故に、神樣は戀する心を私にお許し遊したのでせう……。戀を戀せし少女には、美しき思出の數々がございました、黒い岩の上に立つて波の上ふく夕風に、白いゆかたの裾や袂やはらはせて「波のよる〳〵磯邊の月に泣くは千鳥とわし許り……泣くはちどりとわし許り」と唄つて泣いた事もありました。

忘るべからざるは十二月九日でございませう……、はじめから聲なき言葉にのみ限られて、百里の空遠き君が眉をばあふぎみぬ先に、此戀さめよ！とむちうたれて、くづれかゝつた其最初！　北の國には白きものちら〳〵とふりくる朝でした。斷たれんとする君が文抱き、ねまきのまゝに立ちつくしたかなしみ……四疊半の室に香をたいて白き衣きて泣きふした事も。「我心君をおもひて高ゆくや、親も小さし道も小さし……灯のない夕ぐれに〇子の顔がういてみえた……きえた。〇子がこゝに居たならば……」三年前やきつくした文のふし〴〵、今なほ我胸にはきざみこまれておもひでになく種となつて居りますもの……。

あゝ……あらゆる熱罵をあびせかけられてもなほ、君はなつかしい人でございました。事皆我罪にきせられていふべき事は多く々々私にもありました。それをものいはず罪の女となりおはしたのは何故でございませう!!　御にくしみ御無念の間にも、君も又あの頃のおもひでをなつかしく、かなしく胸にゑがき給ふ折もございませう。あると信じます。

悲しうでございます。我身をかへりみれば！はや我は人の母たる身でございました。あゝ罪といひますか!!僞らぬ心を語らせて下さいませ。人、罪ともいはばいへ！この樣な事を思ふのは操なき女なのでございませうか僞らずに申します！夫のためならば黒髪もたちませう、髪の一筋だに夫ならぬ人には、ふるゝを許さぬこゝろでございますが。

處女なりし日、なつかしき人はありました。けれどそれはなつかしい戀しいと思ふたのみで、眉もあふがず、腕によりし事もなく、嫁ぎくる時は生れしまゝに

我唇、我瞳、些の汚れもございませんでした。生命の限り我許せし君は我なつかしき夫より他にございませんものを。我等がなつかしきかたみは此兒によつて愛のくさりとなつてしかとつながれてをりますけれど……、なつかしいからどうするといふのでもない、たゞ忘れがたい！思ふ思ふ、思ふのみですけれど……。きのふやけふ御いたつきは……。口惜しくも甲斐なき心かな。他の女ならばあの位、冷嘲と侮辱とをあたへられて、しかもいふべき事もえいはず……。あゝ何故あだと呪はぬのであらう……。いはぬ恨みは數々あれど。



娘　深川　矢澤榮子

其恨みのなつかしき、いぶかしき心よ！

「戀人はあさましきかな、わかれては、かたきの如くその君をいふ」此歌を誦す度に泣くのでございます、其の、其の奥にひめられたる情をおもふて。のゝしる底の底の情！

うたがひといふ事や自尊心といふ事。それらによつて、へだてられたる我心！あゝつひに此黒き幕を、ぬけ出て我心情を、永刧。清く新らしき情のかよは天を恨み、地をなげきずして。君はゆくのでせうか。

人を罵り、君は冷きしとねに……。
あゝ！やるせない弱い心よ！
我父母よ！はらからよ、夫よ、兒よ、彼の人よ！
私の此心は君等一人としてうとましきはなきに。なつかしき人のみなるに、然もそのなつかしき一人にも滿足をあたへ得ぬあゝ我此心！許して下さい！多くのなつかしき人々よ！

故郷の音信を手にした時、文字の上にもあり〳〵とあらはれたる老い衰へゆく父母の姿！其時つと胸をさすものがあつた。「あゝ私はなすべき多くの事をなさずに夢のやうに父母の子の時代をすぎてしまつた」。せめて老いゆく御身を……とおもへどせんなき身はすでに他人の家にあつた。泣いても〳〵我父母は、私の仕へることの出來ぬ人々である！。

――思ひおよんで……。我なすべき事をなさずに思ひでに泣いたりほゝ笑んだりしてゐる間に、我兒は放縱な心のまゝに生ひたつて我來し徑路をあゆみ行くのではあるまいか……と思つた時、慄然と私はあたりを見まはした。

黒い鳥が二ッ三ッ森のかなたに飛びさるのに氣づいてみれば、はやあたりはゆふやみに包まれて居た。

おゝ森よ！森よ！私は歸ろう、あの鐵のくさりのつながるゝ家にかへろう。私の以外に誰がこゝに立つても汝は沈默て居るのだろう！きつと。森よ、森よ！さらば。つときびすをかへして畑に出た時、赤いてがらのとなりの嫁さんが鍬をもつてせつせと土をならして居た。

私は何とはなく不健全な自分の思想を恥かしく思つた……。野に山に充實の色あらはれて今鍬もつ人は歡樂の時である。家の前をどつしりした、こがねの狩稻山とつんで、車はいくだいも、いくだいもつゞく。ひくもの、おすもの、眉ひらいて、よろこびの色面にみなぎつてゐる――。だれの胸にも一種の充實した心つよさを感じさせるのであるのに。病的な我思想！

あたへられたるいのちをたのしまず、淺い日のあきかけて、ものをおもはねばならぬ身がかなしくなつてきた。兩手で耳を被ひ、目をつぶり狂人のやうに夕暗の中を、走つて、走つて、走りぬけやうとしたけれど……。後から、後から後からと追ひくる、思ひ出よ！人々よ太きくさりよ！

つひにまぬがれぬ、私はとらはれの人であつたのだ。

病殘の人

小宅てう子

水を飲まうと思つて降りてゆくと、藤屋のおばさんが來てゐた。仕立物が出來上つたのらしい。ふつくりとうづ高いメリンスの包が襖のきはによせられてある。おばさんが母がとつて上げたお茶うけの奈良漬を指の先でつまんで、私の來たのに氣がつくとにつこり目であひさつする。私は茶釜からお湯を汲んで飲むと壁の處の竿にかゝつてる手拭をはづして、額を包んだ端を後ろでぎゆつと結んだまゝ茫然として裏へ出た。

板塀をとつて生垣にしてからは、裏の境は野つゞきの樣になつて了つた。危くかゝる一本橋に、片足かけて踏んで見るとしな〳〵する。一足、二足、三足めには大きく飛んで草の中に立つた。そのまゝ小路づたひに堤へ出た。右の方の田圃は、苅りとられた稻の切株の間に、麥の芽が一寸ばかりの葉を巻いて、眞黒い土のところ〴〵を柔かい綠の色でつゞつてゐる。のんびりと風もなく晴れたまひるの日光に綿入の背中がふくらまつて、のぼせるほど暖かい。堤を左の方へ切れると、赤い野ばらの實が鈴なりになつた枝をからみ合せて道をさへぎつてゐる。幾度も〳〵押分けながら河原へ下りると、カサ〳〵と音がして鶉が一羽あわてたらしく草むらに隱れた。大きい流れとの間を草に掩はれた河原の石は、ところ〴〵に顏を出し白々とほゝゑんでゐる。私はその中の草の厚い、寢よげな處を選んで膝をついた。夏の草原よりも坐り心地が荒い。

目の前を胡麻粒ほどの綿をちぎつて吹き飛ばした樣な雪蟲が。ひく〳〵浮んで行つたり來たりしてゐた。町のはづれにあくたを燒く煙りがしろ〴〵と遠山の頂をなでつゝのぼる。煙りの傍を通つて長い〳〵橋にかゝつて行く馬、子供、荷車、日傘、背負籠など、町から出るものは皆默々として、影繪の樣に落葉林の木立の中に吸はれてゆく。太陽はあわたゞしい冬の日とも思はれぬほど眞上の空をゆつくりと步んで、流れの音さへだん〳〵遠くなつてゆく樣だ。

ふと

「おてうちやん――」と、朗かな聲が私の名を呼んだ。うつかりしてゐた私は、夢から醒めた樣にあたりを見廻したけれども、何のかげもなかつた。けれどもたし

かに誰か呼んだに違ひない。その聲は、晴やかな空をつたつて、野の遠くまでひろがつて消えて了つた。耳に覺えのあるなつかしい響を含んでゐた。私は裾や袂にくつついた枯葉を落しながら、急いで家の方へ足を向けた。

裏木戸を押すと井戸端の石榴の木の下に、衰殘の身を飼殺しにされてる老婢が、ほうけた髪を動かしてむしろの上に居眠りをしてゐた。茶の間へゆくと母がひとりで湯呑に茶をしたんでゐる。母は私が何處へ行つたらうと思つたきりだと言ふ。誰も來た樣子もない。私は、誰の聲がたゞよつて來たのだらうと思ふと妙に戀しい心持になつて、一人の友へ手紙を書きはじめた。

（小春日のまひる）

壁の鏡が少し曇つて、霧が枕がみまで流れて來た。冷たい疊の上に横臥して昨夜の夢をおもふ。私は臨終の床に打臥してゐた。醫師が終りの宣告をして立去つたあとに、しみ〴〵とそのきはの心持を味はつてゐると、斜めに仰向いた私に近々と顔を寄せて、いふばかりない愛惜の眼をして見入つてゐた人、其顔は瞬間にして消えた。

枕邊には母と姉と田宮のおばさまと弟の四人――私のすきな人ばかりがついてゐて、柔かい手に抱擁される樣な溫かさを心に感じて。室の一隅には白木綿を裂いてしごいた紐が幾本も一所に釣下げてあつた。呼吸がせまつた苦む時はこの紐で胸を縛つて氣息を止めてくれるのだといふ。それが限りもない慈愛の聲もて掩はれる樣な感じを私の心に起させるのだつた。

一人の人に會ひ度いと言ふと、みんなが相談して會はない方がよかろうと言つた。臨終のねがひの滿されぬ哀しさを心に泣きながら、なぜであらうか力がなかつた。靈も肉も滅びゆくきはの寂しみ、うづ高きしとねの中に包まるゝ人も、彼の泥沼に落ちて足より胴、胴より頭、高くかゝげた兩手の指の先もかくれて沈んだ上を、泥は四方からそれをうづめて平らかになつた沼は、何の慘劇の痕も殘さぬといふ、そこに死ぬ人の心も多くの違ひはなささうに思はれた。

眼をあげると、夜の空は火の樣な色を包んだ黑雲が煤煙の樣に漲つてゐた。太陽が見たい、白い空が見度いと言つて悶えた。共に日光をはゝの樣にしたつた一人の友にあへぬ怨みは深かつた。

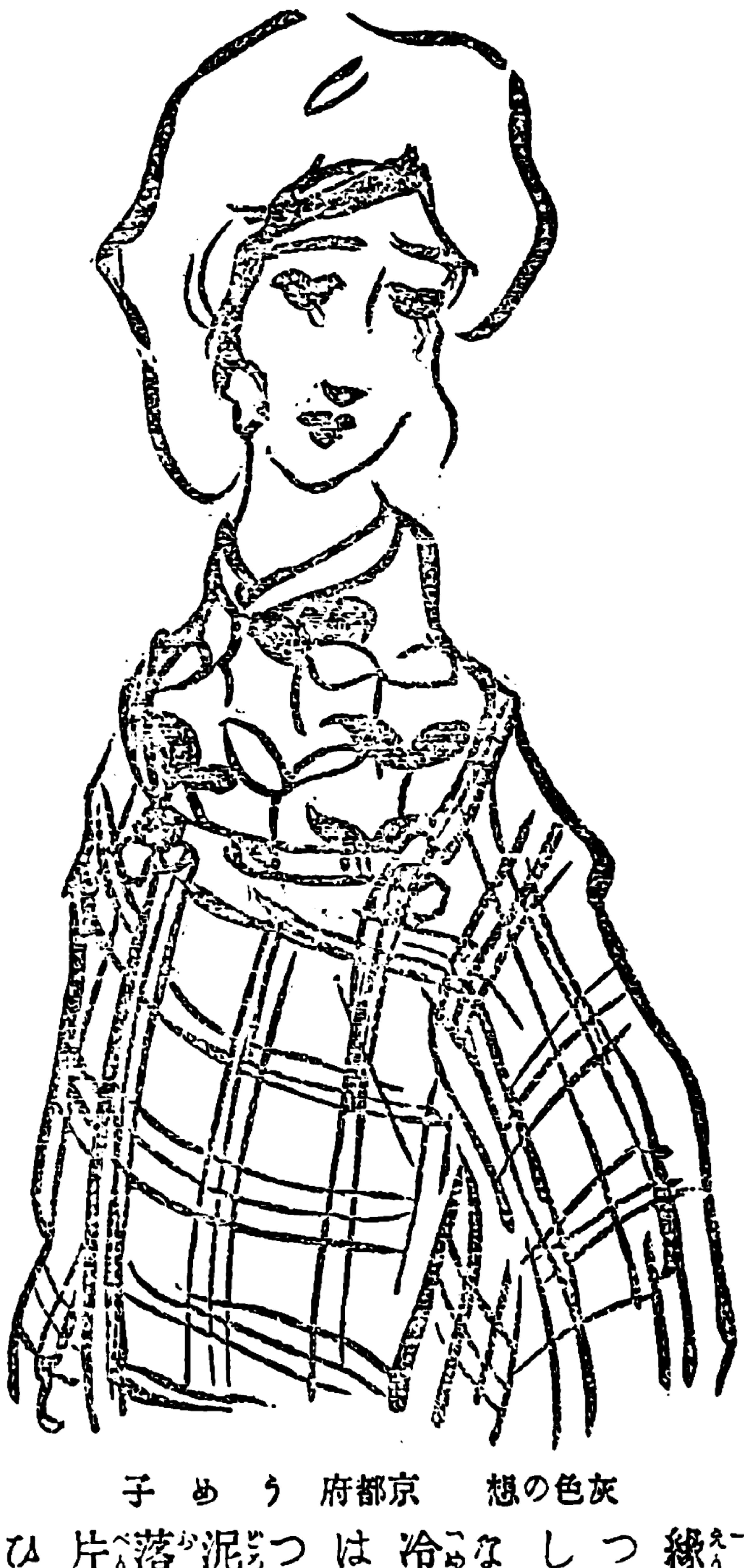
そのわびしさは醒めての後のいつまでも〳〵消えなかつた。じつと考へてゐると冷たい涙が頰をつたつて落ちた

來る。忘れてゐた、私はつひに死ぬるのだつた。（霧深き日の午後）

お晝は頂かないとことはつて壁に添ふて敷かれた臥床の中に妙に疲勞したからだをうづめてゐると、午少しすぎて雲の切れ目から日光がさして來た起きて見やうかしらんと考へてゐると、隣りの子が窓の下の處へ來て今から野菜をとりに畑へ行くのだと言ふ、誘はるゝまゝ一所に出る。隣りの前の橋の上に柿を噛つてゐた白痴の女の兒が、しばらくはついて來たが田圃の途中から犬を追ひとばしながら歸つて了つた日は照つたり蔭つたりした。草むらの中に石しろほいゝいゝづきが成つてゐた。めづらしいので根ごと堀つてゆくうつかりと白茶けた大きなものにつまづかうとして吃驚り飛びのくと、それは種子茄子の化けたのだつた。

水引花を熱湯につけて、石ころほいゝづきの根を葡萄棚の下へ植ゑてゐると、いつになく不機嫌な顔をして下り立たれた母は縁臺の上に散らばつた葉を手で荒々しく拂つた。こんなさゝいな仕打も冷たく沈んだ心には痛くひゞくのだつた。私は默つて泥手を洗ふまへに落ち散る葉の五六片を、一枚々々拾ひとつて女中のたけが持つて來た塵とりの中へ投げた。（或日の夕ぐれ）

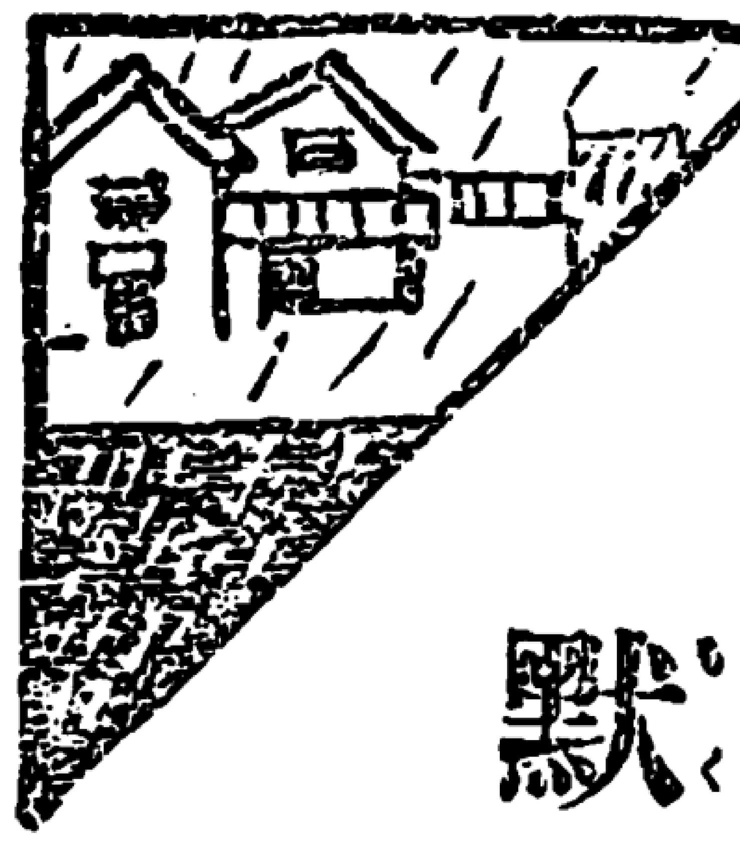
途次取つて來た秋草の種々紫苑、釣鐘草、木瓜、野菊花たで、金米糖草など、ごちやくにしたのでみわけがつかぬが、何れにも秋の面影がある。（或日の夕暮）

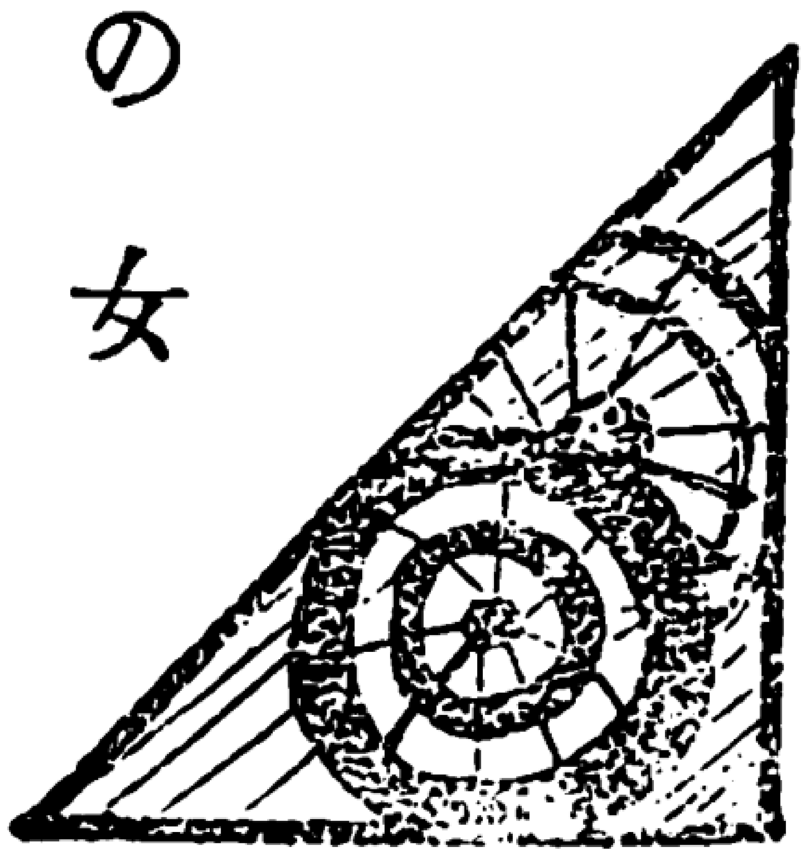


灰色の想　京都府　うめ子

默移

港の女





一つ又一つ……

月照寺の鐘の音は、迷ひ迷ふて明石の海の底に忍びやかに、消えて行く。我が胸に悲しい響を殘して…。

あゝ放恣な秋よ!!!十月よ!!!

薄暮の空には、夢の樣な褪紅色が亂れ亂れて、心の奥にも、うすあかりがさす。

住家を奪はれた者の樣に、觀月橋の袂にまで來た。私の雙の瞳はかゞやいた。今下界に落ちた星かと思はるゝ計りに。

私は、不思議なほどブライトを感じたのだつた。

それは、強い尊いものであつた。

大空を仰ぐべく、何等の恐怖も持たなかつた。

あゝかゝるときの永久に續けよかし。

過去もなく未來もなく、現在もなく、周圍の影は消失してしまふ。若い私の姿一つを殘して……

甘くはただうるく、濃霧の如き月光の波動、虚空を凝視する情緒に、物悲しい顫動を傳へる。海に向つたのは暮て居た。ヒタ〳〵と波は磯によせて、誰にも語るまじ、と誓つた秘密——過ぎにし日この大海に、埋めておいた我が秘事は昔のまゝの聲で、自分にさゝやかれたのだつた。

我が事故、忘れ得ざりし秘密なれど、今更に、語りきかざるつらさよ。せつなさよ。

義理の鎖を破つて逃れ出た、十七少女が、かくれたのは實に彼の君の御胸であつた。

冷たい義理にとらはれた子が、初めてふれた愛の如何に温くsweetなものであつたらう。

これまで世の人のいふ幸福のみを、知つて居た私にはこゝで眞の幸福を拾つた樣にうれしかつた。

あゝ彼の君と、この世のうき子とが、初めて相見しは如月の初旬。

光は冷り海は死した夜、この磯に、二人の心と心とはふれて愛は生れたのだ。

「さすらひ、さすらつた未美しい愛の主をたづねだしました。それはあなたです」と彼の君の御言葉今も尚

心に消えねど……

私はこの言葉には、大いなる恐怖と、いひ得ぬ誇を感じた。只尊い人とのみ思はれた彼の君。御名を呼ぶさへ苦しかつた彼の君より、この言葉を得たのだもの……

自分は意識を失つた。何と答へたであらう。

時は重り、日は移り、冬は去つて、春が來た。雪に包まれた遠山は花の雲に、装をかへた。

二人の愛は成長した、小雨する春の日に、應接室で語り、暮の丘に相見え、柔にグリーンの上の物語、或は月の磯づたひに、春の一夜を明したり、逢ふ毎に語るごとに、愛は熟した。爛熟すれば、落つべきは、木の實の運命である。

熟した愛もまた、破るべきならはしは、あるものを。

永久に！永久に！と彼の君はいつた。

私の心は、うなづいて、これを金石に刻つた文字のごとく、朽も消えもせぬもの、とのみ信じた。

落ちぬ間にとの神の情か、はた、運命の手のたはむれか、知らないが、愛の實はつみとらるべき日がきたのだつた。緑の天地には、强烈な光線が、みなぎつて、萬象は新しい活動と意味ある苦をする様になつた。

二人の心と心とは、面をそむけて、淋しい道を辿りはじめた。「またどこかの世の端で逢ふべく別れるのでせう」と彼の君は仰つたけれど、再と相見る日のない事を知つて居る私には、悲しみ計りがつきまとつた。彼の君の後姿を見守つて、あつい清い涙を落した。永久の別れの餞別であつた。

彼の君のために、清い清い涙を、送つたのである。

愛のかくれ家を見出したこの磯は、思ひかけきや、愛の主人を捨つべき地だつたのだとは。

今は彼の君はわたしの名も顔も忘れて居やう。

彼の君には、忘られても、清い涙を捧げ參らせた、一人の君の私には忘れ得られようか。

姉は私が欺かれたのだといつた。

欺かれたとは思はない。一人で行くべき我が生涯と知りつゝ、明るい人の世の表道を呼ばるゝまゝに、手をひかるゝまゝに、抱かるゝまゝに、行かうとしたのは、罪は私より外に負ふものがない。運命なるものを。

義理のつらさも愛のたのしさも凡てを遠き過去に、送りなして、我が行く道を求めやう。新らしい生活に入らう。愛ほどぼり失せぬ間に、冷たい規則の生活ははじまつた。彼の君に捧げた愛と涙は、私が持つて居

たつ凡てゞあつた。別れし日より、情も涙もない私の生活はつゞいた。

我が求むべきは、かゝる道であつたらうか。冷たいOldmissの、膝によりそうて、なかれるであらうか。岩の様な胸にすがつて……

彼の君に、すがりし頃は……

義理もなく人情もなく、破れた胸を抱いた子が、寄るともなく寄りあつまつた所だけれど、自由の天地ではなかつた。

規則は、心の自由にまで束縛を與へた。

あゝ彼の君と別れしより一年の春、丘の櫻は花ちりはてゝ、姿を見せねど小鳥は日毎にないた。

私の心は全く破れはてた。

その日まで、一緒に君と語りし日のまゝであつたけれど、美しい情緒に抱かれる日は堪へがたい苦しみもあつた。

今は過去と消えはてたけれど、愛に生きし日も、義理に生きし日も、罪といふものを知らなかつたが、規則に手足を縛られる頃は、罪を犯した。それは意識的に……

規則さへなければ、私は犯罪者ではなかつたのだ。

明るい電燈の下の夜の默想は？夜毎そこに、罪を犯して居た。

秋は來た。日も夜も冷たい情緒の上を、若き日の、歌を唄つて秋風が過ぎた。

暗きに居て、暗き過去、暗かるべき未來を思ひ合せて、無言の日をつゞけた。冷たい涙はホロ／＼と、心の中に流れて、再び人を思ふまじ、人には何事も語らじと、一人行くべき我が運命を、我と堅く定めてしまつた。

暗い露路を行くやうに、顧るべき周圍はなかつた。

冬も行き春も逝き緑の頃も過ぎたあゝ又秋が來た。

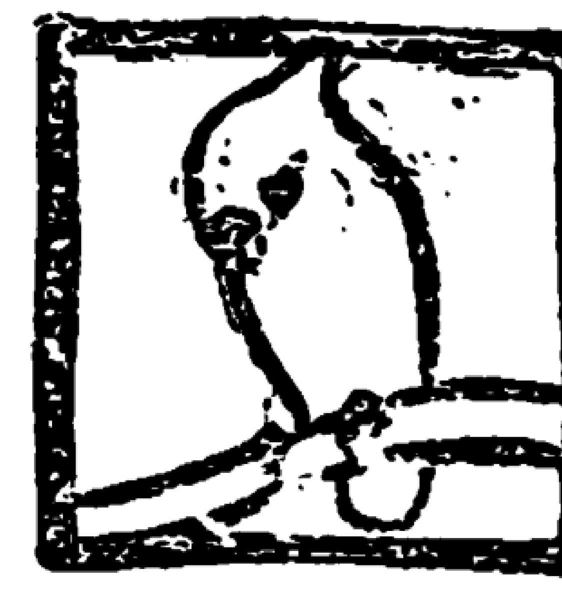
木立の中に、僅に、小暗い影を殘して、姿をかくす夜の様に、私の心に小暗い影を殘して、去りし人？

この暗が晴るゝ日あらば——明るい空の下に二人相見る日があらば——それはこの世の外である。

心の暗も、周圍の暗も、永遠から永遠に連るのだ。

規則にとらはれた自分は悶えず、焦らず、たゞ來るべき日を待つのである。

我が運命に對して、あまりに冷やかな自分の態度は偶然でない。人故に、規則故に、こんなになつたのである。



晩秋の牧場

百合香

まあ、（牧夫の妻女中代りせし者）が育馬へ行つてから主婦役の私、今迄呼び起されてゐた癖がついて、ゐて、朝起きるのゝ遲い事、加てゝ朝食の仕度が手間どれるので、さすがに、兄樣も閉口遊ばして明日から朝は簡單に燒パンと牛乳、珈琲ですまそうと、仰有つてけふから實行した。御飯加減のおひやかしうける事もなく、至極賛成だ。やつと、跡片付をして、ホッと一息、籐椅子によりかゝつて、見晴せる東、西北の秋の錦、自然の美景に恍惚と目をやつて居たが、餘りしげく門の前を人がゆくらしいで、見ると、農場の者でもないらしいが、男も女も、紺のもゝ引に、紺絣の筒袖半衣物、手拭をかぶつて、お辨當腰にしてゐる。大人小供も交り、乳呑子さへ背おふて、一家族、隣近所誘ひ合せて來たらしく、後からも〳〵ぞろ〳〵と。

一體何處から何處へゆくのだらう、お祭りがあるぢやないに。晝食の仕度最中、「夕美、夕美！」兄樣のお呼聲がする、急いで玄關に出れば、門前に、馬上の御ほゝゑみ。下駄つつかけて、「兄樣なあに」、「郵便！お妹さんからだよ。」と笑つてゐらつしやる。「あら！どなた？」。「わかるぢやないか文子さん」、つと手を出して頂かうとするに、遠くてとれない。「私、馬が怖いのですから、手紙お投げになつて頂戴」「よわ虫だな、これは溫順しいから、――さもつと、近くへよつて……。」「あゝ、高島おまへも老いた。」と、立髮の下お撫でになると、優しう首うなだれて。白毛の逸馬、柔順らしいのに「お前も老いた」。のお言葉がひどく可憐で兄樣のお愛用の馬を、なでゝやりたく思つたが、やはり手は出し得なかつた。

朽葉色になる都とかはり、少女が胸の血潮のやうに燃ゆる色なる櫻葉の、その並木道を、ゆる〳〵と育馬場さして、手づなとられる兄樣の、御肩のあたり、ハラ〳〵と紅の葉はちる。秋の空はるり色にすみ渡り、あたりの落葉松は、黄金に、白馬にまたがらるゝ兄上のおズボンは、競馬用の色はオリーブ。さながら、一幅の畫をみるかの心地して、夢のやう、御姿を見送り忠馬が永く健全なれといのる。

そよとの風に櫻葉のまたも、枝を辭して、紫のわが

袖をかすりて、地を彩る。つと拾ひあげた時、正午を告ぐる××の鐘の音忙がしく、遠く里餘彼方、育牛×の鐘もやわ風つたふてかすかに。

先刻の人達はどこへゆくのか伺つたら、△聯隊の兵が演習に來たので近村の百姓達が見に來たのだと、仰有る。

田舍ものゝ呑氣さ加減におどろく。

砲の音が近くひゞいて、その度毎に、「あすこへ來た……」と、あいにく家が、土手でかこまれてるので、それを又幸に、かけ上つちや人達がみてゐる。

緣側に立つてゐたら、老婆さん達が、ぞろ／＼庭へ入つて來て、「きれいな花だきれいな花だ、」とほめてゐたが、私の居るに氣づいて、花がきれいだからみたくつて入つたと、しきりにことはりやら、お世辭やら、花は何といふ名かときくから、コスモスといつたが、なか／＼わからなささうだつた。緣側にうづ高くつんだ、南瓜をみて、「よく出來た、あんな處に出來たか？。」と、きゝながらも、こそ／＼私をみてゐる。盛岡へも三里餘りの此山の中ゆゑ、私が化粧して、大なリボンを、束髮にかけてゐるのも、自分等が娘に比したら、異樣にうつつたかもしれない。失敬な女達とおもつたけれど、田舍ものゝ質朴といふのかとも考へなほしてだまつてみてゐた。

農場の牧夫の妻達は皆或は牧舍に、畑に一生懸命に働く此頃を呑氣な見物人は、日の入りてのち、すこしづゝ歸つてゆく。（初霜おきし日）

見にはゆきたし、こはくはあるし考へてゐたら思ひがけぬ午後窓にいらしつて、兄樣が、「子厩屋へ、つれて行つてあげよう、可愛いゝよ」。と仰有る。

渡りに舟の心地、手間どるは兄樣には大禁物ゆゑ、仕度もそこ／＼に、おともしてゆく。底ふかい川にかけた假橋の板を危ぶみつゝ丘を上つて立ちならぶ、厩舍のいく棟、しかし親馬は先頃みたから、けふはすぐ子うまやへ。土手つゞきにまがつて。

今時間と見えて、馬場の內柵には、むれ遊ぶ數十頭の二才馬、わかき身は今、自由の風に吹かれてゐる。外柵には、運動時間である、親馬(預り)八頭が、殿に馬にのつてゐる人の、「早足——」「並足——」のこゑに從つてよく命令のまゝに、亂れずさわがず柵をまはる。

いづれもたくましい、栗毛の艶々しい毛並、日光に

てらされて一層光澤が美しい。逸物とは思はれるが、數千圓とはおどろく。

兄樣はもう馬場の中柵にお入りになる。子馬はぞろぞろ集つて、長いその頸をだして慰撫を乞ふあり、御手のひらの、ふん麥を嬉しさうにたべたり。

まあと驚いてみてゐたら、しきりにおよびになるので仕方なしに外柵内に入ると、運動中の馬は、ぢきここへくる、出にくいはある、兄樣の處へゆくもこはし考へてゐたがとう〳〵思ひきつて、子馬の居る柵内に入る。

新たな人が來たと見るや、馬はぞろ〳〵よつてくるこはくはあるし、馳けては、なほおそろしで、急ぎ足で柵の端を〳〵と歩くにまだ三匹はついて來る。

胸は早がねをつくやうに、いたく苦しくて。

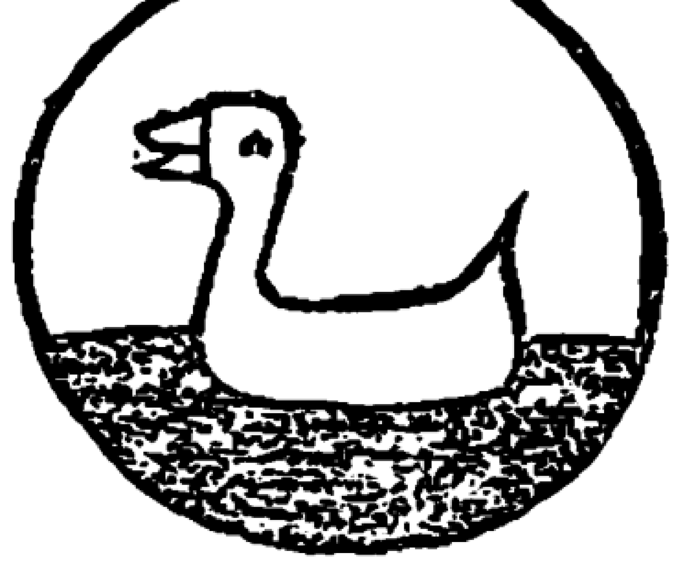
「何して居る、こゝへおいで、馬は害をしやしないよ首を撫でゝもらひたさについて來るのだ、撫でゝおやり」と、笑ひながら、お友達のやうに數頭の頸をなでゝおいで遊ばす、兄樣のお傍へゆきたくはあるし、それはこはし、出るにも出られず、びく〳〵しながら、三頭をみてゐたが、泣きたい程のつらさ。「もし、私が十五六だつたら屹度キアー―と聲たてゝ、逃げだしたらうと思ふ。」「怖くないからおいで。」と幾度の御催促も、もじ〳〵してゐるばつかり。「そんなに怖ければ、お出！早くおかへり!!!。」霹靂一聲まち構へた宣告ではあるけれど、さすがに胸はいたい。親馬を運動させてゐた人の手前、育馬部長の妹があんないくぢなしと、わらはれはしまいかと耻かしさと、兄樣の後の御怒りも心懸りではあるが、ぐづ〳〵してゐては尙更わるいので、おそれ〳〵出る。

子馬と遊ばれる、カーキ色の御服を名ごり惜しさうに見返り〳〵。見えなくなつてから急ぎ足で橋をわたり荒田をぬけて水車小屋を流れる川につたふて、一町ほどゆき夏の洪水に荒された田に立つ。

しばらく程ちかき、クリームの田の面や、あたりの秋の錦のいろ〳〵を、めでてゐたが、丸木橋わたつて林に入る。

名も知ぬ一本の大木、全葉山吹色にそめ出されて、太陽の光うけた處、まばゆいほど美しく華やかだ。

岩手富士の方に當つて美しい虹があらはれた、間もなく消えて了つた。（岩手山に初めて雪を見し日）



正月のお餅配り

松並紫花

私の村も此の頃は、全村擧げて悉く正月は新暦を用ひる樣になつたけれど、今から十年程以前、私が十歳前後の頃位までは百戶の我村に新暦の正月といつたら私の家ともに僅四軒丈けに限つて居た。

それで新暦の私の家にお餅を拵らへると、お餅を拵らへない隣七軒へお餅を配つて行くのが私の家の例であつた。

隣七軒といふけれど、何かの譯で、以前からの例になつてゐる家ともに十六七軒程へ配るので、其の使の私と弟とは寒い風に吹かれながら、早朝から晝過までお重を提げて步き通した。

そして其のお餅を持つて行くと、先きの家でももうちやんと其日を知つてゐて、色々なものをそのお重に入れて吳れた。

蠶豆や黒豆を吳れる家、玉の樣に美しう洗つた小芋を吳れる家、これはお正月のお煮〆になる、籠に盛つて吳れたほうれん草はお父樣の好物、赤い大きな人參はお母さんがお好き、雪の樣に眞白にきれいな大根の束の重いこと、色よう熟れた橙は菊ちやんの家の家例――といふ樣に、それ〴〵用意して置いて吳れるのを、弟と二人で橫になつて提げて戾ると、母が早次の家へ持つて行く樣に風呂敷に包んで拵らへて吳れた。

其內、大人計りの家へあげに行くよりか、子供のある家の方が何となく樂しみであつた。

お重を提げた私達の影が見えると、焚火の傍でお薯を食べながらおどけ狂うて遊んでゐた新ちやんや勇ちやんが、（餅が來たア――）と大聲に吐鳴つて飛び出して來て、母親にポカリッと頭を叩かれて、コソ〳〵と引込んで仕舞う可笑しさ。

マア〳〵美しいお餅を毎年相變らず頂戴いたしまして、長生したおかげ樣で今年も又こんなに頂きまして又生き延びる樣に思ひます、どうぞ皆樣へよろしう仰しやつて、……とお爺さんと二人暮しの、何か云ふと直ぐ淚の出る、小さいやさしい、好い年寄振りの此のお婆さんが、綿の澤山入つた袖なしの胴を丸くして淚こぼし〳〵禮を云はれると、アヽいつまでも〳〵この

お婆さんに上げたい、上げねばならぬと沁々思ふ。歸つて母にお婆さんのことを話すと、母も喜ぶ樣にニコニコして、又來年も持つて行つて上げなさいと云ふ、來年まではキツト生きてゐるでせうかと年寄といふのは氣掛りになつて母に尋ねると、あのお爺さんもお婆さんも格別に丈夫だから來年どころかまだ〳〵生きるとも、と聞いて早來年の其日が待れた、



冬の日向　澁谷　井上もと

斯うして配つて仕舞うと、隨分家不相應に澤山拵らへたお餅が一時に減つて半分もなしになるので、或年はじめて來た下女が、此のお餅の有樣を見て吃驚した樣に、奥さんマアどうしたんでございますかと叫んで、お餅の前へベツタリ坐つてゐるので力落してゐるので父も母も雇つた人も、家中皆々大笑ひ――、下女どん計りは笑ふどころの騒ぎでないのか、氣ぬ

け同然、默つて坐つてゐるので、母が漸うなだめる樣に、心配するとないよ、今日あげただけのお餅は舊のお正月が來たら皆戻つて來るのだからといふと、「へ……エそんなら舊のお正月には又拵らへた程お餅が出來ますナ」へ……エ、……マア——」と呆れてゐる。

母は尙笑ひながら、舊のお正月には間違ひなしに吳れるから入れ物を構へて待つてお出で、それは何軒も何軒ものが集つて來るのだから色々樣々なお餅が出來るよ、と云はれて始めて得心した樣に眞赤な顏をして今度は一人で笑ひ轉ける。

「私マア折角拵へなすつたのに、奧さんたらマア皆他家へ上げて仕舞なすつて、ほんとに惜しい、どうせうにと思ひました、ヤレ／＼」と大安心をした樣に云つたので其後一つ話になつた位である。

母はとりわけお餅を拵らへるのが巧手であつたのでいつもそれは／＼持つて遊ぶ樣な美しい品の好いお餅を拵らへてゐた、そして其の美しいお餅を澤山拵らへては、例の家へ例變らず贈るのが母は一年中の樂しみの一つである。

私や弟も、そのお餅の使をするのが何より樂しみで好い着物を着て遊ぶお正月の當日よりは、寧年末の此の日の方が謂知らぬ趣があつて、樂しみが深かつた。

母が亡くなつてからは、私が母にかはつて母のした樣にお重に入れて渡すと、弟は妹を伴れて持つて步いた。

何事も母の面影をかへぬ樣に／＼と稚い胸にお餅の色にまで心を配つた私の心中を人は皆憐れんでくれた赤い／＼實の鈴なりに實り枝折つてゐる南天の茂みの蔭で、お餅に添へてゆくための、枝振り葉振りの美しい南天の小枝を折り數へながらも、虫食ひ葉や、葉並みの不正なのさへ付ける事をしなかつた母をおもつて、（お母さんがなすつた通りに私がしますよ）と獨言を云つて見て、つひハラ／＼と南天の實の樣な淚を落したこともあつた。

斯うして十年を經た今年の今日は、世の中が全く變つて仕舞つた。人も變つた、新築の家——、破産の屋敷跡——、新たに來た人、去つた人、動かぬ樣に見えても世は緒車の樣に絕えず廻りうつつたのであつた。

ひとり、時期を忘れず、昔の影を見せてゐるのは今年も澤山くれた菊ちやんの家の橙ばかりである。

涙の有る良人を持ちたかつた。

泣き明したので重いまぶたに見渡す落葉の中にヒヨツクリと咲いた薄紫の野菊や狐花、水引、小米の樣な野萩まで我世に艶を競ふ……處女らしき春も知らずに實を結んだ人の子は餘りに憐では有るまいか、笑つて暮らさうなどゝは思ひも依らないけれど、こんなこんな涙と多い生涯は長く續けたくないんだもの。

二タ言目には出て行けよと下等社會にも劣る樣な言葉、もと〳〵落度は私に有るんだから出て行きも仕樣けれど、猫の子か犬の子の樣にオイソレと譯もなく左樣ならと云へるものですか、若い者同士なら知らぬ事早い人なら孫の一人も有らうと云ふ分別盛りの四十三を、さりとは餘りな仰言り樣、事荒立てゝは叔父叔母に申譯なしと目をねむつて忍ぶのも一つは子供の爲めにと思へばこそ。

これでも夫婦か

葉子

普通の身體なら今が今でも出て行きます、家風に合はないと仰言られゝば私は他家の人間……こんな水臭い事も平氣で考へる樣には誰がしたんでせう、其の事情？大事件なんです、天麩羅の持つて來樣がおそかつたので冷たいのを食べさしたと云つて……こんな事が眞面目で云へるものか…酒のかんが遲かつた…物を熱するには時間が入るのは御承知の癖に…それ所か松茸を買つといて煮て食させなかつた！お鮨に入れたのが好きだと仰言つたので煮たまゝ酢をふりかけて明日の朝にと了つたのが事の起り、三日にあげず食物の事で離緣騷ぎ、裏家の神さんだつて恥かしい位は心得て居るまして醫學士の先生！！ブリ〳〵怒つて御飯も食べずグビリグビリ私を睨み付け乍ら、一本を飲んで了つてお皿の天麩羅には手もつけず、サツサと片付けてお了ひになる、お皿を持つて立たうとすれば「何するんだよ

お前は構はなくとも見て居れば好いんだ馬鹿ッ」私だつて人間だ、手が四本も有るんでは無し、お客樣の御膳立からお風呂の加減、御飯も吹く、お汁がこぼれるお使ひにも走る、雨が降るので洗濯物の片付けやら落さうなお腹抱へて此の働らき、自分でもよくまあ病いもせずと、感心して居る位だのに…他所の家なら女中の二人は當然だ、變なお顔してお客樣はお歸りになる三人五人と來る藥取りに藥を渡して居た戸田さん（書生）に行け〱と一つ木の緣日に出して置いて其の跡仕末して積上て置いた洗濯した足袋にかける火熨斗の火を取りかへて居ると、グイと引きたくり底が凹む程横鬢をなぐり付けられた、物も有らうに目から火の出る程…それでも私は申譯御座いません、すみませんの一點張、故意としたのでもないものを…地下の兩親は嘸涙を流された事で有らう。

「お前は無神經か？」と云はれる迄私はすべてを忍んで來た、朝起るときから寢るまでの苦勞、顔色を伺ひ伺ひ立居にまで盜む樣にビク〱仕て居る頭から「オイ一圓札が足らないぞ出したな」「知りません少しも」「知らない事が有るかッ」無理に私の仕業にして口惜しがつて私しの泣くのを見て、其所に自己の尊嚴を發見した樣に得々として居る樣な慘酷な人、洗ひ張の代金まで自分の物は自分で出す位にして居るのに…生れる赤ん坊の常着のメレンスの裏表まで私の小使錢で買つて有る「まるで御女中ねえ、一から十まで從はねばならぬ筈は無いですわ、貴女が自分の求めて苦勞なさるのよ時々グイ〱と口答の一つもなさると好いのよ」と友の誰彼は仰言いますが、迚も私には石の糠袋より難い事です、母が形見の銀簪の幾本、本甲の幾本若い時の派手な綿入や單衣を賣つて迄も小使錢の工面して居たつて主人の金なんか鐚一厘だつて…そんな恐ろしい大それた事を…口惜くつて口惜くつて是でも夫婦だとは出雲の神樣も聞えませぬ、ブラ〱外を歩いて居られる丸髷の皆樣、あれでも御苦勞がお有なさるのかと羨ましくつて、女大學や姫鏡で昔氣質の母に育てられた私、打たれても好い、けられても好い、夫に服從する妻の道位は承知もして居る、けれど後で一口只の一言愛のある言葉をかけて下すつたなら女は馬鹿だから、それで滿足するものを、心行ばかり打ちのめして其の後は出て行けだの歸つて了へだの云はれてもジッと忍んで居るものを、貴女から求める苦勞など云はれゝば私死んでも死ねない。

四季の着替には事缺かぬ迄も流行る半襟の一筋位は居る様なのを、二圓で無理やりに自分の下着に直したかけて見たい、嫁いで來た一年半の間、お前にこれをと云つて手巾一枚買つて下すつた事が有るだらうか、母の形見ですからと大切にして居る黄八丈の下着を良人だなどとおどかし付けて捨て賣りにしても八圓位はぶら下つて



淡墨　京都府　竹村楨

り「金は養なつて有るから差引だぞ」これが私の死ぬまですがる大切の良人なのです。

嫁いで來れば誰を力に暮らさうぞ、その夫が水より冷たい紙より薄い情の人で有つたなら、どう仕樣なぞ何故娘時代に考へて置かなかつたらう、睨まれても好い毒つかれても好い姑樣でも居らしたなら淚の中に又氣のまぎれる事も有らうもの……私は……私は……

朝から晩迄壁や障子と睨つくらして、暗い樣な顏ばかり見せられて、是でどうして丈夫な子供が生れ樣ぞ

何一つ自由に成るでは無し、八百屋の買物まで良人良人と二錢三錢の銅貨を投出して貰つて居るんだもの今日は札が一枚足らないと云つて、札入れ銀貨入れ果ては銅貨の入れ物まで懷中に入れて了はれた盜人飼つて置く樣で氣が落付かないのだらう、親類の交際して下さるでは無し、歲暮や中元の贈物するでも無し、たまたま近所の使物する時でも、大體お前のする事ぢやあないか、と仰言るが「ぢやあこれに致しましたよ」と買つて來る品でも一度で氣に入る筈は意地でもないんだもの、同じ物を三度も四度も取かへ引かへ終ひには店の小僧に鹽花まかれる樣な口惜しい目に逢ふのは何時も私だ。

嫁いで來た翌日から、襷がけで臺所を働いて、飯が堅いと怒鳴り付けられた者は恐らく私一人で有つたらう、五日目は生臭い肴を食べさしたと云つて肩のあたりをなぐり付けられた。あゝ灰色の生活？眞實に良人の選定程むづかしい物は無い娘時代には愛だの戀だの嫌らしい青春男子が異性に送る樣な文句澤山で封じ目の糊にキッスしました、なんて叔母にも見せられない樣な手紙を平氣でよこした癖に……。

今はそうでも赤ん坊でも出來るとね、男つてものは又我の折れる者だよ

と母樣の許から、まあ誰が知らしたのか手紙が來たので、モシヤと便り無い事を賴みに一日二日と送つて來たのに我の折れる所の話か「見にくい腹を突き出して、人が來たら引つこんでろッ」これでした「人でも來たら側について居て妻の役をつとめて見ろ」と叱られたり、私は全くウロ〳〵しました。

野分した後でも倒れた草木には又趣の有るものを無情な人は何時まで無情、愛の氣なぞ探したつて塵程も無いでした「忘れても御前は士族の娘ですよ」と母樣に敎へられた言は忘れも仕ない、形見の短刀の金梨地の鞘をはらふと水が垂る樣な○津田、何の氣もなく

ピタリ首に當てましたピリッと冷たい、刀の光は鞘よりはなすものでは無い名刀は魔がさすと聞いて居た、あはてゝ放すよ薄すり曇つて亂れの美事さ燒の匂ひ、「ねえ母樣、末は苦勞して居りますのよ、御教は決して忘れは致しませんけれど……」名刀の力か胸が空いた。

それは四五日前の事「お前泉岳寺に行かないか」東京に來て三年間、その間に市中を見たのは叔母の家に居る時に只一度、文部省の展覽會を見たきり井の中の蛙此の時こそと「えゝ」今日はどんな風の吹きまはしかと氣味惡る〳〵仕度して出たまでは好かつたが「帝劇に行かふ」やれ嬉しや日頃の望みが今達せられた、クラスメートの律子さんや、天才と噂のある嘉久子さんにも今日は御目にかゝれるかと、電車にも乘りもせずテク〳〵大きなお腹抱へて來て見ると「立派な建築だねえ、さ行かふ」ズン〳〵日比谷の方に引きかへす「まあ」わざ〳〵建築を見に來なくとも…三田行きに乘つて泉岳寺に行き墓地や寶物見て歸りには利兵衛の石碑の下で見つともないお金の勘定「お前の分を出してやつたのを返せ、歸ると忘れて了ふからな」まあ、とあきれたが無言つて出して了つた、ブラ〳〵電車通りまで出る兩側の露店、素通りするのが氣まりの惡るい程呼ぶ、貝細工や錦繪や石版の繪や鮓、汁粉まで「お休みなさいまし、お土產召しませ」私は逃げる樣に電車まで出る、右はなつかしい春汀先生のお邸のある所一人ならば一走り行つて來樣もの、うすら寒い風が吹く「歸りませうか私お腹が空いて來ましたもの」「うん」さつさと電車に乘つて歸つて來ました。お晝前から午後七時迄水一口飮まず食はずに引きづられて遲く歸つてから、お召の上からエプロンかけた御飯でしらへ、ほんとに、ほんとにお金はがちやゝ、がちやゝ、する程持つて居ながら、さもしい話だが淚の出る程腹が立つた迚も普通の人間には出來ない藝だと……。

花やかな血の湧く時代は二十二三年も前に過ぎたのだから、無理もないものゝ、さりとは餘りな世帶染み樣、私は戸田さんに御飯でしらへが氣まりが惡く、「松本樓に寄つたんだけれど込み合つて居て坐れないの」とぬけぬけした噓云つて了つた、若い否年寄でも好い優しい良人を持たれた皆樣が羨ましい、贅澤したいなぞ以ての外だ、寢て居て暮らさうとは思ひも寄らぬ、が人間らしい夫婦らしい妻らしい、一日は笑つて暮らす樣な生活がして見たい、あれ雨が降り出した、さなきだに淋しき秋の暮れを落葉早むる雨の淋しさ。



青春に別るゝ苦痛

草の門

わが秋も遂に終を告げて去らむ。秋の名殘も紅葉の落葉とゝもに誘はれて行く、桐の落葉の一つ一つと奪ひ去る。再び秋をよべど叫べど哭けばとて秋は行く止まつてわが愛惜の情に袂別してくれようか、私の秋も逝くのだ、寂しい思ひが泌み〴〵迫る。處女の最後の秋はかうして終る。

雨の袖でしつかと顔をおさへてよゝと泣いた。寂しさの外になんの印象もなけれど色彩もうつらない――そして秋は逝つてしまふのか？やるせないこの心、この心を誰れが知つてくれよう、知らなくたつていゝけれど、處女の涙も思ひも意味なく終つてしまふのか、今更にわが身に對して愛惜の情を禁じ得ない。寂しいぢやないか悲しいぢやないか……と凋落の木々の梢にむかつて私は呀いた。蟲の音もなき秋の終り闇の夜を見つめて、われをかへり見、凋落の身をひとりかなしんだ。（闇夜の秋）

二日に別れて三日に逢ふ。まる一箇月だつたわね……と、永遠に別るべく別れを告げた人を再びむかへて、私は言しらぬ嬉しさと懷しさに胸は開いた。

私はこの人に對して戀すべき理由はない、そしてわがものぢやむろんないのだ。我がものではないけれど別れてゝまた逢へば感情が湧く、沈滞してしまつた私の感情もまた新らしく響きを立てる。處女だもの――。

私はこの人の結婚について百とせの幸を祈つた。祝福して送つた、その二人を引き離して、わが前に額伏せてあれと云ふ程殘忍な心はもつてゐない筈だけれど、わが欲するがまゝに招くがまゝに、百里の道を踏みてえて辿つてきた。男の面を見る時は、胸の痛みもすべてが去る。（心嬉しき夕）

をとこよ――私は男の心を疑はずにはゐられない、男は女を弄んで後は嘲笑するものか。

をとこの眞情を疑がひその節操を危ぶみながら、女はその尊き貞操を男にまかして耻ぢてゐない。

私は一人のをとこにむかつて、復讐がして見たい、激しい氣の透く樣な復讐がして見たいのだ。

私は憎い男にむかつて、一と思ひにさし殺すより、殺したり生かしたりしてその苦惱の顏が見てゐたい、苦しむ顏が見てゐたい。（苦しい夜）

私はなぜ結婚する氣になつたのだらう。男にむかつて心服する事が出來なくなつた今、戀などはもうできぬ。

まことの戀愛はどんなものを指して云ふのか。

私は異性より同情されたくない。一人がいゝのだもの……。ひとりが……。

現代の男は戀した女を指してどう云ふ。あの女は利口だから……あの女の家は財產家だから、美しいから……と云ふ、富も美もなにゝならう、誇りがあるか。そんなものに戀する資格がどこにある。

戀よ、まことの戀は多くの人の愛することのできぬ女にむかつてそゝげ――と男に云ひたくなる。

（眠る前に思ふ）

私の築く新紀元は、私の身も心も一變化をきたし、そして個性もめちや〳〵に滅びてしまふのだ。

もう書くもうたふも、私のものぢやない、私の自由は滅びてしまふのだ、それは時ぢやない、字の上にいたましい、いましめが出來るのだ。

詩にも文にもまことの聲はなくなつてしまふのだ。

私は遠慮しなければならないのだらう。

草の門の夫たる人は草の門の心を解してはゐない、私のうたふ詩を寬大に入れてくれる人ぢやむろんないのだ。私は目に見えない人に見えないいましめに心身共に囚へられてしまふのだ。歎きを包んで笑つて僞はらねばならないのだもの――ほろび行く處女の影さへ止めるになにがある。これより私の淚も新らしくなるのであらう。覺悟してゐるけれど。

あゝ名殘を惜しむわが二十二年の生涯を――。

戀を捨てゝ、幸を斷つて、たゞ寂しい人の子としてみじめな女のあとを踏むのであらう。その女のむれに入る自分の影があまりにみにくい。けれどほろび行くわが魂はいづれのなへんに佇立んでわれをかへり見てわが影を痛むだらう、ほゝゑむのだらう。（十一月十四日）

私の反抗も、もう終であらう、否、終ではないかも知れないが、私は言ふべく多くを言つた、がまだ滾々として言ひたいことが盡きぬ、此上苦しいことを言ふのは苦痛だ、疲れた。



若き日の誇

秋子

○

をばさん、今私のいふことは目上の人に向つて失禮かもしれません。若しお氣に障りましたら、何、あんな者のいふこと〻、いつものをばさんの度量でお許し下さい。をばさん！をばさんMさんはえらいと、仰有る。そりやMさんはえらいかも知れません。多くの財産と地位とを持つて。けれどもをばさん、學士や財産がそんなにうれしいものでせうか。そりや學士は博士の卵ですけれど、親の脛をかじつて、よし途中で一度や二度停電しようが大學さへ卒へりや學士ですわ。

これをMさんの惡口ととられては困ります。Mさんはをばさんの仰有る通りえらい方でせう、けれど世の中にはこんな學士さんも多くありますわ。

何しろをばさん私はお斷り申ます。私の靈はMさんと一所になることはどうしても出來ないのです。をばさんがいくらやきもきなさつても、私の心の何處にもMといふ字をすら見出すことは出來ないのですから無駄です。本當に無駄です。

私は、をばさんの券はいつ迄つゞくものかといふお説もようくわかつてゐます。獨身論を立てるやうなそんなすさまじい人間でもないのです。何もわけなど〻おき〻下さいますな。只嫁きたくないから、それだけ。

○

この手紙をかいて出さうとしてさすがにためらつたをとなしい――なまじそんな事をいはれる爲に、私は何も思ふま〻にふるまへないのだ。弱き我よ。強くあれ。強くあれと何處かで叫けぶ。私はつよくなるのだ。

○

久し振りで運動會にいつた。いつになく珍しくクラスメートがたくさんよつたのでいろ〳〵の話をした。美しい丸髪の君も四五人ふえた。幸さんはあなたは本當にいつになつても變らないねえといつた。そりや外形は變りやしない。只變つたのは肩上のあつたのがをりた位。けれどもこの心はもうすつかり變つてゐるそれは幸さんだつて知るはずはない、い〻え母様だつてでぞんじないもの。デヤレスト、Fさん、Sさん、Oさん、私の心は二年前とはもうすつかり變つてゐま

すのよ。もうどんな事があらうとも、手をとつて泣く事なんぞとても出來ません。あなた方の上からもう私の心は全部はなれてゐますもの。今私の心の全部はT樣の事ばかり想つてゐますの。なつかしいT樣、今どうしてゐらつしやるの？あの東向の窓の處で、机に倚つて書物してゐらつしやる…子が、まざ／＼と眼の前に浮んで來ます。私の只一人のT樣よ、幸在せ。

○

本郷座を見た。河合のお七が美しかつた。

派手な長い振りの袂を胸に、深い／＼物想ひに沈んだ樣子。戀しい人に逢ひたい一途に、何もかもわすれて自分の家に火をつけ多くの人たちが火事だ火事だとさわぎまはつてゐる最中に親にすがつて、父樣早う吉祥寺へとせがみ、せき立てる。

一里の雪路を、路傍の柳の影にも驚くやうなか弱い少女の身で、吉祥寺にたどりつき、森のあなたの火影を望んで、あまりに自分の仕た事の大きくなつたのに驚いて喪神した樣になる。戀の少女、熱情の少女、私はまじろきもしないで、ぢつと見つめた。木がはいつて、クリーム色に大きく松竹梅を縫つた幕の下りたとき、私はホッとして我にかへつた。お七、お七、二番目の筐がはじまつても私の頭からは、美しいお七が去らなかつた。緋鹿の子の振り袖、疋田の帶、今でも眼の前に浮び出て來る。

○

またこの四五日胸がひどく痛む。いつ迄病むのか。

胸が痛むと肺を想ふ。それにこの頃のやせ方、頰はこけるし色は惡くなるし、自分でも肺になるんぢやないかと想ふ事さへある。胸の痛むことは母には話すまい、話せばまたきつと氣づかふから。家を想ひ父母を想ふ恩愛のきづなにしばられた私何處か隙を見つけて逃れたい。逃れて自由が得たい。と思ひながら。逃れもせず、あきらめ得ぬ私――弱き我よ。より多くの反抗をもちながら、反抗し得ない我をあはれむ。

○

昨夜夢を見た、私は急な斷崖の前に立つてゐた、T樣に助けられて疲れた歩みを運ばせてきたが、前は深淵、水が轟々と渦捲いてゐる、私は落ちようとした、後ろから人が來た、初めは叔女の顏をしてゐたが、父の顏に變つた、さうかと思ふと母も居た、これらの人が止るのも聞かずに、私は前に進まうとして、忽ち兩手を離したかと思ふと深い／＼谷底に――。

手紙を燒く記

葛の葉

いざ東京へ行かねばならぬといふ三四日前の夕日が色變へつゝ沈んで行く頃、毎日々々行つてはありたけの心を打ちあけ合つては互に新しいあしたの心を迎へ迎へして來た友に、鳥取のはる子さんはたく風呂へ投げ込んで友よ師よ許して！と眼を閉ぢて終つたとおいひだつたが、私も大きなお釜に三晩つゞけてお湯を沸してしまつた、そして夏なれば其お湯で最後の祈り然と顔をふいて、あゝ、さつぱりしたといひたげに、けれど〳〵、お釜の下へ投げ入れて焰に灰に色變へさする迄の悲しさは實に口にはつくせなかつた、その心持を遠慮もなく友の夫の方向いて、そりや大勢の中だもの好きな人もありや氣に入つた人の無いでもないさ、大きな支那かばんにつめて〳〵一ぱいあふれる程の文がらだもの、而し私は師やよき友のはからにはしなかつた、大抵は道行く人とすりかすり、過ぎ行く人と見送つた人〻のをだつたからともはつきりはいはれない位男子のも女子のも、私へあてたもの計りはと、新聞紙一部送つて來た包みの紙切でも大事をかけて手箱の中へしまつた〳〵、一ぱいになつてやり切れなくなると、支那かばんの中へ、てゝを最後——と入れ々々してつもりつもつた幾つかの把！、海を渡り山をくゞつて夢の人から現の人から、只私の名をかいて所を書いてまちがひもなく來たもの、故あつて軍人方のが過半を占めては居たけれど、花の樣な孃樣たゝの手になつたのも少なくはない、自稱文士からも少しは來て居た可愛らしい尋常小學の兒童から天眞爛熳たるものも二三はあつた、七十路を七つ八つ越えてのお婆さんからのも、皆其心地の麗はしいとり〳〵の色を、私へ々々下すつたもの許り、からといふにはあまりに惜しい!!無きものにするにはあまりにつらかつた、けれど事情は私にそうは許さなかつた。

み佛に數知れぬ衆生達が眼に見ない強い絲で呼びよせられると、僧さんがいふ樣に、色々の人の眞心から私へ私へと思召して、筆をとつて下すつた其暫くの間の心地といふものは、如何にうれしいものであらう。繪卷物とたゝみ納めて、一生の友の樣に思つたものを、今現在にさし迫つて、無きものに仕樣といふにはどんな

に悲しかつたらう。手紙の交換みたいな事、何の益になる切手代でも小さくはない、よせよと再三再四父にも母にもとめられたけれどどうして〲一時にういた熱はさめさうもなかつた、まあ考へて御らんなさいな、日本は廣いけれど、來るのは私の名計りでせう。自分では行く事の出來ない遠い處から而も私を知つて交際をと言はれるのにいやといはれますか？など〲時には日本國中私の知つた人があるやうに、胸を強くはつたのである。そしてかうして久しく文通をして居れば、何がなよき事を自然に覺えるもの〲様に、澤山手紙が端書がと自ら人にも誇つて物語つた事も再三に止まらないが、一度としてまじめにそりやえらいとほめてくれた人はなかつた。あ〲それにくりひろげてはよみ、よんでは泣き、ああ最後だと又巻き納めて、山とつみ、あ〲かくてもをかれぬと火にくべたのである。遂には燒くのがをしくなり、せめてこれ丈は、



傍に居た人々　京都　山田靜子

せめてこれ丈はといひ出せば又きりがないたまり過ぎてしまふ、其又中から撰び出しては殘す方へ、燒く方へ。

ご飯たべては何か私でなくつちや納まりがつかぬもの丶樣に、朝から晩まで例によつて同じ樣な事を、びり／＼、折角だものを、せめて切手丈はめくつておかうと封筒のは紙のうらからつばきでなめては、しんなりなつたスタンプ附の切手を、澤山靑いもの、桃色のもの、スミレ色のもの、柿色のもの　墨色のも隨分ある。小包などに使用つてあつた藍色のもたまにはあつた。封筒も白も紅も紫もみどりもいろ／＼を澤山交ざつてきれいであつた。その如く人樣々の文句はよみ直しても昔の思ひをそのまゝに、色々に匂ひ薫んずるのであるものを、燒くにはあまりに惜しかつた、つらかつた。

最初戀だの愛だの一口でもかいてあらうものなら、すぐに交際御免とぴん！とはねてかへりみなかつた私でも、習ふよりなれよの諺の通り、味のあるものうそにもしろ面白いと遂には惡く言へば手すさびの一つにしてのろま男をからかつてやらうと、しはしなかつたが思つた事さへある。少しはやつたかもしれないけれど、けれど自分にその身であり乍ら向ふ樣もからろうと思ひ乍ら、如何にもまじめらしいのがあつて泣いた事さへあるから四分五分かも知れない、けれど泣いても眞實の心は許せなかつた、噫なすべからざるもの、世を知らぬ處女子たちが、ここからまよひ深入りをする！と、ぞつとしたのも幾度だつたらう。私はさつさときびすを返す事を知つて居たからいゝけれど。

女子のそれはまたやさしいが、或時には女の手紙はつまらぬと思つた事も往々あつたけれど、いや眞の同情は女子としては女子にある事をさとつた。何といつても男子のは一時は華やかさうで面白いけれど飽きが來ると思ふ、惡くいふ樣だけれど男子の或心を買はうと親切でかすのは、やはり自分が可愛いゝから！、

また私へ或軍人で大尉にもなつて居て（今は少佐）私は一人ぼつちで武骨一邊の軍人だとふれ込みで、始めはそんなでもなく、和歌の話や軍隊の話部下の逸話などを面白をかしく書いて來たのに、遂には戀しいのなつかしいの忘られぬの毎日おもふのなんて、私もにいゝたまたの返事をしといて人が惡るいけれど一寸と先廻りを入れといたのです、處が他の友からの返事は、あの人は妻は申迄もなく子供さん迄もあるといつて來た

ので、こいつは乙だ!と思つて、此度はいざと言へば逃げ出す迄の事と、高を括つて忘られない、親はしいと筆のすさび一方でやつゝけた處が、華さんの様な別嬪は軍人の妻になる者ぢやない、もつと嫁く處があるとか何とか……こちらもをかしくて仕様がないけれど全くの眞面目の體で一生一人で暮すとか何とかいつてさんざやつた上句、上京するが失戀の結果だとみせて、文通は都合上出來ないからお斷りする、と今度はこつちが軍人になつて鐵砲を放つてやつたのです。こりやうそでかたまつた世の中だつたなあと、さとればいさゝかも恨みに思ふ所はないが、まあそんな手紙それに類似したものなどが随分ある。

元來私は飄げた事もいふけれどこちらからうそいつはりを以て人に接した事がないから、向う様からうそを喰はされると腹が立つのなんのつて、今の軍人殿ではないけれど負ひなげしといて逃げ出してしまふ、けれど眞實の人にはどこ迄もそれ丈の事を出來ない中からも交際が出來なければ出來ないと、それはどういふ譯だと詰される迄、手紙のとりつぱなしなぞはしない方であるから、猶更文がらが澤山になつたのだ。あゝのかうのと随分あられもない經歷を作つたが今上京するに當つては一つとしてこれが——と間にあはない殆んど焰に灰に空しくしてしまつたが!!!と淡い心をしづめ〳〵て、お釜の下へ投げてしまつたが慝はかないもの——と淋しい笑をもらしながら、よまずにすむものを、何か中に金の寶でも若しや?といふ様な氣で是れを最後々々とよんではまき、のしてはよみ、ぴりぴり破つたが三日目では手が痛くなるやら首の骨がぐうぐうなるやら、眼がぼーつとなつてしまつてねえ、一ダース入れのハンカチ箱にめくつた切手で私へ來たもの計りで一ぱいになつてしまつた。

筆持ち添えて書かすまで
幼なかりしわらは女も
七年ぶりに相見れば
眉美しうとゝのひて

黛を塗りけん唇に
今亦さすは何の色ぞ
筆は再び執りぬとも
おどけて頬はよも染めじ

ゟを書きたみて
涙に暮れしふることを
語り出さば袖屏風
君は面をかくすらむ

——夜雨——

第八年第壹號

別れて後

舟子

めッきりと冬めいてきたぢやありませんか。

今年の秋はろくに秋らしい氣分も味はずに、もう薄暗い冬の季に入つて行く樣な感がされます。今日は好いお天氣です、姑は、朝から目白のSさんの家へ出かけてゆきました。新らしい、あかるい家の內はガランとして氣味のわるいほどに靜かです。私は其の座敷の眞中へ小布團をしいてねころんでゐます。このごろは又パン計したべてゐるので、どてもかしても力ぬけのして了た樣な、ものうい氣もちで居ります。

あゝあなたにも逢ひたい。恰度一月になりますね。

私も斯うしてすつかりともうお嫁さんです。——考へるとしみ〲寂しい。時々泣きたい氣持になります。——あなたの頭も此頃來の烈しい刺戟でさぞ勞れてゐらしやるでせう。併し決斷がついて結構でしたね、御兩親始め皆もどんなにか安心した事でせう。私も何だかホッとしました。あゝそうしてあなたの運命もきまつて了ひましたね。這那風にして、娘たちは順々に生れた自分の家から離れて、各自に違つたライフに入つてゆくんですね、同胞つて者の關係も不思議に思はれます。——あゝあなたもそうして本當に大阪なんて土地へ嫁つて了ふんですね……もう容易ぢあ逢ふ事も出來ますまい——何だか心細い感がします。ですが——時々名産を送つてしたり、寫眞を取替したり——なつかしい心地でセンチメンタルなてがみを書いたり——其麼事を思ふと一寸たのしみな樣な氣もします。

雁次郎も澤山見られるでせうし呂昇もきかれるでせう、舞妓はんの美しい、三味線の盛んな、斯うした大阪の空氣にあなたの心はぢき沁みるかもしれない。一番氣になるのは身體の弱い事です。私の傍では澤山すがりつこして貰ふ人が居りますが、あなたは旦那樣獨りです。氣をつけて下さい。本當に自重して下さいよ。——ア、こんな事は今云はなくとも逢つていくらでも云へる事だつた——それより私にはもつと云てみたい事が澤山あつたんでしたつけ。

兄さん私はもう、丸髷に直されて了たんですよ。つく〲悲い、情けないきもちで泪がこぼれました。

艶々した髪の毛へ赤い手柄が結ばれて初丸髷の新妻じみた姿が、冷たい鏡にハッキリ見せられた時、私の心は眞から底からの悲しい、やるせなさに泣ました。丸髷と云ふ髪は、たつた獨りの男のために結ふ髪だと云ふぢやありませんか。たつた獨りの男のために―「誰に見しよとて紅かね付よぞ、皆主への心中立!」そうしたぬしがある身なら、私は死でも好いと思ふ私の心は餘り空想的すぎてるかもしれません!この頃は什うしたのか大變に、スヰートな濃かな、情緒の勝つた氣分になつて居ります!此先からですが、もう寂しいと思ふと、矢もたても耐まらなくなつて了ふんです。辛棒も観念も――そんな心地の努力をしやうなんぞと思つた事のない人間なんですから――どこまでも、走りたいだけ、伸びたいだけ、胸の想をひろげて了ふ。押え様とも反省様ともしないんです。良人と伴に往來を歩いてる時でも、ふつと見交した異性の眼付をなつかしいと思へば、私の心は躊躇もなく燃え上つて了ふ。あなたもそうですね。そのくせまた戀い心に焦れて、死身になる程美しい情に泣いた事もない。矢張り要心深い、什うしても自己を忘られぬ人間なんですね――ですが此のごろは、大變に情的になりましたよ。あゝあなたと二人でよく歩きましたつけね――K町のあかるい夜を、白粉ぬつて、しまだに結つて派手な姿で、ぬれた様な軟かな情調をつゝんだ、二人の胸も同じ想を語りながら――なまめかしい姿が滋く眺められる花柳街の夜を好んでお稽古に通ひ〳〵しましたつけね――澤山の異性の胸にふれて、漾ふ様な情の中に身體を浸して、三味線の文句にある様な、芝居のぬれ場を見る様な、スヰートな情の破亂に泣いたり、笑つたり、變化の烈しい、刺戟の多い、浮稼業の美しい顔をした、何もしらぬ女性の身の上をしみ〴〵羨ましく思へます。あゝ私もあなたも情には寂しい身上でしたね。――斯うした氣分の、放縱をしたふ。其のくせかなり自我の勝つた、私の悄分が、此の温順い!道徳堅固な良人の妻として、其の良人の母である。温和なやさしい、併し謹嚴な姑の嫁として、何事もなくすましてゆけるでせうか。――何にしろこのまゝ這那淋しいきもちがつゞいてゐたら――しまひに私の心はどんな事を始めるかしれますまいよ。さう思ふと自分の我まゝな、反省のない此の性分が怖ろしくなります。――ですが、此のまゝに動けぬ我身かと思ふと死にたい程の淋しさに泣けるんですもの――不幸でしたね、

私は●

學校から離れた十八才の春から、此二十一才の夏まで、空想ばかりで暮してきた、あなたと一緒にいろいろな想出をのこしてきた、我まゝだつた純娘の短かいライフが、私たちの生涯を通して一番なつかしい、幸福な時であつたかもしれませんね。

さう思ふと悲しくなる。あゝも一度什うかしてあなたと放逸な生活をしてみたい。内密で新富座の紙治を立見したのがしれて手酷く叱責れました——あの時もおかしな程二人の感情は熱くなつて——夜お稽古に出かけたまゝ、遲くまで淋しい汽車道を歩き乍ら、感情的な事を語り合ひましたつけね、月が冷たく、白い線路に光つてるのが夢の樣なきもちでした。とても人並に妻だの、母だのつて云ふ境遇になる事はない女、そんな風にならぬ中に什うかなつて了ふ運命の樣に思つてならなかつたのでしたが、思の外容易く何でもない男と結婚して、無事に人妻になつて了ひました——解決がついてみると淋しいんで厭になりました！母になるのは厭ですねー。何となく厭です。

ですが、私達の歩いてきた過去の姿を振り向いてみると、よくまあ何の怪我もなく、こゝまで辿りついたものだと思ひます、これから先も考へてみると随分あぶなつかしいものですよ。あゝいつまでもこんなフワフワした落つかぬ心で居るんでせうね。ゆく末が思はれます！、其中に逢ひにゆきます。あゝあなたはまだ島田ですねー。

わが秋の歌

加藤爲子

くさぐの水色の衣ほす竿につときてとまる赤とんぼかな

赤土にまろびて咲けるほうせん花あせたる色のあはれなるかな。

ダリア咲く夏に相見しその人の名さへ忘れて初秋に入る。

はやぶさの鋭き嘴それよりも物思ふ君のするどき嘴。

ものねたみまてと心は淡けれどあなづらはしやこの惡しき癖。

よべの夢ものたらざりき其の人と語らまほしき朝の雨かな。

小さき斧もつ人あまた集ひてよさばきを神にもとむるはうし。

おほかたのつれなき人は八重葎しげれる中にぬるぞよろしき。

かりそめの病に人の訪ひもこず淋しき秋の雨の音かな

草の息醉ふごと匂ふ中にねて病む身にきゝぬ秋風の音

美しきます鏡さへいとはしく手にふれざるもおとろへしため。

わが年をかぞふることの愚さをまたくりかへす秋のくれがた。

美髪劑

小瓶參拾錢。中瓶五拾錢。大瓶壹圓。送費（一瓶市内六錢地方八錢臺灣滿韓拾錢郵券代用一割增し）

婦人の頭髪は、婦人に取りて何よりも大切です。此美髪劑は十有三種悉く人體皮膚並に毛髪の營養となる純植物性のものより成り、どんなクセの多い毛でも之を使用すると根本的になほります。

譬へクセ毛の人でなくとも、毛がやはらか過ぎて、バエギワが藤のやうに下つたり、ビンも、タボも、下り易い毛髪でも、之を防ぐことが出來ます。又毛髪が硬くて自由の利かない人でも、此の美髪劑を用ひておけばすなほな好い毛髪となります。加ふるに毛髪の色澤を美しくすることは驚くべき程で之を常用すれば漆の如くつやつやとなることは保證致します。毛髪に限らず此美髪劑が如何に皮膚を美しくするかは、試みにアレ性の人が少計り手さきにでも塗抹すれば、直に皮膚滑澤となり其効果は顯著に分ります。

只、天性チヂレ毛の人は、此美髪劑を用ひて二時間位は其のチヂレ毛を直すことが出來ますが、根本的に直すことは出來ないのです、前に述べたクセ毛なら何んな困つたクセ毛でも直ります。

此美髪劑は「女子文壇」の化粧問答顧問として皆樣も御承知の 藤波芙蓉先生が多年研究の結果。實地經驗の上創製されたる最新の美髪劑であります。論より證據速に御試用あつて其苦痛を忘れ給へ。

◎注意――此美髪劑は冗費を省くため他の化粧品の如く粧飾せず極めて實用向にせり

申込所 東京市京橋區大鋸町十二番地（振替口座東京第壹七貳九番）女子文壇社代理部（電話京橋六〇七番）

女子文壇化粧問答顧問　藤波芙蓉先生實驗發明

ゴールドクリーム

△定價五十瓦入金壹圓　送料八錢

ゴールドクリームの美顔料として最も有効なことは、世人の夙に認めて居る所、現に女子文壇の化粧問答欄に於いても、藤波芙蓉先生も續々これが有効なること且つ其調製方並に原料までも御紹介になつて居らるゝ程の化粧料ですけれど、歐洲に於いて賞かれて居るゴールドクリームは至つて高價なために、日本にはまだ輸入發賣されて居りません、偶々同名のものがあつても似ても似つかぬ粗製の贋造品で、そんなものを用ゐても何の益にもなりません。從來藤波先生は皆樣方の中の御希望者の御依頼によつて調製して差上げて居られたのでしたが、僅かづつ何度にも原料を買ふと自然高價になり、矢張一度に澤山調製した方が雙方の便宜ですから、これも本社に於いて同好の皆樣方に御わけすることにしたのです。ゴールドクリームの効用は既に御承知のことゝ存じますが、第一はこれをお化粧なさる上によく御顔なり御手なりに摺込み紙か軟かい絹で拭き取りますと、アブラ性の方はアブラの出るのを防ぎ、アレ性の人はアレを直し、皮膚を艶麗ならしめ光澤を出し、おしろいを翌日までも剝げずに落付かせ殊にシワを延ばし、色を白くさせる力を持つて居ります。

但し、ゴールドクリームは美顔劑で、世のクリーム類の如くお化粧下の用には立ちません、お化粧下用としては「艶肌劑」が適當で「艶肌劑」と「ゴールドクリーム」とは艶肌美顔の姉妹劑です。

艶肌劑（えんきざい）

定價　五十瓦入　金六拾八錢　送料八錢

文明とは時間を儉約することです「何か一品で、顔のシミやオデキの痕を取り、キメを細かにし、皮膚のツヤを綺麗にし、化粧下にもオシロイの下にもなり、而してオシロイのノリをよくし、お化粧を落付かせる、有効にして簡便な化粧料を考へて下さい」との某侯爵夫人よりの御依頼で藤波芙蓉先生が永らくの苦心と實驗とを費して、見事に御創出されたのが此艶肌劑であります　右の某侯爵夫人の御望みは夫人御一人の御望みでなくあらゆる文明婦人の等しく御希望なさる所と存じ本社は特に先生に請うて、皆樣方に本劑を御わけして差上げることにしたのです。

純植物性洗粉（あらひこ）

定價　一百瓦入　金三十二錢　二百瓦入　金六十錢　各送料八錢

植物性が皮膚を營養し、鑛物性が人體を障害するといふ事實は世の定論です。現今販賣されつゝある多くの洗粉は鑛物性を以て調製され、中に植物性を含めてあるのもありますが、其唯一の原料として必ず白土を使つて居ります。藤波先生は何とかして純植物性のもので而も皮膚を美化する精良の洗粉を創出したいと種々なる植物を分析試驗の結果、二十三種の植物を調合して遂に世に曾てない別途の洗粉を發明され、現に專賣特許の御出願中であります。この洗粉は單に顔料洗粉として皮膚を美化するのみならず、洗髮料洗粉として髮のツヤを出し、毛をサラサラとさせます、即ち先づ此純植物性洗粉で、御顔やおぐしを洗つて「美髮劑」を塗け、「ゴールドクリーム」をスリ込み、其上に「艶肌劑」を御つけになれば四劑互に相たすけ合つて根本的に自然美を發揮する譯になりますから、この陽春の元旦を以て併せて御希望の方々に特に御わけすることゝなつたのです。

申込所　東京市京橋區大鋸町十一番地（振替口座東京第壹七貳九番）（電話京橋六〇七番）女子文壇社代理部

らい病根治新劑

藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不抜の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を違す。

藥價送料共 壹劑分 五圓拾錢 特別製分 拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚だ多し、然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し、初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

發賣 回春記憶增進丸

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓參拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の原理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること嘗て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知られよ

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通に流下する特効あり本劑一劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を適用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及惡血毒血一を掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる似爲藥類顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

最新發明藥

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も瘢跡を殘さず無痛にて除去し得らることを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ゐて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用二割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを得用とす）着金即刻小包郵送す

以上五藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

横瀬夜雨先生著（目下印刷中）

新年發賣

夜雨集

四六版紙數約三百餘頁
總クロース天金美製本
定價金八拾錢　送料六錢

凡そ勝れた文學は「**生**」そのまゝに物を觀る時に産れるものだと云ふ、してみると**著者夜雨**の如く、在るがまゝの**現實**に生きて、諦めもせず、悟りもせず、憤るものは憤り、怨むものは怨み、**泣**くにも泣かれず、**笑**ふにも笑はれぬ悶々の情を、破れ甕より迸る泉のやうに滾々と文字に表はすことの出來るものは、最も好い藝術家に生れた一人であらう。而かも夜雨の所有してゐる「**生活**」は、**普通**の人の所有してゐる「生活」と全く異つた暗い、淋しい、痛ましい、**呪はれた生活**である。一に身體の自由を奪はれ、**歡樂**を**奪**はれ、**戀愛**を**奪**はれ、**在**る處は只**文字**のみ。今や『**夜雨集**』成らんとして、**一日**も**早**く其書を手にしたいと思ふ者は、誰よりも、彼よりも、先づ夜雨其人であらう。

出版元　東京市京橋區大鋸町　**女子文壇社**（振替口座壹七貳九）●賣捌　東京堂、至誠堂、北隆館　東海堂、大阪盛文館外各店



誌友欄



小說

○銀貨

水野葉舟選

横濱　千鶴子

銀貨の幾つかを受取つたケテーは、質店のドアーを排して戸外に出た、知人でも見てはしないかと云ふ、一種の氣恥しい思で周圍をきよろ〳〵と、見廻した。辮髪を長く垂れて、ペンキによごれた樣な暗色の支那服着た男や、畚で赤子を背負つた支那の小守や、纏足した婦人の、頰を赤く生臙脂にそめて、よち〳〵と歩いてるのやが、目に入つた。其れで彼女は安心したらしく足を海岸に向けた。質店のストーブに熱せられた其反動で一入劇烈に寒氣を感じた。手と云はず、足と云はず諸ての尖先きが、痛くなつた。○○印刷會社の橫を曲ろうとした時、最一度見返つた。夕方の繁劇しき山下町の通りは淡くなつたが、三つ星の出てる質店は一番彼女には印象深かく目に寫つた。平常長く引く樣に思はれるスカートも、少女時代に臑まで出して學校に通つてた時の雪の日よりも、より短かく、然してそれだけ寒く思つた。

彼女はスカートの後のポケットに入れてある銀貨をそつと觸つて見た。ガチヤ〳〵と幽に音がするのが聞えたので、彼女は安心したらしく微笑んだ。

ちらりほらり電燈は點火き初めた。

夕方の鋭い風は一層强烈に人々の肉をさした。周圍は陰鬱な沈滯した色彩になつた。赤い〳〵高い煉瓦が屋敷の燈も鈍つてきた。青いペンキ塗りの商館も淡くなつた、ボーイは急がしく陳列硝子に戸を立て初めた――Silk Store とかＡＢＣと大きくキヤベツルで書いてある西洋戸を。

鳥打帽を英國風きどりに橫に被つた、生意氣らしい商館番頭の幾群に逢つた、摩違ひ樣ちらと、他人を見る冷やかな視線を一樣に彼女に向つてあびせた、其冷笑の眼差を見る度びに、彼女の心に異國にあると云ふ、そうした賴りない情が張くひゞいた。其れが女であつても、男であつても、今日此頃のケテーには旅と云ふ

遣瀬ない不安におそはれるのである、バアから歸つた夫の酒に醉てともすると彼女に當り散らしたりする時と、トランプに敗た後の心細を感じる程深かく其樣な氣分にとらはれた。鹽分を含むだ荒い海の風は容赦なくケテーのクールヘヤを亂れさした。砂埃を立て丶瓦斯の烟をのこして風を切つて急進する自動車や人力車の幾つもが摩違つたが、それには目もくれなかつたカナダ汽船會社と金文字で書いてある硝子を何の氣なしに見た。帽子も被らず一點の赤味も無い。蠟細工の樣な顏は、寒さに震えて寒氣だつてた。其姿に彼女は自分で自分を哀れまずにはゐられなかつた。幼ない時リーダで習つたマッチ賣りの少女を思出した。弱々しい哀れな自分の姿を最一度見る勇氣はなかつた。

カン／＼蟲の幾群がガヤ／＼と通つた、手も足も顏も油煙で汚れたまゝの醜い姿で、野鄙な言語で大聲にさゞめきながら、谷戸橋の方に消えていつた。

故國にある時はジャップ／＼と劣等視して、輕蔑してた日本に來て故國を可懷しむ、さうした不可思議な運命を考へると、堪らなく淋びしくなつた。

最一度ポケットに手を入れて見た、銀貨の幾つかは手に觸れた。

倶樂部に行かう！倶樂部に行かうと！ケテーの欲心は興上した、勝負に勝て、今の幾つかの銀貨が兩手に充滿る程になつたらばと思ふと、最早彼女の心は落付いて、前後の事を考へる氣分にはなれなかつた。そゝられた心で彼女は足を早めた、グランドホテルの食堂の幾多の電燈は赫々と四邊を照してた。樂隊は賑に人足を止める程に奏してた、然しケテーには何んの感銘も與へなかつた。

先に十三番目の椅子に知らずに居て、負けてしまつた事を思出した。今日こそは勝たうと考へた。

ケテーは南京町通りを裏にぬけて來馴れたクラブの鐵の門を開いた、勝負の開かれてる三階の室を見上げた、カーテンを通して瓦斯の光りは青白く流れてる、小砂利のしいてある暗い植込みを眞すぐ歩いた、ばらの甘い香が淡くたゞよつた、ケテーには其れさへ氣にもとめなかつた、パーラの横の窓硝子をコト／＼と、周圍を氣遣ふ樣に叩いた。

「誰れ？」

「平常も來る人――ウヰリヤム、ケテー」

と小聲で云つた、規則的に問れて彼女はきつとこの樣に答へた、ボーイはコック部屋から彼女を通した。

駈る樣に彼女は三階に上つた。

ドーアを開ける刹那彼女の心には只々勝負の樂しさにとらはれた。硝子に寫つた寒さうな自分の姿も、夫の事もなにもなかつた。飢た犬の樣に室に入つた。

勝負を爭ふに熱した人々は血走しつた眼で一心にトランプを見詰てた。（天賞）

○お浚ひ

信濃優梨子

今度始めて踊のお浚ひに出す吾妻家では、もう一月も前から何となく氣忙しい樣な、斯う凝と落着いては居られない樣な氣がして居た。

關の扉で花香の着る墨染の着物と、清元の三社祭を踊る小雪と千代子の揃ひの單衣は、とうに京都へ染にやつた。瀧夜叉姫の前帶も矢張り京都まで刺繡にやつた。そしてお女將は指を折つては、もう來さうなものだと自烈たさうにして待つて居た。

「始めてなんだからネ、皆みつしりやつて頂戴よ」と始めはお女將がやつきとなつて心配さうに皆をせめて居たけれど、もう終ひにはお女將より却つて藝妓達の方が一生懸命になつて居た。

もう皆氣が氣ではないと見えて、其日が近づくにつれて藝妓達の朝起きが早くなつた。

いつも姐さん達に夜着を搔られる一番寢坊の小靜といふお雛妓までが、皆に負けない早く起きては、自分のする式三番と洒おかねの三味線を一生懸命に稽古した將門の瀧夜叉姫を踊る小美代は、地方もそれから對手の將門も濱の家なので、用さへなければ濱の家へ行つて居た。

「やア何處ともなく見馴れぬ女、此山かげの關の扉へいつの間にどこから來たのだ」

「アイ私しやアノ鐘木町から來やんした」

「ム、何しに來た」

「逢ひたさに」

「そりや誰に」

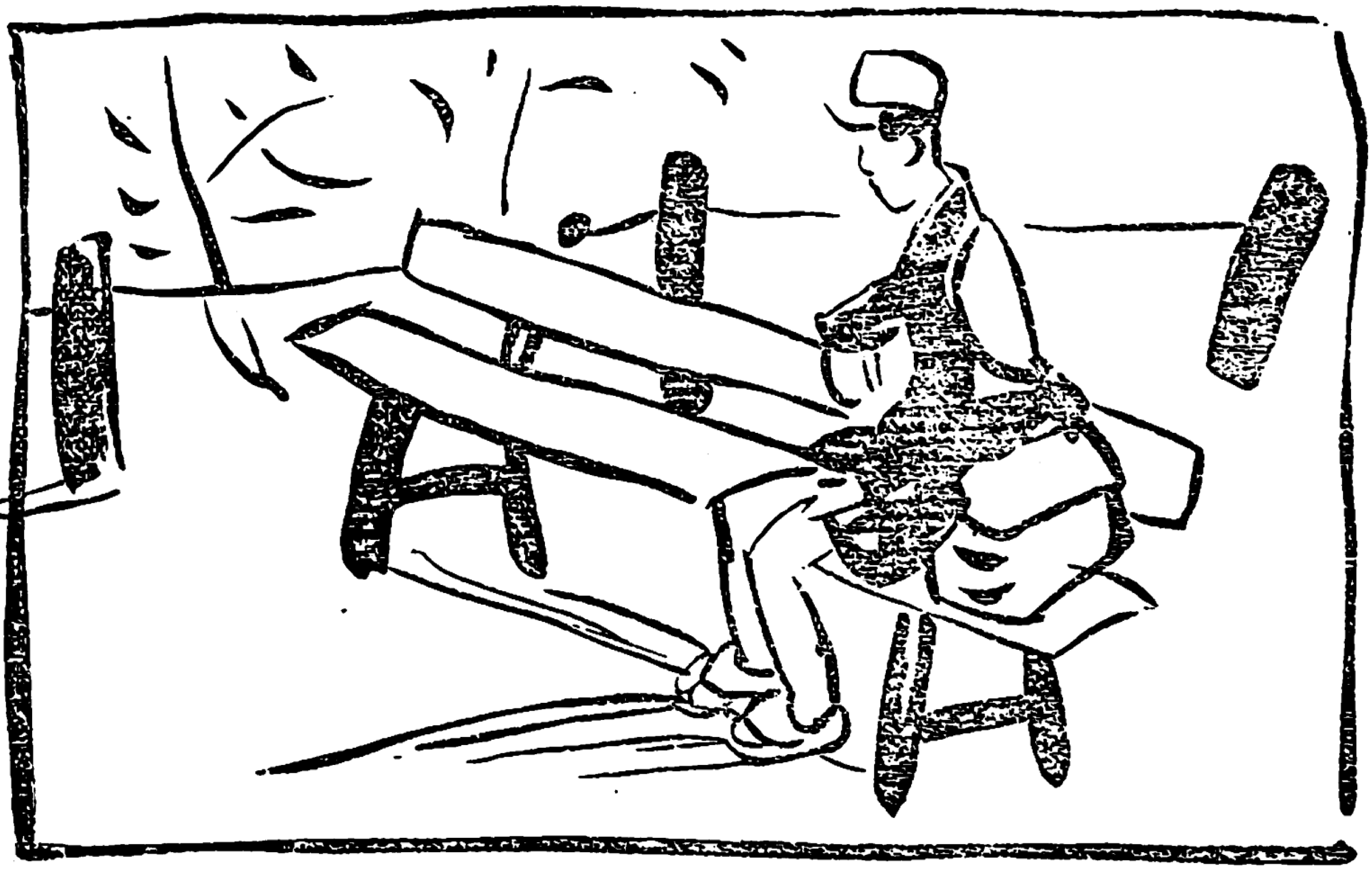
「こなさんに」

「何おれに、そりやなせ」

と聲の好いそして顏も奇麗な花香と踊の上手い梅吉は舞臺でする通りの大きな聲で、狹い藝妓部屋で日に幾度となく關の扉のせりふを云ひ合つて居た。

「かくなる上は何をか包まん、われこそ中納言家持が嫡孫天下を望む大伴の黑主とはおれがことだはやい」

「さてこそ」
「我に恨みをなさんとするそも先汝は何者じや」
「のふ、去りし恨みのあればこそ抑人間のぎやう受けて、女子とは見すれども小町櫻のせい魂なり」と酔どれらしい闘兵衛の太い大きな聲と、凄い樣に澄んだ聲で静かに判然と上手く云ひ廻す花香の臺詞とはよくしつくりと合つて居た。
　闘の扉の地方には一番姐さんのおつまも入つて三味線を引くけれど、二人では始めから踊れないので踊はさう稽古しなかつた。
「――内より出づる血汐の片袖手に取り上ぐれば懐中に深く秘め置く管合の――」とおつまが小さい聲で唄ひながら



公園にて（其一）　芝　後藤明あさ子

絃を稽古して居ると、
「姐さんそこの處の調子を上手くネ、妾間拍子が取れなくて踊りにくいから」と闘兵衛の梅吉は傍に聞いて居ながら踊つて居る樣な氣持ちで頼んだ。さうすれば「ちよいと妾の、御兄君の身にかはりあへなく此世を去り給ふ夫の遺身の片袖に……のあたりの處もネ」と墨染の花香も氣がかりさうに云つた。
　お女將は皆の仕度を揃へるに一心配だつた。お師匠さんに聞き聞きしては其二三日前までに大抵揃へた積りだつたけれど。
「あ、瀧夜叉の足駄がまだ出來て來ない、おや三社祭りのしできも、一つないわと其日になつてあはたゞしく下駄屋へ電話を掛けたり縮緬の白いしごきを借りにやつたりした。お淩ひの其

日は稀な小春日和の暖かい好い日であつた。前日から飾りつけをした××座の天井には、東京の株式仲買の小宮といふのから花香と梅吉に呉れた緋と白の縮緬のビラが可成り大きく目立つて見えて居た。外の藝妓家のも隨分澤山下つて居たけれど、何となく吾妻家のばかりが際立つて見える樣な氣がした。足踏みの音が氣持ち好く響く踊り舞臺に直された舞臺の中の樂屋は、何家々々と一つ〳〵鳥渡區切られて、どの部屋も〳〵坐るところも無い樣に衣裳や道具一杯になつて居た。

踊に出る花香も梅吉も小美代も皆前の日結つたばかりの島田を惜しげもなく頽して、妙な格構の髷下じに下の方へ結つた。そして、

「可笑しな顔になるわネ」

「實際だ、けれど輕くて好い氣持ちだわ」なんて云つて笑つて居た。

「靜ちやんでも千代ちやんでも誰でもネ間違ひたつて笑つちや不可ませんよ、知らん顔して居なくちや」とお女將は皆の出掛けに心配さうに念をついた。

「お女將さん濟みませんがあの撒くハンカチを下さいな」と引詰め髷下じに結つた梅吉が關兵衛とは思はれない程調子の高い好い聲で云つた。

「あゝさう」とお女將は思ひ出した樣に長火鉢の向ふの用簞笥の上に澤山重ねてある、鉞と大きな櫻の木を墨繪で書いて、其櫻の小枝に掛けた片袖に吾妻家、梅吉、花香と奇麗な字で結構よく書いた、關の扉をきかせたハンカチをすぐ梅吉に渡した。

「じや妾達もう行きますわ、お峰さん――仕度をする人――は行つて居るんでせう」と樂屋取締りのおつまは皆を連れて先に立つた。

お女將も小靜の式三番の絃が氣になるので、もう凝として居られないで間なく後から獨りで出て行つた。そして鳥渡樂屋を見て、直高棧敷の成るべく人目に立たない後の方にそつと坐つた。

「大切、淨瑠璃所作事、積戀雪の關の扉」と筆太に書いたのが舞臺の横に大きく張り出してあつた。お女將はすぐそれを見て、嬉しい樣なまた酷く心配な樣な變な心持ちがした。番附の式三番も其すぐ傍に少し小さく張り出してあつた。小靜の絃が堪らなく心がゝりでまた待ち遠しい樣な氣にもなつて、お女將は無意識に煙草を吸ひ〳〵して幕のあくのを待つて居た。

もう土間も大向ふも大抵一杯になつて居た。お茶屋

と藝妓の名を金絲で書いた緋の緞帳の中からせり立てられる様な賑やかな囃しの音が聞えて來た。

（地賞）

○友の結婚

牛込　若菜

美子は、うつとりと、門の柱によりかゝつて夕榮の空を眺めて居た。重たい高まげを急に結ひ變へ、輕い桃割にした爲か袷に羽織を重ねた膚にしみ／＼と晩秋の風がしみ渡る。例時よりよく夕燒のした、空は反射して、あたりのすべての物が、黄色をおびてくれの色は近づいて來た。

美子は、たまら無く淋みしく成て、身を柱に凭せかけたまゝ兩手を帶の間に挾で、じつと、遠い／＼夕燒雲につゝまれた、何物かを見出だ想とする樣にあかず見入て居た、昨日の晝の事を美子は亦思ひ出して、深い深い、ため息をついた。

「美ちやん一寸」と母によばれて、奥に行くと、

「あのうね」と母は云ひ惡く想に、美子の見合も終まして結納とばかりに運んだ縁談の急に破談に成つた事を話した、其して終りに「仕方が無よ、縁談と云ふ物は時と運命を待つよりねえあきらめが一番だよ」と、なぐさめるつもりで言たのが、美子には運命でかしにされるのが、たまら無く口惜しかつた。

其の日の夕方、髪結ひの來たので、綺麗に結て有た高まげをこはして、亦元の桃割に結ひ變した。

「何事によらず、親と云ふ權利をふり廻して今度の縁談とても、本人のこゝろも聞かず勝手に定めて置いて今破談になつたからつて、運命だからあきらめろのつて其れで親の責任は終むのだらうか」こん那事を思つてゐて、「美子さん」と後から肩を打たれるまで、自分の側に人の來るのを知らなんだ。

「おや君子さん」とはじかれた樣にふり返つて、無理に笑顔で迎へた。

「たいへん何か考へ込んでゐらしたわねえ、あら今日はお髪をお變へなすつて」と君子は不思議相に上から下まで見上げ見下ろして、「おせいの高い方はやつぱりお高まげの方が私し可い樣に思ふわ」と云たけれど、美子は其の方の言葉をわざとそらして、「今日はどちらへいらしつたの」と聞いた。

「姉さんと白牡丹まで」と後を何か言はふとしてすぐ

「日曜ですから遊びがてら」と言ひまぎらしてしまつた。美子は「お仕合せねえ」と君子の肩のあたりから頭を見やつた、其して君子の髪の、島田に結て有るのを見て、何とも言へぬ淋みしい感じがした。

其れから二人は、二三話し合てから「十二三日のころ屹度いらしつて頂戴よ」と、君子は念を押して、云て、歸ていつた。

最う日はとつぷり暮て、君子の足袋だけが白う浮てよひ闇の中に見えた。

三越に行たのよ、今日は白木屋へ、一寸そこまでお使ひにと、君子は一週間ばかりは毎日の様に美子の宅へ寄た。其して例時何か云はうとして、はにはかんで、口をつぐんで了ふのだつた、美子は別に氣にも留め無かつた。

「白牡丹に行きましたの」と言て寄てから君子はめづらしく長く、美子の宅を尋ねなかつた。美子も約束の日に急に用事の有つたので行かなかつた。手紙のやり取りをするでも無く。二人の、交際は、一月あまりと云ふものそれつ放しに成つて居た。

其の年も早や押しつまつて、往復の人の足音も何と無くせはしない。暮の二十幾日、美子の宅へ地方から、手紙がとゞいた。發信人は宮崎君子。

「おや」と手に取て見て、苗字こそ變てゐるけれど、其の筆蹟で、友の君子と云ふ事は直ぐ解つた。

……………………

苗子が變つて居るので、さぞお驚き遊ばしたでしやうあらおてつちや嫌ですよ、何故話さ無かつたかつて、其りや私しも申し上度くつてね、毎日〳〵うるさい程「何たんですよ、ですけど……申し上る機會が無かつたんですもの、かんにんして頂戴、式ですか、日比谷大神宮で上げましたの、披露は芝の紅葉館で、大勢の中ですもの隨分きまりの惡い物よ、全く夢中でしたわ。

其れから三日目新橋を立て、宮崎の故郷に參り今は彼の景色の可い明石に滯在中ですの、貴女も一度はお感じ遊ばす事でしやうけど……………

……………………

美子はてゝ迄讀でから、何思つてか手紙をクル〳〵と丸めて、投り出したまゝ机に打ちふして、聲をしのんでひた泣きに泣いた。暫くしてから亦ひろつて廣げて、終りの方を讀んだ。

いづれ近い内歸京致しますから、其の節亦おん目にかゝり幾重にも御詫致します。何卒惡しからず。
かしこ。

へだて無い友垣の、君子は會て話す樣に書てよこした。

美子も始めの內こそ、當てすられる樣な氣持もした物の、こん那に幾度も〱わびてよこした君子の心を思ふと「君子樣は私しのと何にも知ら無いんだから」とかう思つて、しはを奇麗にのばして、封に納めた。其して亦机の上に打ふした。

庭の木の葉は音も無時々思ひ出した樣に散る、美子のすゝり泣はいつまでも、いつまでも休まなかつた。

（入賞）

○仙子

麹町　葉子

「自分も餘程ズボラに出來上つてゐる」と仙子は始終思つてゐる。

彼女が學生生活の終り頃には、もう學生生活にうんざりして了つてた。時間だの、規則だの、校風だのに身體が縛られて居るのが息の詰まる樣に感じられて居た。放縱の生活！放縱の生活！これぱかりを待憧れて居たのだつた。在學中、暑中休暇が終つてがつかりしながら重い心に登校すると彼女の友達はよく、

「もうほんとにお休みが長くつて〱厭んなつちまつたわ」つて云ふのを聞いた。其語は仙子にとつて驚かされないわけにはいかなかつた。家にぶら〱して居乍らも（早く學校が始まれば好い）なんて思つた事はない幾何の講義なんかに散々癇癪を起して歸つて來た時や、教師連が神經質的に着物やリボンに干涉して直ぐ倫理臭い皮肉を聞かされる時なぞつく〲（さがつちまいたい！）と思つた。六時間の課業が終つて校門を出た時は、急に空氣が（或程度迄の『自由』）を含んでゐるのを感じて、心が輕くなるのだつた。よく友達から「橋本さんは歸りばかりお急ぎになるのねオホホホ意味深長なのよ」なぞとからかはれたものだ。そう云ふ場合、眞面目な辯解したつてどうせみんなに理解される事ぢやないから何時も「ゑゝおやつが待つてゐ

ますもの」つて冗談にして了つてた。

だけど家へ歸つたつて別に何をするつて當は無いのだ。偶に一時間繰上げて歸される時なぞ嬉しくつて堪らず、さつさと家へ歸つて來るが、そういふ時には氣を許して、ゆつくりと袴を帶に替たり、母と話をしてゐると平日と變りが無くなつて了ふ。

土曜日や日曜などはいつも隨分待たれたものだつた溜つた宿題の埒も明けて仕舞ひ度いし、遊びにも行き度いし、種々計畫を立てゝ置くけれども、いざ日曜となるとつひ寢過して了つて、髮なんか結つてゐるとすぐお晝だ。何處かへ行き度いと思つても好い相手がなかつたり、興を失つて了ふと行き度くもなくなる。學校の事をするのも惜しい樣な氣がするし、さて興にのつてやる樣な仕事も見つからないと、心はいらだたせ乍らもつまりはたゞぶら〳〵と座敷へ行つて見たり部屋へ歸つて來たりして日が暮れて了ふ樣な事になる。そして宿題に責められる時に徒に過した日曜が惜しくつて堪らなかつた。

が、何やかやと云ふうちに、いよ〳〵仙子も今年で學生生活が終つた。恰度花時を自由に　つた身は、毎日々々面白さうな事ばかり探して浮かれてゐた。日數は仙子をぶら〳〵させ乍ら大分經つた。

青葉の被さつて來る樣な一日、何だか心が倦怠い樣に感じられた。不規則な摑まへ處のない樣な生活。それに、もうそろ〳〵は出歩くわけにもいかなくなつたこの頃は「學校時代の方が飛び歩けた」と思ふ樣にもなつた。「少しは規則だつた生活が仕度い」と思ふ樣にもなつた。で、母から或仕事なぞ云ひ付かると、ホッと安心した樣な淡い嬉しさを覺えてそれに取かゝつた「私の春もゆく！」それが痛切に悲しまれるけれど、どうしたらこの青春時代が滿足に送れるのか解らない絶えず「私の春も僅だ」と叫んでゐながらも徒らに悶えるばかりなのだ。

かうした心持に仙子は口少なの日を送る樣になつた

（人　賞）

〇葬　式

月　草　女

驚愕と失望――這麼思に、お元の小さな胸は充されて、戰きに顫へる身體を主家の人達に助けられながら會堂に入つた。

「彼女が要助さんのお姉さんよ」誰かゞ小聲で囁くと會衆の目は悉くお元の上に注がれて、人々の涙に濡れた眼は痛ましさうに輝いた。

「百九十六番を歌ひます」頰髯の長く垂れた牧師が言葉に連れて。

海行くとも、山ゆくとも……

我がたまの休み、いづて

にか得ん。

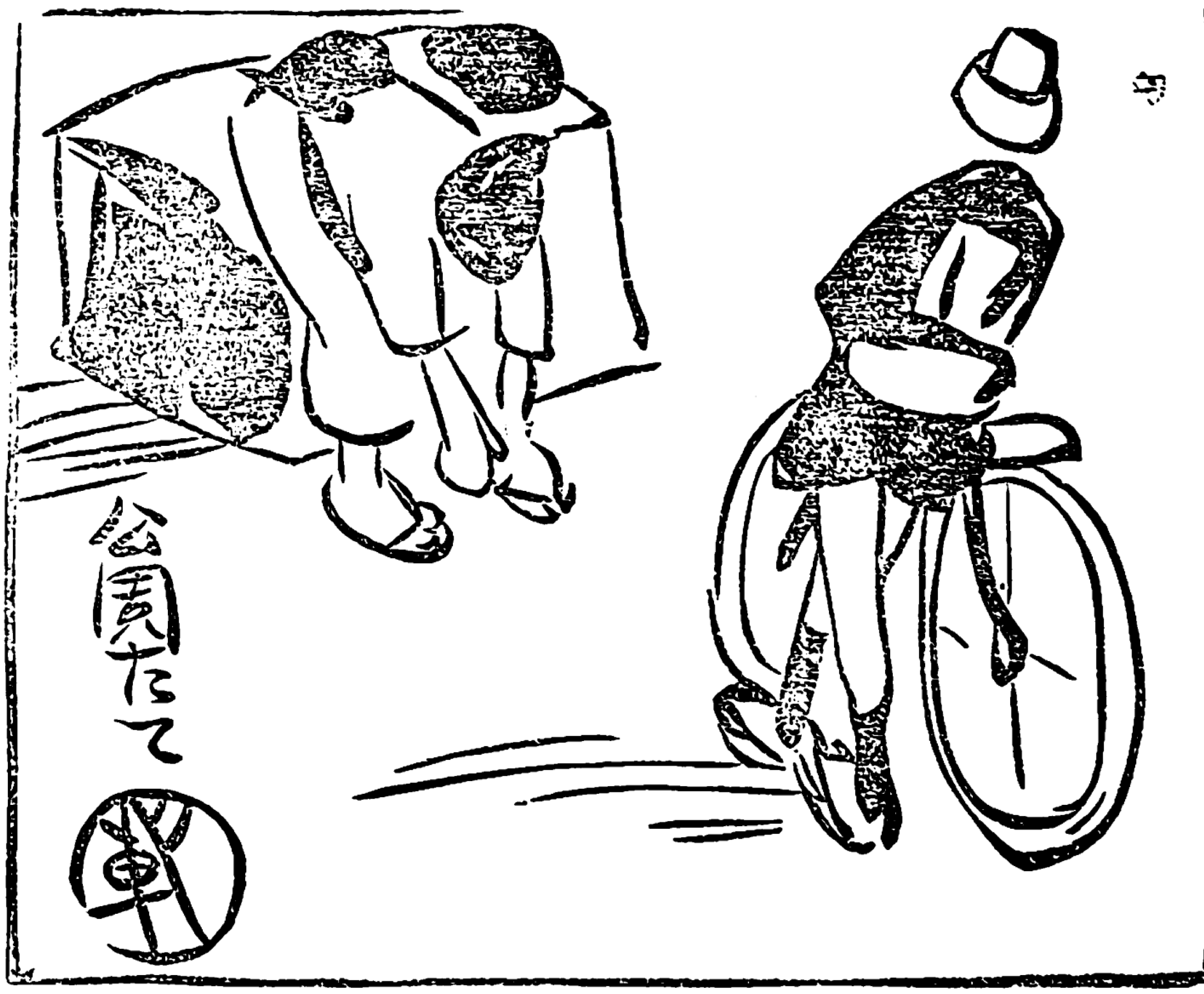
……死ぬるも死の終り

ならず、

生くるも命のまたきなら

ず……

澄渡つた讃美の聲が崇然と起つて來た。お元は人のする樣に黑い表紙の本を持て立上つたが、不圖眼をあげた拍子に正面に置かれた黑布に包まれた白木の棺其上に飾られた生前の彼の寫眞、供へられた二つの柿——之は只二つの初生を我子に喰べさせ樣とする母の情であつた——等を見ると既堪らなくなつて椅子の上に突伏して終つた。



公園にて（其二）　芝　後藤明あさ子

「ヨースケキトク、スグコイ」と云ふ電報を受取てから、一人の母を殘して取るものも取りあへず此濱に來る迄、全然夢の樣な心持で居た。逢つたら彼も云はう是も話さう等と思つて居たので、正可、僅一人の杖とも賴んで居た弟が知らぬ間に棺に入れられて、其小さなガラス張りの穴から青ざめた骨張つた顏を出して居らうとは。

自分達の手許でなら兎に角、甚麽に信用は受て居ても務めて居る先では隨分氣兼も多かつたろう、先月別れに來た時、もつと止めて

遣れば好かつた。田舍の靜かな所だつたら這麼に早くは逝かなかつたであらうなど〻思は思ひを產んで新らしい淚が跡から〳〵湧いて出た。牧師は何を祈つて居るのか、何を話して居るのか、耳にも入らなかつたのである。

「君が母堂に孝養を盡されしは……」氣が付いて見ると、髯の眞白な長老が落付いた句調で履歷を讀んで居る所だつた。

「君牧師に祈らん事を求む。牧師始めに君が病の癒されん事を祈る、君憮然たり。次に靈の安からん事を求む、君蕭然たり。終に望んで「されど主よ、御旨のま〻に爲し給へ」と祈る、時に君欣然、莊重なる態度を以てアーメンと云へり。以て其信仰を知る可し。」此處等あたりで、氣の弱い女の連中は又咽び入て鼻をつまらせた。

やがて祈禱が濟むと棺は四人の人夫に擔ぎ出された多年店に勤めたので寵愛の淺からぬ爲か、送られた花環も可成少くは無かつた。

「川根要助君棺」と墨黑々と書れた白旗も、眞先に立てられて十字架も、佛敎信者のお元には珍らしかつたとは云へ、見送人も可成大勢で雇人の葬禮としては過ぎる程盛大でもあるのが又、主人の情も偲ばれて淚を誘ふ種共成るのである。

棺の後には車が六輛許り、其眞先は主人夫婦で其次には、お元が乘せられた。殘つた多くの若い友達は後から歩きながら。

「君、全く意外だつたな、彼麼遣手だつたのに最少し生かして置きたかつた」と一人が云へば、他の友達も「僕は全然夢の樣な氣がする」等と話した。が現在棺を前に見乍ら行くお元ですら誠の樣には思へなかつたのである。曲り屈つた坂道を幾つか越す間も

「やあヤそのお葬式だよ」「あ、好い人なんだねえ、皆奇麗な着物を着てる」等と、子供達が集つて多辯つて居る間をお元は面を伏せて半巾を眼に當てたなり、燒場に着く迄放さなかつた。いつの間にか梶棒は小さい岡の麓で下されて居た。上り切ると鈍色の煉瓦の建物の前に立つて其手を引いて呉れた女があつた。稍々細面の眉のハッキリとした、葡萄鼠の袷に金茶の帶を締めて居る好い女だつた。眼は泣腫れて赤く染つて居た雖、大勢の中で一番際だつて見えた。其女が要助の生前の戀人お京であると云ふ事を、傍に居た會計の男から敎へられて何となく言葉を掛けて遣たかつた。思な

しが向でも懐し相に此方許りを見て居た。やがて穏亡は大きな鍵を持て來て重た相な煉瓦の戸を捩明て中からガラ〳〵と鐵キウ見たいな物を引出した。

「も、宜御座んすか、入れますよ」二人掛りで輕相にサッサと、かつぎ入れ乍らガチャンと戸をしめて壁の目塗を始めた。其響は妙に淋しく人々の胸に響いた。お元はもう足迄顫へて、「要助!!…」と云つたきり、自分も一層一所に入つて了ひたいと口説く、女達は又咽び入つた。

さらぬだに變り易い秋の空である、俄に雨がハラハラと降り出して來た。狼狽た晴着の人達は勿論、牧師達まで軒の中に馳込むやら、傘を廣げるやらした。その混雜に紛れてお元の傍にひしと寄そうたお京は思ひ入つた胸の亂れも被へない風で、

「お姉さま、私は一所に逝きたう御座います」

「まあ貴女も……」固く手を握り締めたまゝ泣いた。女らしい感情が高調に達した刹那、お元は骨を抱て獨り歸る淋しさも國に待て居る母への苦しい慰めも忘れたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○をとめでゝろ

東京　葛の葉

お客はお京一人であつた。髪結は白前垂の洗ひたてなのに皺のし迄して、商法柄としては小さつぱりした人、身ぎれいなのが此あたりの人の氣をひいた。

『まあお京さん、よう來て下さいました、さ、さ上つて下さいな、いゝ處でした今人がきれた處ですの。』

『おゝさうどすか。あたい誰か來てはるかと思つたのだすせ。まあよかつたわ。』

ずつと鏡の前へ行つて座をしめた。髪結も直ぐ其の後へ續いて立つた。髱はさみから前髪はさみに、かんざしとそれ〴〵髪から拔いて鋏を持つたと思ふとすぐ前髪、根と順よく元結をぱち〳〵はぢいた、そしてあらい櫛でとき出し乍ら

『貰ひに行きなすつたかねお京さん……』

後も先もなく突然こんな事は言はれたので、お京は案のない處、祖父　丹精で荐りに培ふ菊の白、黄、赤、等に思ひを走らせ乍ら。

『誰がですいな。何をどすいな。菊！あんた貰ひに丈ではさつぱり分りまへんがな。』

例の早口にいつてきつと口をとぢた自分の顔、鏡に映るのを見つめて居た、返事如何にと。
『あんたをさ。』髪結は云つた。三十を一つ二つ越えた太り肉の髪結は。につこりし乍ら。
『あたいのおたふくを。』これ丈強くいつて『誰がいなまあ。』次第に聲は細りがちに。
頰のほてりを耳元迄覺えた、そして我から鏡をみまいとさける樣に、左掌を顏半分にあてる樣にして、胸の動悸のはげしいのを自らさとつた、お京はまだ今年十八だもの、遲生れの。
『誰つて一寸した人ですわ、私はまたぎゝに聞いた丈ですのよ、まだ一昨日の事よ、貰ひに行つて貰つたが貰へるかどうかしらん、と言つた人があるでの事よ。』
髪結は新聞紙を渡し乍ら、一寸つてふけをうけよといつた心で、渡した。お京はそれを膝の上へ廣げ乍ら、
『一昨日の事、そんな話ちつともあらしまへんわ。』
『それぢや行つて貰つたといふ人がまだ行かないのかしら』
『そりや分りまへん。けんどまさかなあ…………。』
「美人の髪の結ひぶり」とかいた柱かけがひまもる風にはたく／＼と音を立てた。いくつも髷の形が、丸髷、島田髷、唐人髷、桃割などが寫眞にとれてあつた。
『當世流行つて髷ばつかりやなあ、あれ。』
お京は上目を使つてから云つた。
髪結はそれを柱からはづしてみせ乍ら、『どなたでも大抵同じ樣なのがお好だと仰有るのよ。お京さんはどれが好き？。』
お京はつきつけられた柱かけを兩手でうけて、ぢつと眺めて居た。
『さうどすなあ、私これが一番いゝやうに思ふのさ。』
前髪が一寸出氣持に髮がきり短かくて髱の丸いつぶし島田を指さした、髪結はにつこり、つばきを一つのんであふれる樣に、
『よういひなすつた。ほんとにどなたでもこれがいゝいゝつて仰有るのよ。同じ處に眼が付のかえらいて。』
五つにわけた一番中央の毛をよせて、きりを入れ乍ら兩方へしめわけた。そして一寸根をゆるめる樣にして。
『つよかなくつて？』
『えゝ、もうちつとゆるうてもようおますわ。』
『あゝそう、これでは？、これでは？』
『あゝもうけつこうどす、いゝ氣になあ、あんた、』
髱も出來前髪もふつくらと、きれいな唐人髷が出來上

つた。
『は、失禮しました、』髪結は小腰をかゞめたがすぐ其手でかんざしやくしを新聞紙で拭いて元にさした。お京は合せ鏡をして滿足さうにゝつこりし乍ら、首を一寸すくめて、
『ほんまにいゝ風に結へたわ。あたいこのかみが一等好きだすわ、年とつてもこれ計りに結つて貰ひまひようよ。』
『だつてお京さん、お嫁にいらつしやる時は島田なんでせう。いらつしやればもう丸髷でなくつちや、』
靜まつてたお京の胸はまた月の出しほと波立つのであつた。けれどさあらぬ體に、
『私お嫁になんか行くもんどすか、思つてもぞつとしますわ、實際よ、』
髪結は冷やかにほゝゑみ乍ら、『だつて一代おかゝり人でもあるまいに、其の中に氣が向いてゐらつしやいませうよ。』
輕くいつて、自分のかみをかんざしで赤い玉のかんざしで、ごし〱かいた。
『まあ、そねな話ならやめとくれやすや、いやな髪結さん』つてそつと睨んだ。

おあしを拂つて日和下駄からころと、人々には氣をとめないで、どうも今の一口がげせんと思つた、それにしても變な、母からか父からかこれについての話が何かあるだらう、と歸つても其んな話はちつとも出ない、解きものしてる母のはたへ口繪にまぎらはして雜誌を見せに行つたり、何くれと好機をあたへたけれど更にそんな話は出ない。
一日はかうして暮れたけれど、何かと腹が立つて、もどかしくつて〱、と袖をもだえた。
そして之について話が出たら、結局りは諾といふともあへたりこねたりさんざ駄々がいつてやりたい樣にも思つた。いや駄々いつてやると強く一人言さへいつた。そして明日は園町の姉を訪うて見よう、何でも打ちあける母の話場所たる姉の家をと樂しんで寢た。

○山のお湯

優香子

おつやは此頃ふつとした事からお友達になつて淑子と一所に、町はづれの石ころの多い道をせつせと步いた。その日はこゝらでは珍らしいほどの好天氣で、淑子の額にもお艷の濃い生え際にもともすればしつとり

と汗の染むやうな日であつた。道の兩端の紫の色めせた野菊までがつかれきつた樣に勢なく咲いてゐた。

「それで今日は小母さんどんな御樣子なの、少しはいい方ですか」お艶は急に思ひ出したといふ樣にかう云つて町からくる時買つて來た柿や、紅く美くしい林檎を入れた袋を右の肩からはずにかけて、右の手に薄鼠色の洋傘に日をよけ、左にこれから山の湯へ行つて御晝の菜にする魚の這入つてるつとつこをさげて前に行く淑子の後から、つとつこの中の水がとけてポト〱と水の落ちる跡をみつめながら、不安らしい顏をして聞いた。

「有難う、今日はもうそんなでもないんですよ、けども一昨日の夕方は本當に驚きましたわ、急だつたものですから……」につこり笑つてかういひながら洋傘と右の手のつとつこ包とを持ち替へて、白い緒の麻裏草履に輕くパツ〱と薄いほこりを立てゝ、細い小川の板橋を渡つた。

道の右手に一文菓子を商つて居る店の前まで來た時淑子はひよいとふりむいて、そこから二丁ばかり先の小さな村の中程に一軒際立つて見える瓦屋根の家を目でさして、

「大澤さん――小學校時代の友――所へ近頃いらしつて？二人がこんなにして山の湯へ行く事を知つたらやくでせうか、」言つて淑子はさげすむ樣な笑を目にも口のはたにも見せた。

そう云はれるとお艶は反抗的に、何日か口上手な淑子に大澤さんの惡口を聞かされて一寸した感情の行違ひから、久しくあはない大澤さんがたまらなくなつかしくなつた。もう淑子と一所に行くのはよして知らぬ間に横のあぜ道から一直線にそこに見える友の家へかけ込まうとさへ思つた。

そして今年もお藏の側の柿の木に赤い實がたくさんなつて居るのをみて、去年東京の學校を出て此地へ來たばかりには、只一人の友――大澤さん――を姉の樣に慕つて眞先に訪ねて行つた事や、大澤さんが長い物干竿でその實をはたき落すとそばから袋に拾つてあとで日向の好い緣側でスル〱と長くむいた皮をひざの上に上せて話ながら食べた事や、大風の吹いた朝など裏の山へ栗拾ひに、行つた時、大澤さんが姉樣かぶりして笑つた事など思ひ出して、今かうして内所で淑子と山の湯へ行くのが、大變な罪の樣に思つてしよげて居た。

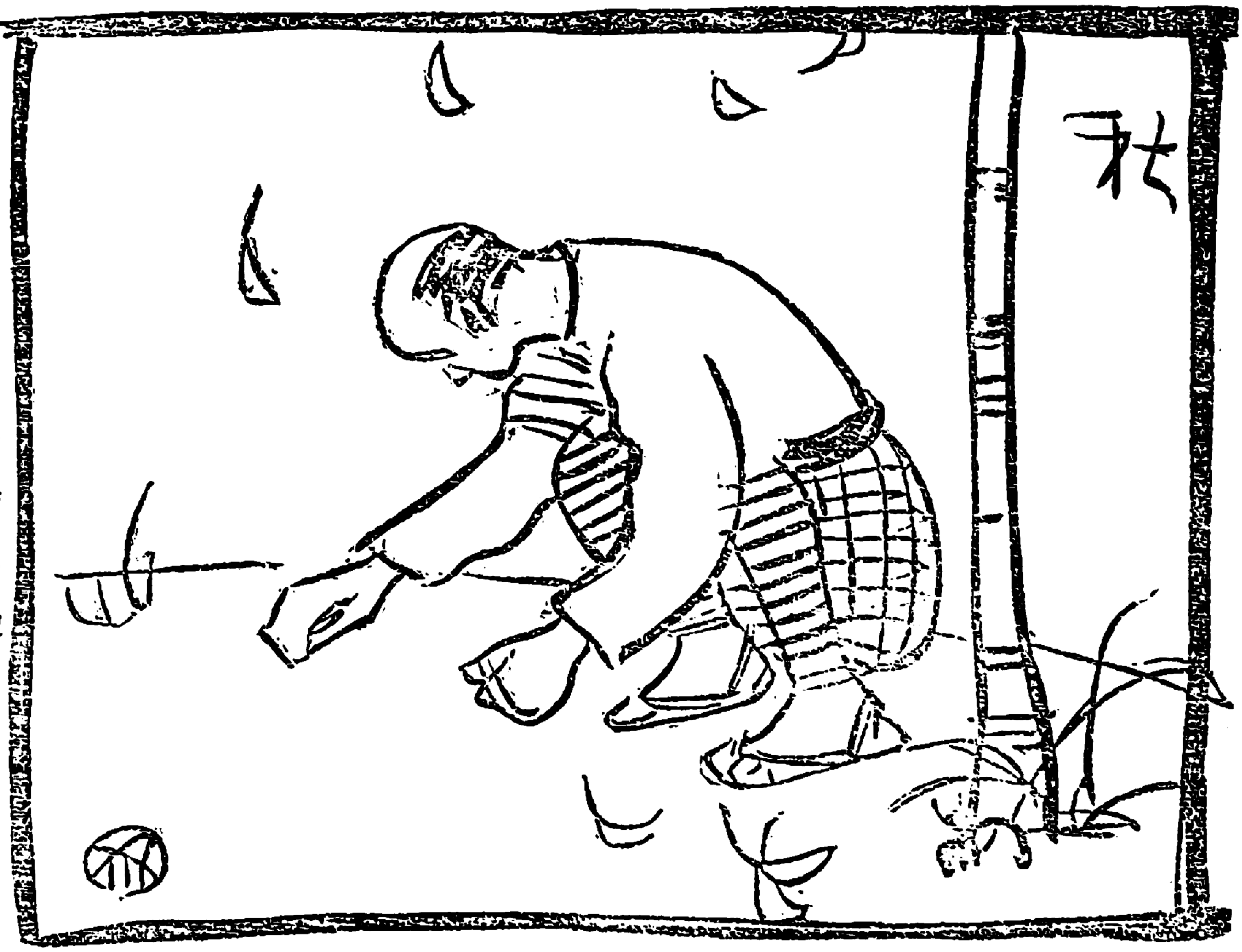
淑子は日頃呑氣な面白い事ばかり云つて笑はせるお艶が急に考へ込んで居るので

「くたびれたでせう少し休みませうか、」から云ひながら丁度そこの大きな松の木の影へ開いたまゝの洋傘もお魚の包も投り出す樣にして草の上に坐つた。

お艶もその側に座つてわざとらしい微笑を見せてホツとした。

山の湯へ着いた時寐て居ると思つた淑子のお母さんが門口まで迎ひに出てゐた。

「御病氣でしたさうで！……」口不調法なお艶はこれだけ云つてあとは只



秋　宮崎ともえ

おじぎをした。

小母さんは平常の樣に元氣よく御世辭のいゝ句調で、何もう大丈夫死なれさうも有りませんわての分じやあ、今一風呂入つてもういらつしやる時分と出て來た所なんです、まあまあ御苦勞でした。さあ上つてお湯にでも這入つてゆつくり今日は遊んでいらしつて下さいおかまひもしませんけれど……」云ひながら娘の淑子が持て來た魚の包を取つて、勝手の方へ見えなくなつた

お艶はもう道でいろいろ思つた事など皆な忘れた樣に、いつもの

通り氣輕に横の庭口から見晴のいゝはなれへみちびかれた。
其の火鉢のそばに見なれない若い男が巻煙草を吸ひながら、こつちを見て居た。
おつやはどきりとした、がすぐいつか大澤さんが聞かせた淑子のラバー？去年此地に開かれた○○會の時、視察に來て隣の二階を借りて居た人と心やすくなつたといふ男だと思つた。
淑子はためらつて居るお艶を後からおす樣にして部屋へ入れて、××さんを紹介してくれた。
そしてお茶を入れ替へたり、湯やの娘に
「何かおいしい御菓子を――」、なんて云ひつけて居るのがいかにも細君ぶつて居るのを見て、お艶はたまらなく不快に思つた。
一時間ばかり過た頃お艶は一人で淋しさうにして山を下つて來た。
先刻××が夫の樣なたいどで淑子にビールを注文する樣にいつた事や、淑子が「ハイ」つてやさしく妻の樣に立つて行く後姿など思ひ出して、だまされた樣にそれがいつも信じきつて居る淑子を一倍おそろしい樣に思ふと、たまらなくいら〳〵してかきむしりたい樣な胸をおさへてにぎやかな△△町の小間物屋の店先へ出た時ホツトして、急ぎ足にあるいた。

○若き命

近江わかば

東京に嫁いてゐる姉から、白牡丹の髪の結びぶりを撮影た繪葉書を送つて來た。菊子は其れを一枚々々膝の上に並べて憧憬れるやうな眼附にじつと見入りながらふつくらとした艶々しい丸髷に結つた姉の姿を思ひ浮べた。「其麽物は何になるんだね、其れでも一枚二錢や三錢はするだらう」と父親は、役にも立たない物を送つて寄越したものだと思ひながら横合から口を出した菊子は其れには答へずに姉の手紙にある上野の展覽會の賑かさや、白木屋の藤原式裝飾の立派なことや、其明るい華美な都の狀況を想像して、身體がむづ〳〵する樣だつた。「あゝ私も東京へ行きたい」と心の中で呟いた。
「阿母さん姉さんも白牡丹で髪を結つて來たんださうですの、三十錢だけれど其りや旨く結んですつて、一度其處で結つて來ると髪にいゝ癖がついて、次からは他の髪結に結はせても恰好がいゝさうですよ」

「三十錢つて一度結ふのがかい、――まあ勿體ない此處いらの四倍も五倍もだね、其麼に高く出したつて別段長く保つ譯ぢやあるまいし、……彼其れをお咲が結つたといふのかい罰當りだね」と、母親は瞠れたやうに眼を見張つてゐた。

「そりや始終ぢやないでせうけれど」と母親の罵しるのを見ると姉を庇ふやうにいつた。

「一體其白牡丹と云ふのは何だい」と母親は菊子に訊いた「小間物屋だけれど其處へ名高い髮結が來るんですの」

「へえ」と母親はまだ腑に落ちぬ樣子だつた。

手紙にはまだ其他に色々と流行の衣服のことなぞが並べてあつて、此冬着には從來の藍氣や鼠色は癈つて茶色がゝつたものが流行つて來たとか、そして色合も澁い一方といふよりも少し薄目になつて、柄合も縦縞のハツキリしたものが好まれる、――なぞとあつた。

菊子は容姿によく氣を附る、贅澤好きの姉の華やかな生活を思ひ浮べて、氣むづかしい吝嗇屋の兩親の側でじめ〱した黴の生えたやうな空氣の中で何一つ浮浮したこともなく生活してゐる自分のことを考ると泣きたいやうな氣持がされた。其れに、此あひだから話のある縁談のことに思ひ當ると尚と情なく思はれた。年に米の二百俵も入る田地持の一人息子で、當人は小遣取りに村役場の書記をしてゐる家柄はよし此位結構な縁はない姉さんなんか良い服裝してベラシヤラこそしてゐるけれど、何時もピイ〱の火の車だ。其れよりも田舍で呑氣に年中お金の心配なんかなしに暮らした方がいくら仕合だか知れない。儂等も今ではお咲を彼麼家へ遣つて後悔してゐる。彼麼一杯生活をしてゐるやうなことでは、もし免職にでもなるか死に分れでもしたらどうするのだ。彼女のことを思ふとおち〱安心も出來ない。それだからお前丈はそんな心配のない處へ遣りたいのだ。と兩親が口を酸くして説いても菊子は諾かなかつた。何故若い命をもつと樂しませてくれないんだ、と壓制な兩親が腹立たしかつた。姉さんは東京で學士の夫を持つて係累のない樂しい家庭を造つてゐるのに自分は其麼田舍の舅姑のある家へいつて一生を朽ちさせて終ふのかと思ふと涙がこぼれた

「どうしたつてそんな處へ行くものかまさかの時には姉さんの處へ逃げていつてやる」と心の中に叫んで菊子は氣むづかしい兩親の顏を眺めながらじり〱してゐた「其れ女が」とか女の癖にとか口癖のやうにいつ

て、眼に見えない十重二十重の繩で縛りつけて置かうとする兩親が恨めしい。「女だつて人間だもの」と、いつてやりたいと菊子はいつも思つた。

菊子は鏡臺の前に坐つて昨日送つて來た白牡丹の繪葉書に見入りながら同じやうな恰好の髱の長い束髮に結び上げた水のやうに澄んだ鏡には庭の樹木から高い空の浮雲までを背景に、色の白い血色のいゝ顏が寫つてゐる菊子は合せ鏡をして見て微笑んだ。長い髱を氣にして片手で輕く壓へながら勝手へ來ると母親は張物に使ふ麩糊をぐつ／＼煮てゐた。側に立つてじつと其れを見てゐると母親は、

「鄕田さんがゐらしつてるからお茶を上げてお出で」と云ひ付けた。

「鄕田さんが何しに」とお菊は故意と訊いて見た。

「此間のあの緣談さ」と、母親は澄ました風で杓子で鍋の中を掻き廻してゐた。

「可厭だ、どうしたつて彼麼處へ行きやあしない」と菊子は、拗ねたやうな我儘な風に斯ういひ切つた。

「まあ仕樣のない――太い子たねえ」と母親が瞠れたやうに浴びせるのを後にして、菊子はふいと茶の間の緣側へ出た。

くど／＼といゝ事づくめを並べたてゝ媒介口をいつて來る鄕田も、其れを眞に受けてゐる兩親も、いゝ緣談のある時に思案してないで手離して了はなくつちやあなどと親切らしく云ふ親類の人達も、凡てが取るに足らないつまらない人間のやうに思はれた。

「あゝ可厭だ！東京へ行きたい」と呟いて菊子は掌で頸をしやくるやうにして秋らしく澄んだ空を見上げた

選評と感想

葉舟選

△今回の投書は數も多かつたが、「結婚」を書いたのゝ多いのには、面喰つてしまつた。或るシーズンが來たのかしらと思つた。諸君の年齡の上に、又は境涯の上から、そろ／＼さう言ふ時期が、暗默の中に押しよせて來たのかとも思つた。自分がまだ學生の時分に丁度、中學を出てから專門學校の二年位、年で言つたらば、十八九から廿二三位までの間には友達同志でよるとは、戀愛論が盛になつた。それも初めは理想的で、神聖論で、だん／＼プラクチカルになつて、ダークになつて來る。それから大學を卒業する前あたりから、そろ／＼結婚についての話が起つたつけ。それも初めは理想論が多かつたが、世間に出て、自分の手で、自分を養ふやうに成つて來ると、そろ／＼實際問題が起るのであつた。そんな態な調子があつた。今回の選をしながら、それを思ひ出して、面白く感じた。

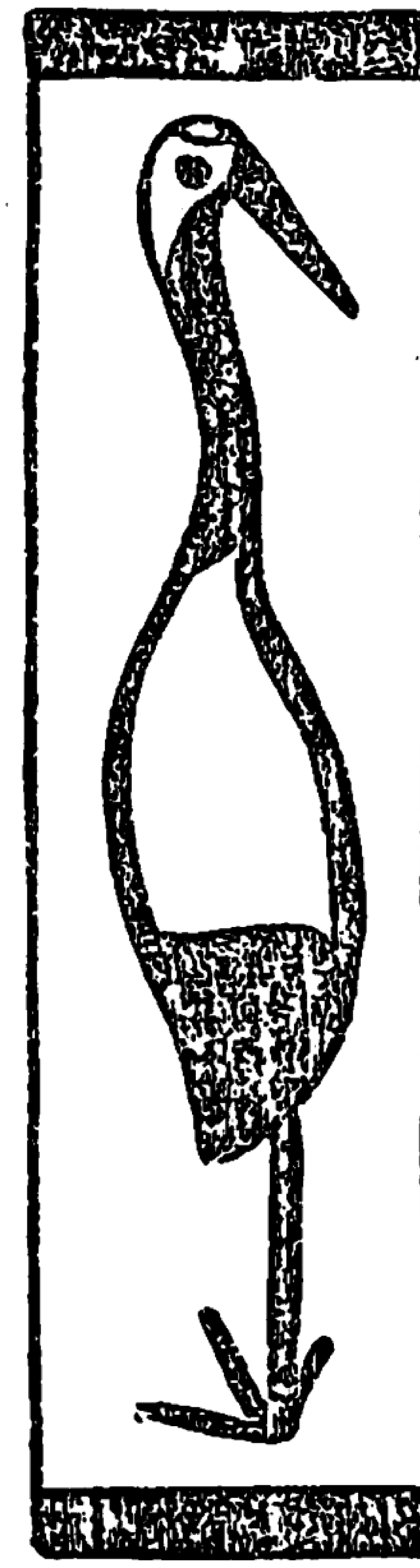
△今回の作にはいゝのが多かつたやうに思ふ。葛の葉（東京）の「をとめ

ごゝろ」は、豐に潤があつた。殊に終りの「そしてこれについて、話が出たり」云々「あたりこねたり、さんざ駄々をいつてやりたいやうに思つた。」の一節で、全體に生命が傳るのを感じた。蕖子(東京)の「仙子」も單純ではあるが、正確であつた。これも終りになつて、自然の力に押されて行く處が面白かつた。矢澤榮子(東京)の「若吉姐さん」は見劣りのされる作であつた。もみじ、普通の――レヱルの低い人情にばかり涙をこぼさずに、書く人の生活を立派にさせたら如何だらう。植松巴子(東京)の「秋の夜の事」はチャント出來た作だ。投書らしい作だ。才のある人だが、目の置き處の低いのがあまり見すぼらしく思はれる。千鶴子(横濱)の「銀貨」はこの雜誌などには珍らしい作だ。自分のこの作に感心した點は、横濱の一部の夕方の寫生にある。ケテーといふヒロインの心理については、やはり常識的に考へて行つたもので、人間の血肉のしたゝるものでは無かつた。わかば(近江)の「若き命」も、この人の平生の作に比しては整つたいゝ作であつた。だが、考へ方がヤワである。世良田優子(信濃)の「犠牲」は今度は、又如何にも樂に出來て居る。如何してこんな拙いものを書いたのだらう。自分は、多少、豫期して居た故か失望した。若菜(東京)の「友の結婚」この人は大變好くなつた。しかし、まだ作者の心が出來て居ないので、だんだん整つて行くと言ふだけで、深く入つて居ない。この人のにはヒステリカルな處がある。面白味もそこにある。廣くなられん事を希望する。それから自分の周圍の描寫を大切にせられん事を希望する。文字を正確に書かれる事、語格を正す事これなどは、自分で注意してほしい。村山咲子(千葉)「妹の結婚」これなども、やはり樂に見てしまつたものゝ一つである。空想で作つて行つたものゝ一つである。野の人(東京)の「お藥」これも同前、足立春子(神戸)の「新しい光」は平穩な作だ。女子は自らもこんな作をして樂しむ處があるのだらう。優梨子(信濃)の「踊のおさらひ」は圓熟した行きとゞいた描寫である。しかし自分はこの人に向つて一つの恐れる處は、この人には柔さはあるが、鋭さが無い點である。それもいゝ、だが、この人が小さく固りさうで困る。それに、筆達者になつてしまひさうで肝要の「生命」を傳へると言ふ事を忘れさうだ。月草女(横濱)の「葬式」もいいと思つた中の一つだが、それは筆付き、筆の熟れ方がいゝと思つたのだ。この人と、「銀貨」を書いた人、若葉といふ人、蕖子といふ人などには望を囑さねばならぬと思ふ。

△明星(東京)の「夜寒」は古いセンチメンタルの作。美女子(周防)「叔父」も、勝手な、一人でいゝ子になつてる人の心持がよめるだけの作。優香子(信濃)「山のお湯」この作は、素直ないゝ處がある。筆も伸びて居る。も少し、意識が明かになつたらよからう。青柳(東京)の「半紙」も細々と書いてあるのが、いゝと思つたが、まだ一息たらぬ點がある。秋月すゞ子(越後)の「結果」は粗雜を極めた作。百瀬美水(信濃)の「野良の一日」は何でもないだけに、嫌氣もしなかつた。

△今、自分が選をして居る時は、四十四年の十一月だが、これが發表されるのは、四十五年だ、四十五年には、こゝからいゝ作家を紹介したいものだと思つて居る。

△今月は自分にとつて、諸君に紹介すべき作が非常に少かつた。新小説に書かれた徳田秋聲氏の短篇「わき道」は珍らしく人間をなめ盡した感じの殘る作であつた。冷やかな態で、憎惡がその中に隱れて居るやうであつた。その外には新しく出た「ザムボア」と言ふ雜誌がある。前の「創作」が改題し、主宰者が違つた雜誌である。この雜誌が如何に發達して行くのか知らない、この中には木下杢太郎氏の詩「椎の葉」及び同氏の「夜」と云ふ戯曲がある。これには堅實な(或は堅すぎるかもしれない)考へすぎたと思はれる感じが殘る。その他には北原氏の詩と散文とがあるのに目がついた。氏の生活はこの散文で見ると、まだ素直な少年の時代のやうである。「木曜便」(早稻田文學)と「文部省展覽會批評」(讀賣新聞)との高村光太郎氏の評論も注目すべきものである。正宗白鳥氏の短篇も數種あつたが、どれも、テクニックの正確さを見るもので、影が意に薄かつた。



和歌

與謝野晶子選

○（天）　宮城縣　齋藤靜子

わが戀と君する戀と相よりて濃きくれなゐの玉となるてふ

○（地）　本郷　平塚白百合

灯ともせば白き壁にもいさゝかの匂ひおぼえて心あかるし

○（人）　大阪　小泉貞子

宵戎八千代を載せし寶惠籠の紐を飾りぬ春の淡雪

佳作

○　大阪市　杉山かし

音もせで櫛の折れたる時の如いまはしき日の三日つゞくわれ

○　磯村はる子

みとりてき椿の葉てそめでたけれわれらが髮の色に似たれば

○　金澤　森薄紅葉

みづからの頸に手ふれてわれ夢む手枕かりしいつぞやのこと

○　富山縣　宮崎晉戸子

雁のつら寂しく啼ける秋の夜に遠方人の消息をまつ

○　信濃　世良田優子

秋の水いとあまりなる冷たさよ紅とく指の悲しみの湧く

○　信濃　露子

もの解かぬ人ともならばいかばかり嬉しからまし憂さもなからん

○　大分市外　小原芳香

寒菊や冷たき淚はら〳〵と朝會ふ度に落す哀れさ

○　秋田縣　貞子

我が戀は危くなりぬくもの巢の絲にかゝれる木の葉のごとく

○　波島　宗原美津子

やがて死ぬ日も來るべきわれなれどつくれる戀のわびしさに泣く

○　加賀　村田糸子

はなたじと君が心を守ること物うくなりぬ戀の終るや

○　伊豆　水の花

かずしらず男の子の群の押しよすとくろ髪見ればまぼろしのわく

○　水戸市　足立さゆり

我爲に泣ける一人のありしともおち髪を見ておもふはわろし

○　埼玉　大鄕米子

小雨して秋の果つる日むさし野に蝶とあきつと舞へるさびしさ

○　茨城縣　片岡治

君戀ふるわれのこゝろと日輪の花は朝夕火の海にさく

○　三重縣　駒越くに子

忘られし戀人のでと泣きぬれて月の夜明にたてる龍膽

○　岡山縣　入江すみれ

たえがたき悲しみとはたよろこびと一時にわく胸のくるしさ

○　東京府　大府愛子

靜やかにものを思へば落葉するひゞきも胸にふれ來るかな

○　東京　蔦の葉

虹の橋渡るが如きよろこびをおぼゆると云へあやふけれども

○　群馬　わか

旅の宿コスモス散るに涙しぬ君に別れてひとり來しわれ

○　京都　要司村ふく子

泣く人も止むる人もふりすてゝ來しわれながら物足らぬ哉

○　後志　櫻井美耶

いとふかく文箱に秘めしいくつかの御文やきぬ魔にならんとて

○　土佐　ゆかり

秋萩の花にも似たる吾一人鈴蟲きゝぬ淋しき夜を

○　東京　瑞野露子

白鳥の羽のしづくのきらめきに照る日うつくし大洋の春

○　渡島　露華

戀しらぬ少女の身さへ何となく人のしのばゆ秋のこの頃

○　千葉　鈴木ぺん子

照る月に影をうつせる丸木橋流の中に夜を鳴く蟲

○　松原小夜子

夢さめて足冷ゆる時つくぐとわが身さびしく思ふ時來ぬ

○　三國町　堀端菸月

淋しくも戀の終のおとろへを覺えしといふ姉の消息

○　越後　田巻てい子

香のなきを咎めたまふな故鄕の柿の一葉を封じまゐらす

○　大阪　紫香子

色あせし雁來紅を見る毎に胸病みいます君思ふかな

○　神奈川縣　長谷川千代子

靜かなる波うち際を遊ぶ人秋のあはれは知らじと見るや

○　鹿兒島市　姉川梅子

ふるさとの伯母もはるばる上り來て共に祝ひぬめでたき春を

○　　金澤市　山田他美

すぎし日の思出我を取りまきて日々の命のさきたげをする

○　　神戸市　緑髪子

風の音雜木林にしばしやみ落葉の歌を吾れにきかしぬ

○　　美濃　遠藤芳枝

野の中にはなれて立てる三軒屋月の照らしてこほろぎの鳴く

○　　渡島　田山清子

わが心二人の君に分ちやる戀もつきけり秋のくれがた

○　　王子　早川妙子

たよりなき事を思へばまつはれる戀のうれひはいよいよ深し

○　　東京　島貞子

月を見て野道を一人我は行く冷たさを知る秋のあめつち

○　　横濱　月草女

町に立つ柳の並木君思ふ血も年毎にうすれてぞゆく

○　　大阪　田野しか子

くれなゐのこの美くしき絹衾卒塔婆にかけんさむき冬ゆゑ

○　　埼玉縣　中澤高子

梅高う匂ふ小床に元朝の星の少女と云ふはわがこと

○　　千住　白妙女

ぬきいとの色あせぬまゝこぼれけり昔の紅のなつかしき哉

○　　牛込　星野愛子

消えてゆく冷たき朝の白き霜このごときゆる戀のこゝろか

○　　豐後　紅い花

君がこと聞くとき顔のほてるをば覺えぬわれは戀をするらん

○　　美作　水田邦子

秋風に木の葉こぼるゝ深山路のこけむす岩に霜白くおく

○　　京都　はづ枝

正月や友の少女とかたらひて疲れしあとの淋しき心

○　　福岡　建部夏久子

朝まだき菊の畑に下り立ちてみそらに殘る月を見るかも

○　　神戸　百合香

戀知らず涙も知らずはたとせを過せし我とすなほに云ひぬ

○　　淡路　内海千鳥子

君にとて綿あつき衣縫ふ窓に初戀すれ思ひみだるゝ

○　　横濱　夕野萩子

黒髪の亂れて寒き手枕に河鹿なく音を數へつるかな

○　　下澁谷　小原あい子

さと風の吹き來る大樹華命のいくさの如く木の葉散るなり

○　　備中　兵延まき子

悲しき日語合ひつる姉二人今日ははやなくわれ二十する

○　　淺草　爲井若菜

永き夜をかるた取りつゝ更しぬる去年の少女も子の衣を縫ふ

○　　備後　藤原清子

君が聲しばしとだえて寂しくも庭の千草にこほろぎの啼く

○　　本所　そのえ

ただごとの其れより他に戀と云ふ文字許されぬ君と我哉

○　　信濃　利惠子

やはらかき肌にぬれたる衣きよと云ふが如かり人の世の風

○　　秋田縣　森靜子

今日よりは年もめでたく變りけり心も共に善きに變らめ

○　大阪　八重子

雨降りて淋しき夜は更けにけり心の憂さを如何にかくべき

○　愛知縣　中村白百合子

鏡臺は白きちりおきものおもふ二十の人に秋の風吹く

○　沼津　山縣時雨

草枯し野末に立てる少女子の袖に蟲鳴く秋のあはれさ

○　伊豆　枝折

庭の隅只寂しげにすく〳〵とのびし雜草我に似るかな

○　麹町　琴子

水色の歌集の表紙手ずれ行くこの如いつかいたみゆくむね

○　三重縣　なでしこ

冬くれば伊賀の山奥ひとつ家に戀なき少女歌のみをかく

○　越中　宮崎貞子

白萩の亂るゝ垣に身を寄せて君を戀ひつゝ月を眺むる

○　仙臺市　赤間とし子

淋しくもはた悲しくも聽ふなり秋の夕の笛の遠音を

○　茨城縣　漂花女

コスモスの佗びしう咲ける廢園にしら〴〵渡る秋の夕風

○　神戸市　雪の女

晩秋の稍々暖かき日の照れば白山茶花のなつかしく咲く

○　越後　貞子

磯に出で泣きくづれたる後よりやさしく抱くたたむきは誰

○　井上つきみ

少女子の二なきほこりを戀といふそれも知れどもかひなしおのれ

○　備後　今井村子

きり〴〵す京に聞く夜のかなしけれ遠くへだてゝ母思ふわれ

○　下總　山和野その子

秋の日は天姫のうつ手毬かもかの大ぞらの草にかくるゝ

○　千葉縣　松崎きよ

うら若き涙はら〳〵おつる時消えもするごと寂しまる身を

○　本郷　城本月見草

はら〳〵と風なきに散る山茶花を見て哀れなり我心老ゆ

○　仙臺　橋本志久子

神無月寒き夜の月やれ垣の一本殘るしら菊にさす

○　紀伊　宇田すが子

ほのかにも君がくちびる盃にふれてもゆるをうつゝにぞ見し

○　千葉　伊東さく子

亡き母のみ墓の前にひざまづき涙流しぬ菊かざす人

○　東京　藤田美夜子

悲しみかはたよろこびか戀衣着る身は重しはためでたし

○　城南　小島美雪

友は泣きわれはさびしき微笑にまた新しき春を迎ふる

○　下谷　津端かよ子

落葉ふみ林の中へつと入ればほのかに匂ふ秋の霧かな

○　常陸　星野觀子

本郷の垣根つゞきの屋敷町山茶花の花ほろ〳〵と散る

○　金澤　しほくみ

わが戀ふる人の住家の門の前うつむきて行く子もにくからず

○　和歌山縣　都田操

美くしき君の思出怖ろしき夢の思出ある身はかなし
○　牛込　西村しのぶ

暮れて行くさふらん色の大空を眺めてあれば悲しみの湧く
○　牛込　西村あやめ

枯草の上にまろびてなつかしき秋の囁きしみ〴〵と聞く
○　福井　北　利子

あたらしき春を祝ぐ日の旗に京ははやくもうすがすみする
○　佐渡　わくらば子

銀杏ちる石のきざはし上りゆく女の肩に秋の風ふく
○　本郷　植松巴子

灯の多き夜の都會のどよめきに別れし身をば運ばれて來ぬ
○　信濃　百瀬若子

行くがまゝ思ふがまゝにあらしめよ此の若き日に悔をのこさじ
○　千葉縣　五木田纏子

姉たちのなかにまぢりて笑みてゐぬ島田もゆひし年の正月
○　足利町　名無草

此まゝに消えん幸をも願ひっれ君とわけ行く深山路の霧
○　岡山市　桃の村女

少女てふ花やげる名にさからはず笑みて苦しき年も迎へぬ
○　上毛　加納やす子

眞白なる君が腕にふと疊のつきたるもよし冬近き朝
○　羽後　三浦ふみ

ふとわれにかへればさびし柳ちる水はるかにもくれし山々
○　越後　かへで

平らかに靜かに流れゆく水も愁ひのあるか瀬の音のする
○　本郷　中村えい子

くろかみのゆらぎよ長きふりそでよ春は美し我が身ながらに
○　陸前　浮草子

少女ゆゑ胸に秘そめる或るものゝ奇しき力が嬉しさを呼ぶ
○　岡山市　石井明子

秋更けぬ小窓によれば青白う月の照るこそうらがなしけれ
○　長崎市　永井圭子

わが門に二もとの松たてしより風は靜になりにける哉
○　王子町　大浪せい子

初春を靜けき里の松かげに祝ふ少女をたたきぬあられ
○　王子町　倉田きん子

更くるまでさやけき月をあふぎつゝ君を忍びて泣く人われは
○　群馬縣　高橋夕星

自らをもてあましたる少女子のはかな心に木の葉色づく
○　金澤　俊子

逝く秋や唄うたひつゝ野邊にたつ鄙の少女もさびしきものを
○　山形縣　智惠子

冷やけき雪てふものも世にふるになど我れのみは燃えまさるらん
○　麴町　あららぎ子

君のため送らんとせる此の文はわがものながらなつかしきかな
○　京都　芳子

日に三度藥の瓶をとる時に細りし手見て涙こぼしぬ
○　向島　花の家

花に飽かば捨てんと云へるみ心の悲しくなりぬよそごとながら
○　秋田縣　千代子

風吹けば軒の端ちかく栗の實の九び落ちくる家のこひしき

○ 大阪市 雅子

古沼の枯あしに似て淋しかる少女子なりともひとはいへども

○ 下野 高村醴子

若き日の思に燃ゆる我が戀はいと美くしくいとかなしけれ

○ 岡山 大山茂子

ものにうゑしおほかみのごとわがなさけもとめたまひぬおそろしき君

○ 龍山 あき子

里少女ましろに引ける絲の如手首細るが哀れ寂しき

○ 茨城縣 直井はる子

文添へて菊をさゝぐる御使に九つの子の選ばれしかな

○ 茨城縣 中島くに子

杖つきて碑をよむ僧一人さびしく立てり常陸の夕

○ 朝鮮 五月女

枯れはてし冬の野原にたゝずみて何をおもふや二十のわが身

○ 萩の里 姬小松

捨てしまゝ捨てられしまゝ歎くなりやつれし少女白きコスモス

○ 岡山市 石井淨月子

そゞろにも垣根によれば白菊の氣高き花に霜のおくかな

○ 豐後 吉田夕草子

小ゆるぎの磯邊の砂に君がみ名書きては消しつ春のたはぶれ

○ 麴町 牧野銀杏子

いとあつき涙そゝぎし墓石に別れて歸る淋しき心

○ 備中 小見山春子

けものにも鳥にもあらぬかはほりの暗きを好む性に似るかな

○ 美作 藥園

たれなりと御名も知らずその影のわすられがたき人にもあるか

○ 翡翠子

もえ出でし野の若草に春雨の匂ふ朝なり消息をかく

○ 島根縣 加藤枝解子

山のはにほのめきそめし月背くむしろおる灯のいと細きかな

○ 廣島縣 翠子

又の日は手にせじとわが云ひし文弱き心に涙して見る

○ 小樽 吉成愛子

夜も長さ針の仕ごとにかかれどもわりなく思ふわれの行末

○ 神田 石田美子

三つ程も若く見らるゝ誇らひに花やうにもよそひくらす

○ 東京 赤蜻蛉

君が名をよびつゝ暗をすかし見る我胸にうつ浪の音かな

○ 信濃 工藤清子

なやみある胸をいだきておばしまに涙のあとをのこす夕ぐれ

○ 福井縣 土屋智惠子

遠山の昨日の紅葉色うせて野中の庵は秋暮てゆく

○ 京都市 島本久惠

紫の匂ひの深き衣ぬへば心をどりつはたも愛ひつ

○ 新潟 都久子

涙ぐみうつむく我を何故と肩に手を當て問ひ給ふ君

○ 大阪 秋雨

わが話今悲しみの日に入りぬ人らはすべて身じろぎもせず

○ 岩手 清子

金色に山々燃えぬ遠き富士はうすくれなゐに春の夕ぐれ

○　岩手　露草

大空の眞白き雲よ秋の野よたゞ云ひしらぬ悲しみの涌く

○　常陸　田村はつ子

わが庭の樹々の葉のちる夕まぐれ寒き涙をぬぐひぬるかな

○　千葉　村山さき子

秋もよし冬もよけれど一人われ棲みがたきかな淋しきゆゑに

○　鶴岡町　野口菊子

男子らにもの一つ云ふもはぢらひしをとめ心もうせはてぬ我

○　伊勢　花擧子

冬枯れしまがきの菊の一輪とわれを思ふもうら淋しけれ

○　伊勢　矢枝子

君は來る我はゆかんとするみちにたゆたふひまの歌ども詩ども

○　越後　秋月すゞ子

濃青なる池の面を木々の葉は紫にしぬ紅葉してより

○　前橋　みづ枝

人こひて母を捨てたるその少女上毛の野の落日に泣く

○　茨城　芳香

面影を胸に描きて君忍ぶ淋しき日なり木の葉おちゆく

○　神奈川縣　しうん子

おのづからさとりし時の遅ければ戀してはやく秋に入りにき

○　伏見　阪かず子

潮滿ちぬ薄明りする遠方の空を望みて小舟にぞ居る

○　椰良美那子

ともすればいとかなしくも北洋の氷の上に座しぬ心は

○　加賀　勝崎きく子

窓の竹をこぼるゝ水をきくときはみな〱かなし胸にうくこと

○　土佐　はぎ子

日の本の少女美くしし二十てふ年の盛りは花に似るかな

○　備中　春子

なげやりの此あさましき姿にも似ずて頬あかむはづかしきわれ

○　上毛　小澤岳子

美くしき花にもまさる戀人の情を見たり死なんともよし

○　群馬縣　富田くじ子

花にあき月にもあきし少女子の袖さへぬるゝ話の上手

○　熊野浦　中田靜惠

少女子はまろきはしらに身をもたせうたひてはなく初戀のうた

○　土佐　鍵山春水

幸あれといのりし君は良妻を得たりと聞くに何の涙ぞ

○　備前　赤木あさし

青鷺は時を忘れず沼に來ぬ我思ふ子の我に來ること

○　荒木伴子

またらにも霜なほ消えぬ初冬の西の都の四條大橋

○　本郷　細川ばら香

青柳の下を流るゝ春水に女は髮をあらふなるらん

○　備前　若宮月枝

比叡の山辨財天のみやしろに菫の時雨の横さまにふる

○　備前　堀谷かづ子

ともすれば暗きかたへと誘はるゝ心をもつはかなしかりけり

○　備前　若葉千里子

くらき海君は見いりぬ胸痛く別れんのちのことわれ思ふ
山城　木の花

○うたひつゝ足をそろへてくる子等の春をきかざる衣のめでたさ
群馬　はゝ木

○雲いくへへたつる方の君こひし秋をさびしく泣くのみならず
越後　貞子

○さびしさに泣きぬ相見し初めの日くみせし言葉そも思ひ出づ
相模　中村貞子

○嬉しきは君のふみをばふところに抱きていねし夜より癒えし
島根縣　藤田豐子

○ああ今は氷をいだく心地もてわだそのかみの戀人を見る
若狹　長谷川英子

○泣くべきを唇かみてうすわろふ女は悲しにくみ給ふな
失名

○同じ世に生れ合ひつる宿世こそうれしかりけれかなしかりけれ
岩代　せん子

○涙なくなさけわすれてひたすらに名をえんとする身にはあらねど
深川　矢澤榮子

○さかまける濤おそろしきわたつみに金の線ひく朝の日の影
伯耆　新田文子

○朽葉より名知らぬ蟲の出でしごと吾れ戀ふ人をふと思ひ出づ
岡山縣　わかは

○初冬や落葉の音をなつかしみ來し森ながらあまりさびしき
草苺

○あかきをば着れば若しと喜べる母に似ずて心の淋し
下總　浮舟

○ひらかれし窓を見つゝも逃れ得ぬ弱き少女をわらひ給ふな
秋田縣　瀧本光子

○初春の天の岩戸は今開き日の神いづるいづいづしさよ
備後　告天子

○門附けの女の顔のうそ寒し灰色の雲西へひた行く
名古屋　波の花

○少女とは誰かいひ初めし花ならばひもゝを思ふ床しきその名
淺草　藤井若菜

○山櫻若公達のまりそれてはらく散りぬ芝生の上に
千葉縣　櫻井田鶴

○小暗かる窓によりそふ夕暮は病のごとく人の戀しき
土佐　花殿守

○ともすれば走らんといふ淺ましき女となりぬあはれ誰がため
舟秋

○誰がためにかくは悲しく蛙なく脊める月もかなしき宵に
水戸　根本隆子

○香たけどわれ琴ひけど君まさず淋しかりけり灯のすゝり泣く
秋田　螢子

○若き身の命と誇る黒髮の櫛にからみて淋しさの湧く
和歌山　茨木妙子

○よべの雨今朝はれにけり白菊の露をけはひの水にとる人
京都　森本俊子

○うつくしき林檎の皮をながめつゝ人をおもへる部屋の靜けさ
美作　橋本露

○

柿の葉のちる山里は寺の門たそがれそめぬ行く秋にして　○　備中　雨の花

わが胸のうれひよろこびは秘密つもれば春の花の姿す　○　信濃　三村利恵子

いと甘き戀の醉より醒めし如霜になへたるコスモスの花　○　安藝　可葉子

つきやらぬ思はあまる白紙を紅ゐの血に染めまほしけれ　○　近江　えふ子

友の手のなかに火鉢にかざしたるひゞの手かなし再世も悲し　○　金澤　糸子

高原の木々の紅葉は流れゆく水さへそめてなつかしき哉　○　豊後　佐藤ふみ

夜は更けぬ星またゝきぬ二つ三つものを思へるわれをながめて　○　德島縣　萬紅

哀愁はやはらかく身をうちめぐり涙に類ぬる秋の夕ぐれ　○　石川縣　まさ枝

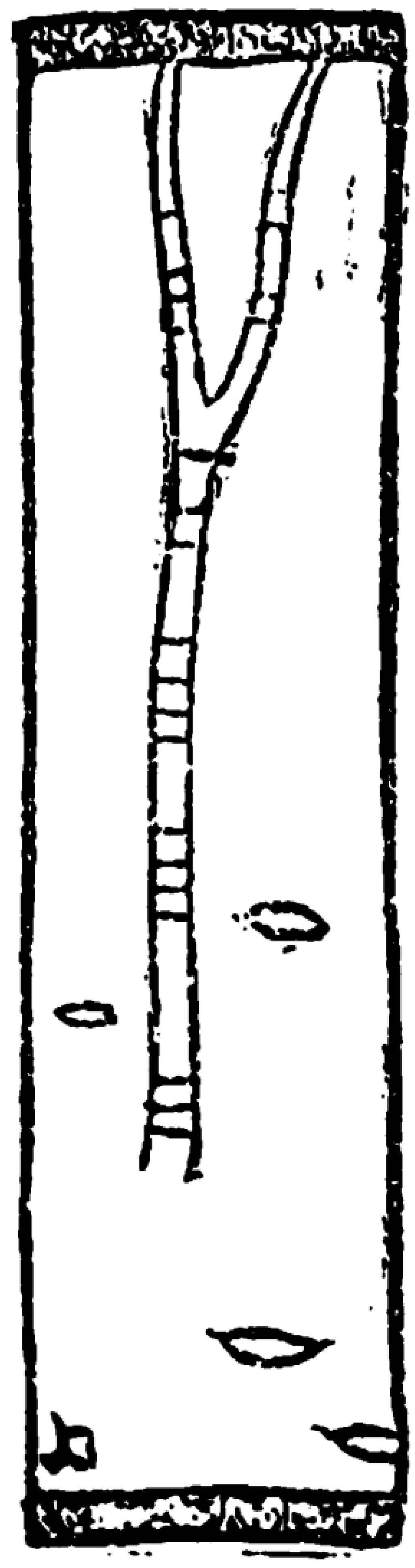
時には夢をもめでぬ二十てふとしを重ねし少女子のわれ　○　淡路　菊子

冬の雨いとあさましく人影のたえし小みちに降りそゝぐかな　○　甲斐　花江

打ちよりてざれ言を云ふ灯のかげにかんざしなども打ちくらべつゝ　○　近江　鈴蘭

今日一日戀しき人に逢はざりし物足りなさに琵琶叩きみぬ　○　遠江　鈴木はん

宵も阿子もいねていつしか更くる夜に衣縫ふ心いと靜かなり



殺人劍活人劍

SSS

△紫小袖（德島松並紫花）こぼれ松葉を染めた蝶の紋つきの紫小袖がある、紋は母の名から取つた。四十年一月一日學校へ着て行つた、明くる日、只一本のこぼれ松葉の肉筆の緑の色懐しく、「こぼれ松葉の紫小袖紋は理想の擧羽蝶」二十の春の紫花様へとした無名の繪葉書を受取つた。五年ぶりの今日そつと手を通して見た、私はまだこの小袖にまで別るべき程に老いてはゐなかつた、花やかなる色よ懐しき小袖よ、朧月夜の花蔭にうたゝねしてるやうな柔かなおもひ出よ『私はこの小袖を抱いてなほしばし浮世を行かう、老の辻まで――』小袖を抱いて思出の春を忍ぶといへる女らしき情緒がよく現はれてゐる。けれどド、一かイツ節か知らないが、うたがキザだ。代用教員あたりのちよつかいとすれば上手の方なれど「こぼれ松葉の紫小袖」は見守子にもつゞれる「紋は理想の擧羽蝶」としたのが情ない。紫花さんは詩から轉じた人と違つて、眼界が狭いからあんなうたに心を動かしたのであらう。詩を知らぬ人は一面に於て實に不幸であるが。今さら詩を作れといふのぢやない、讀んでわかるだけの趣味性を持つてほしいのだ。本誌の第一人として皆人に押さるゝ山田邦子さんすら「海潮音」の中のやさしい詩も、講義してやらなければわからなかつたのだから（但これは一昨年のこと、今は知らない）人みなに完きを求むるのではないけれど、「理想」に羽が生えてゐぬかぎり蝶と紋交ぜなのを考へなさい、折角のこぼれ松葉に蝶といふ意匠からしてナフテナイ。

△肉の接觸（京都荒木仲子）「七日にあまる長い旅の終る日であつた車輪千轉幾度か顏を見合した、車掌がなつかしく戀しく、馬場で山科で停車する度窓の下へ來てはじつと見る、私も瞳を透して私の心もちを彼の胸に刻みつけた。世界の果であらうと構はぬ、車の行く處までは乘つてそして彼の目を見とほしたいと思つた。稻荷ではぼんやりだつたけれど又見交した。七條に着いた。ドアを開けやうと伸した手が外に待つてた彼の指に觸れた淚が流れた。現實暴露の悲哀よ、鋭敏なる指頭の感覺は秋の動脈に觸れた、其刹那私はなぜ彼の手を握らなかつたらう」

嗚呼現實暴露の悲哀、薄つぺらなるデカダンの一例を見よ、お茶屋女のたぐひならばいざ知らず一個路傍の人に對しても凡ての權威を地になげうたんとす。天、玉を降らすと雖餓ゑたる人は以て食ふべからず、君は豈餓ゑたる人か。

△紺の前垂（大分松田美音子）暖い日、からつとした心よい紺の着物を着た男とすり違つた。あの意味深い紺の切を着ける處はないかと身の周りを考へて、髮を長く出していてふ返に冷のかゝつた着物を着た時、紺の前垂を締めようと思ひついた、「紺の前がけなんかお店者のやうだ十八九は女の花ぢやないか、荒つぽい縞の銘仙か一寸紅の入つたメリンスの方が娘らしくつて優しくつていゝ」と母や姉に叱られたが、大分の町中吳服屋を二十四軒探してたうとう買つた、紺の前がけは私が嚆矢だ。

會話に地方の色の無いのはいゝとしてもザンギリ頭の若い衆ぢやあるまいし、駄洒落すぎる。「紺の前がけ松葉を染めてまつにこんどはどでごんす」

△逝秋（山形すゞしろ）「菊を摘む」、勿論ゆでて喰べたのだと知るべし。陶淵明を見よ、採菊東籬下、悠然見南山、これから莚をむしつて葬をすてゝ釜の中へぶちこむところを作つてある。

△我心（長岡吉田ゆめ子）「女はいゝさなー嫁にさへ行けば幸福になるんだもの男におもちやにされてゐろと十七の正さんに言はれた。女のたしなみなんか忘れて、思ひのまゝ其なまいきさを罵つた。曾ては足並を揃へて來た友の多くは人の妻になつた、私はならない、いつまでも〳〵。」

一時はこんな事も言つて見る事。

△弱き女より（茨城をだまき）「たて切つた撮影室のレンズに向つて立つた時、わざとにあらぬリボンをのゝき、心臟のふるへ、刻々と迫り來る恐怖不安。あゝ處女としての最後の寫眞！」

寫眞をうつすだけでも、一寸とした、煩悶がかうだとすれば、お靜樣を見ると氣絕して沫を噴かねばなるまい、矢鱈にすゝり泣いてばかり詩壇の連中すら、恐怖と不安は使はなくなつたに、さりとはおくれたらずや。

△案酥にして見たる男子（長崎のちどり女）「素行の正しい男でも肉慾の望がある時はなめるようにして妻君を可愛がる、男が女に、夫が妻に特別にやさしい時はその胸には肉の望が動いてゐる時で、それが駄目だとなると態度一變、猛獸の嘘となる」

長崎縣は島原半島なにがしの教會にこんな人がゐては流石のキリストもアーメンと祈るよりか、オーマアとのたまふことだらう。

△隣室にて（宮城沼倉ふく子）ところがねえ其の奴と云ふ者は實に稀代な見度くなしさ、赤お多福にお誂へ通り目は細く、鼻なぞは頰をかき別けねば其の存在を認め得ぬと云ふ代者さ加之ならず丈は短くして周圍は五里許りある。

「冗談許り云ふぜ餘り酷だよ。

「何んで酷なもんか實際だ。實に怪しからぬよし一日であらうと二日であらうと彼態奴が我が里の女房の候補者に立てたとは憤慨に堪へん、失敬の極だ」文案なるかな。

△別れ來て（大阪若子）Ｓさん勘忍して下さい、私は貴方の前では泣くことも許されないのでございます、Ｙさんが淚しい、誰もの心になつかしい思出を殘して藤の下、菫咲く野に永く眠れるＹさんが淚しい。只幸多くあらせられませ、Ｈは葬られたるＨはそれのみ祈つてゐます」

この君の結婚は病める母君と、病める母君を苦しむる祖母との葛藤を解かんが爲になされたのであるといふ、當時「賣らる勿れ」といましめたのは自分であつた。賣られたとも買はれたとも知らぬ限女は幸福なり、豈死せる者のみ幸福ならんや。

けれど、昔の人に逢へるは一大事實である、其前後の苦痛がこれだけたと

すると、作文には秘訣も何にも無い、たゞそれ人格なる哉と泌々思ふ。

△新妻日記（淀橋大府愛子）夫と二人門に立つて見送る、御父樣を乘せた車は見る〳〵暗の中へ吸ひ込まれる樣に隱れてしまふ。あゝ今少し語りたき聞きたさ何やかと胸はちぎれるやうに悲しい〳〵思ひにかき亂されて思はず夫の手に縋れば、泣きたくなつたか、よし泣け〳〵と抱きしめ給ふ嬉しさよ、此の君あるにこの君の影だにあれば何にも淋しい悲しいことはない」

これはアリガタイ、借問す蘇生法師寶丹の用意ありや。

△田舍娘より（眞佐枝）北陸の友に（松風）一はこれまで欺されてゐたのが口惜しいと「益々形式的御交際を發揮遊ばせ、お振ひ遊ばせ」と散々毒ついたもの、一つは金澤の友が謠曲を習つてるのを喜んで、私にも敎へてくれ、一しよに謠はう女だてらにゑらいことをいつたもの。

△西鶴の女（湯島植松巴子）江戸文學者で最異彩ある作家は西鶴である。その「五人女」の中で最よく其時代の女性を語つてをるのは八百屋のおひちである。おさん茂右衛門のおさんである。」お七を何度もおひちと書き、おさんは斬罪に處せられたとあるのを見たゞけでも薄ツぺらさが知れよう、

△文函（淺草　藤井若葉）伯母のもと仕へた家にお俟のお姬さまがゐて若樣と戀に落ちたが、他へ嫁にやらるゝことになつた時これを若樣にやつてくれと文函を頼んだ、黑塗に二葉葵を散した金高蒔繪、紫の打紐固く結ばれて戀しき御方樣參る綾よりと書いたまゝ四十年を伯母の古簞笥に入つてゐる」

ローマンスもこれだけではナツテナイが、不思議なのは伯母といふ女だ、若樣にやつてくれと頼まれた文函をなぜ持つてるのだらう。金高蒔繪といふに惚れてネコバゞにしたのであらうか。紐の封じ目はもとのまゝだといふにどうして又戀しきおん方さまとあるのを見たらう。（以上Ｓ）

▲願はくば自然にかへれ。願はくば、自然にかへれ。みづから欺かず、他を僞らずありのまゝをさながら書く幼き昔にかへり給へ。無きものを有るが如く見するを止めよ、手妻使はたゞ小兒をすかし得るのみ。人の冠を着、人の袴を穿ちて大道を行く勿れ。摸倣は女子の全部ではない。

何故に眞を語らざる。

心より泣け、心より喜べ。

一切の虛飾を去れ。すべての虛言を捨てよ。

人の未だ言はざる人の未だかたらざる、或る物は君等に有らん。惟江上の淸風と山間の名月とのみならんや、讀書亦作文の一法なり。たとへば金色夜叉を見よ。或者は宮の貞操を賣れるを憤らん、或者は宮の賢き女なるをたゝへん。宮の童貞を疑ふもあらん。宮の苦悶を笑ふもあらん。「終篇金色夜叉」によれば宮は果して處女にして嫁げるにはあらざりき、さらば其貫一に許せる最初はいつの夜ぞ。或者はよくこれを知らん。知りて言はざるは卑怯なり、さらに個性を沒して强て衆愚に伍する恥辱を思へ。

與謝野夫人の『貞操觀』を如何にか讀める、生田長江氏の見ず知らずの人と結婚する男女を牝牡の獸に比べたるを憤るや。賣られて知らず買はれてさとらざる多くの君が友を見よ。飄菜婦のいたましさを知り、人妻の悲むべきを知らば、かはりて天下に愬へよ處女にしてはじめて純潔なる文を草し得べし。

文章に生命を附與するものは巧拙ではない、含まれた意味である。或時或る處にて感じたる「眞」である、「幸福とは小供だましの飴だ」と悟る人もあらう「不幸は空とぼけることの出來ぬ人だ」と思ふもある筈だ。「最淸に斬られし夢や蚤のあと」はいかにも詩だ、が南京蟲に喰べられたのを祕すやうでは駄目だ。

文章は人格の反映である高きも下きも皆其人に備はってをるので眞似をしたとて出來るものにあらず唯人は自己の存在を主張することの出來る限自己の文章が有らねばならぬ。有りのまゝに書きさへすれば個性躍如として現はるゝにも拘はらず、やつぱりお化粧をするので、甲も乙もおなじになつて了ふのだ。

刺戟なるかな。睡れる神經に注射せよ、閉ぢたる目をひらけ、自然何ものか文章たらざる、人事何ごとか文章たらざる。起つてまづ汝の筆を洗へ

十一月廿九日



自然（散文）　編輯局選

○奈良井川の秋

信濃　百瀬美水

川面を渡つてくる風に鍬持つ手が冷たい。須磨明石の唱歌を思ひだしたから、河畔に立つて、姑らく流の音に合せて歌ふ。白い河原を見通しながらこの唱歌をうたうと、なんだか濱邊にたつたやうな氣がする。高い堤へ吹き上げる風が潮風のやうで嬉しい。

すみきつた水が、一條細くザー〱と、石に碎けて高い響を立てて、北へ北へとはしつてゆく。北の方をみると、峨々たる山岳が連なつてゐる。木曾の御嶽山に生れたての水は、あの山又山の間を通りぬけて、北海にそゝぐべく、矢のやうにはしつてゆく。海の千鳥は知らないが、ピヨウピヨウ、となく〱河千鳥は、常にこゝらあたりをとんでゐる。五羽、六羽むれて、あれ、優しい聲でないてゐる。北の方へ飛んでゆく、ずん〱北の方へ飛んでゆく、もう見えない、海へいつてしまうのか知ら。私はこの鳥をみる度に、ひろい海を想像する。怒濤のくるふ北海がみたい。

私は、河原へ下りた。きれいな石がたくさんある。庭にかざるのや、机の上に置くに好いの等、色々拾ふ。先方に小鳥がたくさんおりてゐる。キチキチツウツウキチキチ――。やかましいほどなきながら、水際の石の間をくゞつては、餌をあさつてゐる。羽が純白で、他は眞黒い妙な鳥である、が、しかし美しい、愛らしい。何といふ鳥であらう。河原の石に似てゐる、ちよつとみただけでは、わからない位よく似てゐる。よい聲でなきながら、面白さうに石の間をとびまはつてゐる、本當に可愛らしい、走つて行つて捕へて、かごに入れて毎日眺めて可愛がつてやりたい。

風が一層寒くなつてきた。もう日が入る。冷たいけれど我慢して、清流で顔や手足を洗つた。

美しい夕空よ。あの美しい西の空を眺めながら、さて私は家へ歸らう。あれ。かうもり、かうもり、又た一つ、おゝあそこにも、あ、たくさんゐる。いつのまに、どこから出て來たのであらう。一つ二つ三つ四つ五つ

六つ一、西に東にとびまはつて數へられない、十五六羽ゐるであらう。暮れがたの、蒼い蒼い空高く、勢よく飛び交ふ狀、實にからもりの世界である。

私は、何時までも、からもりらの活動をみてゐたかつたけれど——、西の空は、だん〳〵さめてゆく。あたりはしだいに暮れて行く——。（二等入賞）

河原の石に似た鳥は面白かつた、女らしい細かいみかたがしてある其味も充分にある、（評）

○落葉樹

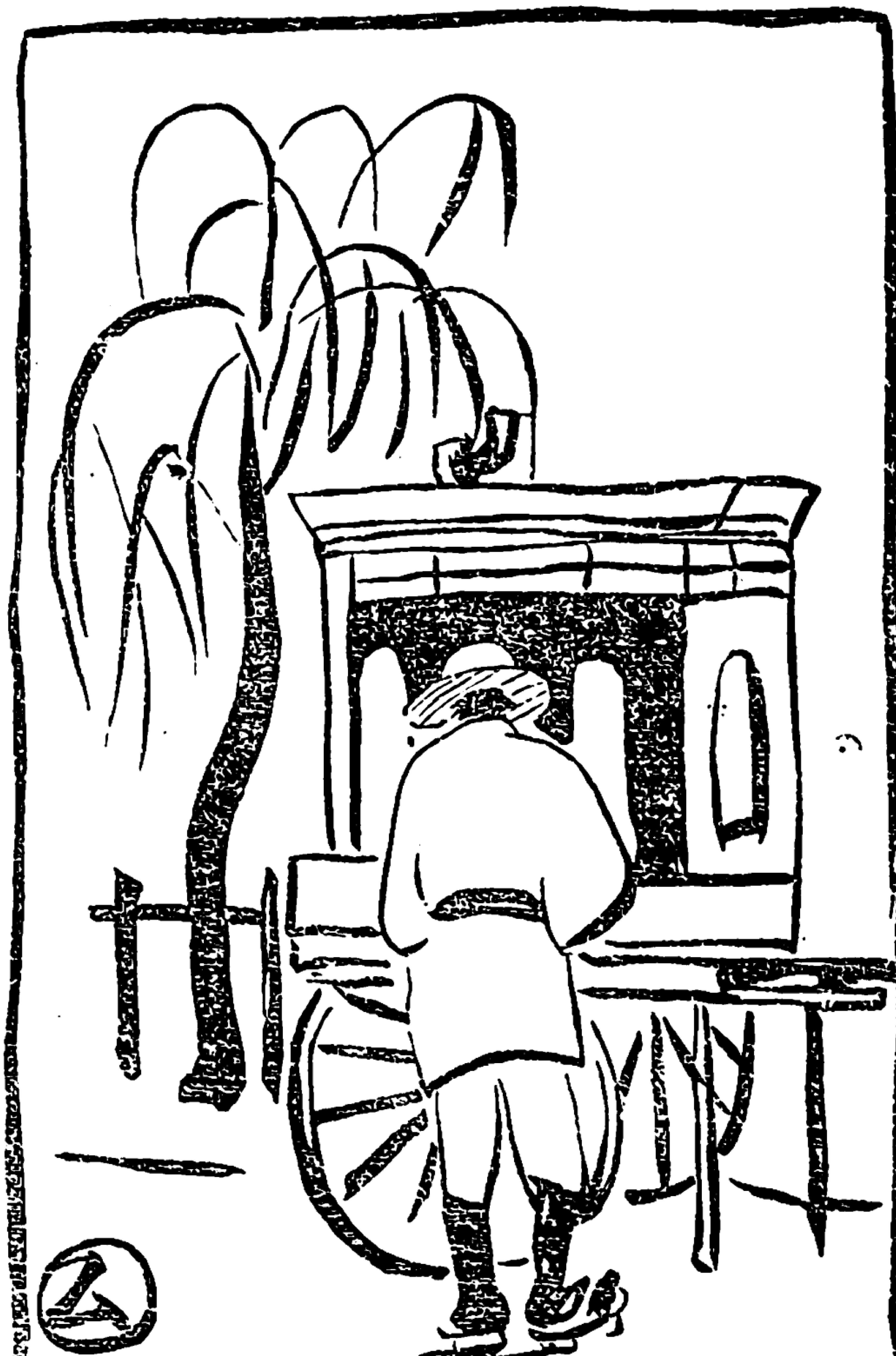
本郷　平塚白百合

慘酷しい夢の續でも見るやうなたゞれた百日紅の花が散り切つてしまふと、たよりなげな物淋しいコスモスが、淡々しい秋の日を夢見るやうに咲き出した。豆菊の蕾もやぶれた、月夜、やはらかに霧にとりまかれた白豆菊は玉のやうな輝がある。昨夜は霧が深かつた。フックリと日南にふくれた羽ぶとんに膝を崩して、まるで雨滴のやうなお向家の琴の音をきいてゐた。濃淡もないりんどう花色の空の何處かで小鳥のさへづりがするどく響く。氣まぐれに暖かい日のあるかぎり歩いて見やうと思つた。生垣の外を三越のメッセンヂヤボーイがサイクルの白銀の輪をチカ〳〵かゞやかせて通る。門を出ると直畑の細い道には入つた。

あかるすぎるやうな物の蔭影のない外光は餘りものがむき出しで、其處に少しのくもりがほしいとさへ思はれる。暖かな日だ。干大根にかこまれてゐるやうな畑の家にもコスモスが垣根から洩れて、素直にのびた花にあるかないかの風が野蜂をぢらしてゐる。

あつたかい緣側には剃刀をもつた母と、うつむいて、片面だけ青いそりあとを見せた髮置位の子と、フット上げたその子の眼に涙のたまつてるのが可愛いかつた茶の花垣の淋しい屋敷つゞきを線路に出る草原で、五六人の男の子がいろ〳〵の型の飛行器を中空に向けてはなしてゐる。赫色や黃や白の飛行器は高くひく〳〵入りまじつて、快心の微笑に醉ひくづれた草をしいた子は、あてもないやうな瞳して中空に眼をあそばしてゐる。其處は瀧の川から團子坂に通る道にそふてゐる。紙紅葉の枝に薄の木兎がぶら下つたのをもつた髮の好い三十位の女が團子坂へ行く道をきいた。ニッコリして下げた襟足が美しく衣紋にぬけて見えたのがたまらなくいゝ。派手な友禪の十一二の女の子は眉の後が青青しい。私はいく度もふりかへつた。向ふでもふりかへつた。向ふは三人連れだ。道のはしつてゐるまゝ行

て見やうかと思つたけれど、行止りの瀧の川はあまり小さく、紅葉を見るよりも亂醉の人や、無理じいする茶店の女のいまはしさを思ひうかべて右に線路をこえた。田と畑と森と家と、ちらばつた武藏野平原は王子の太い烟突と千住の煤烟とが兩端の空をにごして、もう刈り入れ終つた田には蝗が安住の地をうばはれて道端の草にすがつてゐる。草の中にはヒヨロ／＼した野菊が紫にしみ／＼と日を吸つてゐる。赫いほてりつぽい道をあてもなく來た私は、ふと金粉のやうに落ち葉がちるのを認めて、あの森に行つて見やう、から思つた。常磐木のまじつた其森は歩につれてかたちも日をうけた森のとてろ／＼の色も變つた。縁葉の頃は天を摩す程の力がこもつてゐたやうな、大な落葉樹は、今はもう只虚勢を張つてゐるにすぎない。とゞめても留めてもふりかへらずにはなれて行く葉は、末路の悲しい夢のひらめきのやうなものである。日を透して黄色いスッとのびた銀杏の頂で百舌がキョンキョンとなく。私はあかるい大氣の中をふるへ／＼ちつて行く葉の何の執着もないのを不思議に見てゐた。何處の枝をはなれるともない葉はたえずホロリ／＼と散つて行く。フト鋭い刃物のやうな風が渡つた。もろくも黄葉はあはたゞしくハラ／＼と雨のやうに



らうしかへ　芝　村木萩子

亂れ打つて降るやうに散つた。その後の一時、落葉はかろく、一葉、二葉と、散りにくそうだ、よく寄つて見ると、森は悲しい秋風が幾度も通つたらしい。あらはにさし出した木肌に、しみじみと秋の日がしみついてる。落葉はやつぱり絶えずつゞく——。（三等入賞）

賑々として通ふ一路の悲みを見る。（評）

しみ〴〵と落ちついた心持があつて好い作だ。（評）

○舟待して

越後　星野かへで

今迄の大雨はガラリと晴れた。自分は今濡れた洋傘をパチンとすぼめて、杉木立を後に川邊にイずんだまゝ舟待して居るのである。

夜明け方から一日中降つて降つて、一寸の間も面を出せなかつた太陽は、入日時に成つてから華やかに輝やき出したので暗綠色の森を透して向ふの山の半面に美しい光を浴びせてゐる、まだ初秋の故か紅葉が少ないが、薄黃や綠の葉が雨後であるから殊更滴る樣な鮮やかさ……

川はと見ると濁つた水が澤山出た。其水面をつばめがとぶ。ヒラリ〳〵と飛ぶ度、白い胸毛が光つて眩い樣だ。目に見えぬ水上の羽虫を取るのであらうか、縱横にとび廻る。時々水面に羽根がひつたりつくので落ちやしまいかとはら〳〵する。

春二羽で來たのも、何羽かの家族を連れて、海を渡つて暖かい南の國へ行くのも程ないだらう？秋の初め、南國に行く時は、羽根が弱つて海に落ちて死ぬのが大半！無事で着くのは少ないと、つばめの子を見ながら幼い時姉の物語つたのがふと胸に浮んだ……舟はまだ來ない——

暫くすると川下から、同じ樣な小舟に乘つた二人が、一ッの網を兩舟に結びつけて、ガチリ！、ガチリ！と竿と川底の石の觸れ合ふ響き!!はがゆい樣な音立てゝついついと、さかのぼつて行く。鮭取る網曳き舟だ。後からひよつこり水上に現れた二羽の水鳥、頭ばかり出して、波のまにまに、沈んで浮いて又沈んで、面白さうに流れて行く……見えなくなるまでうつとり眺めて居ると、「やあ虹が！」と、誰れかの太い聲が川に響いた。上手に視線をやると、まあ美しい虹!!向ふの城山の麓から田畑を越えて、川を越えて、森を通つて、相對した山の中腹でつきてゐる。久しく舟待しゐる待

ちとほしさに、渡られるものならば、あの七色の橋を渡つてと、つく〴〵思つた……。

——ゴツン！と何かのあたる音にはつとして、我にかへると舟は最う着いて居た……

向ふ岸の荷着舟は夕餉の仕度で忙しい、舟端で大きなおけで眞白な米をといで居た、赤銅色の大男が、とぐ手をとめて虹を見入つて居る——。

拾寫も細かいし、氣分もおもしろい。(評)

○雨後山の女

西多摩

もつと降らしたい雨を中途できり上げて走るやうな雲の間から、燻しがらすを透かして見たほど輪廓のはつきりした秋分過ぎの太陽があらはれた、まだぢかに照りつけられては、たまらないと思つてゐるうちに忽ちかげつて向ふに一ヶ所きはだつた青綠色に照らされてゐた杉山も他と同じに黒ずんでしまふ。

短い町のはづれで雨側へ軒毎に植ゑておく梨が、この頃になつて、漸く熟した實を高く重さうに支へてゐるふだん商賣もしない家で縁臺や地べたへ、敷いた荒蓆の上へ、七つ五つ位づつ積んで置く、青みを帯びたじみな色もどことなく賑かに見える。

早くからたたき落されて黒く朽ちた葉へ足駄の歯をあてながら行くと、何だかと思ふやうな大きな音をどさどさとして二つ、足もとへころがつてきた。雨あがりでもあまりぬからない石間だものだから二つともすこしつぶれて、ひびのいつた白い果肉から甘さうな汁が出て見る間に赤茶ける。よけて通らうとすると十二三の男の小守が「梨が落ちた」と言ひながらはしこく拾つた。「雨が止んだから登つてもげ」と言ふ聲もどこかでした。私はなぜか今日に限つてこのあたりにひらりひらりと眞白に散つてゐた花を再び見られぬもののやうに思ひ出した。

雨はそれつきり降らない、明るい雲が四方に散じて自分のはひつて行く谷間には美しい夕日がさしてゐる。すべてのものが濡れてゐる。濡れてゐるものが悉く輝く、いつも雪片のやうに澤山飛んでゐる蜻蛉もどこへかくれてしまつたのか？すがすがしい小天地はただ金粉を降らしてゐるやう！新しいあやめ色の傘を開いて車の輪のやうに左へ傾けると、右の崖にまんまるの影がうつつて傘だけが動いて行く。もう。ところどころ紅く染めた、こまかい蔦の葉などに、附いてゐる雨が

影になつては光を失ふ。道ばたの猫ぢやらしやかもじ草の穂が、野菊や赤のまんまと程よく交つて、畑のものより心を引く。稗も粟も陸稲もみんな草のやうな氣がしてつまらないと思ひはじめた時、ふと向ふにすゝきの穂の美しいのを見た。如露の口からうす赤い水を注ぐやうな形に揃つて垂れた穂の先端に保つた露が、今にも落ちさうで落ちない。

あゝそよとの秋風も今絶えてゐる。

遠く、はね釣瓶の上下するよその村を見おろしながら、木蔭の多い山路にかゝる。上りきつて下りるところで筏の流れる水が青く覗かれて、岩にあたる水の音がはげしくなる。

何といふ鳥か一ひら落ちた黄ばんだ葉が、幾度もひるがへつて地に止まる間も、五六歩進めた足をふと踏みとどめて、この下は深淵だ！自分はどこへ行くのだらう！こんな山の中と思つた。たたんだ傘と合羽は落さなかつたけれどちらちらする夕日が朝日のやうにも思はれた。

自然を観る眼がだんだん細かく注意深くなつて來たが、感興をわざと起さうとする痕が見えてゆきぬ。今のうちに出來不出來は免れなからうが、注意を要す。(評)

○快晴

常陸　田村はつ子

天には一片の雲もない。緩らな傾斜の薩摩芋畑は、霜に惱まされて、一面に眞黒くなつて居る、背い大根畑の上には、黄色の蝶の一群が飛んで居る。畑と畑との境に實をとられた玉蜀黍があつて、灰色の刀のやうな葉は風が吹いて來ると隣りのと、擦れ合つてガサガサと互に音を立てる。さうした畑が盡きると、緩らな裸山の山腹に、老いた尾花が白く、ほうけてゐて、松山が近く見えた。

ピーピング、ピーピングと小鳥が啼いて居る。松の落葉が、下の小さな躑躅の枝から枝にと張つた、古い蜘蛛の巣の上に、二葉三葉落ちて居た。豆に天鵞絨を被せたやうな、麗はしい小さな蜂が微かな音を立てゝ、白い野菊の花の周りを飛んで居る。いろんな樹の葉は、秋の眞晝日の靜かな光りを、吸ひ取つて、明るい——あの紅葉の鮮やかさ。梢を吹く風がゴーと聞えるまもなく鋭どく黒い松の匂が香つて來る。とやがて傍の樹に颯々と音がして櫟などの黄ばんだ葉がハラハラと舞ひ落ちる。

二つ三つの乳呑兒のふとつたあの足を思はせるやうな太つた軸の茵は、今將さに盛りと、丈の短かい獅の株の中から出始めて少し直線に、それから帶のやうに、うねつて躑躅の後ろに行き、ひときは、大きいのになつて盡きて居る。「ダイコクシメジ」と言つて、匂も豐。味も美なもので、人によろこばれて食膳に供せられるのです。松林は一きる—。白い手拭を冠つて、手籠を提げた、無恰好の草履をはいた私等の姿は黄緑の草の山巓に現はるゝ。

見下せば白く乾ききつた栃木街道を、黒色の幌をかけた一臺の客馬車が喇叭を鳴らし乍ら走つて居る。村々の色づいた森も林も美事。美事!!!珊瑚島でもあるかのやうだ。街の上には鳩の群が飛んで居て、街の白き壁黒き瓦がキラキラ光つて居る。渦沼川の清流は小さき平野を西と東に分ち、鐵道を越えて悠々と彼方に流れて居る。街の南方に發電所が見ゆる

その煙突から、むらがり出る、白き煙が北風に靡かれて末端がちぎれちぎれに離れて飛びつゝ消える。郡役所の天気豫報の白い旗。――（十一月×日）

此君も自然を描寫することは上手になつた、此方面にも好い人が澤山出てほしい。（評）

○雑木山

あはゆき

十月半ばの太陽は赤く黄味を帶びて靜かにかゞやき、地上のものは其のやはらかい光りを負ふて長いかげを投げて居た。鏡の面の如く平らかに、或は又極く稀に、薄物の袖から起きた様の風にゆるやかに波紋をゑがく古泉水には三十羽ばかりのあひるが、云ひ合はしたやうに長い頸をぐるりと後の翼の中へいれて、身じろきもせず水面に浮んでねむつて居た。昔はこの泉水を眞中に廣い庭があつてと、よくこの家の歴史をかたる祖母は云つたけれど、今は處々にある形の同じい飛石のみ僅かに昔をかたり、築山は崩されて畑となり、泉水はあひる飼ふ只の水たまりとなつて終つた。零落の悲しき面かげと靜かに夢みる水鳥の群と……私の胸には悲しい美しい昔の繪巻物をみる様に一種の快よい哀感が湧く。

それらを後にして私は赤い莖の美しく揃つた蕎麥畑をぬけて奥の小さい山へ登つてゆく。それは廣つぱの様な河畔の家から「山の家」と呼んで居た叔母の家へ來た。翌日の夕暮であつた。

やはらかさうな、黒つぽい土の畑につゞいてもう丈の高い杉の木が密生した山の裾がある、それがもう畑から芝の丘、それから若木の山その次ぎにやうやく大木の生えてる山のある地に育つた私にも目新らしくうつる。



大路の人　福井市　岸本てつ子

山道特有の眞中の窪んだ細い道は、なだらかに坂になつてうねうねと兩側からおひ被ぶさつた枝と枝との自然のトンネルの中をくゞりくゞり上つて居る。

山には、ずつと高く迄枝さへも出ずまつすぐにのびた杉や、根本のてぶだつた松や、枝の廣がつた栗の木に雑つて、枯れて節の折れやすい笹竹や。いばらや、小さい楢や、葉のないつゝじなどが、ごつちやになつて生えて居た。蔦に似て少し葉の長い蔓草が、杉の木に高く迄からみついてるのがところどころみえる、ほゝけて銀色のかゞやきを失ひしすゝき、倒れんとしてあやうく傍の笹に倚れる色あせし女郎花もあつた枯葉の色と、暗緑色とに滿ちた中に唯一色目立つた濃紫の名しら

花もあつた。

かうしてなんの思考もせず、なんの判斷もせず、見しまゝ映せしまゝを、丁度くぼ地へ水の流れこむ樣に、心に受け入れてゆく事が私にとつては云ひ得ぬ愉快であつた。

靜かに靜かに日は聲も無く落ちてゆく、葉一つゆるがず、塵埃の如く立ち舞ふ羽蟲の群もみず優しくうたふ小鳥の聲もきかず、只靜寂の中を私は一人のぼりつゞけた。

感受した通り、何の雜へもなく書いてあるが、淺い、且潤ひが乏しい何とかならぬものか、此ずつきりした筆つきを。(評)

○もやのあした

淺草　藤井葉都子

ザクリ〳〵とアサリの殻を踏んで棧橋へ出た、太陽はもう昇つてゐるけれど四方は一面もやが深い、根際に咲いた白菊に置いた露には、朝日の光に七色が輝いて、もう〳〵何日迄も此樣して置きたいやうな氣がせられた。ゴーン〳〵と餘音長く引いて長明寺の鐘がなり出した、もやは追々晴れたけれど未だ向川岸は見えない、そこらこゝらの船の中から白い煙がスーイ〳〵昇つて、小舟が一艘澄切つた沖の方を矢をゐる樣に走つて行つた、晩秋の朝風が水面をかすめて肌寒い。

＊　＊　＊

一しきり立込めた白い雲や灰色の雲は四方へ散つて、東の空に月は高い。晩秋の夜風に重い頭を吹かせて歩ひ共なしに歩みよつた待乳山である。廣くせまくせまく廣い石段を上ると右手に地藏尊がある。左へ石壘の上をソツと歩いたけれど、日和下駄の音は綠陰深き樹々にこだましてかなり高かつた。又石段を上つて社殿に禮拜した。社前に額いて一心に祈願をこらす人が二人、お百度を踏む人が二人、私共五人だ、社殿の後へ廻つて見た、山の中腹の樹立を透して山谷堀には舟の幾艘かゞ黒く浮んで向ふの寺院の樹木の上に出た月が、堀の水に映つて靜かに碎ける。　空の

左手へ廻れば幾つかの石碑が立られてある、中にある日月の碑はまだ私が幼ない頃、其の石へ耳を寄せて「チャバゝ茶沸せ」と云つて遊んだものだ、つと耳を當てゝ見た、茶を沸す音だと云つて面白がつた其の音が、今も猶地の奥の底の方からだらう、ゴーッと云つて響いて來る、下をのぞくとヅツとすると云つた、觀月臺も今はない社前の方へ來た時、十七八の娘が洗手所へ入つて行つた、石段を下りて元の道へ、神樂殿も水行場もお茶賣る店も堅く閉されて配置よく點ぜられた常夜燈の光がまばゆい。大風が吹くとよくドングリや椎の實や銀杏の實を拾ひに來た事や、石段の兩側の手すりを辷り下りたりした事なぞを思ひ出して、懐かしくなつた、其頃から思へば大分變つた、山内の景色自分の身も變つたらうけれど、此處で遊んだ幼な友達のたれかれはどうしたらう、瓦町の方へ石段を下りやうとした時、知らせの鐘が急はしく鳴つた先の姉であらう、石段を下りる自分の下駄の音が夜の靜けさを破つて。――

ひろくれば一大畫圖となるべき待乳山も、これだけではしやうが無い、尤永井荷風の眼と手とをこの人に望むのは無理だが。(評)

○南國より

紀伊　美砂

十一月とは云ふけれ、ほの暖かい南國の空には、瑠璃色の高い天をうれしくも毎日仰ぐことが出來て、そこには北國の人等は最う南洋へ渡つて行つたのだと、思つて居る燕が、なほ緩るやかな、すべ〳〵した心地よい歌を春からそのまゝに繰り返へして居ます。柔らかな日光は、繪具が水に溶け入る時の樣な、淡い懐しいうつとりとする情緒を物みなに與へて、大聲に笑ふでもなく、絶えず甘い微笑みを洩らして、地の中へまでも、ずん〳〵としみて行きます。それに山と云ふ山は、それこそ美くしい黃金色に染まりて、遠くからうつとりと眺めて居ると、何んだか大變に喜ばしさうに眠つて居るやうであるけれど、鳩の雛の柔毛を想はせる、眞白な野菊やほんのりと薄ら紅い山菊やが、思ひのまゝ根をはつて、所

愛らしく咲いた細道を、靜かに靜かに、踏んで勾配の緩やかな山に、登つて行くと、山は最うたゞ活き活きと、若い母親の樣に、幾百株ともわからなく植ゑられた蜜柑を守つて、絶えず幽かな幽かな、然し充實した力のこもつた、小歌を滅みもなく歌つて居ます。小指の先を一寸觸れても皮はすぐ破れて、甘味しい美くしいつゆが、ポタリ、ポタリと滴りさうな、淡黄金色の圓るやかな蜜柑が、眞青な葉よりも多く附いて居て、誰れにでも明るいスヰートな心を與へます。又此頃の夕日は夏程の鋭さではないけれどこゝぽりと外へ洩れない、それ程和調した美くしい、物語りのやうな心持ちを、人の胸にえりつけます。しつとりと潤ひのある、黒土を奇麗に平準して、麥の種を埋めた田を射る、彼の美くしい眞赤な光！私はたゞたゞ南國にのみ見る美くしさだと思ひます。甘蔗のざわざわと音する畑の畔に坐つて影のやうに薄くなつて行く、野や。森にけぶつて行く、森やを眺め乍ら　靜かなゆらぎの少ない牛の遠鳴を聞いて居ると堪らなく懷しく、只だ、無心にマンドリン抱いて。只だ無心に歌つて。彼の消えて行く夕日の後を、何處までも、何處までも追ふて行き度くなります。

あゝ美くしい我が南國の秋。私は此の甘夢の樣に、美くしい南國の田舎を、誰れも誰れも清い心に歸つて、想像してほしい。

力を入れて説明はしてあるが、直覺力は其わりに鈍い。（評）

○農家の秋

上毛　九輪草

背戸の撥釣瓶をぎーいとくんで空を仰いだ時は、星が天一ぱいにきらきらとして、二十日餘の月は朝の世界照らして居る。何となく早おきしたのは好き心地だ、十二人の家内が追々おきて一同揃て朝飼をすましたのが六時三十分、庭に出で六十八枚の莚にもみを乾した。昨夜の霜で庭がちやりちやりして居る寒い朝である。淋しい庭の片隅に黄菊白菊が霜を頂きつゝ榮えて居る。姉樣と私と妹は稻こきを初めた、三人が一所に始めたけれど妹は一番おそかつた、兄樣と二人の作男は庭の掃除をせつせとやつて居る、殊に昨日區長さんが戸ごとに兵隊がくるから座敷や庭の掃除する樣にとふれて行つた、母樣は孫のふみ子を連れて八丁餘の町へ用達に行た。佛間より祖父樣の御經の聲がもれてくる。弟は二里の道を中學校へ通ふので急いで家をとび出た

兄樣達は杉山に釣してある落花生をはずして裏庭でたゝいて居る。根のどろが實と一所におちる、砂が顔にはねてたゝいて居る人達が黒くなつて居る。

近所の子供が面白相に立つて見て居る。一合位もらつてうれしげに歸へて行く、晝飯休に落花生をいつてたべた。初だもんだから中々うまく行かぬなまもあれば黒こげもある。御母樣とふみ子は町より歸つた。

秋の日は短かい故氣長の人と話するなどよく祖母樣が御仰たけれど本當に短かいもう太陽は西へ西へと傾て行く、庭の乾物が桐の木と杉の木とで陰になつたからふりよせてふたをした。

私等は稻こきをやめて、もみののげ落しをした。七人も揃つてふり棒をうつのでとんとんにぎやかだ

いつも父樣か姉樣がとみを廻すのであるけれど今夜は秋が廻した、なれぬ故がたがた音ばかりして思ふ樣に行かぬけれど手は勞れる一生懸命にやつて居るなれど

庭をかたづけて夜食をすまし風呂に入つたら東の空高く月は昇つた、勞れた身は入浴してより一そうだるくなつた。兄樣は何か用事と見え表の道を行つた、妹は姉樣に髮を結つて頂いてうれし相に床に入つた。二人の作男や弟は明朝演習見に行くのだから早く寢ようとそれぞれ床に入る。私と姉樣きりに成つた。兄樣は御歸りなさらぬ、机の二分心の盃ランプがじいじい云つて居る、秋の夜の寂寞を破つて笑の聲が聞える、時計はカチカチと靜な家内にひゞき渡つて物寂しい、ひるの勞で思はず手より本を落して驚いて取り上げて讀み初たけれど眠くつてだめ、もう寢ようとしたら兄樣が歸つた。

明朝近所に演習がありさうだから早く見に行くと云つて床に入つた。時正に十一時半、短かい秋の一日もをへたランプをけして眠た。あゝ今夜はどんな夢をむすぶであらう。

不平も無く不滿も無く希望も無く悅樂も無し、人間もかうなつては

却てしあはせだ。しかし朝殘てゝた二十日餘りの月が、其晩湯に入る頃もう出て來たには驚いた。(評)

「菜の花や月は東に日は西に」お月樣もお愛嬌になら二度位出らあね。(評)

○或る夜

春子

吹きに吹いた風はまあ何處へ行つたのだろう、窓を半ば開いて空を仰げば下弦の月は青い光を放ちてあたりを隈なく照して居る。もう夜も更けたらしく人の足音も絕へた。隣室を見れば寢息のすう〳〵と夜の空氣をふるはせて居る。手早く寢衣と替へた身なれど何となく今宵の月の忍ばれて、音せぬ樣戸を開け外にと出た。月は丁度竹林の上である。ふと氣づけばあと一足で水の中はつと思つて二足ばかりもどつた、何心なく足許を見れば白き花片のおのゝいて居る。少女の吐息するが如く、風もないのにと思へば我が袖のふれたのである。折柄ピユーと草笛の音、夜の森を破つて。此の夜更けに誰が人の業か……とつぜん黑い影の一つ。影ははたと止つた、と、見れば月を見上げて又歩み出した。うつむき勝ちに、ひそんで居た風はもうびんの毛をなぶつて居る。そつと袂をかき合せて緣へ近かよつた。そして、せのびしてかの影の人に目を追ふた、笛の主にてありしか音はかなたより細く長く。

かゝる夜よりぞ女は落つるものなる。(評)

○霧の朝

大阪市　杉山花枝

霧が降る、今明けたばかりの朝の空から。

野も山も川も家も近い所はうすいベールで包まれたやうに、遠くなるにつれ次第に濃く白い霧をはりつめたやう。ゆるぎもなく、ほんやりと靜かな朝である。烈しい風でも吹かなきあいゝに、隣の五郞作さんも今朝は大聲でどなりまはらねばいゝに。今暫く此靜な〳〵そしてもろいうすい霧を破り度くない。

冷や〳〵と降る霧の中を小足に裏の道を步いた。枯れはてた朝顏の葉もない莖に瘦た小さい花が二つばかり悲しげに、同情を乞ふやうに咲いて居る垣根を出て、麥の新芽青い畑中の道をあてどもなく逍遙した。其功なしとげて用なくなつた案山子が物案じそうに首をかたげて居る。其傷ましく破れた笠に箕にヒヤ〳〵と朝霧は降りかゝつて居る。

ゴーン、ゴオーン……。やはらかい霧の霧を動搖させて妙源寺の朝の鐘がひゞく。餘音はみじかい。あの鐘突堂で鐘をついてるのは小僧さんの眞源さんであろうか。妙源さんであろうか。ふと見ると鐘つき堂もお寺の屋根も門もすつかり霧に包まれて見えはしない。……ゴオーン……、ゴーオン——。

知らぬ間にお寺の門に通ふ小さい坂道に來て仕舞つた。門の石段の下まで來て心づいたら、最う鐘の音は止んで居た一夜のうちにまつ黃に土も見えないまでに落ちた。銀杏の葉を掃きよせながら門の內に立つて居るのは妙源さんであつた。私をみて不思議さうな面をしてちよつと目禮した。あゝ私は何故こんな朝早くから、お寺の門なぞに立つて居るのだろう。何故こんな所へ來たのだろう。自分ながら分らない。何だか急に淋しいやうな、悲しいやうな心地になつてほろ〳〵と淚が出た。ブウ〳〵と眞綿のふく袱布の袂でしかと兩の胸を抱へて、可愛い妙源きんの姿をジツと見て居た。霧はまだ〳〵降つて居る。

あつと思ふまに、パツと强烈な朝の日光は東の山から全身をあらはし思ふまゝに其光を放つた。

あゝ、もろいうすい霧の霧は見る間に破られてしまつたぼろ〳〵に。其破られた斷片〳〵は西へ東へ北へ南へ、名殘惜しさうに消えて行く。野も家も川も山も、一時に夢から醒めたやうに身慄ひして、幸ある朝の日光に浴して居る。氣がついてみたら妙源さんの姿は最うみえなかつた。鐘つき堂の影から消えまよつた霧の一群れが、よろ〳〵と出て來たが、直ぐ消えて仕舞つた。

霧は神秘である、この人の戀も神秘である。(評)

詩

河井醉茗選

○淋しき記憶

神戸市　足立　春子

記憶よ、柔らかに顫ふ、淋しい記憶
よ、
北風すぎて冬枯の、荒れつくした
森の中に、死んだ如くにつつたつた
官能を、間斷なく顫ひ起さう
起さうとする、なつかしい記憶よ、
汝は何故そんなに、泣き入りたいほ
ど醜いのだ。
燒け爛れさうな火山灰の、地球の上
に降り注ぐ、狂者地味た夏の日も、
あれつくした後の、靜かな瑠璃色の
漂ふ、水晶の樣な冬の日も、唯、
もうくつたくして立すくんだ官能を、
動搖ろう〳〵とする記憶よ、
汝は何故そんなに判然と、
消へて行く薄い影を取り圍むのか。
——
柔らかいテレンプの上を、まろんで
來る淋しい記憶よ、
爪ブラシの上を幾度も、這らばひ
這らばひした、なつかしい記憶よ、
いつになつたら、あゝいつになつた
ら汝と私と離れるのか。——（地賞）

あたゝかみのない作だといへば、それまでだが、兎に角窮い型から免れて、一つのものにした努力は認めねばならぬ、本號の作の中で、此が一番好いと云ふことは誰が見ても間違ひのない處だらう（評）

○薄暮

本郷　望月れい子

緋の羽布團に身をなげて、
柔らかき悲しみにむせぶとき、
黄に散りしける落葉に、
しら〴〵と薄暮の瞳は輝く。
淡々しき夕の街の灯は、
うつむきて泣きつゝ歩む
さすらひの女の瞳に、
——涙を湛へたる寂しい瞳に濕めり
裸木は聲もなく連り立ち、
うす白きかはたれどきの、
仄かにも重たき空氣の中に、
翅うすき羽蟲の群の、
たちまよふうら悲しさ。……
緋の羽布團に身をなげて、
しみ〴〵とうち嘆くとき、
うれしくも柔らかき我心の底に、
しら〴〵と薄暮の瞳はかゞやく。——

蟲のなげき

波の音のふと遠のきて、
寂寞にかへるひとゝき、
濕りたる磯の空氣は顫へつゝ、
氣療院の窓の外に、
冷たく蟲がなげく。——
閉された窓のかたへに、

沈鬱なる燈火はくらき沈默を守り、
そこはかとなくたゞよへる
クレオソートの白き匂は
悲しくも肌にしみて、……
沈み行く暗き心の窓に、
コロ〳〵と冷たく蟲がなげく。——

ふと波の音の遠のきて、
殘されたる寂寞の一ときを、
薄月のひかり漲る、
氣療院の窓の外の、
濕りたる靜謐に細かくふるへつゝ……
ガラス扉にかすかに觸るゝ蟲のなげき。(入賞)

「蟲のなげき」も「薄暮」も同じほどの質量を持つた作だ、二篇とも情調は動いてゐるが、強いものを掴つてゐない、一つの作なら其一つの作だけを見ても、何か一つ把握したものがなければならない、大體に此方の思想は分つてるけれど——(評)

○日くれどき

千葉　村山咲子

日は暮れて、夜の迫りくるとき
われは蒼空の中にありぬ——
圓きたまに電燈はうつれど
甘きおもひを夢みゐたり。
すべてのあこがれも愁みも、そがうちにひそみをれど
わが悩みは知らざりしなり。
高き二階の窓硝子に
蒼白き女の顔は、描きかけの畫にも似たり——。
かくて描かれし蒼空によりて
日ごろの憤怒も悲しみも忘られし如く、しばしをわれは夢みゐたり(入賞)

感情的の素質を持つた人だ、少し心を斂めて好い詩を作れば、出來さうに思ふ(評)

○月と工場と

N子

水草の花、白く眠りて
夢みゆくみどりのこゝろ
今宵青ざめし月のわなゝきに
見よ——輝きそむる月の出の前の暫しあはれ聲もなきその靜けさ、
堪へがたき石油のむせび入る惡臭と
悩ましきブリキ切る強き狂音の
あゝ鋭きその叫喚よ。
薄暗き中に煤曇るグラスを洩れて
爛れたる灰色の落日の亂れ
生ぬるき空氣のにほひ
その中に渦まける硫黄の煙
痛ましきかな絶えざる黒鐵の叫び
また重き鐵槌を提げた
蒼白き職工の……
あゝ灰色の夕ぐれとブリキの狂音と
青ざめし職工の苦しき吐息と
黄に澱める工場の裡の強き印象——

摸倣だが、下手な摸倣でない(評)

○冬の夕

大阪市　杉山花枝

冷たき病院の冬の夕暮れ、
悲しくも窓によりて、病む胸を抱きて

あれば、わりなさに、涙流るゝ。

あゝ眞綿ふく被布の袂は、やわらか
く、暖く、胸をつ
つめど、
こぼれ出るかなし
みよ。

蒼き瓦斯の灯は、
蒼白きわらひして
またも追憶の夜を
與へぬ。

昨日――今日――
明日――
冬か、病か、かな
しくも我はぬくみ
なき身。
涙さえ冷たく頰を
流るゝよ。

段々上手になつてきました(評)

○病床

齋川幸子

あかつきの空氣を濁らして、
狹き室に藥の香亂れて晨ふ。

病めるものゝ吐息か
絹ハンケチを引き裂く音か
微温い神經に鮮かなる幻覺を呼ぶ。

母の乳房

老いたる母の乳房
に咲く毒の花、
青き膿は白き乳汁
に混りて滴る。

秋の夕日に輝ける
冷たきメッセルの
銀のにほひと、
石炭酸の強き音波
は、
いたくも衰へし蒼
蠅の神經を搔亂せ
り。

今し、あゝ今し、
血の色の月は危ふくも落ちんとし、
白きシーツに纏れて影は搖らぐ――

見よ、奧深き病院の
老いたる母の病室の枕邊には、



編8の山口縣松尾しづか

乳を呼ぶ幼兒の這ひ廻れるを――

乳は思ひつききつたが、もつとよそごとでなく歌ひたかつた(評)

○散り行く木の葉

信濃　二葉子

風よ吹け。鋭く冷き針持つ夕の風
よ吹け
夕まぐれ
北に聳ゆる山々の眞白なる雪の峰を
傳ふてお前が吹く時
きのふまでの
若き誇りに輝きし青葉は
今日うすれゆく夕日の光に
さびれゆく我影をながめて
過ぎし日の華やかさに滿ちた夢の歡
樂をしのびつゝ
ふりかへりふりかへり
のこり惜し氣に梢を離れ
はてしなき旅に迷ひゆく
散り行く木の葉見まもりて寂しげに
立つ野邊の木と
去り行く人を見送りて空虚になれる
我胸とに
寂しくも吹き荒む夕の風よ
草は皆萎てむなしき影を地に投げ、
我魂は
去りたる人を追ふてやまぬ
しかも
元の梢に返らんとあせりあせりて木
の葉は
もの皆のさびれ行く
はてなき大野を迷ひ行く。

かう云ふ詩は讀むのにらくで直ぐ感じが傳はるから宜い(評)

○港より

渚のみそか子

幽かに幽かに
銀いろの鱗を顯はせながら
海藻のかげに隱れ去る……」
小鯖は
日沒の海面には
光線のキッス
刺されて慄える海のさびしさ。
そつと出て陸沙魚が匐ひめぐるとき
夜がくる時
かくも哀れな
ああ、言はざるの極樂界を誰が味ひつくすのか
みどりも淡き海藻の茂みより
隱れては又見えぬ小魚のゆくへ……。

才人の作(評)

○十一月

仙臺市　堀　しづか

露西亞更紗のカーテンの
かげに夢みる十一月こそ悲しけれ。
啼かぬ小鳥は
肺病娘のよな青い瞳を光らして
天鵞絨の光澤を放つ
熟れ腐つた木の實を
尖れる嘴に輕く啄む……。
十一月こそ悲しけれ。

○後れ咲き

越後　星野かへで

冷たい雨、
鋭どい雨にうたれつゝ、
うら淋しい秋の天地に
獨り咲く百日紅よ
過ぎし日の[illegible]

眞紅に咲いて鮮やかな…………
夏の日の代表者だつた汝！
溢るゝ綠に取りかこまれた
其ビロードの如き艶やかな
戀する子の晝の樣な……
解れなば燃えん花片の色褪せて
うつむいて、いじけた樣に
うす紅く咲く少さい花のかずくは
丁度醒めたる戀の思出を慕ひ……
去り行く靑春の夢をかなしむ
二十少女の心の樣……

○銀杏

美作　葉蘭

銀線のやうに降りそゝぐ雨の接吻うけて
やる瀨なささうに身をふるはして居る銀杏よ
お前そんなに嬉しいのかえ
あゝ銀の玉が散るではないか金冠が舞ふわ。
やる瀨ない胸のなやみに
黃昏どきの綠の柱にじつと見上げたとき
お前はいつも氣をひき立てゝお呉れたけれど



夕碧　岡山　野崎よしの

永久につきぬこの胸の……
あゝ妾はお前の生涯が羨しい。

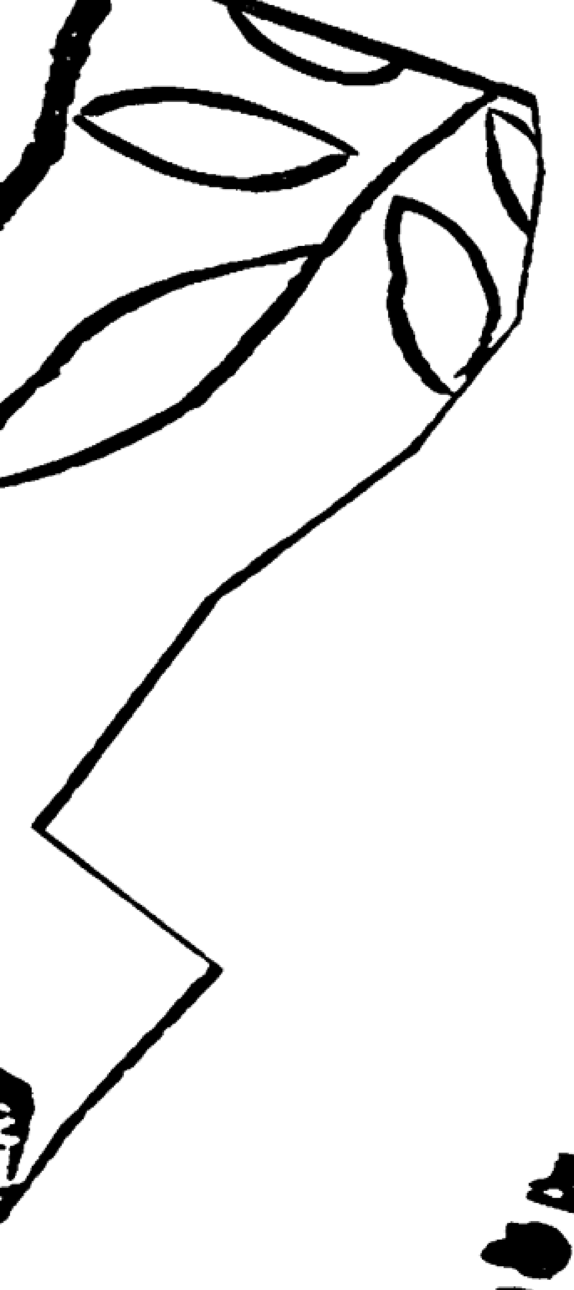
輝く雲の峰に圍まれた泉月の空
靑春のブライトに滿ちたその姿

あふるゝ若葉の匂よみどりの諧のゆらめき
月光靑く澄みきつた夜
銀色の衣に金冠正しう
妾は故なしにシーザーを思ひ出すよ
あゝお前の最後が思はれてならぬ。
ふつと訪れた風に歡樂に溢ふるゝ身を躍らして行方しれぬ金葉よ——スウイート
な夢を辿る眞白の雪の礫が溶けて醒めよと聲かぎり叫ぶけれどあゝお前はなぜ醒めないの？えゝ聲は涸れてしまふよ、あゝうれしさうなあの身振り
また金冠が散る、銀の玉が
………。

○うたひめ

伊豆　枝折

黃色く濁つた十一月の空
三弦の音はひきかきまはす
目醒し時計の樣に自暴に鳴る
キイくと死のたまゆらの
叫びの如き肉聲とが……
ほこりにまみれた日和下駄がころくと
やるせなく靑空の彼方にさまよふて



終に泣きねいりの如く消えてゆく
果敢ない生存の巷をとぼ〳〵として
「なりゆき」に逆ふ自己の力の其の弱み！
あはれころ〳〵と空漠たる空に 音は消えゆく
海！海の底には青白き人魚の住むと いふそのな
まぐさき氣味惡るき手に
とらはれゆくいまはの際の叫び空しく
反響もなくさまよふ
はて知らぬ冷たき青海の底の、うす白き
手にとらはれゆく、あゝ十一月まひるの歌ひ女
よ

○迷へる羊

備前　赤木あさし

荒み果てた十二月の故郷、
ふわと枯草の中に、身を入れば、
そそのかすかのやうな甘い香のなつかしみ。

銀座の街の人を思ひ、
都會の温い色を懐ふ、
柔かな、都會の手に抱かれんと、

若い生活のうるはひが、
うすれゆくあさましさ。

○晩　秋

横濱　夕野　萩子

空は動きぬ——晩秋の山の奥に
やはらかき夕日の光に、[illegible]かく　冬の聲か？

悩み多き少女の胸に、薄弱の其胸の底に永久に
消えざるひゞきの如く、流れ行く。鳥がなく——
つかれて行つた木々の梢に、嘆息の 枯葉の上に
胸赤き二つの鳥がなく——
さや〳〵と落葉のさゞめき
若き女の聲は消えぬ
晩秋の山の奥に……。

○涙

見ぬ世の人

ともすれば、ほゝを傳はるこの涙
見せじとすれど
一人なる時よ!!!
ことに…………
疲ねがての夜着引しめて
はら〳〵と、はら〳〵と、
女二十年を世にすねて
一人ゆく淋しさよ
うき世の旅よ
春くれど
しかすがに、
歡樂の巷に
其のどよめきの中に
平然と身は出でぬ[illegible]と
[illegible]
そは人前よ、
一人なるときあゝ淋しさ

○冷たい月

友　枝

月が——冷めたい月が
此の私のみすぼらしい姿を
街行く人に見せ様と…………
私を照らす爲に
電話の線を一本々々昇つて行く……。
あゝにくらしい
汝も世の中の皆んなの人の様に
私をかばつてくれないの
嗚呼！口惜しい
カサ〳〵……カサ……カサ……
桐の葉の私話。
お前は私と一しよに泣いてくれるの？
…………
いーえ。やつぱり嘲つて居るんだわ……

○白き馬

羽後　小島あるは

さら〳〵と降り來る
爽あたゝかき秋の日光
悲しげに囁きつゝホロ〳〵と散る茶山花。
白き馬——
光澤失せしながき[illegible]
[illegible]
[illegible]
此の窓に居る
姿が生を誚む白き馬よ、
新開の街に車輪を埋めてゆく



入事（散文）　編輯局選

○光

長崎　三根さく

四つ辻についた電燈から投ぐる白光を浴びて明日の米をかしぐべくそこへ手桶を下した。共用水道の栓をひねると、角の床屋で忙しさうに器械の音をさせ乍らくる〳〵と自由にまはす空氣ランプのあかりが、小さな口から吹出る水に流れ込んでキラ〳〵と光つて、桶の中に消えて行く、やがて一ぱひに溢れた時清水は白く泡立つて居た。

華やかな通りから暗い坂にかくれ行く人、暗から出て灯の多い町に重い草履の音をはこび去る人々を、米桶の中をかきませつゝ、只ゆきずりの瞬間に隙見して刻まれたおぼろな幾つかの面影が、何時とも記へず何處でとも分らぬけれど、或る折々のかいま見に印象された顔の様に思はれて、明るき町にも暗い通りにも、黒く消え去つた人影を追ひ乍ら、云ひ知らぬ寂漠な思を磨ぎ込んで、何時もは追はるゝ様に急ぐのが、今夜は幾度も水を、更へ〳〵して丁寧に洗つた、流す白水は清く澄んで行く。

「雨、雨」何處からか聲がした、夜の物音と、夜の聲が間なく響く、眞黒い空を向くと冷たい雫がポタリ顔にあたつた、私は眼をつぶらにして濡れた電燈を見上げると、雨に曇りを洗はれた硝子の玉を、流れ出る光線が、長く短く無數に分裂して、赤、青、黄、紫、とり〴〵に七彩美はしい光が、束の間の眼に寫る、夕暮の空に薄るゝ日光を浴びて、淡くゑがき出された虹の色よ。

あれは。おたばこを少さな頭に結つて眞紅のかなこが嬉しかつた頃、よく連れられては櫻の造花で俳優の名書きを美くしう飾つた芝居の入口を通つた、涙もろい私は千松やおつるにどれ程泣かされたらう、得堪へず母の膝に埋めたかしらを優しくなでられて、泪に濡れた睫毛を上げて舞臺を見やるとずらり吊されたランプの何れからも今見る如な美くしい光が流れ出て居る、私は眼を拭はうともせずに花道から舞臺迄の灯を幾度

いゝいゝいゝも幾度も數へてゐた、今も在りし世の母戀しさに胸苦しい夜は、熱い眼を細くしてさまゞの灯に罪なかつた昔の記憶を辿らうとするけれど、

「まあしばらく」かろく肩をたゝいた人がある、驚いて振仰ぐとこの夏私が二十里の旅の無言に、疲れて獨り窓に青い天地を見戍つて居た時「あゝたいくつ」と吐息した女は美くしくして其人であつた、「此本御覽なさいましな」から言つて私が渡したのは七月號の女子文壇。莞爾して口繪を見つめて居たが、パラ／＼ッと頁を繰ると、すぐに有難うと私の手へ乘せた、妙な人とは思つたが此の動機によつて、互に獨旅の淋しさを忘れあつた、汽車を下りてから此處の四つ角迄共に車を驅つたが名も知らぬ友、云はば只一時の道連なのだ。

「〇〇病院の隣りに母と二人居ますからきつといらつしやいな」仄かな移香の匂を殘して其人の影は黑板塀の方へ消えて行つた。私が其處を離れると誰かゞすぐに水を汲んで居る。

あゝ私は來る朝も、逝く夜も、あの水の音と、あの光りとに接してゆくのだ。（三等入賞）

住所が無いから没書にしようと思つたけれど、あまりにめでたき出來ばえに引かされて復活させた。この「光」やがて八方を照さん（評）

感想、夜雨氏が發見したゞけの價値はある。原稿をみると、書きなれない蹂雜なものだが、作品は何うしても美しいものだつた、好い方へ進めばうれしいが—（評）

〇晩秋

大分　あかき花

夢をみても人に語ることの出來ない苦しい心が、庭に美しう菊が咲いてもいえなかつた。不安な悲しい心が「淋しい、寂しい！」と幾度もくり返した。こんな日がくり返されてもう學校に行くのも厭はしうなつた。樂園と人の呼ぶ學校！何故に嫌になつたらう。かたい樣な葩を持つたコスモスが咲いたとて、昔の夢が、嬉しかつた昨年の心持が、不安な心に泌むるでもないのだもの。出席したつてかたくるしい理科の話しや、嫌な友達の顏に接して、強いて笑はねばならないのだもの。いやだ、いやだ。何しても嫌ひだ。こんな理窟をつけて缺席をつゞけた。

冷い風に木の葉がほぐれた朝、霜のうすいのをとけて跡もなくなつた夕べ、忙がしい、いら／＼した氣を抱いて、それを勉めて沈めようともせずに、人を離れて、默つて深い想にうなだれた。此の時は、恥となつたことも、嬉しかつたことも寂しい想も胸に[illegible]

う。恥かしさに堪へ兼ねては、早く寢て想を忘れやうと思ひ、嬉しさに微笑んでは、早く起きようと思ふであらう。日毎に加はる苦しみは小さい心にいたいたしう響いたそして涙はわけもなく流れた。愛された昔を思ひ出しては泣く母の子には、かうした子が生れても不思議はないと、自分でさう思ひつめては少しのことにも涙を流してゐた。

掃いても掃いても殘つて行く落葉に霜のかなりに置かれた朝だつた。氣まゝな私もふと學校のことを思ひ出して急いで髪を結んだ。長い髪が美しうすかれたと思ふ矢先に、母のしめつた聲が沈んで響いた。かつて歌つたこともないのを、細い聲で哀しく歌ふ。戀物語にでもある人の歌ふ樣な長い々々歌であつた。父上のまだ生きてゐる時代を思つて歌つたのだなど思ふと、哀れつぽい母の顏色が一層寂しく見えた。私はまた堪へかねてすゝり泣きながら、

お母樣、よして頂戴！——

といつた。あの聲が、あの哀しい聲が、葉の散る音に交つてるのだもの。歌もやめて淋しい笑を見せた時は桃割に前髪の強い髪はきれいに出來



手紙　山口縣　糯畑かの

てゐた。

そこ〳〵にして學校に行つた。矢張り淋しかつた。清いとはいへ、「愛」といふを識らない以前がまたしてもこひしい。白い昔の心を抱いて、長い袂に姉が情こもる手鞠をひそめて、紅い振りを愛でたのも、はや過去となつた。母にしひられて親しんだ白粉をも、自ら進んで手に受ける子にもなつた。紅で大半をうづめた帶の間に入れた手の白さと、帶の色とがはつきり照りはえるやうに私に良心と、精神とは互に何日も爭つてゐた。

そうして良心が勝利を得た時は、どんなに忙はしい晩でも早寢にした。

かゝる悲しみに誘はるやうになつた動機を、心に描いて、無意味に晩秋の日の落ちるのを私は立つて見てゐた。人の腕を恨んだまゝ……。淋しう紅葉が散る——

——（三等入賞）

「人の腕を恨んだまゝ……」と未了の語で終つてゐる、これだけ考へ得る人が同僚の男の先生などにからかはれて苦しんでゐるから酷いものた。（評）

○湘南より歸りて

琴子

養神亭の裏に出て相模の海と面接した。

紺青色の波とやゝ薄い空とくつきりゑがいた水平線をはなれて氣高く聳えた富士の嶺は物珍らしくはなかつたが、その空氣その砂その水が都會の惡塵の一片も浮ぶことを許さない爲か、何となく尊とい感を惹起させる。暫らくは柵にもたれて深く〳〵呼吸したが——あゝ我身うちにはなほ汚血が流れて止まぬのを知る、それが今更に悲しかつた。

波打ぎはに下り立つと、その白い飛沫の散る音が一層壯快に耳に響いた。私は「大濤怒り、激浪躍るにあらずや。人間何ぞ獨り靜なるを得む。」と云ふ句を思ひ出さずには居られなかつた。

小さな靴あとが二つ、づッとつらなつて岩のあたりで消えて居る、はかない人生の旅！と左樣云つて淋しう友と笑ひもした、一波に洗はれ消され終るその足跡はあはれな人の事業のかげであつた。時と云ふ大濤は何物をも一掃して萬里の沖へ——秘密の國へ運んで止まぬ

けれどそのうづまきの中にあらゆる色彩を麗はしく〳〵染め出すのこそ美と云ふ觀念を與へられた人の爲すべき務ではないか、美くしい中にも美くしいいろとり、それは私らの胸からしぼつた鮮血の紅であらねばならぬ

ぬ、かく思ふ時うれしさと一種の床しみとを覺えもする。

あやふい小橋を渡つて例の不動迄行つた、想像よりも俗つぽくつて居る人も氣に入らなかつた、暫く默つてそこらを見廻した後にお金を投げて禮拜をすますと始めてさやかに挨拶する老翁の所爲にはいやになつたあはれな瀧も見て尙深く歩いて行くともう滑る岩みちではなくて兩側には草も茂り、秋の花も咲いて居た。小丘の上から見てると淸らかな水底に搖れてる藻がなつかしい情をそゝのかすやうに紫色を見せて居た。透るやうな秋晴の空に白い雲が漂つて居る、默々として動かぬ山、激しい運動を止めぬ波、その中に立て消えぬ罪業にやかるゝ人の子。

渺たる蒼海の一粟と自分を卑下するは卑屈極まる、波の叫びは何と響く、あの崇高な山の風姿は汝の眼にいかにうつる、この聲とこの色とは汝が狐疑、惑念を破り、生々として活氣を以て進ましむる原動力であるものを。

さがみの波よ、さがみの波よ、我むねの血を聖きものになしたまひてよ。――(ひとふし)――

強い言葉はあつても、此文の内容は思ひの外だるい、ぬるいものだ緊張された心持ではない、なるべく理窟は少く言ふやうになさい。(評)

○丁年

水口鈴蘭

「あらッ煙草を……」と私がいふのを、打ち消すやうに「とがめ給ふな、私も丁年になりましたよ」とさもさも得意さうに絣の人は敷島に火をつけながら、「もう少年でないから迂然りはして居られん、確かりしなくちや――と此の頃痛切に思ふ克く勉強して然してから斯う一二本すつて見る時の氣分の良いこと」と云つて立ちのぼる紫の煙を輝く瞳で見つめて居た。丁年さういへば私も丁年だが、私等は何時になつたつて何事も許されやしない、否ます〳〵周圍の人は嚴格に私達に對ふ、既う羽ばたきも出來んまでにされてゐる。何を成し遂げねばならぬといふ責もないがまた何を、しやうとすることも出來ん。血の通うてゐる人形も同じ私達、女――丁年者。女はいつまでも未丁年として扱はるべきものなのだらうか?!、公然喫煙を許されたのを悦んで居る絣の人は、青壯の脉管に、だく〳〵と流れてゐる赤き血の涸るゝまで、奮戰邁進するのだ、と勇み

たつて居た、同じく丁年といふ所に到着しだ私達、女の男に倣ふ事の出來ぬことは初つから悟つゐる、又倣ふとも思はないけど……、女の中の女として今すこし什かしたいと思はずには居られない。「大膽に奮起せよ」。かう獨り言ちて見るが、さて如何とすることが出來ん。

噫々甲斐なき我等――若き女、徒らに神經のみが、顫ふて止まない。

才華爛熳、この人の前途ますく〳〵注意すべし。(評)

○幼かりし日

本郷　古　那　夢

「まあよくなつて居ること」小娘は振り分けた髮に、肩を打たせてかう云ひ乍ら、あふむいた。五つ六つゴツジヤリとかたまつて、なつて居る百目柿の枝がたは〳〵と重たさうに、垣根の上に垂れて居る。小娘は黄いつわぶきと、白いコスモスの間に立つて、何と云ふことなしに、星のやうなまなざしをそれに据ゑたのであつた。「若ちやんコスモスが奇麗に咲いて居るね」と云ふ、その聲に驚いた小娘は杉の垣根の間から、お隣の賢ちやんの短かい絣がすりを見た、「コスモスPエ、よく咲いたでせう上げませうか」とシワリ〳〵三本程折つて揃へて持つた白い柔かに手を垣根の破れから出して「賢ちやんはい」賢ちやんは「[illegible]」と受け取つた白と、赤と、桃色の花を代る〳〵鼻に押しつけて「にほひはしないの」と云つた、そうして三つの花を梅の枯枝の股にはさんでおいて柿の木のコブと枝を傳はつて登つた。枝にゆすられゆすられて、赤い大きな葉が[illegible]ちやんの肩や頭にはら〳〵ふりかゝる、そうして登つた人の手にポツキリ折られた一枝が、バサリと小娘の足下へなげ出されたと同時に、賢ちやんの右の足を支へて居た小枝が、わけもなく折れてボツと厭な音に[illegible]ドシンと落ちた。「アあぶない」小娘は我を忘れて、木戸の方にかけたがかぎがかゝつて居たので、只そこいらをうろ〳〵うろついて居た。「どうかしやしなくつてP」「ウームどうもしやしないよ」「そう、そんならいゝけれど……すりむきやあしないこと」「なんともなつちあ居ないんだよ、ほらそこにある柿を若ちやんにあげるんだよ早く持つてお出で」「ありがたう」。小娘はそれを拾ひあげて、兩方の手で、重さうに持ち乍らよろ〳〵と二三間歩いて振り返つた時、賢ちやんはうちに背中をむけて膝のあたりを、のぞいて居るらしかつた。

「どうかしたんだよ」と小娘は引かへそうとしたが、ふと何が考へ出したかの樣に、そのまゝバタ〳〵とかけて行つて仕舞つた。其の小娘は十餘年昔の私である。賢ちやんは我待ちける其人。

「オイ僕は實は、コスモスなんか欲しかあなかつたんだよ、お世辭に貰めたら、お前かくれて仕舞つたのさ」「そうすりやあお氣の毒さま、そしてあの時のコスモスをどうあそばしてP」「あそこへ忘れて歸つて仕舞つたのさ、明日の朝見たら梅の枝にはさまつたよゝしほれて居たよ、お前に見つかると惡いから、ゴミダメに捨てゝ仕舞つた、怒つちやあいけないよ。」梧桐の枝がから坊主になつて、柘榴の眞黄色の葉が、雪の様に散る頃二人は一廻り昔の物語を、かうして繰り返す、序に未だ見ぬ世の夢をこんなやうに、うらなつたこともある。コスモスのやうな花が咲く〳〵といゝね」「柿のやうな實を結び度いわ。」

枯枝がカサ〳〵となつて、落葉が舞ひ上る、「寒い寒くなつたなあそこの窓をしめてくれ。」針を運ばせて居た手を休めて私は、つく〴〵見た、磔に首をすつこめて居る意氣地のない後姿を……昔はあんな弱むしぢやあなかつた。

[illegible]

「柿の實は来年はきつと生ります」と言つておく。(評)

○意地の人

前橋　み　づ　枝

来る日も〳〵、赤や紫の毛糸の間に埋まつて、同じ仕事を繰返しながら、何の刺戟もないシンプルな[illegible]

人達—其の仲から町樣を見出した私は、まあどんなにか嬉しかつたか……いつも默つて、自分の縫ふきぬの、微妙な針の音に心を吸はれてゐるかの樣、白い顏を俯向けた町樣が、氣に入りました、時々包の中から、スバルや獨歩の本が出て、二人は何時のまにか、心を明す仲になつた。

みづ枝さん、貴女にはまたお話しなかつたけれど、私は近い内に、Sの所へ、いかなくてはならない樣になりましたの……明日からは、もう裁縫にもゆかない、——

父や母に、手をついて頼まれて、自分の產んだ子が、心のまゝにならないつて、泣かれた時は、もうほんたうに辛かつたんですよ、——私獨りが死んだつもりになればいゝんだから、と思つて、

ゐりまずと立派にいつてやりました。明るい町の灯をさけて、暗い方暗い方と辿りながら、冬らしい淋しい風の吹く夜を泌々と語りました。胸にあふれる恨みを、人に明すにも、友の顏は眉根一つも動かなかつた、幼い時から結ばれた、辛い義理のしがらみは、今日迄強いと誇つてゐた友の心も、逐々勝つ事が出來なかつたのか、淚をこぼさないだけ、人に縋つて泣かないだけ、餘計に町樣の胸の中を思ふて、私の方がどれ程泣いたでせう、あなたも孤獨——

私もひとり、あしたから淋しいのね、かすかに笑つて二人は別れました、眠かな××町の、町樣の家の前を通る事は幾度もあつたけれど、いつも逢はずに歸つて來た、店の帳場に筆を啣んでゐる友を見たこともあつたけれど——

いらつしやる迄に、何か一言いつて上げ樣と思ふて、毎日考へてゐる傷しい友をはげます言葉はないかしら……私一旦いけば決して〳〵戾つては來ませんわ、Sの人にもならず……

…私を憎む人はひとりもないけれど、私のゆく迄はたつた一つきりない。

あの夜の言葉を思ひ出しては、心の弱い私はふるへます、友の行末に幸あれと神にすがつて祈つて居る。

おちついた筆。（評）



秋ちやん　秋田　小島健子

○或日の心

伊豆　水の花

五月の冷い雨のふる或晩だつた。あやまつて、右の中指にさした、小刀が、思つたより深くつて、ポタリ〳〵と落つるだけ、おとした血は、白紙に心地のいい程、染まつた。

乳色の、電氣のかさとならべて、美しいと、ひとり喜んで居たのに、次の曉、まどに出して見たら、おかしい程變つて居た。

此ごろは、別の人のやうになつた、と人が云ふ。

眞紅の色、朽葉いろ、二つの印象は、だん〳〵うすれて行くが、中指に印せられた、かぎ形の疵は、はつきりして居る。

大きな暗示を悟つたのも、此頃だが、人の云つてくれる別の人のやうになつた、の言葉は、すべてを云ひつくしてある喜とんで居る。

紅の帶ふさひぬ、と云つてくれた人は、三百里はなれて、今日を過して居る、夢に見らるゝ、我おもかげは、昔のまゝに華やかであらう。

いつまでも〳〵、はなれたくないと思つて居たのに、緋色の帶は、知らぬ間に、たんすの底ふかくはひつて居た、此の頃しめて居るクリーム地の帶と、二ツならべて、夕日まばゆい、八疊の部屋に、ながく廣げて見た。

あゝすさびゆく我心よ、夕日に燃るやうな、緋の色に、堪へがたい、苦痛を感じるやうになつた、をさな子の、母の乳房を見つけた時のやうに、あはたゞしくかけよつた、心の住家は、やつぱり人並に、灰色のやうな、あの鈍い色彩であつた。

何を得やうとしての外出であつたらう、いてふの葉が、小さいつむじ風に、くる〳〵とまはつて行く、淋しいみちにぼんやり歩いて居た、自分に氣がついた時、

ふたりの知らぬ人が、箱根の道を問うた。

とにかく家を心にうかべて、歸つて行く自分のまへに、放浪の人が、たちふさきがつて行方を問ふ、あゝ今日はなんと云ふ日であらう、こゝは函館の小さい町の夕暮である、東海の天地にさすらひし人は、猶相模の海を懲ふものか、東の空に横はつた、大きい暗い影が、ふたりの目には、なんとうつつたか、私には分らない。

今、東海の土ゆきつまつたこゝで、あの女の人の見た、私と云ふものが、きゝたかつたが、ぢつと見つめたまゝ、だまつて行過ぎてしまつた

箱根の路を問うた人は男か女か年よりか若いかなぜ書かなんだらう、かういふところが尻が拔けるのは惜しい。(評)

○聲の人

神戸　百合香

乘る人下りる人迎ふる人、私は其の人達の心を想像する餘裕はなく唯だ一時間の後逢ふべき人の上にのみ心は走つて車中の人となつた。

面知らぬ人、職務上毎日聞いた聲の人、美しいすき透る細い聲の人、其の聲の人の面影を胸にゑがかうとつとめたけれど駄目…毎日應答する幾千人の聲のうちに忘れられぬ聲の人幾百人の聲が一度耳人に入つても其の人の聲は聞えけるけれどもまだ見ぬ人の面は浮ばない、歳は十七と聞いた美しい無邪氣な人であつて欲しいと願ふけれど解らない逢つて失望するかも知れぬと思ふと逢ひたくないやうな心にもなる、モシャ男子のやうな方であつたらどうしよう、ふと「聲で結婚すると面白いだろうね」といつか從兄の云つた言葉を思ひ出してひとりでをかしくなる「私ねフラットに向つて改札口の右側に居りますよ、お納戸のお羽織召しておつしやるのねそれを目印にしてきますよ、だけど幾人もあつたらどうしませう一人一人あなたは私の姉様ぢや御座いませんかと聞きましようかオホゝゝ」と云つた聲は美しかつた、聲の通りの人であつて欲しい四局一千に近い人のうちでの聲美人……「あなたと私は聲姉妹だと私の局では仰るんですよほんとでしやうか」「珍ですのね私の方でもよく似て居るつて皆樣仰いますよ」「まあそうですか嬉しいわ姉様のない私にはせめて聲の姉様でもあると思へば、どんなにか心强いでせう、どうぞいつ〳〵迄もね!」と語出したのが初め、其處は雨の夜も風の夜も宿直の合ふのが樂しみに監督の目をぬすみ耳をぬすんではお互に父なき義理の苦しみをも泣き合つた、梅田、梅田と呼ぶ驛夫の聲にせかるゝやうに私はフラットに下りた、長いフラットを歩みながらも陸橋の階段を一ツ一ツふみながらも心はやつぱり聲の妹にうばはれて居た。土產の包を左の手に持ち變へながら改札口を出ようとするとたん「姉様」と少さい聲で呼ばれてぱつたり逢つた顔と顔……私はホツと胸を撫で下ろした、男子のやうな方でもなく男子より大きい方でもなかつたのですけれど想つて居た無邪氣な活き活きした方ではなかつた。亡き父様を偲ばせるやうなキリツとした面にあらそはれぬ義理の寂しみを秘めた弱々しい影がある、「今日は丁度宜いのよ父様がもらつしやらないの他の人も母様お一人切りでね!」と淋しう笑む妹を見て堪らなく私は抱きしめた。

繼父様の目をさけたい同じ淋しみの身……嗚呼妹よ、永久に心の姉妹と……涙が落ちる……。

二人はあるきながらも無言で、二三日前からあゝ云ふてから話してと樂しんだ心はどこへやら、出すべき言葉を知らず人通りの多い町を北へと足をはこんでやつぱり無言で何だか私は物足りないやうな心地になつた、電話で語るやうに多く語りたく、語れぬ心を知つて居りながら……かうして逢つても明日は十里をはなれて語るのだと思ふとまた新らしい涙がわいた、無言でも宜いいつ迄もかうして二人であるきたいと思つた。

これは事實に興味を持たさるゝ文だ。神戸と大阪とで電話ではなし合うてのお友達とは、何といふなつかしいなつかしい中であらう。しかし文章としてはプラツトホームへ下りて不安と期待の中に其人を探すところで筆をおいて欲しかつた。(評)

○髮と女

京都　森の女

ローマと云ふ髮の結方が流行しかけた頃だつた。よく夢の樣のスケツチなんかに描かれてあつたけれど、未だ實際に於て一人も見つけた事が無かつた、私は我流に毛の自由になるのを利用して其形に結つて居つた流行と云ふ物に重きをおいて居る友は、泣きつかぬ計りにして問ふて來た、其頃私はえらさうな顔して結方を敎へて上げたが今から思ふと恥かしくなる。しかし多數の友は嬉々として、それに結つて居つた。

その後或雜誌に伊賀とら子と言ふ髮結の結び方を記された、うしろへリボンをつける時は屹度其結ひ方にしてをつた、(リボンを付けないと後が變てから)次にルイザー卷といつてグツと根の上つたそして前髮の高いのが流行り出した、ぽかぽかと暖かい春の日の日曜に湯から上つて少々工夫して結つて見た處、不思議によく結へたから又それのみにして居た。

「どうしてそんなに前髮がうまく立つのでせう」

みんな同じやうな言を有被る。

「ネ、我流だけれど前髮のタボを少し大きくして、タボと頭の地の間へ二寸許りの束髮にさす櫛をグツとさして見なさい、奈何にでも立つ事よ、」

是には皆々驚ろきましたけれど、好成績だもの、眞先に齡上の加代樣きき樣すみ樣等がお結ひ遊ばした。

それから女優卷といつて、ツトの日本髷程長くしたのだの、十一月號の表紙の樣に前髮をぽかんと二つに分つて結ふのなんか流行つたけれどどうしても夜會的とでもいひ度い樣な頭になるから、一般の人には、やはり、從來結つてゐる結方に似たルイザーがもてるやうである。

私には澤山友達が有るが、二三度交つたら屹度私によく似た頭に成られる、友に應接して居ると頭を見てあゝ此方は第一ローマ時代から來た人、第二ローマ時代から餘り來ぬ人、ルイザ卷頃からといつた風にすぐ知る事が出來る、又玆に一つ可笑しい事には、私は或便利上から、始終頭に鉛筆をさして居つた、それは、よく外出する時必ず手帖をたもとへ入れて出るが鉛筆を挾んでおくと、郊外なんかに來たとき、しんが折れたりして困つたからであつた。すると學校の友は第一にお茶の友もお學の友も、ほとんど鉛筆を頭にさし出した。或日澄樣のお宅に集會があつて行つた處、中働きの女中が「さどうぞ」と案内するうしろの頭は、模形と云つた風な結ぶりに、私と同じ處に鉛筆をさして居つた。まあ如何してあの方に鉛筆が入用なのだらう、何と思つて、さしてるのだらうと思ふとふき出しさうに思へた。

潜に得意かも知れぬ。(評)

○不自由

廣島縣　宮垣はつ代

向ふの寺の楓の葉が秋風に散りて、我窓に流れ込んだ。あゝ淋しき秋の日よ、風は颯々と吹きて尙寂しさを增す、あゝ去年の此頃はあたら不具の身を悲しんでゐた。あゝ學校を卒業したのは去年の九月だ、多くの友は直ちに、就職口は定まつた、皆卒業と同時に嬉し氣な顔して前途の光明にあこがれてゐらつしやつたが。私はなかなかきまらない。今更我が身の不具を悲しまずにはゐられなかつた。小さい時子守に落されたがもとで、つひに一生なさけなき不具者とはなつた。手足はついてゐるが

右の手足は唯形だけだ、機械人形の如くだ、あらゆる神經は少しも感じない暗中に右手で物をさぐつて觸れたのがわからない。まして堅柔などは識別されない、筆も針も持たれない、右手はあつてもない樣なものだから何もかも左の手でする、横の物を縱に上の物を下にするのも左である、多くの人前ではがゆき思ひをし或は嘲笑され眞似せられたのも珍らしくない。其の度に私の心は泣いてゐたのであるが、社會は我等不具の身をいれないのかと思へば、又新しき悲しみに打たれた。あゝ私の望みは、つひにく絶えたのか、否師の君の御盡力にて此村に敎鞭とる身となつたのは去年の十一月末であつた、あゝ此時は天に對して感謝したのである、あつてもなきが如き右の手、たとひ左手一本でも我心血をそゝいでしたならば、兩手とも完全な人位の敎育は出來ぬにしろ、職務を果す事が出來るであらうと、決心して、我がふるさとを出たのは十一月三十日の小雨そぼふる時であつた、時はうつりそれより早や一年となつた、一番始めの苦しみや、裁縫敎授の絎け方の針の持ち方や、體操の時の示範など、みな涙の種となつたけれど、皆子供はよくなづいてくれる、あゝ私はいかなる事があつても、子供を見ると悲しい事でも忘れてしまふ。實にく私の身體はおしくない、身心を注いでゐるのである、折々來る故鄕の父母樣の御慈愛深き御手紙を見、あれかれと御心づけられし小包を開きては、どうしてうつかりしてゐられませうぞ。いよく身を捧げて育英の道に盡す心算である。あゝもはや今年もあと一ケ月、新らしき年をかへなば益々責任を重んじて職務を全うせん。

それでこそ完全に生れた甲斐があります、心の完美は、身體の不完全を補ふて餘あるのです。(評)

ぢや私だつて云つて上げ度いわ、アラ！私怒つてやしませんわ、だつてく先生も、其麼事仰有るのですもの――先生は餘り御笑ひにならぬ方だつた。私は反對に、少しの事にも笑ふ女！

「少し休みませう」と。ベンチに腰をおろして、先生は、左の袂を探り敷島を出して、西洋マッチで火を付けた。そして煙草をスパく吸ひ始めた。スウくと音は無いけれど。紫の煙が渦を卷いて、み空の何れにか舞ひ上る。

私は、其隣りに腰掛けるのだが、何だか變なので、老い茂つた、綠の雜草を、長い事見詰めて居た。佇みし儘……後から先生に聲掛けられてハット！と我れに返つた時「行きませう」と。ベンチを離れた先生の御言葉は、短かゝつた。けれど、私の心には什麼にか懷かしく響いたでせう。

あゝ先生！詩の如き美くしき御文は、我が手の裡にありますけれど、寂しい――何故でせう。

夕闇に、蒼白き瓦斯の灯が常よりも淡く眼に入つた。相思ひ相思はれて我友と別れてゐるは哀れなるかなと仰有つた、先生の御歌を再び思ひ出した想ひ出したとて、逢へるものでもないけれど。

情味のこまやかな文章だと云ふだけで、意義がはつきりしない(評)

○新らしき日記より

東京　そ　の　え

日記のひとひらや懷かしき、我が新らしき日記の一片を、私は、聞いて下さいと、言ふのではない――私は唯、獨言を云ふのである。先生は先生と呼ばるゝが何と無く物足りないと。仰有つた。其れでは何と申しますの？何へば御返事がない――先生！私のこと、何故、貴女と仰有るの

○留守居

臺北　尾方みつ子

それは針持つ手の冷たい晩であつた。しーんと淋しい稀靜かな夜よ、土人の銅鑼うつてひとしきりさわがしく過つて行つてあとは大の[illegible]

にそよく芭蕉の葉影をゑがいてる。星の無い曇つた空よ。白い竹の生垣に添ふて名も知らぬ樺色の花暗にもしろくくつくつ……丁度黒い布の上に白い花をぬひとりしたかのやうに……さあつと流れ入る風に手にもつ吊ふわく障子閉むればコトッと勝手の方に、あゝきたねずみが「お、寒い」と「ぴしやりと」なや果物を出し

ばなしにしておいたつたが」と急いで行つて見ると盛つた鉢は少しく傾むいて大きな黄金の玉にも似た蜜柑三つ四つころ〳〵と庭の隅にお餅は出しておいた覺えがないのに流しの口に一つ戸棚の側にも一つほんたうにしやうのないいたづらなこと。

座にかへつて時計を見ればすでに十一時五分、もう宴會もすんだらう、やがてお歸りでせうと仕事を片付て火鉢に炭入れやうと立つた時、突然此の夜の寂寞を破つてガラガラッと俥のわだちの音ピタリと家の前にとまる。「おかへり」と急々出て行つて見ればこはそも思ひがけなや此の夜中に花さんひとり、紫紺の袴の裾はらつて眞紅の大きなリボンばかりを見せ斯ううつむいて靴の紐をといてる、「まあ一體どうしたといふんですよ」と玄關に下りて問ふと「あの今晩ね吉田さん所にかるた會があつてお招かれしたのよですから成るべく早くかへるつもりで上つたんだけれどたうとうこんなにおそくなつたんですのだから今晩は姉樣とこに宿らして戴かうと思つて……え？家の方？それは電話で」「まあそう、そんならいゝけど全く不意だつたものだからびつくりしたわ」さつさと入つて來て例の大きな瞳であたりを見て

「兄樣は？」「まだよ宴會から」

城内の賑はひに反してこゝの夜はいつもにかはらぬ、正月もなほどこまでも靜寂、花さんはもう火鉢の向ふで睡つてる、すう〳〵と心地よささうな寢息は此上なく平和で室内はどこからともなくあまい香がたゞよふてくるやう暖い空氣が充ち充ちて居るのである

おや十二時過ぎ、まだおかへりらしくもないいつたいまあ何してゐらつしやるんでせう

「何してるだらう」つてお察の悪い。十二時過といへば二次會に移つた頃ですよ。（評）



羽子板　金澤　中田なへ

○さず痕

紀伊　宇田すが子

みんなと一所に火鉢へ手をかざしてゐても、一人裁縫をしてゐても、この右手の甲の疵が氣になつて仕方がない。

西風の坊ちやんだつて抱いて上げてもすぐ手をさわつて姉ちやんこら何したのと云ふし、花子さんに恰度みゝずがはふてる樣ねと云はれた、それでなくとも人前で手を出す時はかるた會などに氣が引けてなさけない思のするものを。實際みみずみたいな幅三分長さ九分位赤くはれあがつてゐる、おまけにツル〳〵して光つてるのですもの。

自分の命のかぎりこの疵もあるのだらうか、二年たつても三年たつても、他家へ嫁いでも、母となつて、又も我子に母さんこれ何？、問はれるのだらうか。
病院の醫師から、あなたの體は、こゝを何べん手術しても、やつぱりこの通りになると云はれてしまつた。
あんなに友人から美しいと羨まれ、親の前では、はづかしい位きれいな手であつたものを。
恰度二年前の春、ふと手の甲へ固いたまが出來て指でおすと動く氣味わるいもの、けれども痛みも目立ちもしなかつた、其頃同じ甲組の白井さんは顔へできものしていつもひるの休時間に病院へ通つてゐたのを何とかした動機で一所に病院へ行つて、私この手をどうかしてもらはうか知らん、そうなさいよ、連が出來て私もいゝわ、こんな事からつい深い考もなく大膽にも私はすぐ外科室の寢臺に横つた、エーテルや石炭酸の香は身に迫つて心地よい、目鏡をかけた若い美しいハイカラな外科醫の手先指先はすきとほるほど清い、手術衣も雪白、看護婦の服も雪白、殊に自分の足袋のそこがきづかはしくなつてきた、うす桃色の液體に浸した數多の鋭い刀がおそろしかつた、小さい切れ物だが。
看護婦は自分の手をシャボンで洗つた、そしてガーゼの樣な大きな布を二つ折りにして自分の目を被ふた。
何か手にふれたと思つたら、薄荷がしみこんだ樣にしびれた、ギリギリと肉を切る音、生溫い血の流れたらしい、と思つただけで痛は少しも知らなんだ、
三針位だね、えゝ、醫師二人の問答はあつて、パチンとはさみの音がした、被ひを取られて起つ上た時は大さうにほうたいされてあつた。
仲よしの看護婦杉浦さんは中にあつたものはアテロームつて云ふもので すよと敎へてくれた。
次の室へ來た時醫師は看護婦に、「十五等」と筆記さしてゐたのを見て私はおどろいた、それから縫ふた絲を拔くまで通つたが終に合さつた所は一所になつてはれあがつて、とうとうこんなになつたきりなほらないのですもの、去秋二度目の手術をしたが又此の通りに。
きらないでよいものを勝手なことをするから、と母から毎日云はれても、口惜しくて泣けてくるばかりおわびの仕樣もない——。
ほんとに、きらないでもよかつたのに。（評）

○種々

美作　水田邦子

今年尋常二年の政ちゃん、學校から歸つてくると母に、今日習つた、籍といふ字を書いて、何と讀む、と云つた。母は知らん、と答へたら、之位の字を知らぬのか、では明日から僕と一緒に學校に行かう、といはれた母は、七八つの子にさへ馬鹿にされる、世にも世界にも無學な身程悲しいものはない、とさめぐと泣いた。

*　*　*　*

初めて妾にお端書下さつたかたが、邦子さん私は何だかお前さんが懐かしうございます、始終お前さんの事計り……、とお前さんく、と書いてある、未だ一度もお前さんといはれた事のない妾は、限りなく侮辱された樣な氣がして悲しかつた。

*　*　*　*

夜分家の兄樣が入しつたので、「今夜はお宿りなさいな」といつたら、「でも僕は一人ねた事がないから淋しい、くうさん抱いて寢て呉れますか、」と仰つたので、「マア妾でさへ一人ねるのに、兄樣は妾より二つも大きい癖に、」と呆れてありたけ目をあけたら、「アッハゝゝ、矢つ張り子供ね……では一人寢る樣になつてから宿りに來やう？、いゝたらう、」と笑ひ乍ら歸つた。
妾はもう十八にもなつたのに皆に、子供、駄々子、アマちゃん、と直く云はれる、實に情けない。

*　*　*　*

庭掃の動一、[illegible]しと叫有るの之迄妾を若[illegible]といつてゐたが、[illegible]入しつて先生が、「お[illegible]し持つて來たの[illegible]を聞[illegible]」とのか「[illegible]、是は良い娘が[illegible]て居ました」、[illegible]て手が出なかつた。

此頃はやたらに、ちよん、ちよん、といふ。笑はせられる。（評）

○久しぶりで

唐崎秀子

投書を中絶してからもう三年餘、其間無論本誌には毎月接しては居つた、そして何時も皆様方の華やかな文に胸の血を湧きたゝせ乍ら此三年は過した、家庭を去つて寄宿舍生活を續けた此三年有餘、私の心は前とは大分變化したやうに覺える、そんならどう變つたかと云はれると捕へ處が無くて答につまつて仕舞ふ。三年の舍生活中、時には意地惡な友達に泣かされた事もあつたし情厚き先生に自分の境遇を打あけて一緒に泣いて戴いた事もある。又一夜を何の事なしに落ちる涙を枕の布ににじませ乍ら明した事もあつた。斯うして月日を過して來た私は何時とはなしに私に辛く當る人のすべてに反抗して見たくなつた。相手の誰に不拘、けれど時には何だか恐れに打たれる事もある。誰か力の強い人が來て私を暗い眞暗な處へ連れてでも行きさうになつて、其時には恰度小兒が母の乳房を握つた儘夢現に「おつかさん」と叫ぶ様に、「おつかさん」と云つて見る、私は全體生れてから人に向つて「おつかさん」とよぶ機會は一度も持たなかつた。西も東も知らぬ中、「かあ」と漸く口に出る頃母は逝つたのだもの、いつも私は是れが悲しかつた。けれど又十九の今日まで身體も人並に大きく、まして自分の好む道究めよと私に自由のタイムを持して下さる父を想つては、どうして涙が出ないで居らう、そしてこれに依つては「母なくとも……」とせめてもに惱みを消して居る。で斯く恐怖が胸を襲ふとき「おつかさん」とよんで見るのが癖になつて仕舞つた斯うよびさへすれば恐ろしいものは一歩一歩自分から遠のいて遂には何の恐れも無くなる。今自分は自分と云ふものゝ一部分だけでも知りたい知りたいとあせるけれど皆無分らない、眼の開き方が違ふのかも知れないけれど、只もう此頃は文學書みるのが何よりの樂しみ、自分で文を作る事は未だ素養もなし駄目だけれど、語るに友のない身は文學とし云へばなつかしい友の様な氣がして、又是からぽつ〳〵投書でも什様かと思ふ。

急々には及びません、ゆつくりと。（評）

○この秋

信濃　世良田優子

秋も逝きますコロ〳〵落ちるギンナンの實のその樺色の一つ一つに深い〳〵そしてなつかしさに耐へられない思ひ出の湧く日で御ざいます、黄色い葉は最後の悲しい歌を唱つてまつてゆきます、歌ひ終つたのは根方に重り合つてガサ〳〵風の吹く度慄へてゐます。一面散りしいた黄色い色、夕暮れの灰色もこの色でパツとする様に目に映りますけれど決して〳〵華かではありません、淋しい菜の色で御ざいます。

時々落ちる樺色のギンナンの實、あゝ此實！……

六つの秋で御ざいました、思出の人は八つのイガグリ頭、二人で大きな公孫樹の下でポタリ〳〵落ちて來る樺色の實を仲よく拾つてその中の、眞白いきれいな可愛いゝ實が嬉しくつて日向の緣でオハジキをしましたけ、二人とも口の重いおとなしい子で御ざいました。

何も知らずに遊んだ昔の記憶そこには眞實に美はしい或物がひそんで居りますなつかしい――淋しい――美はしい響きが御ざいます、此秋も樺色の實は落ちますけれども――私は拾ふとも思ひません、私には無上に悲しいのですたゞ――茂さんは此秋は駒場通ひ四季の都の風は隨分性質を變化させてしまひましたもう公孫樹の實の思ひ出を懷しむ様なんではなくなりました。あゝ時は凡てを破つてそこに涙を與へます。

何不自由なく母様の愛にすんなり育つた私、こゝに月上げもとれましたさて此頃の私何が不足か―何が不滿か―淋しいやる瀬ない涙が始終頰を傳はります。

どうしたのでせう、こんな弱い意氣地なしの私では有りませんでしたのに一體どうしたのか一寸も解りませぬ自分ながら制する事の出來ない此心、淋しい――そして物足りない何か充實するものを見出さうとして走る様な心――おゝ私は罪の子で御ざいます――罪の子と知りながらもあゝ處女十八の秋――顔の色の惡い此頃を御尋ね下さいますな――

童貞のかなしみ。（評）

評論　編輯局選

○泥人形の作者

加藤白光

優しい様で其の癖、襟を正さなければ前へ出られないといふのは、藤村氏の作品に接する度に起る私の感想であつて、氏は私の一番好きな叔父さんである。甘へてみたい、喧嘩の相手になつて貰ひたいと思ふとき、その人はといへば、白鳥氏より外には見當らない。しかし白鳥は女學生のお相手をする樣な人ではない、といつて、新橋の七人連とやらいふその一人の女と、京都へ新婚旅行するやうな人でもないらしい。粋の様で野暮の様で、規律的かと思へば放縦らしく、お坊ちやんではあるけれど氣六ヶ敷い、さうかと思へば人なつつこい、何とも名のつけ様もない型の人である――とかう泥人形を通じて私は氏を解釋した。

主人公の重吉が、一生の大事件といふ結婚に對しても「どうだつていゝさ」と何もかも放棄した樣に、めかくし的、抽籤的の結婚を敢てしておき乍ら、三々九度の盃を手にした時、相手のつやのない唇に觸れた盃を自分の唇にふれるのが厭らしくつて、そつと小指の先で拭つたといふのや、女が家に入つてからも、未だ妻でもなからうといふて、「お前は得心してるんかい、籍を入れるとお前の自由も失はれてしまうんだぜ」とも言つて、相手の弱點につけ入る。しかし、これは意地にかゝつていふのではなくて、かつて或る青年から聞いた「總てを放棄したといつても、やつぱり自己は可愛いゝから、全然捨鉢にもなれないものだ」この自己を愛する、これであらう。

自己を愛する、これが甚で、これが出發點であらう。結婚といふものも新しい生涯に入つて、新しい心持ちになつて、荒んだ心にしんみりとした情緒を味ひたいので、つまり變化をのぞむより外には何等の要求を持つてゐないらしい。彼の時子が夫の素振りの腑に落ちないで、「奥樣の御釋迦詣」と噂されるやうになつたのも男といふものゝ心が暗闇でわからないことである。怜悧といはれ、才媛といはれても、遂に男の心を解することが出來ない。性は相互の疑惑である。彼が「夫婦別あり、偉いことをいつたものだ」と冷笑したあたりは、よく相互の不可解な事を表はしてゐる。

泥人形の一篇は私にとつて、少からぬ教へである。何故かといへば、今の青年就中文學を好愛してゐる青年の心理といふものが、略了解されたので。「白鳥氏の作品には、自己そのまゝの姿が見える」とか「吾々青年の心持ちとしつくり合つた作品は他の作家にみることが出來ない」といふことを、度々耳にし目にするからで、どれほど今の青年が氏に歸依してゐるかゞ現はれる。氏は青年の、代表者である。自己を深く愛する人であらう。そしてこの大いなる矛盾を抱いてゐる人の半面をみた私は、何となく質實な腹違ひの兄さんといふ感じがする。（三等入賞）

東京に居ない、田舍にゐて僅の雜誌くらゐ讀んでゐる女が、これだけ批評眼を持つてるのは頼母しい方だ（評）

地方色別 誌友評論（三）

一記者

▲大和と京都

◎あしびきの大和の國は、神ながら言靈の幸はふ國であつた、奈良の御時には、才人雲の如く現れて、歌の道に曙の光を放つた、人は滅びても山まろく、野は平らかに、川の名、山の名、森の名、村の名には其代の歌の面影が殘つてゐる。

◎遠い昔の夢は美しいが、現代の文運は大和に何れだけの幸ひをしたかと云ふに、吾人は其多くを知らぬことを悲みとする、大和からは名だゝる作家も出ない。

◎翻つて本誌投稿家の顔ぶれを見るに、矢張大和には少いのである、吉野に中富よしみと云ふ人があつたが—今は見えない。僅に金剛山麓に玉置靜子と云ふ人があつた、文は達者、語る處は賢母良妻式の健全なる思想であつた、勿論人の妻であつた、暫く顔を出したまゝで昨年あたりからふつと消息を斷つた。

◎今一人若い人が、同じく金剛山麓から現れて來た、河崎八重子と云ふ、作物は相當にある、近く『娘時代』には親族の壓制と云ふのを出してゐる、何うも自分の身の上を書いたものらしい、筆は未だ熟しないが、思つたことを忌憚なく書き現はす質だ。

◎反撥心もある、活氣もある、負けぬ氣象らしいが、只それだけでは新しい吾儕娘たるに過ぎぬ、もつと自己の持つてゐる生活を豐かにして、尖つたり、折れたり、缺けたりしてゐる心持を柔かに、優しく、而して美しくしたら、今のところ大和に於ける唯一の誌友たること難くはない。

◎山城の平安の都は、大和よりも更に文學的の土地ではあるが、文學の振はないのは惜しい、と云つても實際は大阪に次いで振つてゐるのであらう、凡ての人の態度がじみだから、いつも調子がはつきりと分つてゐない。

◎京都の誌友と云へば直ちに要司村ふく子を想ふ、京都で二回までも率先して誌友會を開いた、女子文壇に

對しては尤も熱心なる誌友だ。

◎雜誌に對する熱心は明かだが、ふく子の作は令孃式で、鋭い自覺も、飛び拔けた才氣もない、普運の作家だと云ふだけの事で、文章も、歌も普通に出來る、或は歌の方がうまいかも知れぬが、文章もわる氣のないお孃樣らしい文章を書く、文學的修養はあんまりしてゐないと思ふ、寧ろ何うして宜いか分らぬ方だらう。

◎無難と平板、無垢と溫雅、之がふく子の全身であらう、珠の如き人よ、幸に美しかれ。

◎かうほねと云ふ名で『月の上るまで』を書いた人も京都の女學生らしいが、此作一篇切りでは何とも判斷がつかぬ、作は確に手でたへのある好い物だつたが、後にも、前にも、此一つでは何とも云ひやうがない、まださきのことは分らぬけれど。

◎吾人は此處に、最も新しく、最も注意すべき一人を紹介しやうと思ふ。同じく京都の人で、島本久惠と云ふ女だ。しづかとも名乘る、嘗て、動物に對する感想と云ふ題に應じて「千鳥」のことを書いた、散文では「八百屋お七」があつた、餘り性が現れてゐないので例の變性かと疑はれてゐたが、しづかは間違もなく京都の女である。

◎千鳥にも、お七にも、描寫にうまみのある事は分つてゐた。最近十二月號に現れた「盲人鄕」に於て、吾人は少からぬ驚嘆を感じた。

◎讀者試みに今一度「盲人鄕」を讀んで見たまへ、彼の文章は、實に近來本誌上の佳作で、一つは題材の好かつた爲もあるが、あの題材を、あれ丈け巧みに扱つたのは若い女の手腕としては、確に驚嘆に値する。

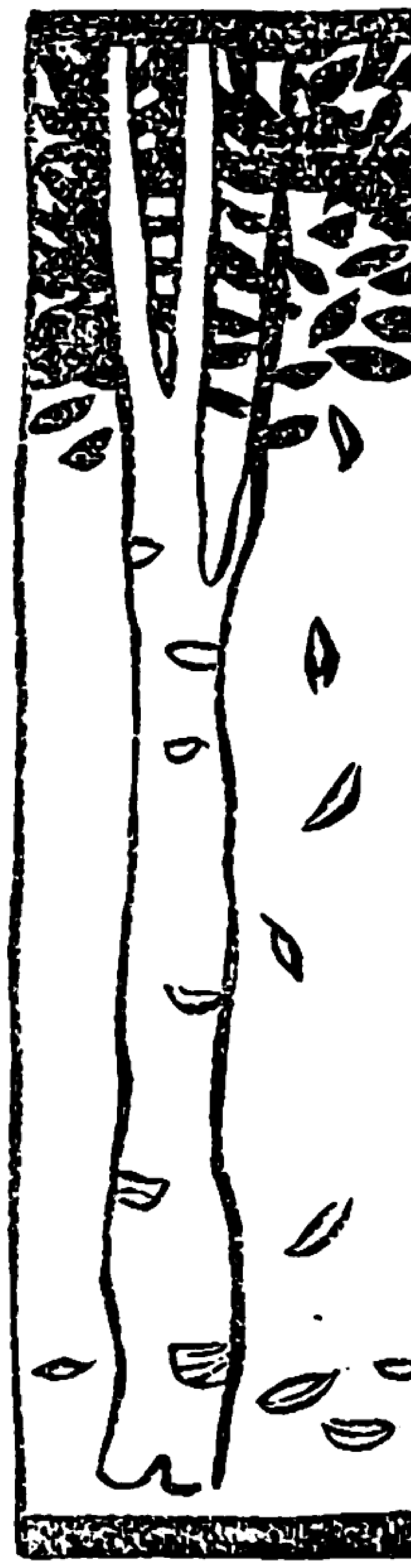
◎散文を書く人は、自己中心を離れない、離れてもゐるを見ることが出來ない、然るに「盲人鄕」は一歩離れて見て居ながら、作者の意識、感情が、生のまゝに力強く現れてゐる、女性として珍しいと思ふは其處だ。

◎しづかたる者、吾人の褒詞に對して慢心すれば止む飽くまで謙遜したる態度を把持し、眞實に文藝の味に徹し、其方へ沒頭して行けば、なほ現在より、より多き未來があらうと思ふ。

◎京都には他に三宅壽賀子。川田益子等があつたがだん／＼遠ざかつて了つた。

◎京都は他の都會に比して、投稿家は多いのだが、多いのは殆ど男性だから始末に困る、京都ほど男子の多く投稿するところはない、何う云ふ理由か一寸解しかねる。

初作　編輯局選



○山茶花の咲く日に

熊本縣　しらはぎ

過ぎた昔を思ふと夢の様でございます。落陽の夕、寢ざめの夜半、母を戀ふて泣いたことは幾度でございましたでせう、覺束ない手つきで、二人の妹の髮も結ふてやりました、よろづ人手を煩はさなかつた母を見習ふて、洗濯もしました、學校で袷の縫方を習つたと云つては、冬の夜を古着の裏返しもしました、臆かゝる時母あらばと小さい胸に泪は盡きませんでした。せめて、父でも人並でしたら……まあ、這麼にお太りなさいましたのに母樣が御覽なさいましたらと、頭を撫でられて泣かされた事も度々でございました。げにも、私の生立ちはつらふございました。

別れる時、乳までも足らなかつた脊丈の伸びて母より二寸も高くなつた今日、再び懷かしい母と起き臥しをともにしてゐますけれど吁私の泪は何時の日にかつきませう、父吁父……

狂するその心より、一步も人の干涉を免さぬ足下に立つて、徐かに破れんとする家の殘骸を擔ふて立たねばなりませぬ、波風荒い現の世に――吁、まだ二十歲の少女には誠に重荷でございますもの、力を添へて吳れる人のないではありませんけど、世慣れぬながら冷たい人の世の裏も知つてゐます人にたよられませうぞ。財が、名が何にならうと、我生立ちを思ふても强く心に叫びましたけれど、吁母、母の泪を見るには忍びません、悲慘に終るべき母の生涯を思ふたら、せめて一つでもその心を滿たして上げたうございます。その上まだ妹があります。二人の妹が、吁この上妹達にもみじめな生を續けさせられませうか。

あゝ、私の責任は重うございます、泣いて居るべき時ではありません。さらば……さらば　（地賞）

文章は初作でも、精神は初作どころではありません、此心根で行かれたら生涯は安全でせう（評）

○留守

澁谷露草

父樣は今朝大森の伯母樣のお家へいらしつてまだお歸りがない、午後から姉樣も活花の會へいらしつたので、私ひとりあまりさびしくなつたので久しぶりに三味線をだしてなくなられた母樣がおすきであつた三保の松をひく――はのぼのと明けゆく空の雲晴れて千本の松に風もなく――こゝまでうたつてゆくと「御免なさい」はつと思つて破れ三味線を押入へかくして、いそいで出て行つて見たら、あらいやなお人の惡い姉樣がにこ〳〵してたつてゐらつしやる「露さん大變ぉ上手ね、お隣がありますから何卒お手やはらかになりたけ音のしない樣に願ひますよ」だつて、本當に隨分な姉樣だわ「姉樣今日は面白かつて私ひとりで隨分さびしかつてよあの御土産は」「ホヽヽもうお土産のおさいそくおそれ入ましたね今日はあなたのすきなもの買つてきてよ」つて仰有て風呂敷包をといて繪はがきと、ばらのかんざしを出して下さる、私は直に頂いたかんざしをさして、ひとりで寫眞をうつしに行く、寫眞屋へはいるのが隨分きまりが惡るかつた　（人賞）

和氣藹々（評）

○姉と弟

丹後　篤代

好いお天氣なので、洗濯物をすまして、お室のお掃除をして居りました時、弟は昨日の作文と申しながら作文帳を持つて參りました。「今日も褒だつたの」と云ひながら讀み始めました。中程に「細い水は泡と消え、樋のしづくも、花と散り此方に飛び彼方に走る、右にむけ、左に寄せ、前へ進み、後に退りボートは油の如き水の上をゆらく〳〵……」これがどうして、弟の作と云へませう私と比べると雲泥の差です、實にいつもながら感心して讀み終りました。その終に師の君曰く「いつもながら感心致し候讀む人をして、さながら○○湖頭に佇むの感ありこれ君の手腕なり勵め健兒」とあります。

「よく出來たわ」と申せば滿面に笑をたゝへて居りました。

「姉様大學に行くには澤山學資がいりますでせうね」

「えゝ澤山いるでせうよ」と云ひました時亦も弟は、

「ね、でも苦學したらどうかこうか行けるでせうね」と申しましたその瞬間私は何ともいへない感にうたれました。あゝ未だやつと、十三になつた弟の音樂でございます。それに苦學等と……それは弟も家の有樣を熟知して居ませうが幼い頭にかくも思ふかと、思ひますとつらくてたまりません、でも父さへ在せばこんな思はさせまじと毎日父上の事を思はない日はありません。

それ故父の死後は自分の身はさておき望ある弟に何故學問を斷たす事が出來ませうかと仕事もそれ故進ます。「それは出來ない事もないでせうけど、私もね一所になつて大學迄は通はして上げたいが」とそつと横を向いて眼を拭きました、「でもね僕は、一人でやるつもりですよ、もし敗つて斃れゝばそれまでゝす」と愛しい眼は露でくもつて居ました、そして暫く二人は無言ですゝり泣きました。嗚呼天の父は、いつか私共の上にも幸ある御光をなげ給ふ日がありませうか。

清い涙が流れてゐる、けなげなるはらからよ、二人の上に長き日あれ(評)

○蝗とり

岩代　登志子

今朝の霧の深いこと、いつも紫色が目覺める樣に聳えて居る磐梯や、其他の山々は全く此の中に包まれて仕舞つて、お寺の前の銀杏の大木ばかり、ボンヤリと目につく。

太陽は白く丸く空にかゝつて丁度有明の月の樣、こんな天氣には一番とれると、かねて聞いて居つたので希望滿ち滿ち田の中に入つた、筒袖半纏に白手拭の伴は四人ばかり。

稻は大方刈り盡されて田に並んで居る、蝗は未だ眠つて居るのか、縮んで居るのかちつとも見えないので、稻をガサ〳〵させてやつた。するとびつくりして四方八方に跳ねる飛ぶ凄まじい勢である。とらへた時の嬉しさはお話にならない、向ふに逃げた、こゝにかくれた、とそれを追ひこれを採り一匹づゝ叉袋に入れる忙がしさ、流石の皆々本氣になつてとりにかゝつた。

霧がはれて山も見え、太陽は輝くと蝗はひとりでとび出す、十や二十は面白さにかぞへても見たけれど、もうそれどころではない、慣れるにつれてとり方が妙になつてくる、大きな袋も大分凹くなつた、かうなるともう一生懸命夢中でとつた、自分のものとなれば人はこんなに熱心になるものかしらと、我ながら不思議に思つた位、稻の害蟲だからなど・考へてとつて居る人は殆んどあるまい、甚少し過ぐる頃、さしも大きい袋へ五分の一はひつた樣子、田舍娘の唯一の樂しみはこれである。

これぞといつて大層な利益は今日はなかつたけれど、世の中の人のする一つの事を經驗することが出來たのを私は何よりの事と思つた。

作詩なことも言つてあるが、先づ好い方です(評)

○朝

美津子

木屋がかんからびた花をたん〳〵落して居たから、菊畑へ行つた。茂介が自由さうにはさみを鳴して居る。足許に見捨てられた白菊が、ぐなり〳〵と地面を好きな方へ這ひ廻つてゐる。勝手な細い枝からは、ちつぽけな、蕊が澤山で、下の方は我儘さうなねぢけ者みたやうな花とがくしやくしやにこみ合つて、じめ〳〵してゐる。手を入れたら屹度何かに刺されてはれ上るだらう！次に來た者がどうなとするがいゝ。

かしこさうに吹いて居る他の花を見るのが何だか大儀でならなかつた。家の中へ這入つたらいつものやうに、姉さんは窓にもたれてゐた。うつむいて居たからすぐわかつた。――又例の寒い〳〵鋏の音を聞いて居るのだ。――私はオーガンを力一ぱいおさえて見たけれど、左の手がちつとも動かないから、じれつたくて、手のひらで一時におさえたら、

「まあ!!! 仙ちやん……十五にもなつて……。」

姉さんが振り返て無難しい顔して居た。

茂介のはさみの音も止んで居た。

此十五はかけねがあつても一つくらゐ（評）

〇菊

名古屋　匡子

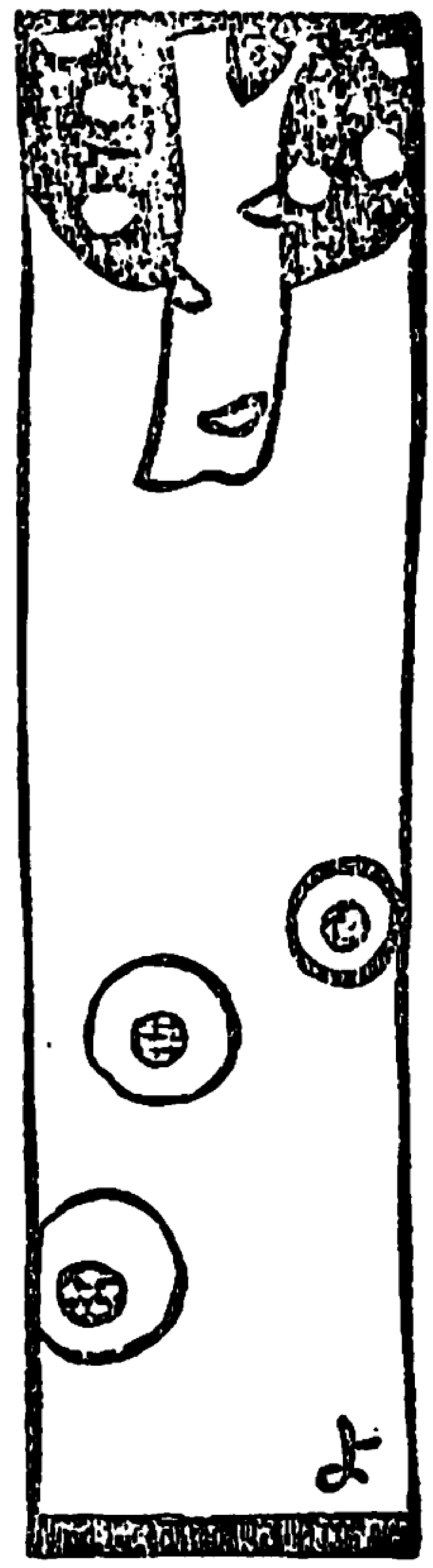
日のあたる温つたかいお縁側に腰かけて、じつとながめてると、庭のすみの方に、一本のほそい竹によりかゝつて、ひよろ〳〵と咲きかけてる菊が目に入る、雨が降つたらたふれさう、風が吹いたら折れてしまうかも知れない、そのはずだわ、こやしもやらなければ水もかけてやらない、たゞ芽を出したまゝ植かへもしないではふりつぱなしだもの、此の菊だつて手入次第で、立派なお座敷の床にも生けられよう。綺麗なお佛壇にも上げられようにと思ふと、何んだかかあゆさうなやうな氣がする、外の菊は今眞盛りに咲きほこつてるのにやう〳〵白い花瓣を出したばつかりそれもゝう霜にいためられて、今にもしほれて枯れてしまうにちがひない、だけど無情な人に手折られてぢきすてられてしまうより、まだいゝかも知れない、今年はこれでこの菊の命もおしまひだけれど、又來年芽を出した時は、思ひきり手入をして大きい花を咲かして、お花好きのお父樣のお目にかけませう。

可憐（評）

〇停車場まで

栃木　里の花

馬車なれば館場迄一里許り、歩けばよいのだが汽車賃差引いて洗粉五袋の徳がある、汽車にしませうといつて美子樣と停車場まで歩く事になつた私逹の出懸ける番になつてから雨があがつたのも天祐の樣に思はれた、雲は高原山の上の方にうづくまつて居る、田圃に居る人の總立になつて見るのを心憎しと思ひながら洋傘でかくして通つた、美しい稲田をながれる風は心持好かつたが、洋傘をぐら〳〵させるのでしつかり柄を握つて四方に氣を配りながら歩いた。かうして話しながら法蔵寺の前を通り越すとホヽヽといふ。振かへつて見ると徳子樣と小僧とがやつぱり停車場行き道連れが殖えてうれしかつた。漸々坂に上ると廣い野原、道がそつちこつちに幾つもあつて梶とりが大變、歩つても〳〵向ふの松迄見えて行けない疲れた、けれども汽車の時間が心配になつておち〳〵休む事も出來ないで困つてしまつた。けれどもかうして歩いて居て過去のなつかしさを思ふまゝ繰返す事の出來るのがかへつて幸であつた。馬の背の上から家を振りかへつて見ては急に悲しくなつて殊に九月に歸校の折は叢に鳴く蟲のなかに入つていつ迄も迄に泣いて居たいと希ふた事は二年前まで數度であつた。今徳子樣も展覽會で休業のため戀しい母樣の傍に行つて歸校する途中なのだ自分の經驗から推して徳子樣の心中を察せずには居られなかつた。美子樣は初ての道だから今すこしです今すこしですといつて力を附て居るうちにもう弱りきつて口をきかなくなつた。



俳句　内藤鳴雪選

○（天）秋の水小鳥の戀を映しけり　信濃　工藤清子

○（地）萬歳の烏帽子落ちたり雪の上　岐阜縣　佐藤綠子

○（人）初夢のさめて飯食ふ美人かな　宇都宮　松井玉子

佳作

山駕に曉寒し藤の花　備中　藤延嶺子
元日や向ふの山に湧く鴉　秋田縣　瀧本光子
大名の行列過ぎて鳴子かな　上州　枯すゝき
名月や舟子がかつぐ櫓の雫　麹町　牧野銀杏子
寒き朝かきねの菊に鵯が居る　山形縣　大平かはる
明家にいのころの鳴く寒さかな　沼津　山縣時雨
書初の繪葉書人に送りけり　東京　安井うた子
夜過たる雨戸あくれば初日哉　京都　木畑しか子
山寺の堂塔高し冬の月　仙臺市　赤間とし子
紙燭して菊の園來る女かな　茨城縣　漂花女
秋くれて一夜とめたる女繪師　神戸　雪の女
美しき雲行き交ふや暮の秋　日高　深山の白百合
雪のちりて雀も鳴くや藪の屋根　美作　橋本
野にふして眺むる月の氣高さよ　城南　小島美雪
朝霧のこむる社や馬の嘶く　下谷　津端かよ子
抱かれて柳を手折る雛妓かな　千葉縣　鈴木ぺん子
煤掃や人形共も庭の隅　品川　網蕣子
戀さめて酒さめて秋の夜の寒し　埼玉　中澤高子
嫁ぐ荷の紋大きさよ菊日和　越後　菊枝子
春風の石の地藏を吹きにけり　下の關　木本白蝶
紅葉した山もねむりて川の音　常陸　星野親子
亡き人を忍びて一人月見かな　渡島　露華
老て來る鶯里を定めけり　茨城　根本なほ子
旅人の笠一つ見ゆ夕吹雪　茨城縣　芳香
鮎燒きて多摩の草家のまどゐ哉　山口縣　梛良美那子
柿の實のかずさへ見えて秋のくれ　加賀　村田綠子
馬上にて拜する人や初日出　渡島　宗原みつ子
大風の尾を引く畑や麥二寸　常陸　田村はつ子
此冬ははじめて旅の冬籠り　千葉　村山さき子
霧深き尼寺淋し大銀杏　山梨縣　新津かつ子
元朝や袴着けたる醉其角　備中　小見山春子
牧馬の落葉身振ふ野分かな　美作　葉蘭
嫁入りの家忙がしや春隣り　翡翠子
少女子がもゆる思ひの紅葉の葉　山形市　木村きせ子
水仙や百疊敷の青たゝみ　萩の里　姫小松
正月は炬燵の上の雪見かな　王子町　大浪せい子
初春や藁屋をもるゝ歌の三味　金澤　佼子
此の間にと君を送りし時雨かな　山形縣　伊藤智惠子
嫋々としてわらひかたるや里の秋　麹町　あらゝぎ子

夜は寵青道心の戀もして　牛込　西村しのぶ
名月によく歌ふ人召されけり　信濃　百瀬若子
雁鳴いて只わけもなく人戀ひし　千葉縣　五木田種子
初春や禿かくるゝ小對立　岡山市　桃の村女
松多き湖南の村や春の水　秋田　水野お葉
遣羽子の空に晴れたる筑波哉　羽後　三浦ふみ
たに川にさいかち拾ふ秋のくれ　宮城　馥子
吹雪する街の夕や下駄の音　備前　赤木あさし
初鳥俊寛の髯のびたらん　山城　木の花
大江戸の人皆起きぬ初鳥　島根縣　藤田豐子
木枯の都大路や馬の糞　備中　春子
秋ゆく夜つれなき人に文かきぬ　下總　浮舟
禿筆や吾即吟を書き悩む　備後　告天子
船軍八島の曲や夕時雨　三重縣　駒越くに子
つばくろや狂女がかざす傘の上　淺草　藤井若菜
公達の馬皆な白し君が春　土佐　花殿守
外風呂に雁きく夜半の寒さかな　吉新舟秋
静かさをつみかさねたる落葉哉　群馬縣　井上みゑ
日や洩れて塔の影さす時雨哉　群馬縣　金澤こう
初夢をほゝ笑みながら語りける　群馬縣　新井ツマ子
ゆく秋や病める身のつかね髮　仙臺市　堀しづか
百姓の菊賣りに出る日和かな　岡山市　富山千登勢
正月や行脚の僧の衣がへ　舞鶴　雪子
訪ふ人もなき古墳の時雨哉　沼津　山縣梅園
大瀧の虹美くしき初日哉　宇都宮　月波みち子
菊生けし床に入日の斜なり　熊本　白萩
掃くあとに又一葉落ち秋は逝く　栃木縣　高松たへ子
行く秋を笠一蓋の身のかろさ　高尾
松風に鶴の胸毛の吹かれ居る　東京　蔦の葉
鐘の音は森より出て冬の月　瑞野　つゆ子
行く雲に思ひやこもる佐渡の秋　松原　小夜子

嵯峨野行く僧の衣に落葉かな　渡島　川原華子
彈初や琴の音にちる餅の花　大阪　筆子
小春日の隣りの椽や圍碁の音　大阪　田野靜子
鷄の鳴く家もありぬ冬枯野　大阪　田野しか子
新年の闇にひらめく吹雪哉　埼玉縣　中澤高子
落葉たく女の顔に宵月夜　千住　白妙女
絶壁を雪すべる音や冬の月　京都府　竹村まき
白菊の花わかぬまで今朝の霜　美作　水田邦子
狂ひ女の打眺む紅葉かな　麻布　小倉ふみ
猫も耳を立てゝ聞くなり除夜の鐘　淡路　内海千鳥子
三尺の軒場は狭し蔦かつら　横濱　夕野萩子
春の水着物の裾を濡らしけり　越後　齋川幸子
正月や揃ふ晴れ衣の姉妹　千葉縣　伊藤ゆり子
馬子が脊をしたゝか打ちぬ初あられ　渡島　宗原美津子
百舌なくや芒の原に椎一木　仙臺市　野田幸子
さみだるゝ夕を君と歌おもふ　岡山市　房之
琴の音や高殿ありて螢川　美作　紅葉
思ひかねて向へば曇る鏡かな　千葉縣　鶴岡吉代子
庵の灯に吾が影小さき霜夜哉　澁谷　山永濱子
雲の峰放し飼ひする駒多し　備中　小見山春子
山道や枯葉の上に秋の雨　上毛　芝擇
村人に我が法を說く夜長哉　知多　加藤矢枝子
萩桔梗舟より拾てし小山哉　沼津　村瀬常月
小春雲千金の鶴放し見ん　越後　藤原竹子
千尋の瀧壺に秋の山暗し　東京　稻ノ邊己子
馬を洗ふ人に灯を持つ夜寒哉　大阪　田野靜子
傘さして夏菊剪りぬ虎が雨　横濱　中島留舟
閉されて池亭寂たり青嵐　澁谷　風玉女
舟人の夕立あびる裸かな　信濃　阿黃子
株桐にとまりて淋し赤き蝶　土佐　はぎ子
霜の翠市の柳の散りしより　越後　歌子



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會 顧問 藤波芙蓉



○美髪劑に就いて　神戸春子様外數多の諸子方から美髪劑御使用の結果につき、その有効なる御禮の御讃辭を頂き、創製者としての嬉しさと名譽と此上もないことに存じます、けれども化粧は毎度申上ぐる通り個人性のもので、甲者に適せるもの必ずしも乙者に適すとは云はれませんので、從つて美髪劑も、私の智力の及ぶ限りを傾盡して極めて普遍的に調劑したつもりではありますけれど、それが絶對に缺點なしとは創製者自身にも斷言する蠻勇がありません、それ故若し一度それを御試用下さつて、多少にても改良すべき缺點がございましたら、斯道のため十分御遠慮なく仰つて下さい、私はそれ等の御忠告を賜はり、更に一入の研究の歩武を進め皆様方が美髪に於ける渇仰の御滿足に資したいと思ふからです。

問　(一)私はまた二十歳にもなりませんのに小皺が顔一面に刻まれて居ります、これを取り去るべき何等かの良い療法を、(二)ソバカスは何をつけたら宜しいでせうか、(三)純粹の椿油は何處で製して居りますか、(四)當今のヌカには砂や小石が混つて居るさうですが、この様なヌカを使ひましても別に害はございますまいか、(五)冬季水仕事を致しますと直ぐヒビが切れますのでリスリンを使つて居りますが、リスリンをつけると色が黒くなると聞きましたが本當でせうか、又何をつけたら宜しいでせうか(徳島一少女)

答　(一)美容マッサージ法を御やりなさい、精しくは今度實業の日本社から發行致します合せ鏡といふ化粧の本に書いて置きましたから、それを御參考下さい。(二)よく其原因から取調べてかゝらねと正確のことは御答致しかねますが普通は省斑乳を最も有効であると存じます。(三)比較的純粹に近いのは伊豆七島の中から産出さるゝものでせう、けれども近来島人等も大部ズルクなつて來て、椿の殻までを一所にしてシボルやうになりましたので、眞に純粹なものは先づ無いと云つてよいやうです、(四)無論いけません、洗顔料のヌカは純粹のものを撰ぶべきです。(五)リスリンは御聞きの通りです、明礬、重炭酸曹達各二匁五分、安息香酸丁幾十匁を蒸餾水一百匁に混合し、それで患部を罨法なさい

問　私は別に病氣も致しませんのに、毎年頭髪が抜け、殊に本年は甚だしうございまして只今では誠に薄く見えるやうになりました、何分抜毛を止める有効藥を(金澤の女)

答　それには必ず原因があると存じます、實は私の方へ直接の御書面であり、且つ御住所も御姓名も明記されてありましたので、直接御返事を申上げ、その原因についても御尋ねしようかと思つたのでしたが、御手紙の中に、特に本欄で敎へて呉れと御書面があつたので、差控へた次第ですが、兎も角硫黄乳一匁アントラゾール二匁、フエトロン三十匁を煉合して、一日一回頭皮に擦込んで御覧なさい。

問　(一)毛髪の薄きが上に、結髪の都度澤山に抜毛致しますが、これを止めますには(二)白椿油は餘り品がよい爲め、毛をもぢくとか申しますが、(三)夜分白粉をつけて寢みますと翌朝目にヤニが澤山出て居ます、大學クラブの二品より外に用ひません、何故でせうか、(四)目と眉との間に短かきを長く見する化粧法を、(五)生際高く抜け出て居るのを格好よく見する化粧法を。(七)顔に出來たオデキの痕をかくす法を(奈良の清子)

答　(一)前の(金澤の女)さんへの答を御覧下さい、(二)毛をもぢくP、そのモヂクとは如何なる意味でせうか、(三)御尋ねの文章が少々わかり兼ねますので御答に困りました、(四及び(五)は、精しく新式化粧法といふ本の中に述べて置きましたからそれを御覧下さい、(六)どんな痕か、實地に拜見せねことには的確の御答は致しかねます。

問　三越でキセロル香油を見せて呉れましたが如何でせう。實は毛質が硬くてフケが多い

ものですから、それに使ひたいと思ひますので若しよいと致しますれば、矢張り普通の香油と同樣に用ふればよいのでせうか（大阪、はる子）

答 それはキセロルブリヤンチンでせう、けれども毛を軟かにする方をもつて居ります、フケには効がありません、使用法は御尋ねの通りです。

問 おしろいをつけずに素顔を美しく致し又おしろいをつけても素顔のやうに見せますには、如何いたしたら宜しいでせうか（芝のなべ子）

答 それは中々面倒です、そのやり方は、新式化粧法といふ本と、合せ鏡といふ本の中に精しく述べて置きましたから、それを御覽願ひます。

問 若白髮の療法とフケを取去る法を御教願ひますわ（女子文壇愛讀女）

答 願ひますわなどゝ、殊更にわの字をつけて女性らしく裝はれても、御身は確なる男性と認めます、男性には御答せぬ答にしてあるが御尋ねの件が御尤のことであるから、まア〳〵御小筆の通り其儘女性と見做して御答致しませう、若白髮の生い出たのを拔き、そのあとへ直ぐ生姜の汁を摺込み、又フケにはキセロルローションを御つけなさい。

問 （一）九月號に痩せたい方は「一方の食物を廢し」云々とございましたが、それは總べての副食物ですか、若くは御飯もですか、又牛肉は一度如何程の分量を食べますのですか（二）切れ毛、拔け毛を防ぐ法を（操子）

答 （一）一方のではありません、一切のです、副ひ物は勿論御飯もです、牛肉の量は、御各自の腹を滿すに足るだけ御食べになつて差支ありません。（二）その原因を調べた上でなければシカとした御答を申上げかねます。

問 コールドクリームの調製法に就いて御伺ひ申上げます。あの甘扁桃油、鯨蠟、白蠟、グリセリン等の藥品を混合致しまする際には、右の中白蠟と鯨蠟とは先に火にかけてドロ〳〵に解して置いて、その中へ甘扁桃油とグリセリンとを投入するものでございますが、斯く混合致しましても或る一定の時間を經過せん中は使用されないものでせうか、それから甘扁桃油一〇〇、〇〇との仰せは、瓦を以てするのでせうか（越後の愛讀女）

答 御尋ねの通りです、但し其火加減が大切で、少しでも强過ぎると分解致しますから御注意なさい、猶直ぐ御使用になつても別に差支ありません。

問 （一）私は生來肥滿いたし居り、顏面に絕えず赤き紋々が吹出て、洗粉、糠などで洗ひますと、猶多く吹出ますし、純良な石鹼で洗ひますと、吹出ものは少しになるやうでございますけれど、皮膚が荒れます、美顏水、ビューテー、チプリなどゝ色々つけましたが、一向駄目です、よい療法を、（二）九月號にて仰せあつた塗身香の調合を或る藥店に依賴致しました所が霜九油と申すのはなく、又あの分量だけで二十圓もかゝると申しましたが如何なものでせうか（牛込たゞ子）

答 すべての化粧品を御中止なさつて、今度女子文壇社の代理部から皆樣方に御わけすることになつた、純植物性洗粉と、姊妹劑とを御使ひになつて御覽なさい、必ず直ると信じます（二）霜九油は支那の藥店にしかありません、二十圓位では恐らく純粹の雲南麝香を使ふことは出來ますまい。

問 （一）毛髮を黑くする法はございますまいか、（二）口の邊りに小さなオデキが澤山出來て其跡が赤く紫色になつて居りますが、何を用ひましたら宜しいでせうか（岩代、翠子）

答 （一）桑の葉と胡麻の葉とを等分にした煎汁で氣永に御洗ひになつて居ると自然黑艶々となります。（二）今度文壇社から皆樣方に御わけすることになつて姊妹劑の乙號を御つけになれば直ります。

問 （一）顏に薄き斑點あるを除く最簡易法（二）吹出物の痕跡を除弱する法、（三）ニキビの豫防法（四）フケを少なくする法（豐後、哀願女）

答 （一）と（二）は文壇社の代理部から姊妹劑を讓つて貰つて、それを御つけなさい。（三）同じく文壇社から純植物性洗粉を御求めになつて御洗顏なさい、（四 兒手柏、七葉、胡桃實三個梨實一個、訶子三個を摺交ぜたもので御洗ひになれば無くなります。

問 私は赤顏なんですが、過酸化水素水を使ひましてり差支ないでせうか、よいと致しますれば四%のまゝで可いでせうか、そして塗るのですか又は服用致すのですか（加茂、黑女）

答 御尋ねの通りで差支ありません、但し服用するのではなく塗布するのです。猶毛髮に

は少しでも塗らぬやうになさらんといけませんぞ。

問　（一）冬瓜子ばかり塗つては白色になりますまいか、（二）長いこと塗けて居ると白粉やけが出來るとのことですが本當でせうか、又それを防ぐ法はございますまいか（麴町、京子）

答　（一）多少の効果はないでもありませんけれど、大したことはありません。（二）それは煉おしろいのことです、粉おしろいなら、其樣な御心配はありません。

問　（一）私は色が黑いのですが白色劑を使用すればいゝですか、（二）鼻の油が多いので白粉が直ぐ剝げて困ります、如何すればよいでせうか。（三）コールドクリームや杜松子油は何處で賣つて居りますか（大阪の若き女）

答　（一）白色劑と申して、どの白色劑ですか（二）文壇社の代理部に御申込になつて、姉妹劑の中の乙號を御求めになり、それを御化粧する前に御つけなさい。（三）コールドクリームは高價なため、まだ日本には輸入されて居りません。それ故今度文壇社では皆樣方の爲めに、私をしてそれを調製せしめ、姉妹劑の甲號として御わけすることになつたのですが、御入用でしたら社の方から讓つて頂きなさい、杜松子油は姉妹劑の乙號に含まれて居ります。

問　（一）御敎に遵つて牛肉を白湯で煮て食して見ましたが胃が受附けません、味をつけては効がないでせうか、（二）一ヶ月に二度は必ず洗髮致して居りますが、その都度脫毛甚だしく且つフケ多くかゆくて仕方がありません、何れよい方法を（土佐、春子）

答　（一）それは御氣の毒なことです、けれど致方がありません、味をつけては効力の大半を殺ぎます、（二）本欄中の（金澤の女）さんと（豐後の哀願女）さんへの答を御參考願ひます。

○（大阪の白百合香）さんへ、その化粧の本と申すは何といふ、誰の書いたものですか、若し御差支ないなら暫らく借覽さして下さいませんか恐らく發音に訛誤あるのではないかと思はれますから

○（一般の質問諸子に）毎度申す如く、月を經るごとに御尋ね下さる方が殖えて參りますので今や本欄を六號活字三段組三頁に擴張しても猶且つ御答し切れぬ程の有樣で斯く盛んに御質問下さるのは答者たる私の身にとり誠に嬉しく光榮と存ずる所ですが、御尋ねになる方々の身になれば成るべく早く其返事を得たいとお思ひになるは人情の自然であらうと考へます。然るに御一人にて何題も一度に御尋ねになると、それが爲め他の御方への返事が自然おくれるといふことになりますから、質問諸子は、お互に此情を御汲合になられて、成るべくたけ一度に多くの問題を御提出なさらんやうに致したいものと思ひます。それでも色々御尋ねになりたい場合でしたら今度から別々の半紙若くは葉書に御認めなさつて下さいまし。

▲化粧問答に問ひを出すのはどなたでも御隨意です、成るべく一人一件にして下さい、順次に答ます

▲編輯通信▼

本號特別投稿の等級

本號特別投稿の感想文、告白文は左の通り等級を定めて、追つて贈賞いたします。（記者の豫期した程の傑作に接しませんでしたから、一等を缺きます）

二　等

△若き日然……………ひざくら

三　等

△空飛ぶ鳥……………夕やみ

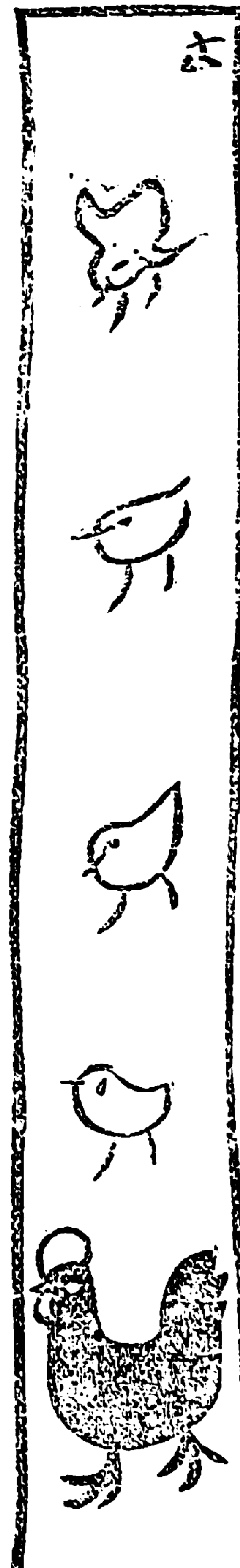
四　等

△歎移……………港の女
△×××寄宿舍……………冷雨
△これでも夫婦か……………葉子

五　等

△處女より妻に……………磯村春子
△思ひ出の窓……………賤花
△別れて後……………舟子
△病殘し人……………小宅てふ子
△正月のお餅配り……………松並紫花
△靑春に別るゝ苦痛……………草の門
△若き日の誇……………秋子
△手紙を燒く記……………葛の葉
△晩秋　牧場……………百合香

○小說、散文等も例號より入賞者は多くなつております。凡て其作物、終の方に書き入れてある通りです。



讀友くらぶ

奈良市、三條通り佐野英方　章子
鹿兒島市、山下町九〇是枝方　笠間いく枝
三重縣、北牟婁郡尾鷲町　中村楠枝
攝津長尾村　山口靜子
遠江　鈴子
靜岡　早川邦子
王子　葉露
京都姉小路　藤本雪子
名古屋　匡子
千葉　伊東さく子
群馬　關口知世野
上毛　小澤竹子
故郷佐渡にて　小田切錦子

神戸市　港の女
本郷　松本兼子
岡山　桃の村女
下野今市　高村多喜子
仙臺市、宮堀町五井上方　佐藤妙香
福井　明ノ星
府下、西多摩郡青梅町森瀬　荒井春子
大阪城南　壽草
芝愛宕下　蔦衣子
新舞鶴　木下はる子
大阪　梨花
王子　大浪せい子
本所區　森本かすみ
東京　野末の花

誌上年賀

新年のお祝ひ目出度申納めまゐらせ候。相かはらず親しき御交際御ねがひ申上候、みな〳〵さまの御健康をいのり申候、かしこ

大阪市、西區南堀下通二丁目　小林田鶴子
常陸、稻敷郡舟島村竹來　水野俊子
紀伊　都田操
越後　井上貞子
鳥取縣、八頭郡國英村大字山手　小林英子
本郷區、根津八重垣町五十二　濱たか
大阪　とし香

記者より

▲北海道、深野さんに、委細了承、御注文に應じることの來ることも、出來ないこともありますが確に拜見いたしました▲佐分富美子さんに、御挨拶たしかに拜見▲秋田、小川範奇さんに、もう籔が一尺五寸ほども積つてゐるさうですね、お寒いでせう▲府下、某女さんに、市中の紙店でおたづねなさい、大抵はあります▲備前、雪子さんに、原稿は凡て同封で差支ありません▲會津、桑原さん子さんに、節子さんは今何處におらつしやるか私の方でも一寸分らないのです、此四五ケ月消息がありません▲茅渟の浦、水仙子さんに、投稿は同じ封筒でよろしいのです。（以上記者）

●書籍換讀●

○　信濃諏訪郡永明村矢ケ崎　石田ひさ

△皆樣方に美簡文講義錄か文章講義錄御有りならば私の女子文壇ノ御交換下さいませんか又外に文章雜誌か新小說もたくさん有りますから。

○　鳥取縣東伯郡小鴨村　岸田繁子

▲持つてゐる書ノ「自然と人生」「野菊」「廣長舌」「西鶴文粹」「文章講義錄」

△讀みたい書ハ「金色夜叉」「己が罪」「小女の戀」

○　土佐高岡局區内日之浦　川村芳野

△讀みたき書物「文章講義錄」「短歌講義錄」右書籍不用の方御讓り下さい

○　靜岡縣賀茂郡南上村毛倉野　菊地づき

△讀みたい書『我が輩は猫である』『紅葉全集巻六』『乳姉妹』『はつ姿』『其の面影』『ハムレット』等

▲所有の分『己が罪』『ツルゲネフ貴族の家』『響』『藤村詩集』『風葉集』『五人女』『桐一葉』『戀と戀』前記いづれにてもよろしく交換下さい

○　廣島縣備後國府原町　倉田眞佐子

▲持つて居る書、花籠集、青山白雲、旅路、青海、五彩の雲、鐵碎子、新文明の利弊、雲の袖、きくの一松、五重の塔、ひとり寢、うき寢歌枕、配所の月、麗子夫人、妙な男、戀無情、えにしの絲、いちじく、いたづら小僧口記、慰問袋、

△讀み度書、雛姬、常夏、みだれ髮、眉山全集紅葉全集、藤村集、夏小袖、三四郎、肉だん、新夫人、水彩色、血薔薇、情の人、茶生木、婦人畵報、三田文學、青鞜、右代借の本、思召しの方は御架書にて申込み下さい本次第に御希望の書物御貸し申します、讀終後は直ちに御返送申します但し男子の方に御斷りです

○　德島縣名西郡石井町松永樣方　弘　蕊

△持つてる書。皆樣御氣毒ですが繪葉書（名所を送つて下さいまし私も相當の返禮は致しますからきつと賴みます私は孝女白菊上下、紀行文粹、源氏物語、忍草、方丈記、土佐日記、竹取物語、徒然草、枕草子、女子日本文典、女學世界婦人世界など其の外色々御好きな人にも面白い本がありまます御入用の御方は御知らせ下さい

讀みたい書物、紅葉全集、乙女の祕密日記、荷風集、夢二畫集、本誌古いの等

○　山口縣豐浦郡小串　稻田なでし子

△見たき書物、女子美文、井上通女の傳、女子修身訓、勇ましき少女、後孝女白菊、乙女の生涯

▲不用書婦女界十數冊、數學世界、家庭雜誌、婦女家庭訓、普通禮式、生花獨習自在、新編裁縫學全書（洋裝）

但し御望の御方は前以て御一報を願ひます

○　兵庫縣宍粟郡三河村　大久保はま子

△求める分、ハムレット、コブシ、源氏物語、

▲持てる分、金色夜叉、不如歸、編物指南、裁縫指南、趣味、女學世界、女子文壇、婦人世界、少女世界、文章世界、其他いろ〳〵小說類を持つてをります皆樣の中で御交換下さる方がございましたらはがきにておしらせ下さい

○　越後中蒲原郡小須戸局區内大鹿　關口淸次郞方　歐子

△誌友諸樣の内に青海、藤村詩集、夢二畫集、新ホト、ギス、自然と人生、吾輩は猫である、金色夜叉、名家の文集、等の不用書がありましたら何卒御送下さい御禮には信濃川分水工事、新潟の大油田、其他名所繪葉書に向けは小學世界、文章世界、少年世界、婦人世界、新國民、農業世界等の雜誌を添へて上げますからねえ。

●個●人●消●息●

▲はじめて心の友を得てよろこんだもつかのま、あゝ片時も忘れぬ我宿瀞子様よ…いづこの地にどう遊ばしてか、皆様の内にも御存じの方がございましたらどうぞ〳〵お知らせ下さいましお願ひでございます（前橋　みづ枝）

▲あの深川の矢澤菜ず様近頃貴女の美はしきお作が見えて私何んとなく嬉しく感じますどうか永久に御振ひ遊せよ影よりも祈り申してよおひまの節に光子様や八重子様と御一所に御出遊せ又コーラスでも致しませうおまち申して居ります（深川　鈴木美喜子）

▲久慈郡太田の株の葉様おなつかしい。本年も八月には母校で同窓會を致します其の節は何卒御通知しますから御出下さい。餘興は柳田様持ちきりで、ふるつて居りますよ、何卒御住所と御本名を御知らせ下さい。（茨城の北村にて　田村波津子）

▲十二月號和歌欄で天賞を得られた部田操様ヤマカのムスコ様の評面白き「落葉」をお書きなされた、宇田ずが子様、同郡でおなつかしう存じます。私しの娘はかねてお二方とは同窓しかも部田様とは、御同室で御座いましたよ。今もなほお噂をいたして居るので御座います、二とせ前のおやさしいお姿は娘の手許に殘つてをります近くは今春の紀念帳を從姉の許で拜見しましては又一しほお慕しく存じます。限りなき誌上に限りなき御文才、御二方とも永久にはえあるお筆をお執り遊ばしませ、失禮をもかへり見ずさらば……（大澤てゆふ）

○ニューヨークの竹田倹子様へ。先日來は絢葉書やらリボンやら、澤山に御送り下さいまして誠に有難う御座いました。お手紙差上げられませんので、誠に〳〵殘念でなりません。然し其内にはお手紙差上げられるやうになりたいと、それのみ心に思つて居ります、何卒御手紙は時々御願ひ申します（栃木縣足利にて　とき子より）

○群馬の今は東京の椎名八重子様、一月附のお端書有難う存じました。御返事上げ様と思つたけれど只東京とばかりなのですもの淋しい身は涙の日を暮してますわ何とぞ現住所を先日の番地で中原様の所迄お知らせ下さいませ、伏してお願ひ致します。（札幌の里　御存じより）

○あの當地の佐野幽香里様十二月號でお歌拜見いたしましてよ、御なつかしい…お交り下さいませんか私はねあなたと同じスクールの一級下のもはや學校を出た君によおわかりになつて？（札幌　夢香）

▲横須賀のきぬた様おなつかしゆう御ざいます私は貴女を能く知つて居る者で御ざいますの、○○高等女學校の選手コートでテニスも試合ましたピンポンもしました。十一月號でお作を拜見致しましてなつかしいやらお慕しいやらで亂れた情緒を無理に連ねて丈に餘る文はしたゝめましたけれどもポストに入れる勇氣がありませんでした。どうぞ嬉子様貴女を慕ふ北海の乙女をあはれと思召したら交際してやる。永久にと次號で一言おつしやつて下さいませ（北の都にて夢見る女）

▲諏訪の石田ひさ様先日は見事の枝折を戴き嬉しくつて〳〵夢の様だつたわ。新らたに號を迎へし本誌の發展と共に紙上にて御活動遊ばせ（長野　存子）

▲島木縣菜様訓文ありがたうにもかゝわらず返し致さない私をさぞ没常識とおさげすみでしやうねえ、而し御住所が不明で何縣人のそれすらわかりかねたのですからあしからずよ（沼津　山縣梅園）

○交際

○加奈陀晩香坡市パウエル街四三九
伊勢崎　ますゑ

▲北米より　親愛なる諸姉上様、私は北米カナダの地に淋しく暮してゐるものです、今後御思召のある方はお交り下さい、麁末なる繪葉書なりとも差上ますから。

○北海道釧路容採
北條光子

▲繪ハガキ　皆様新しき年と共に玉章繪ハガキの交換を希望いたします。

○大分縣速見郡上村四〇二番
花芳子

▲おことわり　懷かしいお姉様方よ嬉しいお正月となりました年の初めより文學をみがきませうね一つきまして誌友の諸姉君様へおことはり申します毎度姉様方よりお手紙下さいましたが局のまちがひでお便り下されしを私に着かずお返ししたの、甚だ申様もありませんがねお許し遊はして頂戴なあの誌友の姉様方よ何つもに

變らぬおなさけ深いレターをキット頂戴よねお返事いたします 住所は誌上の通りですよも、配達して呉ますくれぐれもおわび申します。

○　島根縣能義郡大塚村　藤田とよ子

▲新しい交際　皆樣に新しい御交際を祈ります新しいお寫眞や繪葉書をお願ひいたします

○　深川區大和町　矢澤榮子

▲先づお目出度う　皆樣私も十七の春をむかへて嬉しくてなりません。昨年中は春川花舟と言つて投書して居りましたが、新年からは本名で出します何分にも子供同樣の女でとても姉樣方と肩をならべるなんて實際およばぬ癒ですけれども、今年から益々振つて投稿致しますわ、深川の誌友の皆樣仲よく致しませうね、妹と御思召してね…鈴木美喜子樣どうぞ振つて投稿して深川の誌友を多く致しませうね、どうしてもこんな下町にはハイカラはあまりないので、私悲觀して居ますの、えゝ私ハイカラな方大好ですもの私ですかホゝゝ、セイクレツト〱

○　紀伊　あちさゐ

▲和歌山誌友會　誌友のみなさま、あけましておめでたうございます、新しい年と共に一そう活動せられん事を祈ります、殊に和歌山縣の方は、まことにおなつかしうございます、どうぞ他縣の方々にまけぬ樣に、しつかり遊ばして下さいませ、そして、誌友會でも開かうではありませんか。誌友會が、和歌山市でも開かれたら、私何を放つておいてでも、飛んでまゐりますよ。では、みなさまよ、ごきげんよう。

○　東京市本所區林町二の二七　淺野方　河村みどり

▲私に語るに友もない　淋しい〱者でございます何卒本誌のお姉樣方今後永遠に親密な御交際を御願ひ致します

○　群馬縣多野郡鬼石町相生町九二　新井つま子

▲お手紙　みなさま明けまして御めでたう存じます。また相變らず御手引下さいまし 私は片田舍にほんとに淋しいクルーミなライフをしてをるのです。どうぞ御手紙下さい。必ず御禮はいたします。

○　愛知縣丹羽郡古和野町上奈良　中村白百合

▲悲み　新年を只嬉しく思つて居た私はどうしたものか其の新年が悲しう思はれるやうになりました友も無く淋しく暮れ逝く春を今更のやうに悲しんで居る私に同情して下さるお方はどうか交際して下さい私は華やかな都に新年を樂しく迎えられる人を想ひつゝ寒い田舍に泣いて居ます

○　信濃東筑摩郡廣丘村　三村利博子

▲御愛誦　皆樣に御願申ますが皆樣の日々御愛誦遊ばす唱歌詩等御惠下さいませんか 博愛なる皆樣に願ふので御ざいます

○　北海道栗山局區内　福原てる子

▲北海道より　一度の御便り一片のお端書を拜したゞけでも常におなつかしく存ずる方とさ程でない方と又何となく嫌やに感ずる方とあるのは誰方も同じ事で御座いますから強いてとは申しません然し折角お慰めしたと思ひ又ふとなつかしく存じてお手紙や繪端書をさし　げても一度の御返事もないのはほんたうに悲しくあります。わざと名前ははぶきます

又雜誌新聞等御送りしたら「誠にお恥しいものお廻のしるしなんて十日が二十日たつても…こんなのが五件これはどうしたものでせう

又せつかく繪葉書など送つて下さるのに第四種にして中へ信書を入れたり書いたりなさつて郵便規則に違反なさる方もあります

これはおたがひに注意致しませう

さて新しい年とともに誌友諸姉の正しい美しい御交りを祈ります

○　京都府下葛野郡朱雀野村大字聚樂小字西町ぶ三十一番地　加登方　三宅壽賀子

○かるた會　皆樣あけましてお目出度うまたこゝに一つ年を取りました去年は十八が逝つたといつて悲しんでおりましたのにまた十九の年も用捨なく逝つてしまひました送つた十九の年は半ば餘病床に居りましたいまなほこゝに病後の身を養つて居ります皆樣相變はらず美しい御交りを下さいませ京都の皆　きつと〱御遊びに御出で下さいなかるたの御相手致しますわ何卒ねきつとお待ち申して居りますよ、ではさ樣なら

○　横濱市扇町二ノ一五五堀井方

渡邊房子

▲繪はがき　新年は御目出度う御座います妾は或る事情の爲め本誌の講讀を止めて居りました、また〳〵本誌を愛讀する樣になりました何卒御心安く御交際おや忘れた繪葉書の交換も願ひます

○　東京市神田區東紺屋町五十一
鹽崎方　葛の葉

▲左文字　ちう〳〵ちうとなく鼠の年になりましたねえ、あの新聞を頂きました皆樣に拙い左文字差送りました筈で御座いますが、上京前後の心のごた〳〵に貴名もれの候やも計られずにつき未送の方おはせば御手數ながらも御報を煩はし申候

○　埼玉縣兒玉郡丹庄村肥土
中澤髙子

▲硯覽雜誌　私は女子文壇愛讀者のみを以て文學ノ研究會を起し硯覽雜誌を(筆記の)發行したいと思ひます。御贊成の方は往復端書にて照會下さい。成立の上は改良半紙罫紙にてとじし詩や歌を投書して下さい

○　長野縣上伊那郡南向村
細田草路

▲草笛　明けまして御芽出度たうございます私は何より草笛が好きなのでございすから誌友の皆樣とうぞお手になつた繪はがき御送り下さい下手ながらも描いて御返し致しますから…

○　長崎市　秋海棠

▲長崎誌友會　皆樣! 新年御目出度う存じます長崎の姉妹方昨年は餘り振ひませんでしたのね、今年は、ちと、盛んに賑やかそうではありませんか、そして誌友會等を開いてますす〳〵盛んにしては如何、御同好の方がありましたら私も隨分働きますからぢや之で失禮いたします。

○　宇都宮伊賀町キ内方
常葉

▲めでたくもあり目出度もなし　といふたお正月もまゐりました。誌上のみな〳〵姉上樣より私も二三月まへから御誌の愛讀者となりましたから何卒ぞよろしき樣に御さしづを

○　京都麩屋町三條下經田誠内
野菊

▲本年より　記者樣初め誌友の皆々樣明けまして御目出度う私は去年の一月號よりの愛讀者ですが未だ一度も皆々樣の御目にふれる物は投書した事は有ませんが本年より奮發して投書するつもりですからよろしく、何卒諸姉樣方繪葉書き書物の交換を、またお情け深きレターを御惠み下さいな

○　高知縣高知市鍛匠町百八十番地
岡本のぶ子

○はづかしながら　愛する皆樣新年御目度存じます、私は、昨年當地にまゐり兩親は北の端に居り私一人ぎりでさびしい月日を暮して居ります、皆樣の内御同情有るおかた何卒末なが〳〵御交際を御願ひ致します私も小學校卒業して後は只ふに居りまして裁ぬばかり致しましたので學問が有りませんので誠に御はづかしう存じますが淋しのあまり御交際を御願ひいたします

○　越後國南蒲原郡田上村
椿千壽子

▲雪ノ越路より　御なつかしい誌友の諸姉上樣明けまして御目出度う御座います私は雪ふかき越路の片田舍に母もなく兄弟もなく淋しい月日を送つてるのでございます。諸姉樣、不束者で御座いますけど妹と思召して、永久に御導びき下さいませ

○　名古屋西區江川町一丁目
十五番地　吉桒きぬ子

▲萬國繪葉書會　誌友の諸姉樣に申上ます妾は繪はがき交換が大好きですからどうぞ御願ひ申上ます又私は萬國郵便繪葉書交換會に入會致して居りますから外國の御婦人や御小女達の宿所御望みの方は幾人でも御一報次第御通知申上ます

○　大阪市北區相生町四四四番地
荒井方　成田てい子

▲一昨年より　妾事も一昨年女學校に居る頃より文壇を愛讀して居ります何卒〳〵ヱハガキや御玉章の御交換を永久に御交際御願します御情け深き男子女方樣にも宜敷願ひます

○　相模三浦郡浦賀新町十五番地
鈴木かね子

▲皆樣へ　私はこれから清い女子文壇の愛讀者となりましたから妹と思つて末長く御交り下さいませな。

○　本郷區駒込追分町七一立花方
土岡白夢子

▲繪と歌　木々の梢には緋のリボンの樣な葉

が、夢の樣に靜かに暮れてゆく赤い空に、光つてゐます。何か或るものを期待するかの如く。私は今いちゝくの薄暗い濕ぽい綠に、包まれて泣きました。皆樣私は、繪を勉強し傍ら文學を嗜んでをるものです。どうぞ仲善の爲はがき、御交換を願ひます、そして又、文學好のお方は、詩歌をお惠み下さいな、私も御返事致します。

○　麴町區富士見町一ノ二二小柴方　星野富美子

▲誌友の片はしに　私も十月から本誌の愛讀者となりましたが、また文學の素養もございませぬ不束者故、とても面白いお便りは差上げられませぬが、でも思召のあります方はお手紙お惠み下さいませ、おねがひいたします。

○　下野今市小倉の里　森ゆき子

▲皆樣　いつも美事な繪葉書やなつかしき御玉章厚く御禮申上ます倘相變らず御交際を願ひます皆樣御身御大切に

○　京都市岩上三條上ル　高橋節子

▲繪ハガキ　本誌愛讀者の諸姉樣方何卒エハガキの御交換をお願ひ申上ます

○　高知市中島町下十七　中澤きずみ

▲文學狂　あの皆樣私生れつきの文學きちがいよ文學に趣味を以つておらつしやる皆々樣どしへ御手紙下さいねきつとへ御返事してよ

○　和歌山縣海草郡日方町笠松醫院内　前田婦美子

▲編物とふくさ　姉上樣何卒これよりゐるはがきや御うつしゑやあみ物雜誌の御交換ゝ御ねがひ致します又あみ物に御うつしゑをそへて申込の御方には鹽ちりめんふくさもやう入妾の手許に七八枚あります故御送り致します神にちかつて御ねがひ申ます

○　大阪府下岸和田砂町坂井樣方　山田正子

▲睦じく　妾は本誌を一番愛讀して居ります毎號の誌友くらぶを拜見致し皆樣のお睦まじきをうらやましく本月初めて投稿致しました姉上樣と誌友クラブに面白きレターを交換して頂くのが唯一の樂でございます御見捨なく御交りの程をお正月を樂しく迎へん事を祈つて居ります

○　千葉縣君津郡佐貫町幼稚園内　石川恒代

▲山里より　皆樣御手紙や繪葉書等を御惠み下さいまして誠に有難く御禮申上ます次に私は故國を離れて獨り寂しき山里に友とてもなく幼兒を相手に日を送つて居るもので御座います何卒誌友の皆々樣御手紙や繪葉書を御惠み下さいませ屹度御返事は差上げます

○　長崎市東中町九　永井圭子

▲崎陽　に住みませるおみ姉の君等を始め他方の御方々樣スイートレター將た寫し繪の取り替へを願ふになむ。

○　備後深安郡湯田村　佐藤夕暮星

▲御なつかしき　誌友の諸姉上樣私は昨年の九月より本誌を愛讀致して居る者で御座います私は此田舍は誠に淋しい田舍のすみで語らふ友もなくある思ひにて泣きなやむ誠に哀れなる一少女でございます御情けある諸姉樣よあはれと思召しめしたなら永久まで御玉章　御交際を御願致します誠にごく不束者ですが御玉章を下さいました方にはきつと御返事致しますわどなたでもよろしい御交際下さい私も一度は交際の花とも云はれた私ですから私は御玉章のくるのばかり樂しく泣かずに待つて居ります下さいました方には私の泣くのを御聞かせ致します

○　橫濱市不老町二ノ一五五吉井方　渡邊綾子

▲啓明なる諸孃樣　薄學な妾は今年の花の盛りの半頃遙に佐渡から橫濱へ來て居る者で十一月から本誌愛讀者の一人となりましたから何卒永久に御交際を願ひます終りに橫濱の諸孃樣妾は異鄉の事故打ちとけ語る友もなく淋しく哀れに日を送るものなれば小說又は栞、詩集、文集などおもちの方はお貸し被下度必ず御返し申すは勿論屹度色々珍らしき品お禮します

○　本所區柳島元町一九六海老原定藏内　綠川やい子

▲誌友の姉さま　妾も十月より本誌愛讀者となりましたから末永く御見捨なく繪葉書や文通にて妹と思召し御交り下さい屹度御返事差上升

○　靜岡縣沼津町川廓　山縣吟雨

▲肉筆　皆樣私し下手ですが肉筆繪葉書の御交換を願ひ度いわ、かりにもいつはりは申しませんきつと御返し致しますよ私しは梅園の妹よ

雜報

初空

△記者が此文を書く時は、未だ新年より遙に前だから、新年の心持は書けない、想像の上ではいくらでも考へられるが、それはいつの新年でも同じことだ。

△新聞はやたらに不景氣と書くけれど、やつぱり歲の暮は一年中尤も景氣が好い。

△今の人に春を待つと云ふやうな、のんきな心持はない、餘儀なく新年が押し寄せてくるのだ其眼道に反動して景氣がつくのだ。

△十二月、一月は能く大火事のある時だが、此頃は全く大火事がなくなつて結構だ。

△十二支に選ばれた動物は、年々お正月に研究してもらつたり、描寫してもらつたり、繪はがきになつたりして、動物のうちでも幸福だ、之に洩れた動物は不平だらう。

△支那の革命戰爭もだいぶ行きなやんでゐる、年を越してもお目出度うは容易に云へない。

△東京では瓦斯が一般にひろがつて行く、地方では電燈が一般にひろがつてゆく、山里や、僻遠の地へ逐ひまくられるものは、客馬車だ。

△低い諷刺ものや、かたくるしいものは出版されるが興味の多い創作が出版されない、小說、散文、詩などの好い創作がもつと世間に歡迎されないと、文壇はいよ〱沈滯する。

△芝居と云ふものは決して衰へないと或る人が云つた、成程然うかも知れない、現に東京市には大小幾座かの劇場がある上に、帝國劇場が出來ても、矢張り滿員だ、芝居は衰へないと云ふことは事實だらう。

△新傾向句と云ふものも一寸變つてはゐるが、未だ認められるほどの好い作家が現れないので注意を惹かぬ、惡い慣習に囚はれてゐる俳句は何うかせねばならぬ。

△今年は文藝の盛んな年であつて欲しい、二三年來の沈んだ氣を盛り返して欲しいものだ、文壇には浮沈があるから。

新刊

○都會の卷　竹久夢二著

夢二畫集は何卷出ても、それ〲異つた情調があるから飽きない、此一卷は名の如く東京と云ふ都會をスケッチしたものだ、悉く眞面目な試みとして肯くことが出來る。甘い心持も苦しい心持も、やるせない心持も、敗殘の心持も、それ〲其人に依つて動いてゐる。都會の卷と云つても未だ或る一部しか寫生してゐない。第二第三の都會の卷の出る日あることを待つ（定價金五十錢、麴町洛陽堂發兌）

○邪宗門（再版）　北原白秋著

詩集邪宗門は明治の詩壇有數の產物である、少くも現代より次代にかけて永き生命を有する詩集である、初版當時にもそれほど世評には上らなかつたけれど、詩は元來一般的のものでないから、いつまでも熱心なる愛誦者を牽引する力さへあれば宜い。邪宗門の再版は頓て三版四版を意味する、此處に內容に就いては多く語るを要さない。再版は高村光太郎氏の裝釘內容は殆ど初版と變りはない（定價金八十五錢、京橋畔東雲堂出版）

○吳田博士　三津木春影著

探偵奇談と、冒險奇談と四五の短篇を集めたものだ。此種の奇談を愛讀する人には歡迎せられるだらう、面白い本だ（定價金四十錢、神田表神保町中央館書店發行）

○源爲朝　兒玉花外著

鎭西八郎源爲朝の傳を兒玉花外君が書いたと云ふことは面白いことだ。書く人も書かれる人も適當を得てゐる。下手な小說などを讀むよりは面白い、傳記と云つてもかたくるしい研究的のものとは異つて、文學的の味ひが深いから誰が讀んでもおもしろい本だ、三版が出た（定價金五十錢、本郷春木町三、菁莪堂出版）

○露子の運命（後篇）　植松美佐男著

さきに出た少女小說露子の運命の後篇である、著者は若い人だから、書くこともわか〱しい一種の快感を作ふ作で、此等の小說を好んで讀む人は世に少からずあるだらう（定價金四十錢、本郷駒込本郷書院出版）

△市街繪葉書を送られた諸君にはお約束の如く年賀狀を送ります、洩れた方があつたら御注意ありたし。　河井醉茗

一月

一月は一年中の初めの月ですから太郎月とも云ひますが、また睦月と云ふ名もあります。陰暦が廢されたので、今は全國津々浦々に至るまで、新暦のお正月を迎へることでせう、東京は七日までが松の内で、其間は遊びます、地方では十五日まで松の内になつてゐる處もあります兎に角正月の上旬は遊ぶくせがついて能く遊びます。小寒大寒の寒い時候ですから戸外よりも室内の遊びがはづむ時です。

八日からは諸學校も始まります、陸軍の觀兵式もあります。

新聞や雜誌の初刊を、ゆつくり讀み初めるのも其頃からです、凡て分量が多いから一月は讀み物に骨が折れます、寒い時でもあり、夜の長い時でもあり、讀むには好い時期には相違ありません。

野も山も枯れはてゝ、只山茶花、水仙、椿などの暖い日向に咲くくらゐなもので、自然は淋しいものです、水鳥の日かげを慕ふて遊ぶのも寒さうです。東北地方では雪に全市を閉ぢられる處もあります。太平洋岸の一月は好晴が多いのですが、それでも雨が雪になることは能くあるのです。

大祭日、一月一日(四方拜)一月三日(元始祭)
一月三十日(孝明天皇祭)

日曜　七日・十四日　二十一日　二十八日

▲注意　本誌は本年度より從來の增刊を廢し、年四回(一月、四月、七月、十月)定期號を特別三百頁の大册として發行することになりました、なほ左の定價表を詳しく御覽下さい

◎本誌投稿及懸賞規程

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は斷じて受付ず)に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類每に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて擣き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◉投稿は每月十五日到着を以て嚴に締切る

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す(但し短きものは此限りにあらず)▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇　定價　毎月一日發行

四十五年一月より左の通り改定す

◎特別號一冊金參拾錢　送料貳錢五厘
◎普通號一冊金拾五錢　送料壹錢五厘
◎半年分(特別二冊 普通四冊)　前金壹圓九錢　送料拾壹錢
◎壹年分(特別四冊 普通八冊)　前金貳圓八錢　送料貳拾貳錢

特別號は一月、四月、七月、十月號なり、
其他は皆普通號であります。

申込注意

注文は總て前金のことゝ振替貯金にて拂込の時は必ず雜誌代金の外に登記料金壹錢增しのこと、郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割增のこと最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▽廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

壹等割引	一頁貳拾五圓	(半頁廿四字 三十二行)	
貳等割引	一頁貳拾圓	半頁拾圓	
參等割引	一頁拾五圓	一行四拾錢	(一行ヵ號字 二十四字詰)

取扱所　博報堂。電報通信社。文明廣告社。弘報堂
其他いづれの取次店にても取扱申候

明治四十四年十二月二十五日印刷納本
明治四十五年一月一日第八年第壹號發行

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本魁
印刷所　東京國文社
東京市京橋區大鋸町十、十一番地
發行所　女子文壇社
(電話京橋六〇七番　振替貯金東京壹七貳九番)
特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂　東海堂、良明堂、大阪盛文館外

唯一の女流文學雜誌

第二卷 第壹號

青鞜

一月一日發行

新年號

發行所 東京本鄉區駒込林町九番地 青鞜社
電話下谷三七七六●振替東京一一六〇

發賣所 東京神田表神保町 東京堂 特價卅錢

文章作家之大福音

原稿用紙

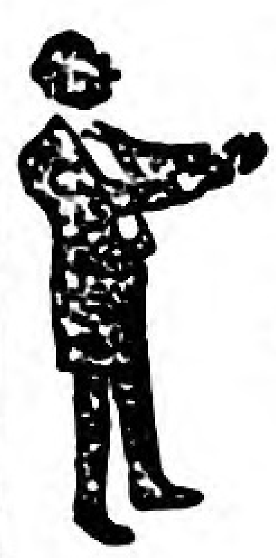
文壇大家名士之大高評

原稿用紙定價表

二十四字詰
二十字詰

百枚（送料共）	金三十錢
二百枚（仝上）	金四十八錢
五百枚（仝上）	金一圓

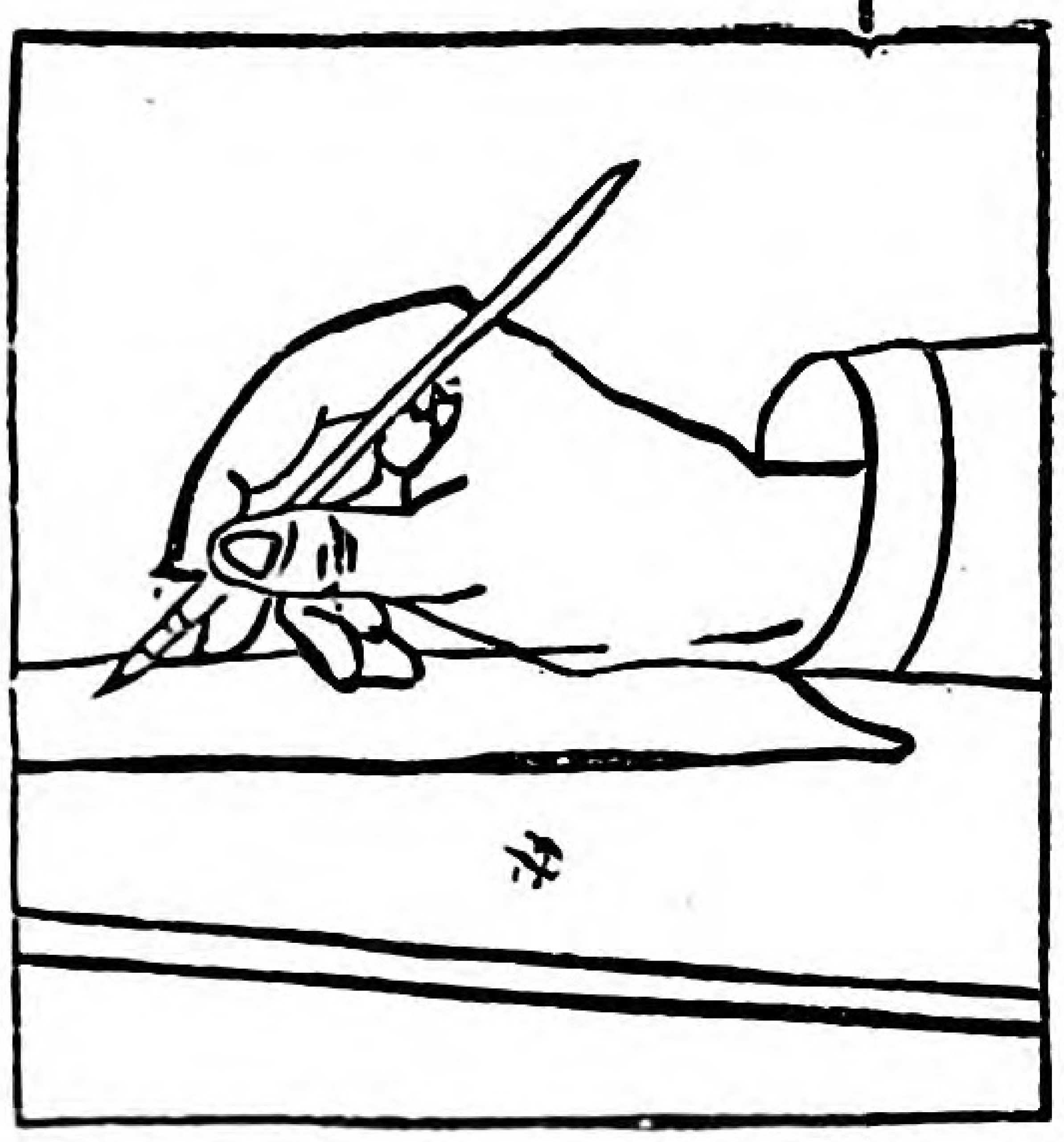
右御注文の節は何字詰と明細に御書添の上注文願上候爲替（神田末廣町局）振替（東京一九五五五番）の二種に限り申候間御承知の上御注文願上候尚郵券ならば二割增にあらざれば御注文に應じ難く候



本誌投書家諸君ニ告グ

本堂用達部に於て今回發賣せる原稿用紙は東都文壇諸家の最も好評せらるる者なれば地方投書家諸君も此の高評ある原稿用紙に依りて執筆投稿せらるれば名文立ち所になり、所謂鬼に金棒の感あらん。此の用紙は舶來紙を用ひあれば紙質滑澤にしてペン、毛筆共に自由なること他に比類なし、請ふ大方諸君御愛用の上高評あらんことを希ふ。

△秀才文壇 女子文壇 編輯局證明▽



專賣元 東京市神田區旅籠町一丁目 **文光堂用達部** （振替東京一九五五）

前田夕暮氏序

近藤元氏著　　正宗得三郎氏書

歌集　南方の花

四六判二百餘頁
歌數六百餘首
定價金六拾錢
郵稅金六錢

◎呪はれたる藝術と新春歌壇のヘラルド！

著者曩に『凡ての呼吸』を出版せんとして世の俗惡新聞者流の爲に嘲弄せられてその稿を燒きたり。今また『南方の花』は出版に日ならずしてその紙型原稿共に一夜の夢に灰となりたり。著者の胸は燒かれたり。著者の藝術は先天的に呪はれたり。
今や更に新作數百首を加へて新春歌壇の爲に一層の光彩を添て且つ久しき期待に酬いんとす。著者は生れながらの詩人なり。その歌風は世既に定評あり。その尤も進步したる思想と洗練されたる技巧とは敢て贅せず。幸に愛讀を乞ふ。

一月一日發賣

◎江戸の花となりし『南方の花』出づ！

發行所　東京神田旅籠町一丁目　振替口座東京一九五五　文光堂
賣捌所　東京堂・東海堂・上田屋・北隆館・益文堂・至誠堂

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）